RECONSTRUCTION

改造

貳月特別號

1921

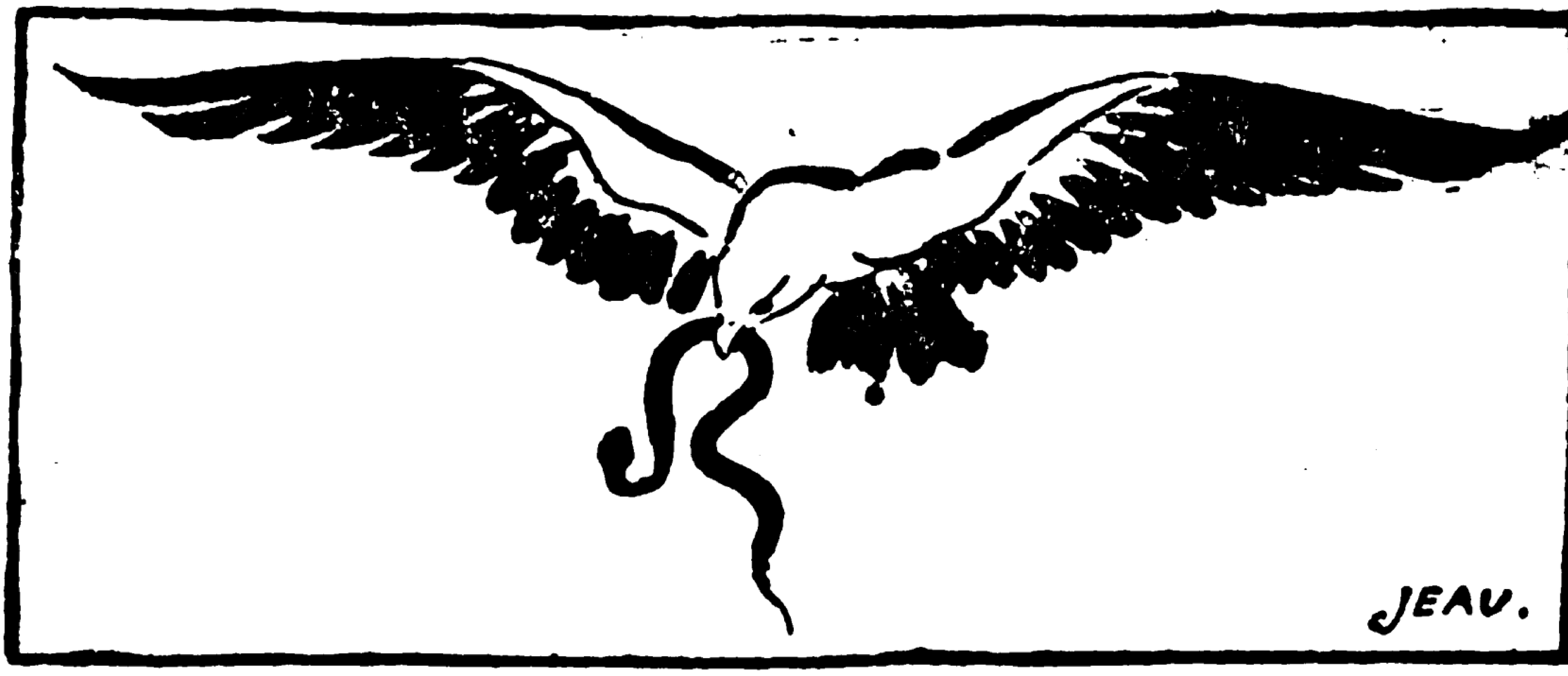
新刊發賣！

7. — 8.40
7.15 — 9.19



改造 二月號 目次





改造二月號

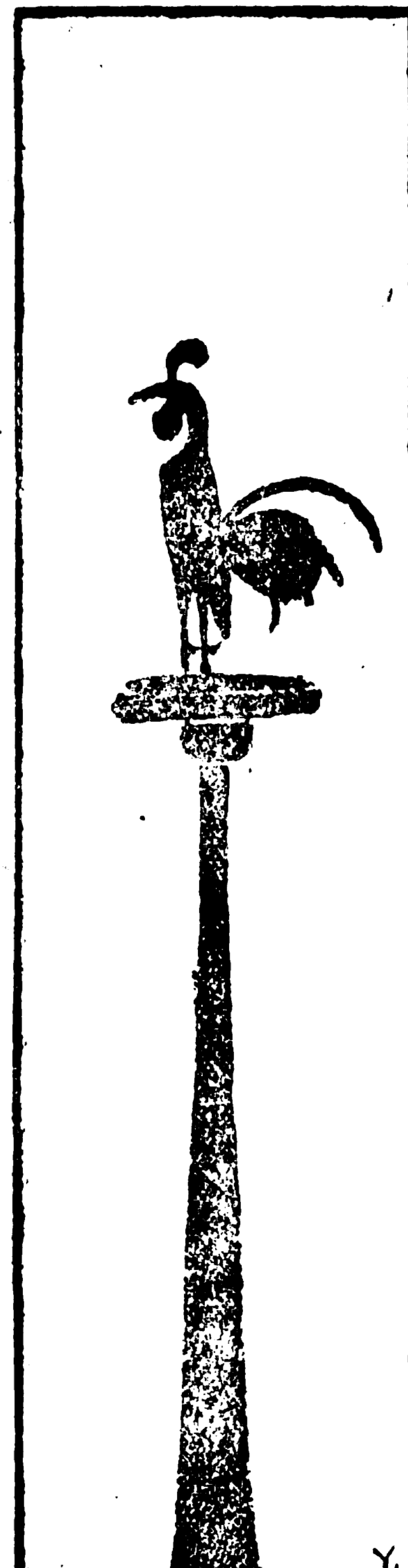
愛を先づ隣境へ

西伯利の撤兵を斷じ切らぬ原內閣を軍閥の出張所と見るに何の異存もあるまい、昆弟として契つた鮮人の經濟生活の保障さへ出來得ぬ我財政に依つて、隣境萬里、人口超億のスラヴ族に散漫の愛を敷かんとするは、人類自然の行程であるか、眞に自己を愛し、國家を愛するならば、封境の靜謐、國內の經濟的自立を先にすべきだ、朝鮮は國內だ。

愛は近きより遠くへ、國內の愛を先にして國際的愛へ、此の順序を顚倒したる愛よりは眞の勇氣を生まざるべく、勇氣の伴はざる愛は社會と國家に寸毫の寄與もなさざるべし、支那人が自己の獨立資格を具備せざるため、古へより執り來れる近攻遠親の策は奇策であつて、人類として取るべき正道ではない。加之、西伯利人、ロシヤ人等は擧つて我政府の執れる愛の推賣りを拒斥し、歐米人は我が侵略主義の結果だと罵倒しておる。乏しき國帑に聊かも餘裕あらば以つて鷄林八道に霑ふすべきだ。

見よ、今議會に提出されたる尨然たる軍費を。政黨內閣にあらずして軍閥內閣である燦然たる證據は其處にある。劍を以て威嚇せんとする民意は明瞭に北豫算が說明しておる、劍よりもパンであるべきだ、愛であるべきだ。パンを欲せざるスラヴ人に與へて、パンに餓えたる鮮人に劍の威を示す、何といふ矛盾の政策だらう。

愛は先づ隣境より、パンは先づ隣人へ。



過激派ロシアの前途

バートランド・ラッセル

ロシアに於ける過激派の前途の見込みやその向後の展開の筋途やを考察する際に於て、我々に取つて必要なことは彼等過激派が若し何等の抵抗を受けないものとしたら如何なることをしようと目論むであらうかの點を討究することであるよりは、寧ろ、世界が資本階級の支配の下にある限り彼等に向けられるべき世界總掛かりの敵對を前に控へたまゝで彼等に如何なることがなし得られようかの點を討究することである。かうした敵對が、今後尚ほ引續き封鎖や戰爭の形式で行はれるであらうか、若しくは、さういふことよりも更に一層隱密な手段に限られるであらうかは、今のところ疑問である。私は考へる、若し平和と通商とが恢復されようものなら、ロシア全國の内的及び外的發達が、封鎖や戰爭が

繼續する場合のそれとは、全然その面目を異にするであらう、と。私のやうに、經濟組織としての共產主義を主張する人達に取つては、ロシアが盛大な、そして幸福な共產制を確立することに成功するのは、大切なことだと思はれるのである。我々は單に、ロシアが外敵の壓迫の下に崩壞するのを歎はしく思ふのみならず、同時にまた、ロシアが世界に於て代表する主義精神を犧牲にして如何なる表面上の成功の購はれるのをも悅ばないのである。ロシアはその國民的失敗の危險と少くとも同じ程度の精神的失敗の危險に瀕してゐる。この兩方の危險を豫防し得べき何等かの希望があるか？この問ひに答へることを企てる前に、過激派の現在の政策、及びそれが今までに經て來て居る發達の段階を理解しておくことが必要である。

一九一七年の十一月に於て過激派が始めて權力を握つた頃、彼等が帝國主義、國家主義、及び軍國主義に反對して居たことは、一點疑を容れる餘地がない。當時世界は尙ほ戰亂の渦中に在つたのだが、ロシア人たちは、各國に於ける無產階級が、彼等自身を驅つて相殺戮せしめて居るところの、彼等の虐使者たる資本階級に對して企つる反抗運動に依つて戰爭を終結せしめようと希望した。が、この希望は水泡に歸した。ドイツ人たちは、彼等が戰爭に敗けて國際的に無力となつたまでは革命を起さなかつたし、協商側の戰勝諸國民は、皆いづれも一時自國の政府に滿足して、中々革命論に耳を傾けようといふやうな氣持にはなれなかつた。かういふ譯であつたから、從つて聯合側諸國は過激派に對する戰爭を煽動することが出來たのであつた。もつとも、過激派征伐といつたやうなものは、すべての文明國の勞働階級がそれを惡事だと考へて居たものであるから、聯合側諸國は、いづれも自國の軍隊をしてそれに身を入れて戰はしめることは出來なかつたが、しかし彼等は傭兵を――チエック、スロヴアーク軍とか、コルチヤツクとか、デニキンとか、ユデ

ニッチとか、ポーランド軍とかなどゝいつたやうな傭兵を用ふることが出來たのであつた。從つて、過激派は餘儀なく一大陸軍を編制して、彼等の精力を經濟的改造の上に用ふるよりは、寧ろそれを軍事の上に用ひねばならなくなつた。

不幸にもヨーロッパ及びアメリカの諸國民の側に於て示された斯うした不精な態度から、樣々の惡結果が產まれた。まづ劈頭第一に、ロシアは共產制度を發達せしめるために相當な機會を持たなかつたから、從つて、共產主義なるものが產業の創設なり管理なりのために適當した方法であるか、でないかに關して、まだ何等の實驗上の證明が擧がらない譯である。第二に、ロシアは輸入貨物の缺乏の結果として、大苦しみに苦しみ拔いた。そこには鐵道車輛の恐ろしき饑饉があり、ペトログラード及びモスコーに於ける食糧の重大なる不足があり、また、藥品とか、衞生上の設備とか、麻痺藥とか、消毒劑とかの缺乏があり、斯くてチブスなり其他の諸種の疫病なりを防遏することが非常に困難になつて來た。それからまた、政府が農民に對して食糧と引換へに與へるべき何物をも持つて居ないところから、少量の食糧しか手に入れることが出來ないで居て、しかもその少量の食糧すら困難に困難を重ねてやつと手に入れるといふ始末だからそのため都市に於ても田舍に於ても、政府に對する不滿の聲が聞かれるやうになつた。かういふ不滿の聲を塞ぐための必要上、政府は若干の抑壓手段――たとへば、共產黨の公認機關新聞以外のすべての日刊新聞を禁止するといつたやうな――を取るに至るのである。そしてまた、協商側諸國の政府の煽動に基づく敵軍の來襲を卻けるための必要上、ロシア人たちは、餘儀なく軍國主義の方へ驅り立てられ、從つてアジア的帝國主義の政策の方へ追ひ入れられるやうになつたのである。かういふアジア的帝國主義などは、彼等の最初の計畫には全然這入つて居なかつたことだつたが、外敵の壓迫の結果、事實上自然とさういつた深みへ落込むやうになつたのである。かういふ事情の下に於て、共產主義の本來の精神が殘存しようなどといふのは、困難なことである。

ロシアの對外政策は、今のところ、ヨーロッパの方へとアジアの方へとの、二重の方向を指してゐる。

ロシアのヨーロッパに對する政策は、ヨーロッパのロシアに對する政策と同じやうに、幾分二つの異つた傾向の中間にぐらつきながら産まれ出たものである。過激派が始めて權力を握つた頃に於ては、レニンがその個人的權威に依つて强いてロシアの民衆をしてブレスト・リトヴスク條約を承認せしめることに成功した。といふのは、彼がロシアは最早戰爭を繼續することが出來ないものと見て取つたからである。社會革命黨の左翼の人々も、過激派中の多くの人々も、資本國政府と講和するのは、主義の讓歩だと考へた。しかしながら、當時ロシアが甚だ弱く、レニンが甚だ强かつたので、結局彼の意見が通つたのであつた。同時に過激派は、ドイツ及び協商側諸國内に革命を誘發するために、あらゆる手段を講じた。當時ロシアに於ては、人々はヨーロッパ全土が革命の危機に瀕して居るものと信じて居た。否、その國から餘程の時日を經過した今年の夏、私がロシアを訪うた時ですら、最も炯眼なる數人の首領株の外は、皆が皆まで、今にも革命がすべての資本的國家に勃發しさうになつてゐるものと決め込んでゐた。かういふ信念から出發して、共産主義宣傳といふ一事のために他の萬事を犠牲にしようとし、そして現在の諸外國政府と講和するために目星しい程の讓歩をすることを決して認容しない、といつた樣な理想主義を主張する人々が出て來たのは、無理もないことである。

之に反して、實際家張りの人たち――すなはち、ロシアの産業を築き上げ、滿足と繁榮とを民衆のために持ち來たしそして共産主義が幸福と一致するものであることを天下に示さうといふ願望を懷いて居るやうな實際家張りの人たちは、運輸交通を常態に復歸せしめたり、諸製造工場の能率を戰前の標準に近いところにまで引上げたりするためには、産業的諸國との通商を開始することが絶對的に必要だといふ旨を切言して居るのである。クラッシンはこの派の人達の代表的人物と見做すことができるのであるが、要するに彼等は、西洋の民主的諸國家と講和しようと欲して居るの

ニッチとか、ポーランド軍とかなどゝいつたやうな傭兵を用ふることが出來たのであつた。從つて、過激派は餘儀なく一大陸軍を編制して、彼等の精力を經濟的改造の上に用ふるよりは、寧ろそれを軍事の上に用ひねばならなくなつた。

　不幸にもヨーロッパ及びアメリカの諸國民の側に於て示された斯うした不精な態度から、樣々の惡結果が產まれた。まづ劈頭第一に、ロシアは共產制度を發達せしめるために相當な機會を持たなかつたから、從つて、共產主義なるものが產業の創設なり管理なりのために適當した方法であるか、でないかに關して、まだ何等の實驗上の證明が擧がらない譯である。第二に、ロシアは輸入貨物の缺乏の結果として、大苦しみに苦しみ拔いた。そこには鐵道車輛の恐ろしき饑饉があり、ペトログラード及びモスコーに於ける食糧の重大なる不足があり、また、藥品とか、衞生上の設備とか、麻痺藥とか、消毒劑とかの缺乏があり、斯くてチブスなり其他の諸種の疫病なりを防遏することが非常に困難になつて來た。それからまた、政府が農民に對して食糧と引換へに與へるべき何物をも持つて居ないところから、少量の食糧しか手に入れることが出來ないで居て、しかもその少量の食糧すら困難に困難を重ねてやつと手に入れるといふ始末だから、そのため都市に於ても田舍に於ても、政府に對する不滿の聲が聞かれるやうになつた。かういふ不滿の聲を塞ぐための必要上、政府は若干の抑壓手段――たとへば、共產黨の公認機關新聞以外のすべての日刊新聞を禁止するといつたやうな――を取るに至るのである。そしてまた、協商側諸國の政府の煽動に基づく敵軍の來襲を卻けるための必要上、ロシア人たちは、餘儀なく軍國主義の方へ驅り立てられ、從つてアジア的帝國主義の政策の方へ追ひ入れられるやうになつたのである。かういふアジア的帝國主義などは、彼等の最初の計畫には全然這入つて居なかつたことだつたが、外敵の壓迫の結果、事實上自然とさういつた深みへ落込むやうになつたのである。かういふ事情の下に於て、共產主義の本來の精神が殘存しようなどといふのは、困難なことである。

ロシアの對外政策は、今のところ、ヨーロッパの方へとアジアの方へとの、二重の方向を指してゐる。

ロシアのヨーロッパに對する政策は、ヨーロッパのロシアに對する政策と同じやうに、幾分二つの異つた傾向の中間にぐらつきながら産まれ出たものである。過激派が始めて權力を握つた頃に於ては、レニンがその個人的權威に依つて強いてロシアの民衆をしてブレスト・リトヴスク條約を承認せしめることに成功した。といふのは、彼がロシアは最早戰爭を繼續することが出來ないものと見て取つたからである。社會革命黨の左翼の人々も、過激派中の多くの人々も、資本國政府と講和するのは、主義の讓歩だと考へた。しかしながら、當時ロシアが甚だ弱く、レニンが甚だ強かつたので、結局彼の意見が通つたのであつた。同時に過激派は、ドイツ及び協商側諸國内に革命を誘發するために、あらゆる手段を講じた。當時ロシアに於ては、人々はヨーロッパ全土が革命の危機に瀕して居るものと信じて居た。否、その頃から餘程の時日を經過した今年の夏、私がロシアを訪うた時ですら、最も炯眼なる數人の首領株の外は、皆が皆まで、今にも革命がすべての資本的國家に勃發しさうになつてゐるものと決め込んでゐた。かういふ信念から出發して、共産主義宣傳といふ一事のために他の萬事を犧牲にしようとし、そして現在の諸外國政府と講和するために目星しい程の讓歩をすることを決して認容しない、といつた樣な理想主義を主張する人々が出て來たのは、無理もないことである。

之に反して、實際家張りの人たち――すなはち、ロシアの産業を築き上げ、滿足と繁榮とを民衆のために持ち來たしそして共産主義が幸福と一致するものであることを天下に示さうといふ願望を懷いて居るやうな實際家張りの人たちは、運輸交通を常態に復歸せしめたり、諸製造工場の能率を戰前の標準に近いところにまで引上げたりするためには、産業的諸國との通商を開始することが絕對的に必要だといふ旨を切言して居るのである。クラッシンはこの派の人達の代表的人物と見做すことができるのであるが、要するに彼等は、西洋の民主的諸國家と講和しようと欲して居るので

ある。縱しやそれがホンの一時的平和に終らうとも、彼等の立場からいへば、若しそれが數年間の使用に堪へる程の機關車や機械類の輸入が出來る程の期間に亙つて繼續するものでさへあれば、さうした平和を締結する價値が十分にあるのである。これらの人達は、若し彼等がアジアでの宣傳や西部ヨーロッパ諸國での宣傳に關して重大なる讓歩をすることに依つて通商關係を常態に復歸せしめることが出來るのだつたら、いつでもさうした讓歩をしようと欲して居るのである。

無論、ロシアの勝味を增したり、敵國側の仲間割れの期待を惹起したりするやうなことが起る度每に、非妥協派の勢力がそれだけづつ强められるし、また之に反して、ポーランド軍やウランゲル將軍に對する戰爭の不結果だとか、若しくはその他の如何なることにせよ、ロシアを弱める懸念のある事情が起る段になると、西洋諸國との講和を主張する連中が得意の地位に來る傾向があるといふことは、極めて當然のことである。それ故に、ロシアの政策は、刻々の事情が共產黨中の硬派か軟派かを有利にするに伴れて、幾分動搖もするし、不確實でもある。

これと丁度同じやうな意見の分岐がイギリスに於ても、國家政策を管理して居る人達の間に存在して居るのである。ロイド・ジョージのやうな實際家達は、過激派が印度に於けるイギリスの勢力を脅威する力を持つて居ることを認めて居るし、また戰前に於て行つて居た通りに穀物及びその他の農產物をロシアから取寄せるのが有利だと考へて居る。で、彼等は講和の締結及び通商の再開を主張する。之に反して、チャーチルだとかカーゾンとかのやうな、舊式に屬する熱狂的理想家等は、過激派と講和しようなどといふ考へは不屆千萬だ、と思つて居る。そのやうな、主義を蹂躙したやうなことをやる位なら、一層のこと、ドイツに過激派を向ふに廻はして戰はうといふ氣があるなら、そのドイツの國力を產業的及び軍事的意味に於て復舊させてやる方がましだ、と位に彼等は考へて居る。だが生憎、ドイツが憎んで居る當

の相手は、ポーランド人なのであつて、ロシア人なのではないのである。尚またフランス人は、ロシア人とドイツ人と引括るめて罰し續けて行かうと、執拗に決心して居る。——といふのは、ロシア人は外債破棄を決行してフランスの債權者たちを虐ぢめたのが惡るいからなのであつて、そしてドイツ人はドイツ人だといふことが惡るいからなのである。かういふ障害と矛盾との間に挾まつて、イギリスの對ロシア通商交涉は、いつまでもぐらついて居るのである。で、ロイド・ジョージが講和締結を決行しさうな形勢が見え出すと、海軍がチャーチルの命令の下に出動して黑海でロシアを相手に海戰を開始したり、カーゾンがペルシアに關係して侮辱的な通牒を發送したりなどするのである。かうした兩側の意見の衝突の結果として、交涉がだらだらと永引いてばかり居て、この頃（一九二〇年十二月）になつても、まだ何等の取決めを見ないで居る。

時日の經過するに從つて、過激派のアジア政策は、段々と重要の度を增し、そして他の列强に對する過激派の關係をも支配する樣になつた。初めの頃は、過激派は西方へ着眼して居たので、アジアの方のことを重く見て居なかつたのである。彼等はマルクスが豫言した社會革命の機が正さに熟して來たのだと考へ、そしてそれがロシアから西部ヨーロッパへと急調子に擴がつて行くものと信じた。しかし、その希望が挫折したと同時に、普通の手段で軍事上の力を獲得することや、帝國主義的イギリスのやうに强くなることや、宣傳の齒の立たないやうな諸國民を威嚇するに足りる程の力を持つことやが、ますます必要なものになつて來た。コルチャックやチエックスロヴアク軍を打破る必要は、シベリアの再征服といふ意味を含んで居た。彼等なら、協商側の煽動に乘ぜられた其他の敵軍なりに當る必要上、過激派は否でも應でも非常に强大なる軍隊を編制しなければならなかつた。トルキスタンやボクハラなどのやうな、國內の土地が

大地主らに屬して居たやうな諸國に於ては、赤衞軍に依つて土地を彼等の手から捲き上げた。そして彼等がさういふ土地を分配して設置した自作小農等は、無論過激派に對して好意を持つて居た。西部及び中央アジアを通じて、過激派はその學說中の人氣を增しさうな部分だけを實際に適用することに依つて、民衆の歡心を得る方法を理解して居た。彼等は各地方の土民に向つて、地方行政に關する參加權を、舊帝政時代に於けるよりも遙かに多く許與した。彼等は個々數に比してキリスト敎を偏重するといつたやうなことをしなかつた。彼等は舊帝政時代の官吏よりも、より多く公正で、より少く腐敗して居た。

過激派は今や事實上アジアに於けるロシアの前領土の全部を恢復した。この領土の或る部分は自治權を持つて居て、そして唯モスコーの中央政府だけに聯合せしめられて居る。しかし、共產黨の規律のお蔭で、苟くも共產黨員が自治の行はれて居る地方に於て政權を執つて居る限りは、かうした組織に依つても、モスコー中央政府は必要なだけの管理權をすべて行使することが出來るのである。しかし、共產黨員が政權を執つて居るところですらも、彼等は共產制を確立するための努力を餘りにやつては居ない。といふのは、彼等がこの共產制は中央アジアに於ける諸部落のやうな未開社會には適しないと考へて居るからだが、この考へには私も同感である。

舊ロシア帝國の疆域外に出れば、共產制から遠ざかる程度が益々甚だしく、そして過激派はその事を公然聲言してゐる。レニンは彼が第三インターナショナルの第二回の會議(一九二〇年——七月)に提出した論文に於て、次の通りいつて居る。——

『我々はそれ故に最早我々自身を萬國の勞働者たちの團結を認識し布告する仕事だけに限局して仕舞ふことは出來な

い。今後我々が、解放を目的とする民族運動や植民地運動や勞農ロシアとの鞏固なる團結の實現を圖ることが必要である。かういふ團結は、各國の無產階級間に於ける無產者運動の進化の程度なり、または、未開諸民族の勞働者や農民たちの民主的ブルジョア的解放運動の進化の程度なりに相應するやうな形式をそれに附與することに依つてその實現を圖るべきである。』

同論文に於て、彼は斯うも言つてゐる。――『國際共產黨は、未開諸國のブルジョア民主主義運動と一時的の盟約を締結しなければならないが、しかし、決してそれと融合してはならない。』

かういふ觸れ込みの下に居る以上は、過激派に取つては、トルコや、ペルシアや、印度やに於ける富裕なる民族主義者たちと共々に提携して行くことも出來て、しかも彼等に彼等の財產が沒收せられるであらうといふ懸念からの脅威を感ぜしめるといふやうなこともないのである。しかしながら實際のことをいへば、明かに、これらの諸地方に於ける民族運動が過激派の援助の下に於て幾分でも成功しようものなら、それだけづつ過激派の勢力の延長となり、そして彼等の帝國の擴大となるのである。素より過激派の首領株は、疑ひもなく純眞なる國際主義に深く浸潤して居る人達である殊にこの事は、レニンの場合に於て最もさうである。若しレニンが共產主義の成功かロシアの隆盛かの二者のうち其一つだけを擇ばなければならない破目に陷らうものならば、彼は共產主義の成功の方を擇ぶであらうといふことは、私が毛頭疑ひ得ないところであらう、且つまた、彼がそのためになら、何の遲疑することもなく彼の一身をすら犧牲に供するであらうといふことは、彼の敵すらも認めてゐるところである。けれども、レニンがロシア政府の全部を構成して居る譯でないことは、ロイド・ジョジがイギリス政府の全部を構成して居る譯でないのと、同じ筋合ひである。そして過激派の勢力が段々と確立せられて行くに伴れて、彼等は、次第に多く、眞底から彼等に同情して居ない人々の協力を需

けるやうになるのである。今では多數の皇帝派の將校連が、赤衛軍の中で勤務を執つて居る。また産業の方面に於ても帝政時代に專門の技術家だつたり、請負人だつたりした人達が各種の地位を占めて居るが、彼等の全體の物の見方は、今でもまだ矢張り資本家的なのである。殊に、一旦帝國的國家生活に慣らされた國民の胸裡に帝國主義を甦らせ易い國際政局上の不可抗の傾向があるとは、否むべからざる事實である。是等のすべての理由に依つて、ロシアの將來の對外政策がアジア征服といふことを基調とするものではあるまいと保證することは困難である。

不思議にも、革命といふものは、その最初の騒ぎの鎭まつた後では、政府の對外政策を餘り變更しないものである。第十七世紀に於て、イギリスが革命國であつたとき、クロンウエルの對外政策は、その前のチャールス二世のそれと全然同じものだつた。すなはち、クロンウエルの治下に於ても、依然としてスペイン及びオランダを敵側に廻はしてフランスと同盟してゐたのであつた。第十八世紀に於ては、ルイ十四世、十五世、及び十六世の採つた對外政策は、そのまゝフランス革命の時代にもナポレオンの時代にも踏襲せられた。そして今や、過激派の天下であるロシアに於ては、ドイツからの脅威がすべてのものゝ上に暗影を投ずるやうになつた以前に於て皇帝の政府が執つて居た對外政策に復歸しさうな傾向があるのである。一九〇七年に至るまでは、皇帝の政府の對外政策は、イギリス及び日本に反對してアジアへの膨脹を畫策したものであつた。斯ういふ看板は、過激派の出現と共に塗り變へられた。そして、若しイギリスと日本とがロシアの革命政府に對して辛辣なる敵意を示さなかつたのだつたら、その看板と共にその事實も變はつたことであつたらう。ところが、この政府は自己の生存のための戰ひを强ひられ、そしてその戰ひに於て異常の成功を收めるやうになつたに伴れて、それは戰爭の不可抗の勢ひに押されて、假裝したる征服政策を執らねばならぬやうな土俵際にま

で追ひ遣られた。かうした假裝したる征服政策は、事實上舊帝政時代の政策と同じものであつて、しかも民族的本能の立場からいへば、それが極めて自然的な政策であるといつたやうな無限に大なる利益を有して居るのである。

ロシア國民がアジア征服政策の徹底的採用にまで追ひ遣られるか否かの問題は、世界歴史の將來に取つて、甚だ重要なるものである。そして、ロシア國民がそれを採用するか否かの問題は、私の考へでは、列強が適當な時期を失しないうちにロシアと講和締結及び通商開始をすることを承諾するか否かの問題に全然繋がつて居るのである。最近百年間の政治に於て、これ以上に重要な契機があつたとは、私には考へられない。で、私は私の能力の許す限りに於て、イギリスと日本との側に於て、勞農ロシアに對して採ることの出來る和戰兩樣の政策の歸着點を揣摩して見よう。

もしロシア國民が平和と通商とを得たならば、それが彼等の對內政策及び彼等の前途の全形勢の上に及ぼす影響は、非常に宏大なものであらう。まづ第一に、彼等は運輸交通をその戰前の狀態に復歸せしめることが出來るであらう。次に、都市及び軍隊の需要する食糧を農民から徵集する代償として、服地や農業用機械やを彼等に供給することが出來るであらう。さうなれば、農民の不平は直ちに緩和されるであらう。殊に彼等農民は兎に角過激派のお蔭でその土地を得たのだし、その上に若し反動的勢力が勝利を得ようものなら、忽ちそれを彼等の手から捲き上げられるかも知れないといふ懸念があるのだといふ點を考へれば、彼等の不平は、さういふことで直ちに緩和されるであらうと思はれる。それはロシアの農業に再生を與へることになり、その結果食糧が不足なく產出せられるやうになり、從つて都市に於ても、ます〳〵多くの貨物が製出せられるやうになるであらう。さうなると、過激派に取つては、ロシアの產業界の方面に於ても、その人氣を恢復することが出來るであらう。その時には、田舍の農民も都市の住民も、大抵のものは、共產政府

苦しくは共產主義に反對しなくなるであらうが、今では彼等は、聯合國の行つて居る封鎖のために生活の安易を得て居ないのであつて、そして彼等はこの安易の缺乏を政府の失政の結果だと勘違ひして居るのである。もし政府が彼等に生活の安易を與へることが出來たなら、彼等は政府嫌ひでなくなるであらう。

共產政府（過激派政府）は、それ自身が人氣に投合して來たことを意識して來れば、それが現今自國民の上に何かにつけて加へてゐるところの自由に對する束縛を、餘程多くの點に於て緩めるに違ひないであらう。若しこの政府が貧困のどん底へ追ひ詰められないならば、教育のために偉大なる業績を擧げるであらう。若しまた、この政府が諸外國と通商を行ひ、且つまた通商に隨伴する筈の交際を行ふやうにならば、外國の輿論に向つて一層注意を拂ふやうにもなり、またそれに對して一層氣を兼ねるやうにもなるであらう。それやこれやで、かの國家の存亡を賭して絕望的奮闘に從事してゐる際に不可抗的に生ずるものであるところの集團的熱狂の雰圍氣は、自然と消散するであらう。さうなつて來ると、ロシアの共產主義は、かういふ事情の下に於ては、或ひは、今まで多くの氣分家連を喜ばせてゐたところの、その火のやうな熱烈さを幾分失ふやうにならないにも限るまいが、しかし同時に、それはもつと實際的になるでもあらうし、共產制度が一個の生產の樣式として如何なる實績を擧げ得るものであるかを示す機會を得るであらう。で、若しそれが成功すれば、それは唯單に人々の感情に訴へる力を示すばかりでなく、また絕望裡に希望を求めやうとするやうな人心の弱點に投合するばかりでなく、それは實に人々の理性にも訴へる力を示すであらう。產業上の先進諸國も、さうなつた曉には、これまでのやうに單にロシアから革命の酵母を得ることを能事とするばかりでなく、色々のことをロシアから學ぶことができるであらう。そしてその場合には、どうせ晩いか早いか一度は來ないで措かないであらうところの共產制度の推移も、世界を顚倒させるやうな事變なしに無事平穩の間に行はれまいにも限らないであらうし、また一方當

のロシアに於ては、現今行はれて居る通りに、小資營業を法律で禁止する試み——それを實行するためには、警察やら、裁判やら、監獄やらの素々しい道具立ての必要な——そんな試みを全廢して、その代はりに、勞農政府直營の賣店を私人經營の賣店よりも一層人を惹き附ける力のあるものにする政策が行はれるやうになるであらう。なぜなれば、共產制度は、それが普通人の本能を强硬に法律で抑壓しないでも圓滑に行はれるといふ境地に達したのでなければ、決して成功したものだとは言はれないのだから。——

之に反して、若し列强が今後尙ほ引續いてロシアを封鎖したり、またロシアの隣接諸國民とか折々飛出して來る冒險家連とかを嗾し掛けて勞農政府を襲擊せしめたりすることを止めないならば、その時には、局面の展開が上に述べたものとは、必然的に非常に異がつたものとなるであらう。實をいへば、かういふ局面の展開は、今までに於て既に、餘程のところにまで進んで來てゐるのだが、しかし、かうした事は、もと〳〵過激派の初志に反してゐることであるから、過激派が平和と通商とを得れば、その代償としてそれを抛棄するであらう、——といふのが私の確信である。

過激派は東部ヨーロッパから北部アジアに擴がつて居る一帶の曠野を支配して居る。こゝから古來世界の大征服者と目指されて居る人々の多くが出て來たのである。成吉汗もこの同じ地方から踏出して大帝國を創建したのだが、ロシアも外から吹掛けられた戰爭に於て單なる自存のための奮鬪を續けてゐるうちには、成吉汗の版圖にも增した版圖を獲得しまいにも限らない。それに、過激派の思想は、そのアジア的方面に於ては、回々教の敎義に似つかないものでなく、そして若しかすると、さうした精神と同氣相求め易くなるかも知れない。之を要するに、西洋の民主諸國の對過激派的敵對は、そのアジア式方面を唆る結果に陥り、延いて、曾つてアジア人の群れが屢ばヨーロッパを震駭せしめた時のや

うな驚天動地の禍亂を誘惑しさうな危險をます／＼濃厚にする傾きがあるのである。

　私は思ふ、かういふことは過激派が熱望して居ることではないと。彼等が熱望して居ることは、ロシアを出來るだけ合衆國に似寄つた產業國にならせたいといふことである。唯合衆國に在つては大富豪達が幅を利かして居るのが、ロシアに在つては大官達が幅を利かして居ることであり、そして工業的熟練の報酬が、彼に在つては富であるのが、此に在つては權力である、といつたやうな點で異つてゐるばかりである。過激派は彼等が實現したく考へてゐる社會に就いての理想を持つて居るが、この理想は產業主義に繋がつて居るものであつて、產業的に進步して居る諸國でなければ直ちに實現することが出來ないといつたやうな種類のものである。勞農政府に於ける人達の殆んど總べては、國外に流寓の身となつて永い歲月を西洋諸國で送らせられた連中であるところから、彼等がさうして居た間に西洋風の物の見方や仕方を好むやうになつたのである。彼等が彼等の注意の大部分を東方へ向けたのは、決して彼等の任意の選擇とか希望とかから出たのではなく、全く西洋が彼等と交際することを拒んだからなのである。彼等は彼等の注意を軍事上の諸問題に向けることを好まなかつたのだが、しかし、彼等はそれにも拘らず、一大陸軍を創設するの餘儀なき破目に陷りそして平和が拒まれた限り、彼等は已むを得ず、征服の手を擴げるために彼等の陸軍と彼等の熟練とを用ひた。といふのは、さうすることが、彼等が危難を避けるために賴ることが出來た唯一の途であつたからである。

　帝國主義的及び民族主義的立場からいつても、アジア大陸の上に領土を持つたり、支那に於て無限の利害關係を持つたりして居るところの、日本とかイギリスとかいつた國々が、ロシアを强制して、心ならずも斯くの如き强大なる精神的及び物質的敵對力を起こさしめたのは、狂氣の沙汰と形容すべき程の愚かさである。今は過激派と和を講ずるためには餘りに遲すぎるといふことはないが、しかし、過激派と戰つて軍事上の勝利を得ようといふには、大に遲れたりとい

ふべきである。若しも我々がこの上ロシアとの戰爭を續けて行かうものなら、今後幾年も立たないうちに、ロシアがアジアの各部を席卷するか、若しくはそれらの各部と聯合するかは、殆んど確實である。もつとも、我々の海軍力で支配することが出來る諸地點はこの限りではあるまいが、そんなのは極僅かな例外である。

斯ういふ結果が生ずることは、いふまでもなく、日本及びイギリスに取つては、その民族的野心上の、及びその通商上の立場からいつても、大に憂ふべきことである。そんなことになると、それは事實上、是等の兩國の、列强中の大國としての地位の沒落を意味するものであらう。同時にそれは、墮落して居る、そして苦惱して居る世界を救ふ力の源泉にならないとも限らない理想運動として考へられる過激主義の價値を滅却するものともなるであらう。疑ひもなく、過激主義をして、ヨリ善き社會組織を憧憬する人々の眼に立派なものとして映ぜしめるところの一面は、ロシアがアジアを征服して殊にその結果として富と力とを得るやうになつた曉には、永遠に失はれるに決まつて居るといふことができる。その時は共産主義は、急に實現の出來さうにもない理想として、そつと高閣に束ねられてしまはれるであらう。かういふ道程はキリスト敎の場合に關聯して、歷史上よく知られて居ることである。すなはち、キリスト敎は、その初期に於ては共産主義的であつたが、キリスト敎會が富と力とを得るやうになつてからは、共産主義を異端的思想として斥けるやうになつたのである。

いかにも、右に述べたことは、楯の半面であつて、他の半面は又それとは異がつたところがあるといふことは、之を認めなければならぬ。すなはち、若しアジア全土が一大國に統一せられたとすると、それは世界平和に接近する第一步だと見られるであらう。なぜなら、それは攻擊に弱く防禦に强い一國となるであらうから。また、印度はその時には今

よりも一層大なる自由を得るであらうとは、儲かに保證が出來なくても、或はそんなことになるかも知れないとは、言ひ得られるのである。それからまた、支那がそのお蔭で若返るといふことも、あり得ることかも知れないのである。しかのみならず、イギリスにはその時はたしかに、帝國としての版圖を失つた結果として、一層自由な國土となるであらうし、そして丁度ロシアが最早共産制を實行する國でなくなつたと反對に、イギリスが共産主義を實行する國となるやうなことも甚だありさうなことである。しかしながら、ロシアがさうした帝國になつてしまへば、それは多分西洋の感化を受けないやうに閉鎖せられて、非産業的な國家となり、そしてその文明の水準は段々低下するのを免れないであらう。しかも、それが非産業的な國家となれば、最早近代的意味に於ける共産主義的ではあり得ないであらうし、そしてそれは主として、少數の治者階級の統治の下に在る自作農民から成立つ國となるであらう。それは内に在つて幸福な、そして外に對しては非侵略的な國家になるかも知れないが、しかしそれは最早、世界の煩悶の解決に對して何等の新しき原理を貢献しないであらう。ロシアの過激派の思想を中心として懐かれた高遠なる希望を映り立てた運動の結末がこんな處へ落ち附くものとせば、それこそ泰山鳴動して鼠一匹を出したやうなことにならうといふものである。

上來述べたところから不可抗的に生じて來る結論は、斯ういふことにならう。――ロシアは、今のうち少しも早く平和と通商とを得るのでなければ、當分の間は、過激派の理想を實施することが出來ないで居なければならないであらう。なぜなら、過激派自身が資本的諸強國と戰爭をやつて居る間に、已むを得ずこの理想を抛擲しなければならなくなるであらうから。これらの資本的諸強國が、彼等自身の過激派に對する敵對行動に依つて顚覆するであらうといふ樣なことも甚だありさうなことである。けれども、假りに若し、聯合國諸政府が過激派を憎惡するのは、過激思想の中にある善きものゝためであつて、そして、是等諸政府が過激派征伐を決行するのは、利己的動機に驅られたためといふよりは、

寧ろ共產主義及び經濟的公正といふものに對する狂想的恐怖に驅られたためだとするならば（かういふことは時としては避くべからざることであるらしいから）、しからば我々が、チャーチル式人物やミルラン式人物やの反過激派的行動に向つて、その或る程度に於ける成功の可能性を認めてやることが必要である。といふのは、彼等が舊きもの〻滅亡を喰ひ止めることに成功するであらうといふ意味でなくて、新しきものが舊きものよりもヨリ善き働きをするのを妨げることに成功するであらうといふ意味である。過激派は新しき理想の中堅として、ヨリ善き世界の實現の希望を齎らしつ〻政權を握つた。が、彼等は戰爭遂行の必要上、多くの點に關して、彼等の政治の遣り口を彼等が拒否する遣り口に段々と同化しなければならぬやうに仕向けられたのである。過激派思想中の價値あるものを保存し、價値のヨリ少きものを除くためには、唯一つの途がある。それは平和と通商との途である。それ故に、ロシア政府及び協商側諸政府に向つて講和締結を勸奬するためにあらゆる手段を講ずることは、生產手段の公有が進歩の道であるといふことを信ずるところの各人の義務であることは、いふまでもあるまい。戰爭を繼續して行けば、どちらかの側が名ばかりの勝利を得ることがあるかも知れないが、しかしながら、人類を愛するもの〻尊重するやうな主張が勝利を得るといふことは決してあり得ないのである。

現代社會の階級分析（續）

文學博士　米田庄太郎

（四）現代勞働者階級の諸部類

扨說現代勞働者階級の一般的概念は前節の初めに於て述べしが如きものであるとすると、之を詳しく研究せんとするに當ては、先づ之を幾多の部類に別たねばならないことは明らかであるが、玆に現代勞働者運動の發達から考へて第一に注意す可きは熟練勞働者と不熟練勞働者との區別である。此の區別は英米の産業界に於て、隨ふて英米の經濟學者によりて、又英米の勞働者によりても殊に重要視されて居るものにして、而して夫れは勞働を熟練勞働と不熟練勞働とに區別することに基づいて立てられたものであるが、然るに勞働に付て嚴格に此の二種の區別を決定することは甚だ困難であるが爲めに、勞働者階級に付ても科學的に右の二類を精確に決定することは甚だ困難である。今熟練勞働と不熟練勞働との區別に付て、英國の經濟學の大家マーシャル氏は其の大著「經濟學原理」第一卷の中に論述せる所見の大要を述ぶれば左の如くである。

進步の甚だ後れたる民族は如何なる種類の仕事も長時間續けることは出來ない。而して吾人が不熟練勞働と見做すものの最とも簡單なる種類でも、彼等にとりては熟練勞働である。蓋し彼等は夫れが爲めに要する精力を有せず、又之を獲得するには、永き訓練を要するからである。併し教育の普及せる國民に於ては、讀書の智識を要する仕事でも、之を不熟練勞働と見做して敢て差支へはないことになる。尙ほ製造業が永く營まれて居る地方に於ては、高價な器械や原料を取扱ふことに付て必要なる責任、注意及び迅速等の習慣は總ての勞働者に共通の性質となつて居る。而して器械を取扱ふ仕事の多くは全く器械的な又不熟練的なものにして、別に尊重に價する何等の能力をも發揮させるものでないと考

へられて居る。されど實際に於て今日の世界の人口の十分の一も、其の仕事に要する知力的及び道徳的能力知能や自制の力を有しないであらうと思ふ。恐くは二代間引き續いて着實に訓練したればとて、其の仕事を仕上げる熟練勞働者となり得るものは、其の半分もあるまい。實際製造等に從事して居る人口の中でも、一見すれば全く單調であるが如くに思はるゝ多數の仕事を適當になし得るものは只其の小部分である。例へば器械織りの仕事は一見すれば單純なるものであるが如くに思はれるが、而も夫れは上下の幾多の等級に分たれて居て、而して下等級の仕事に使はれて居るものの最とも多くは、數色を交ぜ合せて織る仕事に必要なる素質を全く具へて居ないのである。更に金屬や木材の如き硬き原料を使用する工業に於ては、其等の差異は一層大なるものである。

手工の或種類のものは、其作業の一組に於て永き實習を要する。併し此等の場合は、あまり普通ではない。且つ益々稀れになつて居る。是れ此の種の手の熟練を要する仕事は、益々器械によりて行はれて來たからである。なるほど指を一般的に自由に運用する技能は、工業的能率の甚だ重要なる一要素である。併し夫れは主として神經の強健なることと及び自己督制の結果である。夫れは勿論訓練によりて發達するが併し其の大部分は一般的性質のものにして、特定の仕事に特殊的なるものでない。かのクリッケットの堪能者は迅速にテニスの技を學び得る如き、熟練なる職工は大して又永續的に能率を失なうとなしに、屢々他の職業に移り得るのである。

一の仕事より他の仕事へ移さるゝことが殆んど不可能であるほど專門的になれる手の熟練は、今や生産に於て斷へず益々其の重要を失なふ因素となつて居る。藝術的官能及び藝術的創造の諸能力は暫らく措て、吾人は一の仕事をして他の仕事よりも高等ならしめるもの一都市或は一地方の勞働者をして他の都市或は他の地方の勞働者よりも有能ならしむるものは、何れの一職業にも專門化されない一般的聰明或は怜悧及び精力に於て優秀なるとであると云ふとが出來る。

同時に多數の事物に注意して、之を心の中に保ち得ること、必要なる時に何事でもすぐに役立てる樣に準備し得ること、間違の起るときには少しも狼狽せずに、迅速に適宜の處置を施し得ること、仕事の詳細なる點に於て起る變動に迅速に己を順應させ得ること、着實にして信頼し得られること、不時の出來事の起る際に直ちに使用される力の餘裕を常

に貯へ得ること、此等は實に偉大なる工業的人民を作る諸形質である。此等の諸形質は何れの仕事にも特有のものでなく、總ての仕事に於て要せらるゝものである。而して若し此等の諸形質が常に一の職業より夫れと餘の近い他の職業へ移し得られないとするならば、其の主要なる理由はつまりは彼等は原料に關する或智識及び特殊的なる過程に親しむ事において、補充さるゝを要すると云ふことである。

されば吾人は其等の諸能力及び種々なる度合に於て工業の總ての、やゝ高等なる部類の共有物たる其の一般的智識並に知能等を云ひ表はす爲めに一般的才能と云ふ語を用ゆるを得、而して之れに對して箇々の職業の特殊的目的の爲めに必要なる其の手の巧妙或は敏捷及び特定の原料並に方法を熟知すること等は、專門的才能として棄知されるとが出來る。

今以上述べしマーシャル氏の說によりて、吾人は先づ熟練勞働と不熟練勞働との差別は、文化發達の程度により種々異なるものなることを學ぶのである。文化發達のより高き階級にある人民にありては、不熟練勞働と見做さる可きものが、文化發達のより低き階級にある人民にありては熟練勞働と見做されねばならぬこととなり、兩者の實質的區別は時と處とに關係なく、之を普偏的に決定することは不可能である。次に吾人の學ぶことは現代文明國にありては器械の使用が益々發達するにつれて、熟練勞働と不熟練勞働との差異は段々に減少し、而して熟練勞働者の特權的地位が大に脅かされて居ることとである。吾人は此の傾向が器械の使用の殊に盛んに行なはるゝ米國に於て、甚だ著しく現はれ、と夫れが爲めに今や同國の勞働組合の組織に於て重大なる變動の起りつゝあることを見るのである。(拙著「晚近社會思想の研究」中卷別冊「米國I.W.W.の研究」參考。)次に吾人は又現代文明國にありては從來の熟練勞働と不熟練勞働との區別の骨髓をなせる勞働能力の差別は、マーシャル氏が一般的才能及び特殊的或は專門的才能と稱するものゝ間の差別に轉化しつゝあることを學ぶのである。此くて從來慣習的に定まれる熟練勞働と不熟練勞働との差別の根柢は大に動搖しつゝあるのである。併し今日までの英米の勞働運動史に於ては兩者の區別が甚だ重要なる意氣を有して居るのみならず、今日に於ても尙ほ其の意氣を大體上保持して居り、世界戰爭中英國に於てはヂリユーシヨンには勞働組合を破壞す

るものとして盛んに論議せられ、又米國に於ては不熟練勞働者は熟練勞働者の職業的組合に反對して革命的なる産業的組合を組織し、彼等特有の社會運動を起し來れること（上に擧げたる拙著參考）を考へ合せて、余は少くも近き將來に於ては、熟練勞働と不熟練勞働との慣習區別は倘ほ相當に重要を保持するものであらうと思ふ。而して吾人は此の區別に付て實質的には一般的なる決定をなすことは出來ないが、併し形式的に一般的なる決定をなすことが出來ると思ふ。然らば其の形式的に一般的なる決定とは、如何なるものであるかと云ふに、夫れは卽ち一定の部類の勞働を滿足に行ふ爲めには少くも數年間の習練を積まねばならないが、併し他の部類の勞働は普通の體力さへ具へて居れば何人でも別段に習練と云ふ程の豫備を要せずして、之を行ふことが出來ると云ふ事實に基づいて、前者を熟練勞働と見做し、後者を不熟練勞働と見做すと云ふ事である。何れの時代にありても其の時代の人々の一般の教育上から見て、數年間の習練を積むに非らざれば一人前の仕事をなすと見做し得られない性質の勞働と、然らざる性質の勞働とがある。夫れは文化發達の階級如何を問はない。如何に高等なる階級にありても矢張り其の區別は立て得られるのである。前の階段にありては特に熟練勞働と見做す可きものが、後の階段にありては最早熟練勞働と見做し得られない程容易に、一般の人々の從事し得るものとなるかも知れない。併し其の時には又特に熟練勞働と見做す可き高等なる他の種類の勞働が發達するであらう。倘ほ何れの時代に於ても、何人でも普通の體力を具ふる以上は容易に從事し得る勞働は少なくない。而してかかる勞働に從事する人々は、常に不熟練勞働者と見做さる可きものである。器械が益々盛んに使用せられ、而して適當なる教育が愈々普及するに從ふて、從來熟練勞働と見做されたるものを、僅かなる期間の習練によりて、容易に行なひ得る人々は段々增加するであらう。而も何等の教育を受けずとも普通の體力と知力とさへ具へて居れば、直ちに從事し得らるゝ種類の勞働は常に存在し、而して又かゝる勞働よりなし得ない人々も亦常に存在するであらう。されば或意味にては熟練勞働と不熟練勞働との區別は、永久的のものであると考へることは出來るのである。而して吾人は如何に文化の發達せる國民に於ても、熟練勞働者と不熟練者との區別を認めることが出來るのである。

熟練勞働と不熟練勞働者との區別は、器械の使用の發達するにつれて理論上傳來の重要を減少す可きものであるに拘らず、實際上に於ては尙ほ重要を保持して居るのである。且つ余が右に述べし意味にては、永久に其の重要を保持するものとも見做し得られるのである。而して現代勞働者階級の發達を研究するに當ては、此の區別は決して輕視す可きものでないが、併し更に重要視す可き分類がある。夫れは產業の區別による勞働者の分類である。尙ほ此の分類も今後段段其の重要を失なふ可きものであるが、併し少くも今日までの發達に於ては甚だ重要なる意義を有するものである。蓋し現代勞働者階級の今日までの發達は、此の分類の上から見たる特定の部類の勞働者の運動によりて、主として成就されたるものであるからである。而して今產業の區別に基づいて近代勞働者を分類するに當て、純理論的に考ふれば彼等は近代產業が分類されるだけの數に分類されるのである。而してかゝる分類も決して無用ではないが、併しあまりに形式的にして實際的には其の効用は少くない。夫れで之れに社會的重要の見地を加味して考察することが、必要であると思ふが、シエンベルヒ氏は工業的勞働問題を論究するに當て、「勞働者問題は其の內容に於ては勞働者諸階級に從ふて種種に異なれる社會政策問題である」と認め、而して「吾人は此の見地から見て特に賃銀勞働者の三部類、隨ふて又三つの異なれる勞働者問題を區別することが出來る。此等の部類の各々に於て害惡の狀態改良の目的及び救治手段は、夫れ夫れ性質を異にするものである」と述べて居るが、今同氏が賃銀勞働者の三部類、隨ふて勞働者問題の三種と云ふは即ち左の如きものである。

（1）　農業賃銀勞働者（農業勞働者問題）

（2）　大工業的企業大採鑛業的企業及び其他原料獲得を目的とする大企業、殊に廣義の工業的企業の賃銀勞働者（工業勞働者問題）

（3）　小中工業の勞働者、所謂手工業職人（職人問題）

シエンベルヒ氏の右の分類は今日も勞働者問題の研究に於て一般に用ひられて居るものにして、而して勞働者問題の

今日までの狀態に於ては、實際上有益なるものであつた。勞働者階級中に含まるゝ多數の部類に付て其の社會政策的意義の上から考察すると、一方に於ては廣義の工業的大企業に使用せらるゝ勞働者は大體上同一の狀態にあるが、他方に於ては農業的勞働者は之れと異なれる狀態にあつた。更に小中工業に使用せらるゝ勞働者は右の兩者の何れとも異なれる狀態にあつた。されば此等三種の勞働者は夫れ夫れ其の運動の目的、及び方法を異にし、隨ふて又社會政策的見地よりして彼等の改良を圖る爲めにも異なれる方策を講究せねばならなかつたのである。而して今日に於ても此等三種の勞働者は尙ほ夫れ夫れ特色を有し、又詳細の點に於ては彼等の運動も夫れ夫れ特色を有して居るが、而も從來の如く各々孤立して、或は時には相反對してさへも運動する傾向は大に減少して來た。而して輓近に至つて大工業的勞働者運動と農業的勞働者運動とが聯合或は合同する形勢が著しく發達して來た。尙此の形勢の發達に於て勞働者運動が殊に過激化する傾向の見ゆることは吾人の大に注意す可き點であると思ふ。とにかく工業的勞働者と農業的勞働者とは今や均しく勞働者階級としての彼等の共同の利害を意識し來り、從來の如く各々他と離れて運動を行はず、相聯合し或は合同して運動を行はんと企だてて來て居るのである。(米國に於ける此の傾向の發達に付ては拙著「米國I.W.W.の研究」參考)。又小中工業の勞働者も矢張り大工業的企業の勞働者と共同の利害を段々意識して種々なる方面に於て、之れと運動を共にせんとする傾向を示して來た。されば社會運動の輓近の發達から考へると、此等三種の勞働者の區別は從來とは其の意義を異にしてくると思はれる。即ち從來の如き稍々根本的なる意義を有する區別ではなく、只實際的便宜上の區別となつてくると思はれる。而して此の點は勞働者運動の將來の發達上大に注意す可きものである。要するに今後の勞働者運動に於ては產業上の差別は段々其の根本的意義を失ひ、其の運動は勞働者階級全體の運動として發達する傾向が段々著しくなつて來て居るのである。尙ほ是れは勞働者階級の覺醒に伴なふて發達する自然の結果であらうと思はれる。

　これは勞働者運動の將來の發達に於ては、大工業的勞働者と農業的勞働者と小中企業的勞働者との區別は甚だ意味のなきものとなるかも知れない。併し今日の狀態に於ては尙ほ意義を有するのみならず、今日までの發達に於ては甚だ

大なる意義を有つて居る。蓋し今日までの勞働者運動は主として大工業的勞働者によりて行はれ、而して之れに今日までの現代勞働者階級の精神的生活の發達は大工業的勞働者を中心として行はれたものであるからである。而して普通に工業的勞働者或は特に大工業的勞働者と稱せらるゝものに於て、今日までの勞働者運動の發達、隨ふて勞働者階級の精神的生活の發達に於て重要なる役目を演じたるものは工場勞働者、交通業勞働者、鑛山業勞働者、建築業勞働者等であると思ふ。

却説是れまで論述し來れる處によりて、余は現代勞働者階級の概念をかなり詳しく究明したと思ふが、尙ほ我國今日の狀態に於て工業的勞働者の特性を十分に理解する爲めに少しく論じて置かねばならぬと思ふ。と云ふのは我國に於ては嚴密なる意味にて云ふ現代勞働者階級の代表者と見る可き工業的勞働者は輓近に至りて始めて急激に増加して來たのであるが、然るに彼等の多數は尙ほ十分に工業的勞働者として分化して居ないが爲めに、我國今日の狀態から見て現代勞働者階級の概念を十分に理解することは困難であるからである。今現代勞働者階級とはつまり法律上及び政治上の自由を有し、契約によりて他人に傭はれて勞働し、夫れに對して拂はるゝ賃銀によりて獨立せる生活を營む無產者を總括するものである。約言すれば自由賃銀無產勞働者である。但し右の概念中にて政治上の自由を有すると云ふこと、即ち參政權を有すると云ふことは、今日では勞働者階級の本質的一要素となつて居るが、併し此の要素は具はらなければ現代勞働階級はまだ成立して居らないと云ふのではない。假令此の要素が具はらなくとも、法律上の自由、人格が認められて居れば、夫れで現代勞働者階級は成立して居るのである。要するに政治上の自由は現代勞働者階級の完成する爲めには必要なる一要素であるが、併し其の成立には必ずしも具はらなければならぬ要素でない。之に反して法律上の自由は其の成立に必要缺く可からざる要素である。されば又政治上の自由、即ち參政權の認められて居ない我國の勞働者は、完成せる意味では現代勞働者とは云ひ得られないが、併し法律上の自由が認められて居るのであるから、既に現代勞働者として成立して居るのである。併し玆に特に我國の工業的勞働者に付て注意しなければならぬ點がある。夫れは

彼等の多數はまだ現代勞働者階級の代表者たる工業的勞働者として、十分に分化して居ないと云ふことである。

今一般的に云へば廣義の工業に働く自由賃銀勞働者であれば、吾人は之を現代勞働者階級の代表者たる工業的勞働者であると云ふことが出來る。されば今日我國に於ても工業に働く勞働者は總て之を工業的勞働者と見做すことが出來るのである。併し嚴密に云ふ工業的勞働者が他の部類の勞働者より十分に分化して存立する爲めには、更に一の條件が必要である。夫れは彼等は一般に工業的勞働に非らずば勞働することが出來ないと云ふ程、其の勞働に於て十分に分化して居ると云ふ事である。現に工業的勞働をなして居るが、併し必要なる場合には、何時でも他の勞働に移り、農業的勞働や其の他の勞働をなすことが出來れば、又之をなす意志も有つて居ると云ふのであれば、彼等はまだ十分に分化せる工業的勞働者ではないのである。工業的勞働でなければ之をなすことが出來ねば、又之をなす意志も有つて居ないと云ふ程になつて、玆に彼等は始めて工業的勞働者として十分に分化せるものと云ふことが出來るのである。然るに今日我國の工業的勞働者の少なからぬ部分或は大なる部分はまだそこまで工業的に分化して居ないかと思はれる。彼等の多數は工業的勞働の賃銀がよいと云ふので、俄かに農村より出て來たもので、工業的勞働の賃銀が低落するか、又は不景氣の爲めに解傭さるれば、何時でもゝとの農村に歸りて、農業に從事することも出來れば、又之をなす意志も有つて居るのである。尙ほ彼等の少なからぬ部分或は多數は農業的勞働者よりは寧ろ小作人或は其の子弟である。彼等は工業的勞働をなすに於ては勞働者であるが、併し古郷へ歸れば最早純然たる勞働者でなくして小作人である。而して工業的企業から解傭されたればとて直ちに其の日から生活に困ると云ふのではない。されば今日の我國の工業的勞働者の多數はまだ十分に分化して居ないので、嚴密に云へば純然たる工業的勞働者でないのである。是れ我國今日の工業的失業勞働者問題は歐米諸國に於ける程重大なる意義を認められず、又隨ふて我國では此の問題を解決せんとする企てが、まだ眞面目に發達して居ない所以であらうと思ふ。要するに我國今日の狀態に於ては、まだ嚴密に工業的勞働者と稱す可きものは、比較的に小數であらうと思はれる。而して外見ながら一般に工業的勞働者と見做さる可きものの多數は、まだ眞

の工業的勞働者ではないので、殊に彼等は工業的勞働者としての心理的特性も、精神的傾向もまだよく發達させて居ない。此くて我國の人々も一般に工業的勞働者に付て只漠然たる觀念を抱いて居るだけで、十分によく之を理解して居ないのである。吾人は我國の識者とか名士とか稱せらるゝ人々が、新聞上や雜誌上に於て、表される勞働問題に關する意見を見て、彼等が現代勞働者なるもの性質に付て、全く理解を缺いて居るのに、屢々驚かされるのである。されば我國今日の勞働者の狀態を見て、現代勞働者階級の性質を十分に理解することは甚だ困難であるので、之を十分に理解する爲めには、吾人は歐米諸國に於て彼等の大に發達せる今日の狀態に付て、觀察しなければならないのである。

併し我國の工業的勞働者も尙ほ永く今日の如き狀態に止まるであらうか。或意味では今日の狀態は勞働問題の解決に種々なる便宜を與へて居る。例へば上に述べし失業者問題に付ての樣なものである。詳しく云へば我國の工業的勞働者がまだ農民より十分に分化して居らないと云ふことは、工業的勞働者問題の解決に種々なる便宜を與へる。併しそれと同時に、かゝる勞働者に於て工業的勞働の能率の大に高まるを望むことは、到底不可能である。而して夫れが爲めには工業的勞働者は十分に分化せねばならぬ。即ち農業的勞働は到底出來なくなるまで、又之をなす意志が全くなくなるまで、彼等が工業的勞働に於て專門化するに非らずば、彼等の能率は十分に高まることが出來ないのである。而して今後我國が今日の形勢を持續して益々現代的に發達し、以て世界的經濟上に於て優勝なる地位を占むるには十分に分化し、能率の大に高まれる工業的勞働者の發達することが、是非必要なので、若しかゝる工業的勞働者が發達する場合には、我國は到底世界的經濟上に於て威を振ふことが出來ないのである。隨ふて我國が今日の形勢に於て益々進步するに於ては自から十分に分化せる工業的勞働者の發達を促がし、我國に於ても嚴密なる意味に於て云ふ工業的勞働者は大に增加するであらうと思はれる。而して其の際には我國の人々も一般に工業的勞働者の性質及び社會的地位をよく理解し、又彼等の社會的運動の意氣をもよく了解するであらう。然るに今日の處では上に述べし如く我國の工業的勞働者は一般にはまだ十分に分化して居ないから我國の人々は識者・名士と云はるゝものでも、尙ほ工業的勞働者の特質も、彼等の社會

的意義もよく理解することが出來ないのである。

（五） 現代ブールヂョア階級

余は前數節に於て論述せる處によりて現代勞働者階級の概念をかなり詳しく究明したと思ふが、終りに現代文明國に於て支配階級の地位を占め根本的には最とも重大なる勢力を有する現代ブールヂョア階級の概念を少しく論究して、以て、尙ほ一層明確に又詳しく現代勞働者階級の概念を究明して置きたいと思ふ。蓋し現代勞働者階級は現代ブールヂョア階級の發達に伴なふて自然的又は必然的に發生し、而して之れに對立する一の基本的社會階級として發生し來れるものなれば、其の概念を精確に究明する爲めには、吾人は之を現代ブールヂョア階級の概念と對照して考察することが必要であるからである。

今ブールヂョアと云ふ語は佛蘭西語にして、もとブールヂュ（Bourg）の住人を意味せるものであつた。而してブールヂュと云ふ語はもと日耳曼語にして、其の原義は單に住居團體を意味するものであつたと思はれるが、後其の意義は更に變化して、ライン河の彼岸にありては領主の城を意味し、佛蘭西にありては、普通にシヤトウや修道院の周圍、又は都市の外廓に密接して作られたる住居團體を意味するものとなつた。中世紀にありては在來の多數の都市に接して此の種の住居團體は發達して居た。更に此の如き住居團體が幾つか集りて、一の都市を形成するに至れる場合もあつた。而して其等のブールヂュの住民に始めてブールヂョアと云ふ名が與へられたのである。併し其後ブールヂョアと云ふ語の意味が擴張せられ、第十三世紀以後は總て僧正都市に非らざる都市の住民に適用されることになつた。尙ほコムミユン革命時代即ち第十二世紀の始め以來、都市の大多數が種々なる特許權及び特權を與へられ、或は自から獲得するに至つて、ブールヂョアの意義は制限せられ、且つ精確になつて來た。而してブールヂョアと云へば都市の總ての住民を意味するのではなく、只住居、不動產及び能力等に關して一定の條件を具備し、當時自由（libertis）と稱せられし一定の特

權を有するものだけを意味することになつた。只ブールヂョアのみが完全なる市民權を有し、彼等の集團が市民團體(la Communauté)を構成し、只彼等のみが選擧權及び被選擧權を有することになつた。要するにブールヂョアと云ふことは一の特權となつた。而して其の權利の得喪の事情及び條件を決定する諸般の條規が、制定されて來たのである。此くて此の特權的なるブールヂョアの下にマナン(Manants)と稱せらるゝ下等階級が形成さるゝに至つたが、其のマナンと云ふはつまり都市に住居するが、而もブールヂョアの特權を有しない人々である。而して中世紀の商業都市の大多數に於ては、ブールヂョアは一種の貴族階級の地位を占め、只彼等のみが市民權を獨占して、當時の工業勞働者即ち職人を從屬的地位に壓迫せんと企だてた。但し其等の職人は當時 le commun と稱せられしものを構成して居たのである。

却說中世紀に於てブールヂョアである爲め、或はなる爲めには、上に述べし如く一定の條件を具備しなければならなかつたが、其等の條件中にて最とも普通なるものは住居條件であつた。即ち一定の期間以上都市に住居して居らねばならなかつた、又はブールヂョアの娘と結婚して都市に定住せねばならなかつた。而して不在は殆んど何處に於てもブールヂョア權喪失の一原因とされて居た。さればブールヂョア權は先づ第一には一種の物權であつたと思ふが、併し第十二世紀以後に至つては、一定の事情の下に於ては、一種の自分權に轉化することが出來たのである。然らば其の轉化は如何にして行はれたかと云ふに或領主の支配下にある自由人が其の領主の追求を免るゝ爲めに、一層勢力の大なる他の領主殊に國王のブールヂョアであることを宣言し或は自認することによつて、其の領主又は國王の保護を求めんとしたことが即ち此の轉化の原因であつたのである。此くて傳來のブールヂョアの外に自認或は宣誓のブールヂョア(Bourgeois par aveu)なるものが發生して來たのである。而して此の種のブールヂョアは國王に年々一定の租稅及び年賦金を收めることによつて、一定の場合を除けば、彼等の居住地の領主の支配を脫却するものとなつた。此くて彼等は何れの都市にも附着することなくしてブールヂョアとなつたのである。尙ほ其他にも領土の追求を免れん爲めに、其の居住地を

變ぜずして、ブールヂョアとなる方法があつた。夫れは一定の手數料を拂ふこと、宣誓をなすこと、不動產を都市に於て買入れること、及び其他の條件を充たすことによりて、國王よりブールヂョアの特許狀を受くることである。此くて特許狀のブールヂョア（Bourgeois lettres）なるものが起つて來たのである。併し此の種のブールヂョアは普通に所有地外居住のブールヂョア（Bourgeois forains）と稱せられて居た。尙ほ此の方法によりて國王のブールヂョアとなれるものは、特に「國王のブールヂョア」（Bourgeois der roi）と稱せられて居た。而して國王は其の勢力增進の一手段として、此の「國王のブールヂョア」を大に歡迎し、其の增加を奬勵したが、併し領主等は自己の勢力の衰退を招くを恐れて、時には兵力に訴へても之れに反抗せんとした。されど時代の大勢は益々「國王のブールヂョア」の增加を促がし、而して後には農奴も國王のブールヂョアとなることを許さるゝに至つた。

併しブールヂョアは身分に於て平民（Zoturiers）であつたから、封建法制によりて封建的領地を取得することは禁ぜられて居た。されど第十三世紀以後は法律家は該法制の適用を緩和し、此の時代に於ても既に古くより行はれて居た土地の違法取得を認可する手段を工夫した。而して實際上ブールヂョアは段々土地を所有するに至つた。但しブールヂョアの特權は都市によつて種々異なつて居たが、或都市では、其の特權は甚だ大にして、貴族すらもかゝる都市のブールヂョアとなることを熱望する程であつた。此くてブールヂョアの實力は大に增加し、殊に第十四世紀に於ては、彼等の奢侈禁止例を屢々發布せしむる程に達した。而して此の時代に於ては、彼等は政治上に於ても重要なる地位を占むることになり、茲に第三報團（le tiers Etat）と稱せらるゝ一の新階級を構成するに至つたのである。されど夫より間もなく都市制度は衰退し、都市の政治的特權及び獨立が減弱するにつれて、團體としてのブールヂョアの政治的勢力は衰へたが、而も其の社會的重要は減弱しなかつた。而して夫れより後はブールヂョアと云ふ語の意味が曖昧になり、總て自己の財產收入だけで豐かに生活するに十分なる富者を漠然意味するものとなつた。又此の時代よりして彼等は作者や諷刺畫工の嘲弄の目標となつて來たのである。彼等の上流社會に入らんとする努力、彼等の成金的利已心、彼等の大なる

財産を所有することと矛盾する彼等の經濟思想及び、教育の劣等なること、平民に對する彼等の傲慢等は、常に世人の嘲弄罵詈の材料となつた。併し夫れと同時又此時代よりして彼等の中より有名なる政治家、法官、財産家、學者、文學者等が續々現はれて來た。而して舊時代の終り頃に於ては、ブールヂョアは貴族より離れて居たが、併し特權や生活作法なぞに於ては殆んど差異はなかつた。彼等は貴族と同樣なる教養及び教育を有つて居た。彼等は貴族と同じ高等學校に於て教育を受け、同じ思想や趣味を有つて居た。而して第十八世紀末の大革命は、實に彼等を中堅として行はれたものである。此の大革命によりて貴族とブールヂョアとを區別せる障壁は全く破壞され、隨ふて夫れまでは尙ほブールヂョアと云ふ語に附着して居つた法律的意味は全く消滅した。而して普通には單に其の財産所得によりて安樂に生活する人人を意味することになつたのである。然るに佛國社會主義者や共産主義者が此の語を特に勞働者階級に對して專ら資本の利益を代表する有産者階級を示すに用ひてより、其の用法が始めは只社會主義者の間に行はるゝに止まつて居つたが、後には大體上右の意味にて社會科學上の一の術語となつて來たのである。而して今日社會科學に於てはブールヂョアと云ふ語は、プロレタリア或は勞働者階級に對して之れと利害を異にする處ある、資本家階級或は有産者階級全體を意味するものとして用ひられて居るのであるが、余は更に其の概念を一層精確に決定して左の如くに云ひたいと思ふ。

ブールヂョア階級或は有産者階級とは財産を以て生活の基礎となし、而して財産所得を以て獨立に安樂なる生活を營むことができ、且つ財産の力を以て彼等が社會的及び政治的勢力を振ふ根柢となさんとする人々の總體である。

尙ほブールヂョア階級は其の起源から云へば、商業者及び工業者を中心として發達し、又今日に於ても其の中堅をなすものは大商工業家であるから、其の生命とする財産と云ふは、卽ち動産或は貨幣財産にして、而して其の點に於ても土地所有を其の財産的基礎となせる貴族と異なつて居たのである。併し其の後はブールヂョア階級は土地をも所有するに至れると、今日では財産の種類如何を問はず、財産其物が勢力の根柢となつて居るから、ブールヂョア階級が大いに力を振ふ國民にありては、貴族の勢力と云ふもつまりは主として其の土地又は他の種類を多く所有する事に基因して居

る。此くて現代文明國にありては、一般に貴族階級はブールヂョア階級に對立する社會階級であるよりは、寧ろ其の中の特別なる一部類となつて居ると思ふ。殊に貴族階級とブールヂョア階級との間に、結婚が盛んに行はるゝに至つて、ブールヂョア階級が貴族化すると同時に、又夫れよりも遙かに以上に貴族階級がブールヂョア化して居ると思はれる。

却説現代社會に於けるブールヂョア階級、卽ち現代ブールヂョア階級の一般的概念は、以上述べしが如きものであるが、然らば今此の如き現代ブールヂョア階級と現代勞働者階級との根本的關係卽ち現代社會問題或は現代勞働者問題の根本義は如何なるものであるかと云ふに、是れは先づ現代ブールヂョア階級の精神或は心理を研究することによりて理解されるのである。而して現代ブールジョア階級の精神或は心理を、典型的に表現するものは、現代企業家である。それで余は終りに、現代企業家の精神或は心理を簡單に論述することゝする。

抑々近代企業家の精神を支配する最とも根本的なる念は何んであるかと云ふに、夫れは營利の念と事業の繁榮を圖る念との二者であることは、少しく注意して考察するに於ては直ちに發見される事實である。併し此等二種の念が商工業者の精神を支配して居ると云ふことは、決して新しき事實ではなく、舊時代のブールヂョアに於ても矢張り同一の事實が發見されるのである。要するに營利の念及び事業の繁榮を圖る念は、何れの時代に於ても、ブールヂョア階級の精神を支配する根本的勢力であるので、決して近代企業家にのみ限れる事でない。併し尙ほ深く分析して考察すると、此の點に附ても近代企業家の甚だ重大なる一特質が發見されるのである。

夫れ舊時代のブールヂョアも營利と家業の繁榮とを圖ることを以て、彼等の最とも重大なる職務と觀念して居つたことは疑はれない。殊に家業の繁榮を圖ると云ふことは舊ブールヂョアが重代の家憲として遵奉せるものであつた。而して其の家業の繁榮と云ふ中には勿論營利の事を含ませて居つた。併し必ずしも營利の增大することのみを以て其の家業の繁榮とは考へて居なかつたと思ふ。是れ彼等の經營方法を考察しても明らかに認められるので、彼等はあまりに世人

の目に立つ樣な看板を掲げたり、仰々しく廣告したり安物を生産し販賣することを大に賤めて居たのである。彼等は只營利の增大することのみを以て、家業の繁榮とは觀念せず、假令利益が少なくとも一定の實業的名譽の高まることを一層重んじて居たと思はれる。此くて彼等は又多數の實業に關係するを賤め、一定の傳來の家業にのみ專ら力を集注して居たのである。金さへ儲かれば何んでもやると云ふ樣な人々は着實なる實業家ではなく、山師であるとして賤められ、而して累代の實業を固守し、其の生産物或は販賣品の品質を出來るだけ優良ならしむることに專ら力を集注する人々が眞に實業家として世人の信用と尊敬とを受け、而して其の世人の信用と尊敬とを作なふ營利が即ち家業繁榮の本義と信ぜられて居たのである。尙ほ舊ブールヂョアは營利を以て身分相應の生活を安樂に營み、身分相應の社會的義務を盡くす手段と考へて居たので、決して營利其物を目的として居たのではない。彼等は金儲け其の事を目的として業を營んで居たのではなくして、身分相應の生活を安樂に營み、身分相應の社會的義務を盡す手段として金儲けに努力し、而して其の身分相應の生活を安樂に營み、身分相應の社會的義務を盡くすことの出來るだけの利益を收めて、誠實に實業を營み、其の家業に付て世人の信用と尊敬とを得ることを以て、家業繁榮の眞義と考へて居たのである。要するに舊ブールヂョアは營利を重んじたが、併し營利其物を目的とするのでなく、之を以て家業繁榮の手段と觀念し、而して家業繁榮とはつまり身分相應の生活を安樂に營み、身分相應の社會的義務を盡くすだけの利益を收めて、誠實に家業を營み、世人の信用と尊敬とを得ることであると觀念して居つたのである。されば彼等の家業繁榮の觀念は單に經濟的意義を有するだけのものでなく、又時代に適合する深大なる倫理的意義をも具有して居たのである。

然らば近代ブールヂョア階級の心理を最ともよく代表する近代企業家にありては、彼等の精神を支配する最とも根本的なる營利の念、及び事業の繁榮を圖る念は如何なる意義を有し、又兩者の關係は如何にあるかと云ふに、吾人は夫れは舊ブールヂョアの精神に於けるとは大に異なつて居ることを發見するのである。今有力なる今日の企業家にして、自から此の問題に付て反省を加へたる人々の言明する處によると、彼等の眼目とする處は營利、貨幣利得、金儲けではな

くして、事業の繁榮其物であるのである。ワルター、ラテナウ（Walther Rathenau, Telexianen, 1908）は先づ「余はまだ金儲けを以て其の事業の主眼として居る樣な實業家を知らない。而して余は箇人的金儲けのみに執着する樣な人は一般に大實業家となり得ないと敢て公言したいと思ふ」と云ひ、夫れより今日の實業家の生命とするは、事業の利益、事業の繁榮其の物であると云ふ注意を述べて左の如く云ふて居る。

實業家が力を盡くし思ひをこがす其の目的物は、彼の企業其物である。詳しく云へば彼の經營する商業的企業、工場、銀行、船舶、劇場鐵道である。彼は此の企業を簿記、組織及び商號等になりて夫れ自身獨立なる經濟的存在を有する一の生きたる實在物であるが如くに觀念して居るのである。彼れは此の企業を益々繁榮する、强健なる、將來に富める有機體として發達せしめる爲めに、努力し奮鬪すると言ふより外には、何等の努力奮鬪も知らないのである。

右に述べし如く現代の企業家は彼等の生命とするは事業の繁榮其物にして、決して金儲けでないと言明して居るのである。而して其の言には眞理は含まれて居ると思ふ。少くも彼等が當面に意識して居ることとは、事業の繁榮其物にして、決して金儲けでないことは明らかである。近來殊に米國に於て勃興する大企業を計畫する大企業家の精神を推察すると、彼等は決して金儲を其の當面の目的とはして居ないで、只大企業を計畫して、偉大なる事業を起すと云ふこと共事又之を巧妙に經營して行くと云ふこと共事が、意識的に彼等の精神を支配する動機であることが發見される。併し更に深く分析して考察すると、玆に吾人は彼等の意識して居ない動機が、根本的に彼等の精神を支配して居ることが發見するのである。夫れは即ち彼等が意識的には其の目的でないと言明し、排斥して居る處の其の營利の念、金儲けの念である。

夫れ資本主義が經濟生活の全體を支配しつゝある現代に於て、事業の繁榮とは根本的には何を意味するかと云へば、夫れはつまり、營利の大なることを意味するに外ならないのである。今日の企業即ち資本主義的企業は常に貨幣を以て始まり、又貨幣を以て終るものにして、出來るだけ多くの貨幣的利益を收めんとすること、即ち出來る丈營利を大なら

しむることが、即ち其の目的であり、生命である。而して營利を離れて事業の繁榮を考へることは出來ない。今日繁榮する事業と云へば、夫れは即ち營利の大たる事業を意味するのである。されば假令今日の大企業家の意識的に目的とする處は事業の繁榮であつても、結局は彼等は營利の大なることを目的として居るのである。要するに今日の資本主義的企業家にありては舊ブールヂョアに於けるとは異なりて、事業は只經濟的意義を有するのみにして、倫理的意義を具有して居ない。而して只營利を求むるが爲にのみ彼等は事業を起し、又益々營利を大ならしむるが爲めにのみ、其の發展其の繁榮を圖つて居るのである。尙ほ彼等は其の事業の利益を以て、舊ブールヂョアの如く、身分相應の生活を安樂に營み、身分相應の社會的義務を盡くす手段と觀念して居るのでなく、營利其の物を目的と觀念し、如何程儲かつても夫れで滿足することなく、儲かれば儲かる程益々多く儲けんとするのである。此くて吾人は近代企業家と舊ブールヂョアとは營利に關して根本的に異なれる思想感情を抱いて居ることを發見するのである。而して吾人は近代企業家は營利を夫れ自身にて目的であると觀念して居ると云ふことからして、彼等の心理の全體を理解することが出來るのである。玆に詳しく論述して居る暇はないから、現代企業家の心理の極一般を簡單に論述するに止めて置く。

さきに述べし如く舊ブールヂョアにありては、營利は家業繁榮の手段であり、而して又家業繁榮はつまり身分相應の生活を安樂に營み、身分相應の社會的義務を盡くす手段であつた。然るに近代企業家にありては、事業の繁榮其物が目的であり、而して事業の繁榮と云ふは即ち營利の大なることを意味して居るのであるから、つまり營利其物が目的となつて居るのである。玆に吾人は現代企業家を舊ブーヂョアより區別する根本的差異を發見するのであるが、此の差異が即ち現代企業家の精神組織を決定する根本的原因となつて居るのである。今現代企業家が事業の繁榮其物營利其物を目的とするに於ては、先づ出來るだけ事業を擴張して出來るだけ營利を大ならしめんとするは當然である。此くて彼等は企業の規模を益々擴大せんとし、而して一の事業が其の營利力の最高度に達したと思へば、更に其の上に新しき事業を起す。此くて今日の大企業家大實業家と稱せらるゝ人々は、一身にて如何程の事業に關係して居るか判らない程であ

る。吾人は此の點に於て現代企業家が舊ブールヂョアと如何に異なつて居るかを、外面上より見ても直ちに觀破することが出來るので、舊ブールヂョアは累代の家業を固守する單一企業家であるが、現代企業家は利益さへあれば何んでも着手する多頭の蛇である。而して營利其の物を目的として追求するに於ては、出來るだけ多くの事業を起すほど箇人の收益が增大するのであるから、現代企業家が此の如くに多頭的となるのは敢て怪むに足らないのである。

現代企業家は營利其物を目的とするから、出來るだけ事業を擴張し、又出來るだけ多くの事業に參加して、以て其の箇人的に收める貨幣的利益を增大せんとするのであるが、更に其の企業の經營に於ても矢張り出來るだけ多く貨幣的利益を收めること、卽ち出來るだけ多く金を儲けることを原則とする。約言すれば彼等は營利の目的を達する爲めに出來るだけ合理的に企業を經營すると云ふ經濟的合理主義を遵奉するのである。彼等は事業の選擇に於て出來るだけ營利の大なるものを選び、之を出來るだけ營利的に經營し、一厘一毛の利益をも失はざらんとするのである。夫れよりして彼等は勞働者をも單に原料や器械と同樣に一種の商品に過ぎないものとして觀念し、勞働者の人格を全く顧慮せずして、」只營利的見地のみから之を取扱ふに至つた。彼等は營利の爲めには人情も道德も敢て頓着しない、又之れに拘泥することは營利に有害であるとして排斥した。如何に神聖なる慣習も營利に害あると見れば、彼等は之を排斥するに躊躇しない。又從來如何に賤められて居つた職業も、若し其の營利力が大なれば彼等は之を甚だ神聖なるものとして尊重する。流感にて死亡者が非常に增加し、電氣仕掛の火葬場を設立することが甚だ有利であると見れば、堂々たる企業家が名を連ねて宛も紡績會社を起すと同じ氣持で火葬會社を起し、火葬場の建設經營を、紡績工場を建設し、經營すると同じ精神で之を行なふ。彼等にありては人間も只營利の手段に外ならねば、人情道德慣習も營利力を有つて居る以上は之を尊重するが、之を有たないもの或は之を妨ぐるものであらば、全く顧みないのみならず、大に之を排斥する。彼等は敵國に兵器彈藥を賣ることも、戰場にある母國の軍隊に送る罐詰の中に瓦石を詰め込むことも、營利の爲めには敢て躊躇しないのである。併し今や現代文明の大に進步せる國にありては、現代企業家の精神も段々改善せられ、彼等の營利心

も段々人道的精神によりて緩和されて來た。而して勞働者の待遇も段々改良されて來て居る。而も現代資本主義的の企業の發達の時代にありては、現代企業家は上に述べしが如くに、猛烈なる營利心のみによりて發動し、勞働者の人格は全く無視して、單に商品に過ぎないものと觀念し、只營利の爲めにのみ使役して居たのである。此くて現代勞働者階級の現代企業家、更に之を代表者とする現代ブールヂョア階級に對する反感が發生して來たのである。而して現代勞働者階級は始めは箇人的企業家に對し反感を抱くに止まつて居たが、次には企業家全體に對して更にブールヂョア階級全體に對して反感を抱くに至つた。（拙稿「現代勞働者階級の哲學思潮」哲學研究昨年十一月號參照）併し其の後現代社會の根本的禍根は現代資本主義其の物にあることを悟り、勞働者運動の大眼目は現代資本主義其の物の改造、或は廢止並に新經濟組織及び新社會組織の建設であると信ずるに至つたのである。而して今日自覺せる勞働者の組織的運動は此の信仰或は信念を以て行はれて居るのである。

始めに述べし如く本論文はもと現代社會に於ける勞働者階級の概念を社會學的に決定することを主眼として、書けるものであるから、題名の「現代社會の階級分析」としては不十分なる處もあると思ふが、とにかく余は本論文中に於て、勞働者階級以外の總ての階級の概念をも論究し、且つ其等の諸階級と勞働者階級との根本的一般的關係をも、社會學的見地より見て大體上論述したので全體より見て題目の主旨に適合して居ると信んずる。最後に余は本論文に合せて「大觀」本月號に於て發表せる拙稿「現代社會問題の社會學的意義」を閱讀されんことを讀者諸氏に望む。（大正九年十一月末。）

中産階級滅亡論（二）

山川　均

九　無産者と農民との對照

吾々は茲に、近代的無産者の精神上心理上の性質について、詳細な描寫をしようとしないで、唯だ一つの對照によつて、彼れの性質を表はしたいと思ふ。即ち、彼は有ゆる點に於て、小農（ペザント）の正反對である。そしてマルクスの言ふところによれば、彼はその歴史的使命を果すべき適當の道具である爲めには、斯うなければならなかつたのである。マルクスの小農に對する態度は、極めて特色がある。マルクスは小農が大嫌ひで、彼は其約束の邦土からも、小農は除外して居つた。此結果として、例へば露國のような、小農が『資本化』の作用を受けつゝある諸國では、マルクス主義者は、空想的な小農愛護者から、憐む可き農民に對して、有らゆる種類の怖るべき謀らみをして居るものの如くに非難されてゐた。無論、マルクスもマルクス主義者も、貧しい小農に對しては、唯だ同情と憐憫の外に他意はない。けれども彼等は、小農愛護者の主張が、到底望みのないことを明瞭に看取したばかりでなく、若し小農なるものが存續するとせば、それは確かに、社會主義の途上に横はる大なる障礙物であると云ふ事實をも認めてゐたのである。先づ第一に、小農の財産觀念を觀察して見よう。幾時代の間か、父祖と自身との生活して來た職業と環境との結果として、その土地にも、家屋にも家畜にも、其他何も自分のものと名のつく一切の物に對して、強い愛着心が出來てゐて、小農が是等のものと離れるのは、大富豪が其鉅萬の富と別れるにもました苦痛である。是等の物が如何に價値の無いものであつても、それは此場合には問題とならぬ。是等の物の價値は、なか〳〵金錢では測られない。之が小農の財産觀念を全て色どつて居る。彼れと彼れ以前の父祖たちは、この特定の地點に生活して居つた。そして一家の歴史は

永く此地點と關聯して居る。此處には幾代かの勞働と艱難とが埋められて居り、彼れ自身、歎き悲しみも、又た樂しい（若し斯んな者があるならば）思ひ出も、密切に此地點と繫ながつて居る。彼は此の處に生れ、また此の處に死なんことを冀ふ。各々の樹木、各々の建物、みな彼れ自からと彼れの家族との、大なる心配と勞苦の結果である。全ての家畜は、彼れと共に辛勞と悲慘とを分つ友人であり、伴侶であつて、其の多くは彼れの手塩にかけて、我子同樣に育てたものである。彼は若し其爲に、この苛税に苦しめられて壞廢した、價値なき財産を棄てなければならぬなら、寧ろ約束の邦土に入ることを欲しないだらう。小農に取つての財産權の『神聖』と、之に對する彼れの執着とは小農の特質を研究した者の、均しく認めるところである。小農の私有財産に對する斯ような觀念は、其頑迷で融通の利かないところと照らし合せて見て、環境に變化の無いことや、仕事の性質も方法も單調な爲めである。

そこで此の財産觀念は、彼を社會主義の頑強な敵とし、資本主義の有力な支持者たらしめたのである。尚ほ此上に、小農は他人と協力することが出來ぬといふ事が、彼をして社會主義の社會に不適當ならしめる。殊に社會主義的社會の實現の爲めに闘ふには、不適當ならしめる。小農は極度の個人主義者である少くとも猜疑とか頑固などと云ふ『個人主義的』の性質をもつて居るといふ點だけは、彼は最も大なる個人主義者である。幾世紀の久しい間、彼れは孤立した自足的の生活を營んで來た。彼は他人の助なしに、自己の勞作のみで生活した。彼は掠奪せられるか、壓制せられるか、時としては瞞まされること以外には會て他人と接觸しなかつた。小農が斯ような個人主義者となつたのに、少しの不思議も無い。また幾時代の間、小農の受けた壓迫の經驗も、また日常の仕事も、彼れを自治的な產業社會に於ける、複雜にして困難な任務に適したものとはしなかつた。否な全べて是等の事柄は、その甚しい貧窮と悲慘な生活にも拘らず、昔風の小農をして、社會主義の頑強な敵とならしめる。尤もそれに、昔風の小農が若し存續すればであるが、昔風の小農は、永く存續すべきものでない。吾々は今この所には、謂ゆる農村問題を論究して居られぬが、唯だ一言しておきたいのはマルクスの目撃してゐたような昔風の小農と、この小農を生じた昔の經濟的狀況と社會的環境も、甚しく、進歩の遲くれた國を除いては、最早存在して居らぬし、それ等の後進國でも、資本主義の進歩の前に消滅しつゝあると云ふことである。そして

之は以上に述べたことと、何等の矛盾もしないのである。普通の小農の消滅と共に、私有財産の支柱と反動の根城も、亦た消滅する、そして此點に於いて、小農に代つて能く反動的勢力の根據となるべき社會的階級は、他に存しないのである。

十　ブルジョアの心理

紳士閥は、農民の特徴を多く有しない。彼は機敏であつて、何時でも鵜の目鷹の目で居る。彼れの財産に對する愛と執着とは農民ほどに明から樣でない。彼はまた、個人化され人格化されるような種類の財産は持つて居らぬ。彼れの財産は、少しも自分で産出したものではない。彼はその所有する商品とも、又は其工場で使用する機械とも、何等の永續的の親密を結ぶことは出來ぬ。卽ち是等の商品や機械は、不斷の變化に遭遇し、また容易に他の商品や機械に依つて取つて代られるものである。そして多くの場合、是等の物は、機敏に手放なすことが彼れの第一の利益であつて、彼は少しも別離を惜しまない。否な實際には、彼は少しも是等の物を氣に掛けたことはない。彼れに大切なのは是等の物ではなくて、其貨幣價値乃至は其の等價物である。言葉を換へて云へば、資本家が眞實に顧念するのは、財産そのものではなくて、其所有から生ずる利益である。尤も或場合、殊に舊式の遣り方で事業を行つて居り、從つて、生活も之に準じて按排せられて居る場合には、或る種類の財産、卽ち大抵は先づ營業の場所とか、住居と其家具や附屬物と云つたようなものに對しては、財産に對する愛着のあることもある。

そこで斯ような特徴をもつた紳士閥は、小農に代つて、財産と反動との擁護者となるには不適任である。ところが其れにも拘らず、マルクスは紳士閥の消滅を以て、社會主義的社會の實現に、極めて重要と見做して居る。之は抑々何故であらうか。

自らマルクス主義者を以て任じてゐる、俗學的の唯物論者に取つては、此問題は何の造作も無いことである。彼等は唯物史觀を、『人各々其ポケットの爲に』と云ふ、簡單な定式に歸約する。そして紳士閥のポケットは、資本主義から社會主義への變化により、どうせ損害を蒙るものと見なければならぬから、紳士閥の階級に、必然に此變化に反對するに相違ない。從つて社會主義への進路を拓くためには、何とかして此階級を無くすることが必要である。斯ような唯物史觀の貧弱な顚倒は、不幸にして、極めて廣く行はれて居るが、之には相當な理由がある——卽ちこの唯物史觀の顚倒は、實は資本主義の理論と實際との複

寫なのである。それは資本主義の『一般普通』の慣行上の複寫であることは勿論であるが、同時に亦た、資本主義の到達し得る最高の理論の複寫である。それは要するに、資本主義的智力の達し得る最高の絶頂である、『聰明な利己主義』を、唯だ意譯したまでのものである。右の學說が理論的にも不條理であり、歷史的にも誤りであることは、容易に證明が出來るが、それにも拘らず、斯ような學說を産み出した狀況が依然として變化せぬ限りは、此學說の流行も衰へないであらう。唯だ經濟上の變化につれ、遙かに此變化におくれて、初めて眞實の理解が勝利を占めるのである。

然しマルクスの如き先見者は、例外である。マルクスは紳士閥に對して、萬腔の嫌惡を抱いてゐたにも拘らず、彼は決して全ての紳士閥、若くは其有識者と精神的の指導者との全てが、個人的にせよ开うでないにせよ、唯だ單に彼等のポケットの命令に從つて行動したものとは信じなかつたのである。之はマルクスの多くの著作のうちに散在する、數多の章句によつて容易に知られるが、就中かの『二月十八日（アイヂュイシエームブルメイル）』（註三）Eighteenth Brumaire and Louis Bonaparte. のうちに明らかである。

紳士閥の特質をして、社會主義的の協力に不適當ならしめ、其心理をして、資本主義の主たる支柱たらしめるものは、財産の所有が彼に賦與する獨立である。彼は一面には、其財産——もつと正確に云へば財産權の目的物——に對しては、格段の愛着はもつて居らぬが、それと同時に、彼は此財産が何から成立つて居るかは問はないで、唯だ此財産の所有によつて得られる獨立の社會的地位を大に尊重する。實際、彼れの眼中にあるものは、特殊な財産そのものではなくて、其社會的の交換價値である。彼れの社會的地位の爲めに役立つのは、彼れの財産の實物ではなくて、全ての財産に附隨してゐる社會的の屬性と可能性とである。之れぞ紳士閥が、私有財産の抽象的原則を擁護する所以であつて、農民に至つては、實際上に享有することさへ干渉されなければ、斯ような抽象的の原則は、多く意としないのである。昔風の紳士閥の社會的地位と、その日常の經濟生活とは、彼をして、財産の所有に基づくこの獨立を愛護し、之が爲に力爭せしめる。斯くて彼れの心理は、紛れもなく個人主義的となるのである。そして此心理は、紳士閥の最高の智力的代表者の手によつて、ハアバアト・スペンサーのそれの如き一個の理論體系に結晶する。斯くて社會主義を、一種の奴隸制度と見做すのである。そして此階級の發刺たる意氣と進取の氣象とは

唯だ經濟上の絕對的自由を求め、生活の戰ひに干涉せられまいとする、各個人の熱望を强よめるに過ぎぬ。そして此階級が成功すればする程、其成功は、更に其上の征服に對する貪婪を鼓舞激勵し、如何なる拘束にも我慢が出來ないようになる。然るに一方には、此階級の智力上の成業は、過去に於ける如何なる支配階級にも優さる、有力な武器を其手に與へるのである。

二　ブルジョアの支配と暴力

力が社會的要素として、至大の勢力を有するといふ事に就いては、隨分書かれもし、言はれもしたが、此點に就いても、俗學的唯物論者は、矢張り一般的の混亂を助けて居る。全ての支配階級は、其支配の權を握る爲にも、それを維持する爲にも、曾ても暴力を用ひたし、將來も用ひるであらうと云ふことは無論である。けれども、單に暴力のみによつては、支配階級は久しく其地位を維持することが出來よう筈もなし、現にまた維持し得たこともない。一體、支配階級は何時でも少數者であつて大抵の場合、一國の人口中の極めて小部分である。そこで一人と一人を比らべれば、支配階級の人々が服從階級の人々以上の腕力を有することは稀れである。前記の斷定の誤つて居らぬことは、此一事を想起したゞけでも明らかである。そこで支配階級の力は、自然的の力ではなくて後天的の力である。即ち社會的性質を有する力である。支配階級の力は其組織にある。この組織あるが爲に、支配階級は服從階級の力の一部分、否な時としては其全部を、その同じ階級の壓伏に利用することが出來るのである。そして時としては、支配階級は組織を有して居るから、これに依つて其の優越を維持するに充分であるといふ事實だけで、能く組織のない服從階級を慴伏せしめて居る。けれども此場合とても、單なる暴力ではない。何故ならば組織そのものは、一つの精神的勢力であつて、腕力では無いからである。其證據には、腕力的には優ぐれてゐる勢力が、適當の組織と訓練とを缺くために、それ相應の勢力を振ひ得ぬ場合には、吾々は『精神的に腐敗して居る』と云ふ言葉を使ふのである。尤も之は、唯だ例外的の場合に當て嵌まるだけであつて、大抵の場合支配階級がその優越を維持するためには、自己の組織以外の何物かに據つて居る。そして此何物とは、即ち全社會若くは國民の社會的組織である。支配階級が、明かに一般的の利害に反し若くは服從階級の大部分の利害に反する場合にも、能く其優越を維持することの出來るのは、全社會組織の力を、自己の目的

に利用するからである。

支配階級の利用するこの社會的勢力の根柢は、大抵は、其當時に行はれてゐる經濟組織である。この經濟組織こそ、服從階級をして、止むを得ず支配階級に經濟的に隷屬させる。けれども之れだけでは、何時も不充分である。そこで大抵の場合、支配階級は、少くとも或る程度までは、その權力を持續する爲に、純然たる精神的の說得を用ひる。斯くて宗敎は遠い昔から、現世的勢力の侍婢であるか、さもなければ宗敎そのものが現世的の勢力であり、斯くて一身に主婦と侍婢との役目を兼任して居つた。宗敎が衰へて其感化が無くなると、科學と哲學とが之れに代はり、宗敎同樣に敎徒に且つ容易に、同じ役目を遂行したとは云ふものの、宗敎にせよ科學にせよ、乃至は哲學にせよ。服從階級を隷屬の地位に縛つておく爲に、支配階級に依つて發明せられたと云ふ譯では無論ない。支配階級は唯だ、手近にある——時としては適當な、時としては不適當な——手段方法を利用するまでゞある。そこで要するに肝腎な點は、下層階級は何時でも、その『思想』——宗敎、科學、美術、哲學——を上流階級から當てがはれると云ふこと、そして是等の思想は、動々もすれば上流階級の生活樣式と、其根柢に横はる原則とを表彰し代表したもの、手つ取り早く云へば、是等のものを『思想化』したものだと云ふことである。そして下層社會の經濟的存在が上流階級に隷屬して居る場合には、何時でも斯うなるのである斯樣な場合には、支配階級の經濟的精力は、社會全體の利害と憧憬とを代表するかの如く見え、また實際にも屢々之を代表してゐる浮動的にして、進取的の心理となつて現はれる。けれども古來の支配階級中、今日の紳士閥ほどに、服從階級の上に大なる道德上又は理想上の勢力を揮ふ、大なる機會をもつたものは未だ曾てない。そして紳士閥の斯ような至大の勢力は、其支配の下に、藝術と科學との上に起つた偉大にして多方面な進步に負ふものである。そして此の前代未聞の思想の富は、驚く可き結果を齎らしたが、先づ第一には、紳士閥自身が其力に醉はされて、欲求と憧憬とを以て狂氣の如くになつた。古來の如何なる王者と雖も、紳士閥ほどに、自己を以て神に選ばれたる支配者と信じたものはない。又た古來の如何なる支配階級も、紳士閥のように、其支配の法則の、絕對にして不易なことを主張したものはない。尤も紳士閥のようにと云ふよりも、寧ろ紳士閥が其權勢の絕頂にあつた時分のようにと云つた方が精確である。即ち紳士閥は其權勢の絕頂に立つてゐた頃には、恐らくは

古來服從階級に感化を與へた如何なる支配階級よりも一層力强よく、其理想と、其思想の樣式と習慣とを、勞働階級に滲入せしめるやうにした。之は一面には勞働者をして、曾て比類のないほど、智識普及の恩澤に浴せしめたことと、他面には、經濟上の議論を、特に力强く近代的勞働者に注ぎ込んだ結果であるこれ以前の如何なる社會組織の下に於ても、支配階級の蒙る經濟上の災厄が、今日の如く迅速に且つ恐ろしい結果を以て、服從階級に反映したことはない。であるから吾々は、紳士閥の心理が近代無産階級の上に及ぼす重大な影響、殊に無産階級の發達の初期に於ける重大な影響を、決して忘れてはならぬ。けれども後節に見る如く、無産階級は其發達するうちに、又其發達の結果として、自己獨特の心理を形成するに至るのである。

資本家的の『思想』と心理とは、資本家階級によつて勞働階級のうちに植え込まれるのであるが、それは故意に、若しくは無意識に、資本階級の下層たる謂ゆる『中産階級』と呼ばれる階級により、此階級を通じて行はれるものである。そこで社會に、多くの人員を包容する大きな、そして剛健な中産階級の存在してゐる間は、勞働階級は道德的にも審美的にも、主としてこの階級の勢力下にあるのが常である。何故ならば勞働階級が、社會的に直接に接觸するのは此の階級であり、勞働階級が未來の希望と憧憬との的とするものは、此の階級である。幼稚園や學校で、勞働者を敎へるのも此の階級であるし、敎會や『修養上』の會で、勞働者に說敎するのも此の階級である。更に全世界の報道を蒐めて之を篩にかけ、日刊新聞で勞働者に說明し、又は通俗科學や、藝術や、『文學』を彼等に與へるのも此の階級である。

昔風の紳士閥（ブルジョアジー）——資本主義的社會に於ける舊中産階級——の斯ような『理想上』の特質、殊に此の階級が勞働階級の上に及ぼす『理想上』の感化、之れぞマルクスが此の階級の消滅を以て、社會主義實現の上の一大重要事と考へた所以である。但しマルクスは此の階級の消滅を以て、社會の經濟的諸勢力の運動を示す徵候であるといふ意味で重要視した以外に、此の階級の消滅そのものを重要視したのである。そして斯ういふ意味で、此の階級の消滅を、社會主義實現の上の一大重要事と考へたのである。何故ならば、社會主義を實現せしめる眞の力は、經濟的諸勢力の發展であつて、或る階級又は或る人々の一團が、此の運動の上に及ぼすことの出來る影響は、斯ような經濟的諸勢力の發展を示す表象としては重要であるが、それ以外の意味では、

第二次的のものに過ぎないといふ事を忘れてはならぬからである。

二、再び元の問題に——ベルンシタインの三つの論點

本論の第一節には、會社組織による事業經營の發達は、資本主義の發達に一新要素を加えたこと、そして此の新要素は、マルクスが資本主義的社會の中產階級を破壞して了ふと云つた諸傾向とは、一見したところ、反對の方向に働いたと云ふことを述べた。そして之はまた、マルクス研究者の前に、資本主義發達の傾向に對するマルクスの診斷と、この新要素とを調和させるといふ難問題を提出したといふこと、然るに修正派（レウィジョニスト）は、此問題を解決する力が無かつたので、彼等はマルクス診斷が誤つてゐたのだと云ふ結論に到達したことをも述べた。そこまでゞ一寸この議論を中斷したが、それは第二節に於いて、種々なる社會的階級に對するマルクスの立場を了解する爲めに、マルクスが眼中においてゐた是等の社會的階級の特質を論究する爲めであつた。そして之は讀者諸君が、之から述べようとする議論——資本主義の發達と其運命に就いてのマルクスの診斷と、之に代はらうとしてゐる新たなる社會組織の輪廓とが、マルクスの學說體系の他の部分と同じく、何等の修正をも要しないことを示す爲に、之から述べようとする議論——を、充分に理解せられる爲に必要だからであつた。そこで是から、吾々は再び修正派の友人諸君、就中、其領袖たるエドワルド・ベルンシタインに立歸へる。

此問題に對するベルンシタインの立場の要點は、既に述べた通り、斯うである——第一、資本の聚積（コンセントレエション）は事實上、マルクスや或るマルクス主義者の想像し、又は信じてゐるほどに迅速でない。第二、事實上、資本の集中（セントラリゼエション）は行はれて居らぬ。富は多數の人々を除外した少數者の手に累積せられては居らぬ。從つて中產階級は消滅はしないで、却つて増大しつゝある。第三資本の聚積と富の集中との傾向の分岐は、會社組織てふ新たなる社會的要素に負ふものである。

本論は純粹な理論上であるから、第一點を論究して居る譯にはゆかぬ。理論的には、重要なのは唯だ進化的現象の傾向だけである。カウツキー對ベルンシタインの論爭は、純粹な理論以外の問題をも包容して居つたので、統計上の數字など極めて重大な問題ともなつたが、是等のものは、玆には第二義的の重要

をしか有しない。マルクスが梗概を示した進化過程を完結する爲に、『歴史』の要する時間の長さは、マルクスの學說體系の一部分を構成するものではない。マルクスは決してこの時間の長さを述べて居らぬから、此問題に對するマルクスの意見がどうだつたかは、唯だ臆測するの外はない。よし又マルクスが、之に就いて明言して居つたにせよ、唯だそれだけで、之がマルクスの學說體系の一部分と爲る譯のものではない。のみならず此點に就いては、カウツキーが剩ますところなく詳論して居るので、何人も之を其儘ま轉載する以上のことは殆んど出來ないしそれ以下のことをしようとも思ふまい。しかしカウツキーの論議を其儘ま轉載するとは紙面が許さぬので、此點に興味を持たれる讀者諸君には、カウツキーの原文を讀んで頂くの外はない。

一三　第二の論點――收入と社會的地位

ペルンシタインの提出した第二點が、マルクスの學說を論ずるに當つて、果してどれ程かの意義のあるものか、若し意義あるものとすれば、果してどれ程重要なものであるか。之は後に論ずることとして、茲には先づ、彼が指摘したと想像されてゐる現象を吟味しよう。抑々ペルンシタインが、その第二の論點を立てる爲に用ひた唯一の證據は收入に關する若干の統計であつたことは、既に述べた通りである。ところが彼れの用ひた統計的方法の誤謬も、丁度此の場合に明らかに現はれて居る。と云ふのは、收入の種々なる等級、若くは種々なる分配額を、高、中、低の三つに區別するには、固より何等の標準が無いから、從つて斯ような區別は、勢ひ獨斷的の區別である。また斯ような標準は、國々で違ふばかりか、一國內の地方々々の間でも、隣接地域の間でも互ひに異つてゐるし、更に重要なことは斯ような標準は時々で違つて居る。然し以上の如き事實は暫らく措いても、斯ような收入の額は、決して其人の社會的の地位をも、經濟的地位をも現はす指數とはならぬと云ふ、根本的の缺點がある。或人の收入は、必ずしも其人を一定の社會的地位に置くものでもなく、又たマルクスの口吻を學べば、量が質に變ずるような、或る例外的の情況の下に於いての外は、必ずしも其人の收入は、其人の經濟的境遇の結果であるとは限らないであるから、先づ以て一定の收入は、必ず一定の方法により、又は一定の泉源からのみ得られるものだと云ふことを立證しておかぬ限りは、唯だ單に或人の收入を記述したゞけでは、其人

の社會的地位、乃至は經濟的境遇を示したことにはならぬ。然るにベルンシタインは不注意にも、收入から財產へ脫線して、一定の收入を得て居ることは、一定額の財產の所有を意味するものと推定して居るが、この不注意は畢竟、爭點となつてゐる眞の問題を、全然理解して居らぬ爲めである。事實上、一定の收入額は必ずしも、常に一定額の財產の所有を示すものではない。否な大多數の場合、开うではないのである。農業者（ファーマー）や、製造業者や、雜貨商や、教師や、陸軍士官や、機械技師などが、皆な同一額の收入を有する場合はあるが、それにも拘らず彼等の社會的地位や、經濟的境遇や、各自の所有する財產額は全然違つて居ることもあれば、根本的に異なつて居ることもある。そこで問題は其人の收入如何ではなくて、この收入を何から得て居るかと云ふこと、そして彼は如何なる狀況の下に、如何なる方法によつて、之を得て居るかと云ふことでなければならぬ然しそれとても、單に彼れは財產を所有して居るか所有して居らぬかと云ふ事や、又は其所有する財產の額さへ調べればよいと云ふ譯ではなく、若し財產を所有するとせば、其財產は何で成立つて居り、且つ收入を得るためには、此財產が如何に運用せられて居るかをも調べなければならぬ。この最後の點の重要なことは、讀者諸君が、前節に述べた財產の種類と職業との及ぼす心理的、思想的の影響に想到せられたなら、自づから明らかになると思ふが、此點に就いては、尙ほ後節にも詳論する。

一四　最も重要なる第三の論點——

然しながら本論の初めにも述べた通り、ベルンシタインの議論のほんとの力は、彼れの信ずる事實を立證する爲に用ひた統計的の材料にあるのではなくて、彼れの觀察した社會的現象——マルクスの述べた、資本主義の進化的傾向を打消すかの如く見える社會的現象——そのものにある。即ちベルンシタインの議論の正味は、上に揭げたうちの第三點にあるのである。そこで眞の問題は斯うである——資本家側が個人的の經濟行爲に代へるに、會社組織を以てしたと云ふ、この近代に於ける社會經濟的要素の發展は、資本家階級の運命の上に、如何なる反應を與へるかと云ふことである。但し吾々の研究は、單に資本家階級の間に於ける、收入の分配といふ問題にのみ限らないで、同時に此分配は如何にして、また如何なる情況の下に行はれるかと云ふことを、研究しなければならぬ。詳言すれば、吾々は單に一人々々の資本家が、勞働者の創造した剩餘價値のうちから

其配前としてどれだけを受けるかと云ふことを明らかにするばかりでなく、此配前は如何にして定まるかと云ふこと、彼は此配前に與かる爲には、何をしなければならぬか、と云ふことをも發見しなければならぬ。更に亦た、彼が此配前に與ると云ふことや、彼が此配前を得る方法などの結果として、彼れは同僚たる他の資本家と、其他の階級と、そして社會全體、卽ち社會の組織體全體と、如何なる關係に立つこととなるかをも、明らかにしなければならぬ。

　ベルンシタインは、マルクスの價値學説の重要を論じて、勞働階級が剩餘價値を創造し、そして資本家階級が之を吸收するといふ事實は、經驗的に立證し得べき事實であつて（固より之はベルンシタインの滿足とするところ）、それが如何なる經濟法則の結果として行はれてゐようとも、同じことである、と云つて居る。此議論は、謂はゆる『倫理的』前提から出發した場合には、充分結構かも知らぬが、科學的な歴史經濟的の見地からは全然不充分なものである。ベルンシタインは、剩餘價値の創造と、資本家階級による其吸收とは、どんな經濟法則によつて行はれて居つても、相異はないと云つたが、此相異が、純粹に經濟的の意味からして、極めて重要なことは、既に充分に指摘したところであるが、茲には、その社會的乃至は心理的の意味とも云ふ可き方面からも、極めて重要なことを力説しておきたいと思ふ。何故ならば全體としての社會と、其内にある各階級とに、各々其特質（その心理をも含めて）を賦與するものは、單に或る階級が剩餘價値乃至は剩餘生産物を創造し、他の階級が之を吸收するといふ事實だけではなくて、それが如何にして行はれて居るかと云ふ事にあるからである。そこで會社組織の發達が、資本家階級の運命に、どんな影響を與へて居るかを研究する場合には、單に資本家階級の數に及ぼす結果ばかりでなく其性質に及ぼす影響をも、否な主として此影響を考察しなければならぬ。何故ならば、資本家階級の性質如何によつて、全社會組織の性質が定まるからである。更に亦た、資本家階級の性質如何によつて、其の社會組織の持久力と、他の社會組織への急速な變化とが定まる場合もあるからである。そこで吾々は、二つの方面から此問題を吟味しよう。

一五　會社組織と中産階級の數

先づ數から始めよう。會社組織を以て個人的經營に代へることは、ベルンシタインの斷定してゐるやうに、資本家階級の

の減退を阻止し、若くは其膨脹の傾向を助長するであらうか。斷じて开うでない。そしてベルンシタインの用ひた經驗的統計方法は、貧弱ながらにも、尚ほ且つ此事實を示して居る。即ちベルンシタインは、勞働階級の絶對的の增加をも、比較的の增加をも否定して居らぬ。然るに人口全體が增加し、之に比例して勞働階級と資本家階級とが、共に增加する場合は別として、开うでない場合には、此二つの階級は、どちらか一方が減ずることによつてのみ他の一方が增加するのであつて、兩方が同時に增加することは、明らかにあり得可らざることである。ところが若しベルンシタインを信用しなければならぬとすれば、正さに此のあり得可らざることが行はれてゐると云ふことになる即ち資本家階級も勞働者階級も、どちらも同時に、一方の減少によつて增加して居るのである！　ベルンシタインが斯ような不條理に陷入つたのは單なる數字を、無批判に取扱つた結果と見るの外はない。之に反して、若しベルンシタインが實際の現象を細心に吟味したならば、會社組織の發達は、資本家階級減退の過程の進行する速力を、遲くすることはあつても、此過程そのものを廢止することの出來ないことを覺つたであらう。資本家階級は減少しなければならぬ！

これと關聯して先づ第一に考ふ可きことは、既にマルクスの指摘して居る通り、會社組織そのものからしてが、固より他の意義もあるが、それと同時に、資本聚積（コンセントレエション）の一手段だと云ふ事である。即ち個々の資本家の零碎な資本を結合することにより、更に適切に云へば、中產階級と勞働階級の上層との零碎な資本を、銀行や貯金制度によつて、直接若くは間接に大資本家の手に渡し、斯くて初めて尨大な資本と企業との集中（コンセントレエション）が行はれて居るのであつて、斯ような驚く可き資本と企業との集中は、會社組織によらないでは、到底不可能であるか、それとも非常に困難である。そして其結果は全產業組織を、一層高い程度の資本化に引き上げ、從つて小資本は最早や其企業に適しないものとなり、利潤率は益々低落するから、小資本の收入では最早や生活することが出來なくなり、斯くて小資本家は勢ひ驅逐せられることになる。斯ように會社組織なるものは、一方には、小資本家乃至は小資本家の或者には、能く其小資本を結合し、之によつて長かれ短かれ、新らしい命脈を保たせるものであるが、それと同時に他方に於ては、最早や是等の小資本家の獨立の立場を、維持しきれなくするような、小資本家驅逐の作用に一段の刺戟を與へるものである。卽ち一方には、資

本家階級減少の作用を遅らすが、他方には、却つて之を促進するものである。

之に關聯して考察すべき今一つの點は、會社組織なるものは色々の不正直にして投機的な事業經營の形式のうちで、最も適切な、最も優秀な手段であつて、かの横暴な富者が、自己の無力な爲に彼等に信賴して來る資本家階級の下層から、個人的競爭が僅かに彼等の手に殘して居るものを、すつかり卷き上げる手段となるものである。『好景氣』の時期には、若し自分の資本でやらなければならぬのなら、何人も手を着けようなどゝは夢にも思はぬような、有らゆる種類の商工業上の事業が始められる。會社組織によると、是等の事業を、公衆の費用で『創立』することが出來るので、世の中には『一般公衆』の金で事業を起さうとする――と云ふよりも『一般公衆』の金を狙らつてゐる『創立發起人』が何時でも澤山にゐる。そしてこの『一般公衆』なるものは、即ち資本家階級の下層から成立つて居るのである。この『公衆』は、經濟的に大資本家と競爭の出來ない地位にあるので、彼等の事業の計畫にくつついて、あわよくば昔の財産の殘りか、乃至は僅かの貯金の有利な使ひ道を見つけようと願つてゐる。すると程なく恐慌、乃至は『收縮』が襲來し、泡沫は殘らず消え失せて、其の跡には、自分の財力は、一本立ちでは資本家たるに足りないにも拘らず、資本家氣取りになつてゐた、小蝿の死骸が數を亂して横たはる。倘ほ此現象の違つた方面にも、極めて重要な事柄があるが、それは他の問題に關聯して後節に論ずることゝして、茲には唯だ、會社組織と云ふものは、小資本家をして、自分の採算では到底着手することの出來ない經濟上の事業に仲間入りをさせる手段であるばかりでなく、同時に亦た彼等の小資本を卷き上げて、之を浪費させるなり、乃至は直接間接に、之を大資本家の手に移す手段であるといふ事實だけを指摘しておきたいのである。此事實はベルンシタインとの論爭の初めに、カウツキーによつて指摘せられたが、爾來吾々は、この卷き上げ作用の事實を證明する、無數の證據を見たのである。トマス・ダブルユ・ロウソンの素破抜きは、資本主義王國の最高の藩屛たる人々が、單に商業界の自然の『膨脹』や『收縮』に伴ふ偶然の出來事としてゐるばかりでなく、卷上げ作用を促進する爲に、故意に惡意の計畫を以て商業界の『膨脹』や『收縮』を製造して、此卷き上げ作用に從事して居ることを示してゐる。また氏の素破抜きは、小蝿が自分自身でやつて來た場合には、

銀行家や、貯蓄銀行や、其他の預金機關が之をやつてゐることを示して居るが、其有樣は、マルクスの診斷の正確を立證する爲に、互ひに相競つてゐるかのようである。

然しながら此の卷き上げ作用は、どこまでも、資本主義の大海豚が、弱少な同胞に對する不正直の結果とばかり見做してはならぬ。之に反して此作用は、會社組織そのもの丶自然の働きに基づく、自然の作用である。そして此作用は、暴露せられたような『弊害』により、會社組織による事業經營の濫用によつて、唯だ一層助長せられてゐるだけのものである。何故ならば、恐慌と收縮には自然的のものと人爲的のものとがあるが、何づれも皆な、小蝦の資本を大海豚の手に移すか、さもなくば枝節に見るように、全然これを浪費し破壞して仕舞ふかに歸着するからである。

一六　小資本家の陷落作用

會社制度の『弊害』と『濫用』と、小資本の周期的に起る折々の破壞や、大資本家との移轉などを外にして、會社制度の普通にして必然の結果として――即ち其本來の用途と作業の方法との結果として、此制度は、資本家階級中產階級の數を保存する上には、殆んど無効である。云ひ換へて見れば、獨立中產階級の破壞を喰ひ止める手段としては、會社制度は殆んど無効である。

會社組織による事業の一般普通の遣り方は、單に少數の人々即ち此事業を組織し支配してゆく富豪のみが、其利益の全部又は大部分を壟斷するようになつて居る。此點を明瞭に理解する爲には、吾々は事業と貸付資本との間の相異に注意しなければならぬ。即ち或人が、其資本を自分で事業に使つて得るところの報酬と、同じ事業に使用する爲に他の資本家に貸付ける場合とは、違つて居る。第一の場合には、彼れは其事業から生じた利潤全部を收めるが、第二の場合には、利子と名づけられる利潤の一部分を得るだけである。そして利子の額は、何時でも其事業から生じた利潤の額の半分とか三分の一とか云ふような一定の割合のものではない。が然しながら其れは何時でも、利潤の一部分であつて、決して其全部ではない。然らば資本の所有者と事業を經營する資本家とは、どんな割合で、其事業から生じた利潤の配前を定めるかと云ふと、それには先づ、他の條件が同じ場合には、資本所有者の冒す危險を勘定に入れなければならぬ。即資本所有者が何等の危險をも冒されない場合には、

最低率の額が利息として支拂はれるのである。之が即ち本來の利子である。何等の危險も伴はぬ、唯だ單なる資本の使用に對して支拂はれる右の如き利子を引ばつて殘つた利潤の殘高は、幾らあつても、之は資本家的見解に從へば、當然、事業の監督と、之に伴ふ危險に對する報酬として、全て事業の經營に當る資本家の手に這入る可きものである。そこで若し資本家が、不充分な擔保で其金を貸したなら、高い利子を取るが、此高い利子は、實は純粹の利子ではなくて、本來の利子に、貸主の冒す危險に對して支拂はれる餘分のプレミアム（即ち狹義に於ける利潤の一部）を加へたものである。

會社組織に於ては、事業監督の仕事は株主の行ふものではなく有給役員と使用人とによつて行はれる。そして是等の役員と使用人とは、何時でも此事業を組織し管理する金持であつて、彼等は利潤のうちで、事業監督の任務に對して資本家の受く可き部分を丸取りにするばかりでなく、尚ほ其上に、高い俸給と臨時の費用の形で多くを取る。そこで事業に投資せられた資本全體から生じた利潤のうちの右の部分は、大資本家のみの手に歸するもので、小蠅は少しも其霑ひに與づからぬ。若し又た何かの拍子で、或る小資本家が、此部分の利潤を得たにしたところで（之は株主全部が總て小資本家のみであるといふ、例外的の場合でなければあり得ない）、それは唯だ一人の小資本家だけのことで、其他の株主に至つては、全ての獨立の資本家が收める部分の利潤は、到底之を收めることが出來ないであらう。

そこで株主たる資本家に殘されるものは、本來の利子と、利潤のうちで、危險の報酬となる可き部分とだけである。此點に於ては、株主資本家は、貸付資本家と同一の立場に立つて居る即ち或る會社の株を持つことに、多くの危險が含まれてゐればゐるほど、彼れの受ける報酬（取れる場合には）は多いし、危險が少なければ少ないほど、配當の形で受ける報酬も少ない。但し此場合に彼れの冒す危險とは、單に事業上の冒險の危險ばかりではなくて、會社の不正直な管理による危險をも含んで居る且つ事業の有利といふことに就いてすらも、固より詐りがあるかも知れぬ。何故ならば彼れは勢ひ他人の判斷に依賴しなければならぬが、其人々は、たゞ自分が澤山の給料を取るといふ事以外には、此冒險事業に利害關係を有しないかも知れぬからである。そこで目先の見える株主は、安全な會社、即ち或種の保證を提供するか、それとも事業の結果について約束をして與れる、有力な大資本家を頂く會社に投資しようとする。しかし

社が安全であればあるほど投資者は、啻だに債券の所有者ばかりでなく、株券の所有者すらも、少くとも投資して資本に對して受ける利潤の額に就いては、愈々益々、金を貸す人の立場と同じことになる。これは何時でも、株式取引所に往つて見ればよく分かる。會社が安全であればあるほど、其配當は、單純な利子の水準に下がつて居る。勿論こゝに配當といふのは、投資した資本に對する配當額の歩合を指したものである。或る時は極く安全な會社が（稀れではあるが）非常に多額の配當をする場合がある。然し斯んな場合には、株券の値段は遙かに額面以上であつて、畢竟配當率は普通の水準にあることゝなる。そこで會社に投資しようとする小資本家は、獨立の企業家の遭遇せぬ有ゆる種類の危險を冒すか、それとも資本に對して、純粹の利子以外の何等の報酬をも受けないかと云ふ、痛たし痒ゆしの立場に陥入るのである。

けれども利子は、利潤全額のうちの一部分であり、而かも大抵はその一小部分に過ぎないから、若し獨立の事業家たる地位さへ保たれるなら、當時一般に行はれてゐる利潤率で僅に獨立の收入が得られるだけの資本を持つてゐる資本家でも、一會社の株主としては其れだけの收入の得られぬことは明白である。そこで彼等のうちの多數は、結局は現在の地位から陥落するの外はない。如何にも儲かりそうで、而かも失敗に終るような、有らゆる種類の冒險事業に資本を供給するのは、大體是等の人人である。彼等は安全な會社に投資したのでは、資本家としての地位が保てぬので、經濟進化の勢力の爲に失つたところを、あわよくば一擧に取返そうといふ希望を抱いて、其資本を此種の事業に投ずるのである。

然し之れだけではない。差當りは安全な會社の投資者として資本主義の坐食者としての地位が保てるだけの資本を持つ小資本家とても、彼等の地位は決して大丈夫ではない。利潤率に低落の傾向のあることは、既に示した通りである。利潤率の低落につれて、利潤のうちから、直接に若くは配當と云ふ形で、會社の債券や株券の所有者に利子として支拂はれる部分も減少する。其結果、今日では僅に獨立の生計の出來る資本も、明日はそれには足りなくなる。斯くて陥落作用は、資本主義の進歩につれて増加する。

斯ような資本家階級減少の作用――資本家階級から無産階級への陥落は、其全作用が隱くれてゐて、容易に看取し難いような形で行はれることもある。これは或る情況の結果であるが、それに就いては後節に考究する。が要するに此場合にも、矢張り會社組織一部の原因になつてゐる。但し此場合には、會社組織の作用は、それほど重要な譯ではなく、資本家階級減少の過程を包む覆面の襞を、一層多くしてゐるまでのことである。

（未完）

支那社會主義の信徒

小村俊三郎

一

舊きものが廢れて新らしきものが興るのは、人類進歩の一階程で何等怪しむに足らぬ事であるが、現代支那を見渡して特に此の感想を深甚ならしむるものは、文化的黎明運動に飛躍せる幾多新人の輩出と、其の思潮に一大變化を齎らした事である。然かも、其の思潮の基礎が何れも社會主義に置かれてある事は從來の支那を研究せる我等にとつて、更に驚異に値する事實であらねばならぬ。つい最近迄の支那人は、事實上に於て可成深酷に社會主義的思想の教化と暗示を受けつゝあつたにも拘はらず、根本改造を高調する社會主義の唱道に對しては、殆んど無關心であつた。否それよりも社會主義に就いては、彼等の聞くだに畏れる所であつた。回顧すれば、十餘年前上海の商務印書館から「回頭看」といふ社會主義の飜譯小說が出版された事があるが、其當時は、僅かに支那全國で約百冊足らず賣れたに過ぎなかつたもので、社會主義等はテンデ問題にされていなかつたのである。然るに今日では、社會主義に關するものでなければ、新時代の需要物でないとせられて、何人も更に一顧だに與へぬといふ有樣となつたのは、如何に驚く可き變化ではないか。然かも單にマルクスや、クロポトキンや、プルードオン等の祖述と布演丈けでは最早滿足がし切れず、如何にすれば社會主義が實行し得るかと云ふ樣な實際的研究に進んで、社會主義の裡でも最も極端急激である虛無主義、共產主義、ボルシエビスム等に關する研究が頗る旺んとなつた。從つて其讀書の如きも例へば「近世科學と無政府主義」「愚人いわん治國史」「平民の鐘」「自由鐘」「民聲叢書」等といふ極端に過激なものが愛讀せられ苟も表紙に無政府だとか、過激とかいふ文字の散見しないものは、其の内容の如何に拘はらず、顧みられぬといふ有樣である。之

れを「回頭看」出版當時の狀況に比すれば、如何に世界の大勢に順應するに速かなりとは殆んど隔世の感なき能はざるのである。

それでは從來支那に於て、社會主義は唱へられなかつたかと云ふと、決してそうではない。古代から此の思想はあつて既に三千年來旺んに唱道せられてをるのである。支那の史實に徴するも、既に古代に於て社會の不平を排斥し、之れが改造を計らんとせる事實や學說は甚だ尠くない事を發見する。夏殷時代は其史實に信憑すべき證據がないから考察する事は一寸困難であるが、周代から老子時代にかけて此の思想が萠芽し來つた事は明白な事實で、更に老子から戰國の末年に至る迄は此の思想が頗る發展し、廣く唱道せられてをるが、然し其の後秦の天下統一から淸末にかけては此思想が漸次姿を隱し段々衰微し來つた樣である。そしてその思想の大勢は孟子を除く外は、殆んど無政府主義に偏して太古を頌揚してをる事實は特に留意すべき事であると思ふ。支那に於ける社會主義の萠芽時代の同主義は彼の有名な伯夷(個人現象のユートピア)や盜賊の張本と云はるゝ盜跖(無政府主義今のバークニンに近し)を筆頭に狂矞、華士(韓非子外儲傳にあり個人無政府主義者)等がある。其外此の思想を稱ふに足るものは詩經で、其の載する所に此の思想は偶せられてをるものが尠なくない。それから老子以後の同主義者として如何といふと、之れは、又頗る多士濟々で先づ老子を其の筆頭に擧げねばなるまい。老子は當時の社會現象から受けた刺戟と、以前の詩人の革命的思想とに因つて一種の過激的な學說を編んで破壞的な、放任的な自然に反する社會哲學を創唱し、當時の主稅戰爭及政府の干涉政策の三次に極力反對し、之を否認し人類の自由平等の理想を高唱してをる。それから聖人と云はるゝ孔子の主張の裡にも、同主義に近い主張がないではない。蓋し彼は國家社會主義者である。而して其の敎義を更に演繹した者は、孟子である。孟子は何と云つても立派な社會主義であつた。胡漢民氏が孟子の所說を批評して「孟子の主張は頗るマルクスと相似てをる、只マルクス程分量がない丈けだ」と云つてをるが、誠に適評であらう思ふ。孟子は孔子の大同思想と、墨家の功利學說との感化を受けて、社會大多數の幸福と、經濟改善の組織に就いて極めて深き注意を拂つてをる。之れの着眼點は支那社會主義思潮の裡に獨立的旗幟を揚げたもので、特に注目すべき事柄である。殊に彼れの經濟上に於ける根本的改造論の中に、井田制度の恢復、生產機關の保護の二方策を極力主

張してをるが之は支那社會主義中での一大見識と云つてよい。更に同時代の特色ある同主義者に許行といふのがある。許行は支那古代思想家中最も顯著に相互扶助主義共產主義を主張した論者で孟子の滕文公篇の一句は味ふべき言である。此の外に陳仲（亦田仲とも云ふ）といふのがあるが、彼れも亦王狂矞、華士と同流の無政府主義者である。更に此の時代の重鎭に莊子があるが、彼れの思想は直接に老子の破壞的放任的學說の影響を受けた上に、更に一步進めて悪乎可、悪乎不可、悪乎不然の達觀主義に到達してをる。故にある論者は彼れの社會主義的思想は其の學說中に於て、最高の理想でないと云つてをる。次に、衰微時代に於ける重なる者を擧ぐれば、相互主義の阮籍（西曆二一〇年に生れ同二六三年死す）や物質文明を打破して公共生活の農村に導かんとした鮑敬言（西曆三世紀末四世紀初葉の人）或は理想の村を高唱した陶潛、賦税に反對して勞働主義を提唱した鄧牧等がある。之等は何れも衰微時代に傑出した同主義者である。

斯く多數の學者が此の思想を持つてをつたが、然し之等の主張は、時の政府の壓迫や人民の無自覺等其他諸種の原因に因つて遂に一世を播席するに至らずして只此の思想を一つの學說として止んだのである。猶茲に注意すべきは、今日一般に提唱せらる、所謂社會主義とは多少其間に趣を異にした點が尠なくない。それ等の事に付いては他日に讓るとして余は先づ支那古代に於ける社會主義的思想を持してをつた重なる者を提げて支那の思想界に此思想の早くから存在してをつた事の證左を擧げるに止める。

二

叙上の如く、支那に社會主義的思想が古代からあり、又事實之れを實行した時代もあつたが、併し現在提唱講究せられつゝある樣な社會主義は云ふ迄もなく歐洲の新學說であつて支那に於ては提唱せられて以來まだ僅かに二十年に滿たない。即ち支那の社會主義は第一革命前から漸く皷吹されたもので、其の鼓吹者は大抵革命黨であつた。然して其主唱者は中山孫逸仙氏で當時孫逸仙の所謂三大主義は民族、民權、民生を基調とする溫健なる社會主義であつた。そこで孫文は、明治三十八年我が東京に於て、清朝の轉覆を目的とする『中國同盟會』なる同主義の結社を創立して此の民族、民權、民生の三主義を以て、其綱領とした。民族と云ふのは滿洲民族卽ち清朝の專橫を打破する爲め

にするもの、民權主義とは少數人の權力壟斷を打破する爲めの政治革命で、民生主義と云ふのは、一部富有の利を專らにするのを防止する所謂社會主義を謂つたのである。然して、當時孫の考へでは滿洲人の政權を奪ひさへすれば、差當り社會問題等起るべき事はなかろうと信じてゐた。此の事は當時彼が發表した意見に徵して明白なものでがある。

社會問題は歐米では隨分研究せられて居るが、支那では尙極めて幼稚で、目下は大して憂慮するにも及ばぬが是は將來必らず發生する時期があつて、亦、大革命を起すやうになるに相違ない。凡そ革命は萬已むを得ない時に始めて行ふべきものであるから、我々は民族の革命、政治の革命を行ふと同時に、法を設けて社會經濟組織の狀態を改善して將來社會革命の起ることを防止せなければならぬ。支那では此民生主義を實行することが、歐米に於けるよりも更に容易である。我々が今日の革命は單に國民の國家を作るばかりではなく、亦社會的國家を創造せねばならぬ。此れは歐米各國の遠く及ばざる所である、即ち此に至る最善法は地價の限定である、例へば地主の其持地が一千圓に値するものであると、國家が其れを限定して一千圓とか、或は多くとも二千圓位に定めて置く、そして他日交通の發達とか他の事情の爲に一萬圓の價値が出て來た場合は地主の所得は限定された二千圓で、殘りの八千圓は之れを國家の所得として一般國民の幸福の爲めに使用するといふ法であつて最も簡便に行はれ易いのである。歐米の如く已に地價の騰貴が極點に達して操作を置くに苦む程の所では一寸行ふことが難いけれ共支那の如き地價の騰らない所に於ては容易に行ふことが出來る。

孫文の此の意見と相前後して、香港中國日報に馮自由氏が『民生主義と中國政治革命の前途』と題して同主義の意見を發表した。馮は孫の同志で其意見も略ぼ孫と同じである。即ち

支那の資本制度は尙ほ未だ發達せず、勞働階級の苦痛も未だ歐米の夫れのやうに苛酷ではないが、政治に大々的革新を興ふると倶に、商工業をして之に附隨せしめたならば、資本家の實力打破を叫ばなくても自然に打破さるゝに至るであらう、勞働階級の苦痛が今日の歐米に於けるが如き狀態に陷つた時に慌てゝ社會暴動の風潮を防止したり、救濟する樣な方法を講究することではとても致方がないそこで我々は政治革命の期間に土地交通產業國有の社會主義施設をも實行して、中華民國をして完全なる社會主義の國家と成し以て世界の模範たらしめなければならぬ。

とは彼の主張であつた。此頃から淸朝の沒落に至る四五年の間に、斯かる新思想が永らく無能の惡政に倦いた支那人の心を占領したことは夥しいもので、國內では言論集會の自由が無い爲に、僅かに香港の中國日報、東京の天義報、新嘉坡の中興報、

風生の自由新報、ぴくとりあの大漢報などで盛んに同主義の宣傳に努めた。

然るに、間もなく革命が成功して民國の創成を見るに至つた、勿論此等思想の力が與つて効果あつた事は云ふ迄もない。然し其後革命黨は袁に致されたので之れが恢復の爲め大に焦つて湖北で事を擧げんとし社會主義は其の爲めの手段として上海でも、湖北でも更に大いに鼓吹された。上海では天鐸報と云ふ漢字新聞が其の機關になつて働いて居た而已ならず、滬杭鐵道列車中あたりでは妙齡の女をして社會主義思想を書いた書冊を賣らしめて宣傳した事さへもあつたのである。

天鐸報の如き支那流の古書を引證して近世の社會主義に附會する事を怠らなかつた卽ち「管子曰く、云ふ勿れ生を同ふせずと遠者は聽かず曰ふ勿れ鄕を同ふせずと遠者は行かず又曰く地の如く天の如く何れに私し何れに親まん、」是れ社會主義の眞諦にして博愛仁をなすの絕解なりと書いたものであつた。又「王莽始建國元年令を下して曰く」を社會主義に當て嵌めて曰く「漢氏田租を輕減す、三十にして税一、而して豪民侵凌し、分田劫假、厥名三十税一、實は十税五なり父子夫婦終年耕耘し得る處以て自ら存する能はず故に富者は、犬馬菽粟を餘し驕りて邪をなす、貧者糟糠に飽かず、而して姦をなす、」玆に所謂分田劫假なる者は註に曰く「貧者田なく、富者人の田を取り耕耘共に其收むる所を分つを謂ひ假なるものは貧人が富人の田を賃するを謂ふなり、劫なるものは貧人が富人の田を賃するを謂ふなり劫なるものは富人其税を劫奪し、之を欺凌するなり」云々と云つて、最後に之れ地主資本家を以て劫盜をなすの義なりと同主義にもつて來てをる。

斯様に社會主義が鼓吹せらるゝや當時の有力なる學者章炳麟などは盛に孫を攻擊した。而して之が爲め當時の孫派の中國同盟會は痛く輿論から嫌はれたもので當時の新聞は「社會主義は今日の時勢に適合するものでない、道は歐米諸國にすら未だ行ふの域に達せない、況して支那に於ておやだ。孫は大資本家の發生を豫防するのだと云ふも、支那は此際極力資本家を誘導して、實業の發展を圖り、其の資本家の勢力で外人に當らねばならぬ、どうして今日の經濟競爭時代に支那の立場があるものか」と駁したものである。社會主義は下層人民をこき集めて事を謀るには好かつたろうが已に當時南北相持して下らなかつた、其苦しみを漸く逃れ得た矢先であつたから、社會主義の提唱に反つて孫派が人心を失ふ媒介となつたのである。

革命當時の支那社會主等實行論はかくの如くして終り、別に社會に害毒を殘す様にならなかつたが、其當時とて急激な社會主義者の黨派はないではなかつた。現に「中國社會黨」と稱して襲世遺産制度を破壊せんとする一種の共産主義を綱領とする社會主義者の結社があつた。此黨に屬する者は、首領江元虎を中心に張繼、陳翼龍、王織哉、滋生、樂勤等の巴里仕込の急進黨が其の主なるもので提唱僅かに數ケ月にして、支部三百、黨員五十萬と號して江南工高研究會、惜陰公會、社會主義研究會、社會星、社會雜誌、社會日報、社會世界等と提携し上海「天鐸報」を其の機關紙となし、社會主義の宣傳に從事するといふ盛況を呈した。然るに其後の同黨中比較的過激な主張を抱く陳翼龍、沙淦等の一派は同黨の溫健派に潔しとせず、全然分離獨立して一の秘密結社を組織し「社會黨」と稱するに至つた。同黨の主張は純然たる虛無主義で其の黨員の主なるものは、首領陳翼龍の外沙淦、大虛周繼香等之に屬してゐる、然るに其後過激社會黨陳翼龍は袁世凱の毒手で斃れ次で溫和社會黨首領江亦人望を失し米國に去るに及んで支那に於ける社會黨の勢力は頓に地に墜ち、一兩年前迄全く其の勢を失ひ衰微するに至つたのであつた。

三

それから支那に於ける社會主義の勢力はいつしか表面より遠ざかり、裏面に於て旺んに秘密結社を組織して暗々裡に頗る活動を爲した。其の秘密結社の皮切りを爲したのは、劉師復、莫起彭等の廣東の「心社」が之れである。爾來引續き各地に色々な秘密結社が組織された其の重なるものを擧ぐれば(一)北京の實社(二)南京の群社(三)山西の平社(四)上海の民聲社等は是非見遁す事の出來ないものである。又其一面には紅旗社會黨とか綠旗社會黨といふ様な同主義の集團結社が組織されて、之等が旺んに各方面に活動するに至つた。

當時紅旗社會黨に屬した重立つた人々は揚庶堪（前四川省長）戴天仇、朱執信（最近廣東虎門に戰死す）居正、葉夏聲、吾崑、揚維等で何れも白耳義社會黨系統を引ける急進分子である。猶此の外に孫逸仙系及び純民黨の一派が之れに參加して一時非常な勢力であつた。然して之れに對抗する綠旗社會黨に席を置いた者は、陳獨秀（前北京大學文科學長）何天炯、江亢虎、于右任等がそれで此の外紅綠何れの黨派にも屬しない同主義者に佛蘭系の急進派として有名な同主義者李石曾、劉思復、張繼、

吳稚暉、張靜江等往年巴里で「新世紀報」を發行した同人の一派があり、更に胡漢民、汪兆銘、廖仲愷、陳中孚等の新人があつた。此等の人々は何れも革命黨の錚々たるもので今日でも民黨の闘士として相當活動しつゝあるから其の重なる二三を紹介して見よう。

先づ指を胡漢民に屈する。胡漢民は孫文の高弟で漢民は字、名は衍鴻、我が法制大學の出身で未だ三十幾歲の男盛りで、同主義者としても政治家として可成り有名な男である。汪兆銘は同主義者としては頗る有力なる一人で佛國仕込みである丈けに其の程度も略押して知る事が出來る、殊に汪兆銘に感心する所は支那人に稀しく政治上よりも、社會改良とか、敎育とかの方面に着眼して官職に就かず新道德の創生に努力してをる事である。彼の逸話として特筆すべき事實は淸末北京に潜行して、攝政王を暗殺せんとして危く捕へられ一度は囹圄の人となり徹宵悲憤の涙を鐵窓に吞んだものであるが、肅親王の爲に其の奇才を惜まれて死を免れた事である。佛國に遊ぶ前、我が中央大學を卒業して居る、次に張繼である、彼れは直隷の人で前參議院議長の重任に就いたが、今や政界には大して期待すべき程の力もなく最早過去の人である。只思想的には多少の道が殘されてある、それは佛國系統の同主義では可成り大頭の一人であるのと今一つは昨年排日運動が勃發して親日派が頗る不評になつて以來戴天仇、何天炯、の兩親日派と共に排日派に急轉して佛國勤工儉學會の大立物として親佛派に寢返り佛支文化の提携に努力しつゝあるのが彼れの强味である。最近湖南方面に大いに同主義の宣傳に努力しつゝある樣である。次に戴天仇は星期評論の主筆として過激派に近い主義を持しつゝある殊に最近彼の思想が漸次過激化して勞働者に接近しつゝある事は注目せねばならぬ、次に陝西督軍たる于右任である、彼れは新思想家としては可成りの理解と學力はある、三年前上海中華新報の論說に於て、支那思想界の混沌時代來を豫言し、且つ過激化するに至らざるべしと言つた事があるが今日にして思へば多少傾聽すべき言であつた樣に考へられる、英國留學生としては異材といつてよからう。

上叙の外に、最近殊に著名になつた同主義色彩の政治家が二人ある、一人は例の孫洪伊で、今一人は廣東に時めく陳炯明である。此等は何れも政治的革命を斷行して社會の改造に進もうと云ふのであるが、然し孫洪伊の如きは果して社會主義について何處迄諒解があるのか頗る疑問である、只彼れが其の 機關

紙「正報」で頗る過激な論陣を張るので或はレーニンと關係があるとか、或は在上海の過激派と提携してをると云はれるので恐らく社會主義なるものに徹底的理解があつて主張するものではあるまいと思はれる。思ふに彼の言論の過激なるは失脚政治家の自暴自棄の常として不平晴らしに極左黨の筆陣を以て進むに過ぎなからうから、眞面目に社會主義者だといふ事は早計である。然し其の動機は兎も角として、今日では文學的改革から進む總大將陳獨秀の向ふを張る過激派の猛將として頗る有力なる者である事丈けは見逃す事の出來ない事實である。字は伯蘭今年五十一歳の分別盛り、天津の富豪で閲歷も前內務總長といふ所で現に上海佛租界に蟠居しつゝある。それから次は陳烱明であるが、陳は我陸軍士官學校の出身で、孫文系軍閥の大立物である。最近は廣東軍總司令兼廣東省長に納まり、若し廣東軍政府の再組織が首尾よく成り立てば、陸軍總長は先づ動かぬ所であらう。彼れが社會主義的色彩を特に濃厚にしたと傳へられたのは、ホンの最近の話で福建漳州に於て「閩星」といふ雜誌を發行し新思想を宣傳したに始まる。一時喧傳せられた勞農政府承認說は稍怪しい之れもまだ海の者とも山の者とも見極めのつかぬブラックリストの一人である。

要するに、以上の連中は素より何れも純然たる社會主義思想や、色彩の熾烈なものではあるが、政治運動に沒頭した爲めに、同主義者としては餘り聞えていない、若し政治運動から全然分離して、直に此の主義の爲めに獻身的に活動し研究してをる者に就て考へるならば、次に述べる文學革命を提唱しつゝある一派を擧げねばならぬ。之れは後段に述べる事として、文學改革と關係のない者で且古い時代から純然たる社會主義を奉じてをる者はと云へば先づ馮自由や江亢虎等に指を屈せねばなるまい、馮自由の名は可成り有名で、最近廣東新聞記者團の一員として渡日して來た爲めに日本でも相當知られて居るが、彼の本名は馮懋龍といふのである、彼れは孫文とは同主義者として非常に密接な關係があつて、孫文を政治的にも可成り力強く之れを援助してをる。彼れの現職は參議院（舊國會）議員、全國華僑聯合會々長、大光日報、香港晨報の記者で常に其の主張や主義の宣傳を香港晨報上に高唱しつゝある、最近著はした「社會主義と中國」といふ一書は支那の社會主義に關する唯一の名著として新人の間に頗る評判がよい。猶彼れも我が早稲田大學に學んだ男である、次に江亢虎は既に一寸述べた通り支那社會主義者の首領株である、歳は未だ三十五六、浙江省の產で嘗ては中國

社會黨の穩健派の領袖として頗る羽振りの良い方であつたが、何樣其の心事が陋劣で不正行爲が多いので漸次失脚し、つい最近迄米國桑港カリホルニヤ大學の漢文中教授として傍ら「支那社會黨史」の編纂を爲しつゝあつた。支那の赤化近しと聞いて二三ケ月前支那に歸來し稍復活の態である彼の率ずる所は素より共產主義である。

四

歐洲大戰の齎らした一大波動は、デモクラシーといふ高浪で世界の津々浦々迄皆此の波浪の洗禮を受けない所はない、支那も御多分に漏れず此の洗禮を受けたが、支那程其の洗禮の効果の顯著なる國はなかつた。そこで、此の波動忽ちにして各方面に浸潤して種々の新運動が擡頭した、就中思想上に受けた影響は深甚なるもので、先づ其の皮切りを爲したものは、文學革命であつた、文學革命の急先鋒は北京大學の新人たる陳獨秀、胡適一派で彼等は「改造の前に破壞あり、破壞の後に創造あり、民主主義を擁護せん爲めには、一切の國粹と舊文學に反對せなければならぬ」と宣言して文學革命の大幟を掲げて勇往邁進した、其結果は覿面にやつて來て支那の思想界は殆んど根柢から倒毀されてしまつた。そして、そこに創設せられたるものは新思想の堅壘である。然かも其の堅壘を死守する者は何れも錚々たる新人で社會主義を是認する者のみである。社會主義の勢を得たるは當然の解決ではないか、何故支那人の思想が斯く急變して社會主義に向つたかと云ふ事に付いては、大いに論ずべき材料もあるが之れを簡單に指摘するならば(一)新人の續出(二)日本思想界の影響(三)露國革命の影響(四)歐洲戰終熄の結果デモクラシーが一歩を進めたる事(五)排日運動に伴ふ影響等が支那人をして社會主義に趨向せしむるに至つた至重なる原因で、最近一ケ年間に上海、天津、廣東、長州、太原、杭州、漳州等各所に於て傳播せられた社會主義色彩や宣傳を爲す新聞雜誌は約二百幾十種といふ驚くべき多數に上つて、今や新人は相率ひて兎も角社會主義の域に趨り、新人即ち社會主義者といふが如き觀を呈するに至つたのは特に愼重考慮すべき出來事である。

斯くの如き變化の極は更に新人をして分裂せしむるに至つた即ち穩健派と急進派が之れである今其の分野の概略を表示して見よう。

(イ)北京大學系
- (稍急進)―胡適
- (穩健)―蔡元培

新人
- 穩健派
  - 研究系—梁啓超
  - （ロ）其他—中立系
- 急進派
  - （イ）舊北京大學系—陳獨秀
  - （ロ）露國過激派に呼應せるもの—陳家鼎、覃子鼎、李中
  - （ハ）政治革命より轉ぜるもの—戴天仇、孫洪伊

急進派の「陳獨秀」から説く。陳は元々綠族社會黨に屬する者で最近迄北京大學文科學長の任にあつた、其の出身は安徽懷寧縣富豪の出で字を仲甫と云ひ雅號を隻眼と稱し本年四十四歳の男盛りである、彼れは我が速成師範科の卒業生で、安徽高等學堂教務長を振出しに地方教育の振興に努めた。辛亥革命に際して政治家に志し、都督柏文蔚の祕書に任ぜられたが、幾何もなく第二革命亂の政變と共に、彼れも亦其地位を失ひ、上海に流寓するの已むなきに至つた。陳君の社會主義に興味を持つたのは、蓋し此の浪人時代に始まる。適々民國四年北京大學總長蔡元培の聘に應じて同大學文科教授の任に就き、同六年一月同學長に推された。彼れが北京大學に入るや、常に校務の機微に參與した而已ならず、夙に教授學生間に「新時代の指導者」を以て目せられ同大學新學徒の中心人物であつた。嚮て一昨年の新舊學派の衝突起るや、陳獨秀は問題の主人となり、天下青年の同情は翕然として集り、遂に文學革命よりする社會革命の第一聲は鼓に突として狼火の如く擧げられた。率ゐて新思想謳歌の聲は、決河の勢を以て天下を風靡するに至つて遂に今日の大勢を激成した。即ち間もなく舊學派范源廉、陳煥章等一派の反對憎惡は、彼を目し過激主義宣傳の嫌疑の下に其身は捕はれ職は奪はれ、更に追はれ又も浪人生活に這入つたのであつた。ツイ最近漢口を過激主義者として追はれたのは人の知る所今や上海に流寓して萬丈の氣焔を吐きつゝある風聞の傳ふる所に依ると、露國過激の密使ボタポフ等と提携し何事か劃策しつゝありとの噂がある。陳獨秀の焦燥的な主張から考察すれば露國過激派と提携して其の立脚點を見出そうとするのは有り得べき事であらう、蓋し、彼は將來極左黨を背負て立つ「支那のレーニン」其人であらう。殊に最近上海に於て勞働者階級に接近しつゝある事は見遁がす事の出來ない事實である。陳獨秀に對抗し飽く迄も穩健にして學理と實際運動との間に立つて、着々進むべき針路を進みつゝ其地盤を開拓する者は胡適である。彼も亦安徽省績溪の人本年三十二才、文科大學々長兼教授で、哲學門研究所の主任

を兼ねてをる。彼の會祖胡埍翚は、前清乾隆から嘉慶に掛けての學者として鳴つた、其の名門の後裔丈けに彼も亦頗る學才の秀でた男であつたが、何分にも家産の傾いた頃の事とて、充分な學資を得る事もならず、笈を負ふて上海に苦學したものである。所が丁度其秋、米國の團匪事件の賠償金返還に依る、留學生の募集があつた。彼は逸早くも之れに應じて合格し康奈爾大學に學び哲學方面の研究に進入つた。研鑽幾年遂に墨翟哲學の論文に依つてドクトル・オブ・フイロソフヒーの學位を以て歸國した。彼の社會主義研究は玆に胚胎するのである。歸朝後間もなく陳獨秀の推薦によつて北京大學文學科の教授に任ぜられたのである。北京大學に立て籠つて以來彼は新人中の新人として夙に斯界の明星と仰がれた。文學革命の先驅を擧げた新文學運動の所謂「白話文」の宣傳は、實に彼れの提唱に始まる。陳獨秀去つて以後の北京大學の新人は一つに彼れに依つて代表せられ、彼は第二の陳獨秀として、官僚、軍閥、儒學の三方面から包圍攻撃を受けつゝある。然し彼は陳獨秀の様に焦燥的な妄動は、斷じてやらぬ。其の思想の如きも單に學術的見地に立つ議論は云爲するが、他は願て輕々には發表しない。孔子の所謂「敢知而不言」といふ語を、嚴守自重して動かぬ。今日彼の其地位を保ち得る所以は實に玆にあると思ふ。それ丈け彼のやる事は底深く恐るべきものである事は云ふ迄もない。此の外同主義を奉ずる者は枚擧に遑もないが共裡でも色彩の明劃な重なる二三を擧げるならば北大總長蔡元培を筆頭に、李大釗、錢玄同、朱希祖、沈尹默、高一涵、張崧年、康白情、徐彦之、周作人、孫幾伊等限りもない又其の宣傳雜誌として有名なものを擧ぐれば「星期評論」、「建設」、「改造」、「太平洋」、「新青年」、「新潮」等何れも其の色彩の明白なもののみである。

最近の支那の新人は斯くの如く社會主義を是認し、實際之れを國内に實施してみようといふ朕兆が見える。然して今や支那の赤化といふ聲が旺んに傳へらるゝが、支那が果して赤化し得るかどうかは姑らく措くも其の之れを受け容るるに足る丈けの準備的素質は充分にあるといふ事は云へる。目下來支中のベルトランド・ラッセル博士は支那の赤化と云ふ事に就いて是認してをるが、此の豫言が適中するか否やは全く將來に徴するより外致方もないが、叙上の様な環境の下に漸次其色彩の濃厚に染め上げられて行く事は余も敢て否定しないのである。

（大正九・一一・二九）

今議會と當面の問題

法學博士　堀江歸一

不可解な財政策

豫算案や之に關聯する經濟財政上の諸問題が議會の劈頭に於て、朝野兩黨の間に劇烈な論爭を惹起すこと丶爲るのは、每年の例であつて、敢て異とするに足らないが、今度の議會に於ては、特に此方面の問題に關聯して、種々の議論の生ずること丶考へられるのである。大正十年度の豫算案を一瞥して、何人も一驚を喫するのは、經費に十六億數千萬圓と云ふ未曾有の膨脹を告げたことに外ならないであらう。政友會や、原內閣のような空虛の頭腦で、判斷させたならば、斯る經費の膨脹を目して國力の發展に伴ふ結果であるとして、之を樂觀するかも知れないが、私は決して其然るを認めるを得ない。何故明年度の豫算案に於て丶經費が急劇の膨脹を來したかと云へば、其重なる原因は之を數年來に亙つて、連續する物價の騰貴に歸さなければならぬ。物價が今日のように騰貴して居れば政府が經費を支辨する場合に、其れが對物經費であらうが、對人經費であらうが共に增加するのは、當然の數である。卽ち明年度の經費膨脹は物價の騰貴に基くものが其大部分を占めて居るとして、此物價騰貴は何が故に起つたものであるか。從來原內閣の當局者は物價の騰貴を以つて、世界共通の事相であつて、我國單獨の力で如何ともするを得ないものと辯明して居つた。世界諸國の物價が假令ひ程度に多少の相違はあるとしても、大體に於て騰貴の狀態に居つた時代には、此辯明にも多少の取る可きものがあつたかも知れないが、今日と爲つては、如何であらうか。世界諸國の物價は講和條約の成立以來徐々に低落して居るのに、獨り我國の物價は下落しない、殊に政府の經費と密接の關係ある小賣相場に於て、殆ど下落の勢を示さない。此事たる、要するに原內閣の物價政策に大なる誤謬があり、戰爭時代には物價の騰

貴する勢を煽揚して、彌が上にも之を高からしめ、今日其下落す可き時に際會すると、百方策を求めて、下落の勢を阻止することの結果であるとすれば、原内閣こそ、物價騰貴を通じて、經費の膨脹する傾向を馴致した張本人であるとしなければならぬ。

從來議會は物價問題に對して、如何なる態度に出たであらうか。衆議院の在野黨が此問題に就て、政府に肉薄したのは勿論貴族院の諸團體も原内閣成立の當初から、其解決を政府に迫つて已まなかつたのである。然らば政府が今日のように物價問題の解決を閑却し、爲めに依然たる物價騰貴の結果として、經費に異常の膨脹を來したものであるとしたならば、議會は果して鵜呑みに此經費を承認し得るであらうか。議會が此經費を已むを得ざるものとして承認するようなことがあつたならば、是れこそ議會自ら侮るの甚だしきものとしなければならぬ。議會が物價問題を放擲して、經費を膨脹させた政府の責任を糺彈す可きことは勿論であつて、憲政運用の根本義から考へたならば、此一事だけで内閣は瓦解しなければならぬ道理である。唯我國では貴族院が政府に致命傷を與へて、内閣を更迭させると云ふ一段に爲ると、貴族院自ら躊躇する趣であるから、何處まで物價問題で政府の責任を問ふかは不明に屬するが、物價騰貴の現象が財政に容易ならざる影響を及ぼしたことの歴然たる以上は幾ら豫算案を成立させることが必要であるとした處で、糺す可き政府の責任は之を糺し、今後の過誤なからしめるだけの處置をすることは、最も公正の地位に居る貴族院の職分である。

不景氣と財政

昨年四月我國の經濟社會は恐慌に襲はれて以來、商工業は勿論農業まで不振の狀態に陥つて、今日に至るまで、恢復の曙光にすら、接するを得ない。而して物價は政府の間違つた經濟政策に制されて、不景氣の狀態に相應する程度まで低落して居らない。經濟上から見れば、今日の我國の誠に混沌たるものであるが、此混沌たる狀態が財政に如何なる影響を及ぼすかと云へば、各種の收入をして前年度より減少させると同時に、各種の經費をして前年度よりも增加させ、出入の間に不均衡を生ずることを免かれないのである。既に明年度の豫算案に於て、物價騰貴の結果として、經費の膨脹し來たことは、前論の如くであるとして、一方に政府は不景氣の爲めに、各種收入の減少することを誠實に豫算して居るであらうか。豫算案に掲げられた收

入の諸項目を見ると、二三のものを除き、他は何れも前年度に比較して、大なる增收を豫定して居る。若しも今年の四月頃から、經濟社會の面目が一新して、景氣の恢復が實現されるならば、斯る豫算の立て方も自ら道理ありとしなければならぬ。政府や政友會關係者は昨年の恐慌の起つた當座に於ては、景氣の恢復近きに在ることを揚言して已まなかつたが、今日に及んで何者か能く此言を繰返し得るであらうか。景氣は昨年中に於て恢復の緒に就かなかつた如く、本年中に於ても、之を得ること至難である。さうすれば明年度の收入豫算の如く、好景氣の存續又は景氣の恢復を前提として、作り出されたものは、恰も砂上に築かれた樓閣と同じく、其基礎最も薄弱ならざるを得ない。政府は斯く收入を過大に豫算したことに依つて、表面上收支の均衡を維持することを容易にし、豫算編成上の困難を除き得たやうなもの丶、此豫算を施行するに當つては、必ず大なる難關に逢着せざるを得ないであらう。議會にして財政の基礎を堅實にしようとする以上は、收入豫算の確實なる數額を標準として經費に削減を加へなければならぬ。議會に豫算協贊上に於て、是れだけの權能を發揮するだけの誠意なり、見識なりがあるであらうか、私の疑を存する所である。若しも歳出入の均衡を得て居ると云ふことだけの表面上又形式上の理由で、豫算を成立させたならば、次に來る可きものは、大規模の增税でなければならぬ。明年度の豫算案は單に表面から見れば、甚だ無意味なもの丶ようであつて、其裏面に於ては、恐る可き增税の危險を將來に齎すものに外ならないのである。

一國の經費が幾ら膨脹した所で、其膨脹が國力の發展する勢と或る調和を保つて居り、又膨脹する經費に對して確乎たる財源が備へられて居るならば、必ずしも深く憂ふるを要しないのである。然るに我國に於ては、果して如何であらうか。不景氣時代には、國力は自ら衰微せざるを得ない。此場合に國策として必要な事は何であるかと云へば、國家としては經費の節約であり、國民としては冗費の省略でなければならぬ。其際に政府が如何に經濟政策の間違に胚胎して已むを得ない結果とは云ひながら、未曾有の經費を豫算案に揭げて得々たるが如きは、沙汰の限りである。而して此經費に對する財源は如何にして調達されるか、果して確實を以つて許され可きものであるかと云へば、租税や、官業の收入豫算を殊更に過大に見積つた形跡がある上に、公債の如きも、政府の豫定するように、容易に募集されるかどうか、甚だ不安である。金融が近來緩漫であるとか、

銀行に遊金が集まるとか云ふような事實は政府をして公債募集の容易なるを思はしめる材料であるかも知れないが、今年度中政府が不景氣の最中に於て、公債の發行に如何に苦心を重ねたかを考へたならば、斯く樂觀して、可なりとするを得るであらうか。又萬一政府の豫想するように、景氣が本年中に恢復し來かけたとして、政府が多額の公債を連續して、發行することは如何なる結果を齎すであらうか。景氣恢復の原動力たる民間の遊金が公債募集の爲めに、政府に吸收されたならば、其れだけ景氣恢復の機運を頓挫させることゝ爲るのである。

政府が一度び經濟政策の立て方を誤まつたことは、因果律の支配を及ぼして、物價の騰貴、投機熱の勃興から、恐慌の襲來を促し、遂に不景氣を惹起して、其最中に國民をして增稅に伴う負擔に苦しまさるを得ざるに至らしめるのである。原內閣のような放漫な經濟政策を施して居つたならば、結局斯う云ふ行詰つた最期を遂げることゝ爲るのは識者の既に豫期して居つた所であつて、必ずしも異とするに足らない、唯國民は何故に斯く財政上に秕政のあらん限りを盡して、財政の基礎を危うするに至つた原內閣其ものゝ存在を寬假して居るのであらうか私の了解に苦む所である。

貯蓄銀行問題

今度の議會では、貯蓄銀行制度改善に關する法律案が政府に依つて提出されるさうである。昨年中經濟社會の動搖と共に、普通銀行には勿論貯蓄銀行にも取付騷ぎが起り、銀行の內で之に堪へることが出來ず、支拂停止の已むを得ざるに至つたものが東京にも、橫濱にも、大阪にも、其他の大都會にも續出した貯蓄銀行の貯金者の如きは、概して中產以下の階級に屬する者であつて、多くは日夜の勤勞で收得した所得を剩して、貯蓄した次第である。斯る粒々辛苦の餘に成つた貴重の資金を預つた貯蓄銀行が經濟社會に一寸した波瀾の起つた爲めに、支拂を停止するようなことがあつては、純然たる經濟上の問題たるに止まらず、由々しき社會上の大問題としなければならぬ。而して何故貯蓄銀行中に破綻を生ずるものがあつたかと云へば、銀行自身貸出を無謀にして居つたとか、或は親銀行として貯蓄銀行が平生から預金の形で吸收した資金を預け入れて居つた大銀行其ものに破綻を招いたとか云ふようなことが原因として擧げられるようである。隨つて世間に傳唱される如くに、貯蓄銀行の預金に對する拂戾準備金を豐にさせるとか、責任準備積立金の

運用される目的物の種類を精選するとか、一個の銀行に預入れ得る預金の高を制限して、親銀行の投機的所業の爲めに、子銀行たる貯蓄銀行に不利の影響を及ぼすことなからしめるとか云ふような改正が現行貯蓄銀行條例に加へられたならば、自ら今日に比較して、貯蓄銀行の基礎を鞏固ならしめるを得る道理である。世人は斯る趣意の改正を以つて滿足するかも知れない、貴衆兩院議員の如きも亦同樣であるかも知れないが、私は更に今一歩を進めて考へなければならないのである。

何故昨年の恐慌以來貯蓄銀行に破綻を暴露するものが多かつたのであるか。破綻を生じた銀行の一個一個に就て云へば、其れ〲特殊の原因の存するに相違ないが、吾人は更に一般的原因を求めたいと思ふ。貯蓄銀行なり、又は其親銀行たる普通銀行が昨年中のように、屢々世人から信用を疑はれ、根もない風說の爲めに、公衆を驅つて、取付けに向はせる失態を演ずるに至つたのは、銀行其ものに責任もあるが、同時に經濟政策上の過失から、經濟社會に容易ならざる混亂を醸成した原內閣に責任の重きものがある。人爲的手段の限りを盡して、百方經濟社會の人氣を煽揚させ　此間に立つて、銀行が着實一方の方針を取つて、營業に從つて居つたならば、殆ど脫俗した仙人同樣に見られる。世間一般に好景氣に夢中に爲り、投機に浮身を窶すように爲つた場合に、銀行業者だけに、超然たる態度を守れと要求するのは、甚だ無理な註文であるとしなければならぬ。其れでも我國の銀行業者は本來預金銀行主義に根據を置いて居ると云ふ事實に顧みて、餘り事業の發起經營に深入りをすることを避けたのであるが、其の或るものは之を以つて保守退嬰に過ぎるものであるとし、銀行自ら事業に向つて、法外の貸出をしたり、事業家に過大の資金を融通した。斯くて反動來と共に、是等の銀行は自ら苦しまざるを得ざることゝ爲つたのである。此場合に銀行業者其人を責めるのは、當然であるが、同時に銀行業者をして斯る態度を敢てせしめるに至つた張本人の誰れであるかと云ふことをも考へなければならぬ。成金風の事業界に吹き荒んで居つた頃には、如何なる事業も莫大の利益を占めて互に其大を誇る有樣であつた、而して此際に平常と大差ない利益に安んぜざるを得なかつたのは、獨り銀行業だけであつたが銀行業者と雖も、一個の俗人である以上は、斯る場合に、他と共に利益の大なることを欲して已まない。如何にして彼等は利益を大ならしめたかと云へば、直接に銀行の營業資金を事業其ものに注入する、銀行業者であつて、同時に事業家とも爲り、斯

ぐて利益を增加する工風に出た。是れが銀行をして其基礎を薄弱にさせた根本の原因である。成金風の吹き荒んで居る際に、銀行業者だけ之を雲煙過眼視し、飽くまでも堅實一方の營業振りで滿足して居れば、甚だ結構であるが、是れは容易に望み難き所である。現に教育者の社會にすら成金風が襲つて來て、教職を棄てゝ、金に緣のある職に赴いた人すらある程の次第であつて見れば、銀行業者が成金風に中られて、結局取付き騷ぎを演ずるように爲るのは已むを得ない。私が銀行業者に罪なくして、彼等に罪を犯させるに至つた政府其ものに却つて罪の咎む可きもの大なりと斷言して、憚らない所以である。果して然らば政府が貯蓄銀行條例の改正を議會に提案した場合に、議會が之を承認するのは、其職分として當然であらうが、同時に政府をして斯る提案を爲すに至らしめた程、銀行に破綻を來した當面の責任者は誰れであらうか、議會が此事に着眼して、政府に一擊を與へるのは、至當の處置と見る可きである。

失業問題と思想問題

不景氣の影響は今や段々濃厚と爲つて來た。不景氣と云ふ一段階を經なければ、好景氣と云ふ他の段階に達し難いものである以上は、吾々は姑く今日の狀況を忍ばなければならぬ譯であるが、社會上から云つても、又經濟上から見ても、最も厭ふ可きことは、急劇極端の變動である。而して之を避けるには、或る調節策の必要を生ずる。不景氣の今日、社會的事相として、何人も認めて不可なりとする所は失業者失職者の增加する趨勢である。昨年恐慌の起つた當時や、其後數個月間に於ては、都會の工業地に失業者が簇生しても、其或る者は地方農村に歸還して、職を求めたし、農村繁榮の時代には、都會の失業者を吸收する餘力が充分に農村に備へられて居つたのであつたが、今日は果して如何であるか。米價の低落、繭價の下落は相重なつて、農村を疲弊させ、從來農村で勞働に從つて居つた者が何等の見込もなく、手蔓もないのに、漠然都會に集合して、都會に於ける失業の勢を甚だしからしめる趣の爭う可からざるものがある。私は倫敦のハイド、パークやリジユント、パークなどで失業者が唯芝生に橫臥して、終日爲す無きに苦んで居る狀を目擊したことがあつたが、昨今東京市內到る所の公園や、神社佛閣の境內で、同樣の境遇に置かれて居る人々を見出すようである。政府は失業に當る爲めに、今度の議會に職業紹介所に關する法律案を提出するさうであるが、今頃職業紹介所の設備を完

成して、失業問題に當らうとするが如きは、伊呂波歌留多に所謂大井から眼藥の感に類するものとせざるを得ない。

國民思想の問題も近頃時々議會で論議されるようであるが、今度の議會では如何に取扱はれるであらうか。國民思想の趨向を見るに就ては、固より精神的方面に重きを置かなければならないが、同時に物質的方面の關係を閑却してはならぬ。我國近年の經濟狀態に於けるように、富の分配は不公正にする。物價は暴騰させる、景氣不景氣の變轉を劇しくして、多數の國民をして好景氣の絶頂から、不景氣のドン底に墜落させ、不景氣の甚だしきに至れば、職業の安全さへ脅かさうとする。原內閣の經濟政策は現在の經濟組織に於ける病弊を極度まで暴露せされば已まざるものである。斯の如くして民心自ら現行經濟組織を不可なりとする方嚮に向へば、原內閣は之を目して不健全の思想であるとか、危險の思想であるとか云ふ。何ぞ計らん、此種の思想は多く原內閣自身の釀成しつゝあるものであることを。原內閣にして國民思想を善導しようとか、國民思想を取締らうとか云ふならば、先づ內に省みる所なかる可からざる次第である。

議會は毎年開かれ、豫算案以下種々の法律案は上下兩院の議に付せられ、其多くは成立して、國法と爲るのであるが、爲めに國民の眞實利益とする所のものが如何なる程度まで擧げられるであらうか。政府の爲す所は常に目前の急を凌ぐ事だけであつて、此圏外に一歩すら踏み出さうとせず、議會亦必ずしも政府をして其爲さざる所を爲さしめる用をも成さない、吾々政治の局外に居る者が議會の開かれる度毎に感じることは、何であるかと云へば、議會の依賴するに足らぬと云ふ一事である。今度の議會に對しても、亦此感を再びするに止まりはしないであらうか。如何にして議會をして眞實國民の利害とする所を具體化する立法に從はしめ、所謂議會政治の妙用を實現するに至らしめるを得るであらうか、此一事は私が近頃特に切實に感ずる所である。

議事妨害の權利

室伏高信

一

議會の野次廢止問題なるものが多數黨の側から問題にされ、そして反對黨の側でも、原則としてはそれに異論のないといふことが傳へられてゐるようである。この人達の間では、野次なるものの意味が極めて漠然として取扱はれてゐるようであつて、彼れ等が野次廢止なる名のもとに、果してどれだけの諒解をえてゐるものであるかは不明であるが、野次なるものは、しかく簡單に取扱はれべきものであらうか。また少數黨がしかく簡單に讓歩のできるものであらうか。

二

一般に、議會の野次といはれてゐる場合には、可成り汎く且つ漠然たる意味を含むでゐるのであつて、そのうちには單なる茶番狂言式のものも少ないし、この野次を利用して賣名の具に供するものもあらうし、また興味半分でやるものもあらうが、こうしたことは獨り野次においてばかりではなしに、演説の場合でも同樣のことがいひえられるのである。今日議會野次として知られてゐるものには、少くとも二つの意味がある。その一つは演説の妨害であり、他の一つは議事進行の妨害である。前者は演説の進行または有効なる働きを妨害するの行爲であつて今日日本の議會で行はれてゐる野次にはこの演説の妨害の場合が多い。演説の妨害は、議會內において行はれる場合であつても、議會外において行はれる場合でも、二重の害惡を含むでゐる。それは第一に言論の自由の妨害である。院內においても院外においても、言論の自由は民主主義の絕對的要件であつて、言論の自由——絕對的自由の存在しない間は民主主義の存在する餘地は全然考へえられないのである。その言論の自由は、今日の日本では、院外では官憲があらゆる工夫と努力と謀策とを盡してこれを妨害してゐるし、院內においては、憲法において、

そ言論の自由は保障されてゐるのであるが、その日本における言論上の唯一の隱れ場所でさへ院内における多數黨の横暴と、院内の野次なるものによつて妨害されてゐるのである。またこの演説の妨害は、反對黨（少數黨）の野次によつて行はれるばかりでなしに、政府黨によつても盛んに行はれるのであつて、少數黨はその唯一の戰鬪方法たる言論戰を妨害されることとなるのであるから、演説の妨害に對してはこれを辯護すべき餘地がないのである。

三

議事の妨害とは議事の進行の妨害であつて、學問上オブストラクションと稱せられてゐるものがこれである。このオブストラクションなるものは、演説の妨害ではなくして演説の擁護——擁護でないまでも、議事妨害のための演説の場合が多いのであるから、この方法においても演説の妨害の場合とその撰を異にしてゐるのであるが、更に一層、且つ本質的に相違してゐることは、演説の妨害の場合は多數黨によつても行はれることのあるのに對し、議事妨害と稱せられるものは常に少數黨によつてのみ行はれるものであるといふことである。少數黨によつてのみ行はれるといふことは、多數決に對する小數意見の抗議を意味するものであるが、議事妨害なるものはこの少數意見の抗議を最も有効に表現する方法である。このオブストラクションが是認せらるべきものであるか否かについては、學者の間に異論のあるところであつて、若し多數決なるものが絶對に正義と一致するものであると考へられるならば、オブストラクションは、この多數決に對する抗議であるから、素より排斥すべき行爲であるといふこととなるのであるが、多數決に誤謬の存在することが承認せられるとすれば、われ／＼はオブストラクションを排斥すべき何等の理由をもたない。私はこゝに多數決制そのものについて論じてゐる暇をもたないが、多數決が常に正義の決定と一致するものである事は、日本においては、常識的に、現前の事實から、一般に理解されてゐることであつて、日本においては、殆んど凡ての場合において、多數黨は輿論の後援をもたない。多數黨の横暴といふことは、日本の憲法史を一貫した大きな事實である。こうした場合に、少數黨がたゞ多數黨の決議に盲從し、手を拱いて爲すところがなかつたらどうか。多數黨に屬するものは、如何なる暴行があつても議會はこれを不問に附する。例へばその地位を利用して相場を行ふ多數

黨の大臣は不問に附せられて、これを糾彈する少數黨の代議士は除名處分をも受けなければならないとすれば、この場合に少數黨が自己を擁護すべき何等かの方法が許されてならないであらうか。英國の憲法史家として重きをなすメーンはその「ポピュラー、ガバアンメント」のうちでいふ、少數黨が多數黨の專橫に對して議事妨害の權利を有せざるべからずと。卽ちメーンにおいては、議事妨害は單なる野次ではなくして權利、——議事妨害の權利（Right of Obstruction）であるとなしてゐる。私はこの點において全然メーンの說に一致するものである。少數黨は議事妨害の權利をもたなくてはならない。その妨害は、方法としては演說によつて行はれるのが普通の方法である。卽ち言論の自由が與へられてゐるところでは、少數黨はこの自由を利用して議事の進行を妨害し、そして多數黨の橫暴を抑止すべきである。これ少數黨に許されたる權利にして、且つ最も有效なる戰鬪の方法である。この言論の自由が妨げられるところでは、更に他の方法を撰むのも止むをえない。

四

嘗つて一八三二年の選擧法改正の討議の際には、反對黨はその進行を妨げるために惡戰苦闘した。ピールは反對の領袖であつたが、議事の妨害のために、同一演說を四十八回繰返したことがあつた。またこの時はウヰルソン・クローケルは同じ演說を五十七回繰返した人として知られてゐる。今日の日本では、反對黨といつても賴みになる反對黨はないのであるが、若し議會で正義のために戰はんとするものであるならば、躊躇するところなくこのオズストラクションの權利を行使すべきであらうと思ふ。

經濟革命と直接行動

賀川豐彦

政治の起原としての私有制度

經濟運動と政治運動とはよく混同する。マルクスも、凡ての政治運動が經濟運動の上に乘かつて居ると云ふて居るが、或人は政治とは要するに略奪すると云ふことだときめて居る。

そして最初の政治は私有財産制度を保護する爲めに産れたもので私有財産制度は卽ち略奪であるから、政治は卽ち略奪機關であるとして了うのである。然し之は餘に亂暴な決論であり、經濟進化の上から見た私有財産の意義を充分理解し無いから、こんな論が出て來るのである。プルードンなどが無政府の世界を夢見ながら猶私有財産を殘して置かうと考へたのは道理のあることで、或種の私有財産は永遠に取り去ることの出來るものでは無い。それかと云ふて共産分子も、集權分子も社會の進化につれてより濃厚に這入つてくる。之等は一つの教條で律することの出來るものでは無い。社會的生産が強くなればなる程それは共産的分子が強くならう、個性の確立が出來ると共に私有制度も一層深められよう。そして、社會化が一方にあると共に個性化が伴ふから、私有財産が常に共産の側に殘つて行く。然し世界の主要な生産は殆ど凡てが社會化する爲めに、今日のような變性した私有制度はその影を沒するであらう。その變りに個性を表現した或種の藝術品又は個性の投影した各種の財産はより一個私有化しよう。眼鏡、義齒、個性を表す衣裝、個性化した趣味に關する諸物品等は一層私有化する。それは調度子供が拾つたガラスの一片をその子供が水晶の玉よりも大事がると同じ様に或人が自ら畫いた繪畫──それは社會が共有を悦ば無い程下等なもの──を或個性はそれを何よりの寶として尊ぶこともあり得る。

こんな風に時代は一層社會化し共産化すると共に、他面には

一層個性化しよう、それで昔私有財産制度が確立した時は必ず政治的には略奪する爲めであつたのだと云ふやうなオッペンヘイマーの云ふような亂暴な學說は面白い說ではあるが眞理では無い。

生産の形式が個人的努力に待つことが多い場合には、どんなに共産的にしようとした處でそれが可能であることはあり得ない。牧畜時代には、土地や山林は誰れのものでも無かつた事が多いだらう。然しそれは、土地や山林のみであつて私有財産はその努力の上には必ず有つたに違ゐない。農業時代になると、私有財産制度は色々な形で發達した。私有財産制度と云つても色々な通りが有つて、一律には行か無い。然し勞働を多くするものは多く利得を取つても善いと云ふことを認めて居たには違ゐは無いので、この意味に於ける、勞働全酬權は充分確立せられんと努力せられたことは事實である。即ち一方には勤勉な百姓があり、一方には怠惰な百姓があつて、一方は十を生産し一方は五しか生産し無い時に、それを分配する時に十と五とを二等分して七、五にして分配しようとは考へられ無かつたに違ゐない。これは昔の百姓が個人的生産の形式を取つたからこの點が一層明瞭であつたに違ゐない。

然し此處に病的な個人があつて、怠惰であり又戰鬪を好み、人の生産によつて、生きんとするものが出て來たのである。そして征服なるものによつて、個人個人が生産した富を奪つて行つたのである。之が昔の酋長の或者であり、暴君のあるものである。然し酋長の凡てと君主の凡てが略奪の爲めに略奪したもので、略奪したい爲めに私有財産制度を確立したのだと考へるのは當つて居らない。

國家の警察的任務と財産保護

個人の勤勞によつて集積した富——多くの百姓は自分に耕して自分の家に積み重ねて居た——を略奪したいと思ふたものがそれを盗むことの危險より、經濟的には個人主義的勞働全酬權で善いが、社會的には泥棒を防ぐ爲めに或種の警察制度を設ける必要が有つたに違ゐない。之が政治と經濟の最初の分岐點であつたのだ。

處が攻撃される時には生命までも失ふことがあるものだから、生産せられた富よりも生命の方が大事だと云ふことになり、警備に當る人間が生産する人間より尊敬せられることになり、警備に當る人に凡ての生命及財産を供託することになり、王や

酋長が必要とせられるようになつたのである。即ち政治の起原は必しも征服と云ふような外部的なものでは無くして、征服や略奪と云ふ外部的な刺激に反抗して內部的に政治組織を持たんとしたものに違ゐないのである。それで無ければ國家組織など云ふものは充分確立するものでは無い。

然し先にも述べた通り政治の最初の分岐が警察的任務にあつた爲めに、それが專門的になり過ぎると征服にも移れば、軍國主義にもなり得たのである。

またたとへば國民は警察制度を擔當して居る人が誰れであらうとかまは無いとも考へた。それで、國民全體が政治には無頓着であつた時代もあつた。それでウイリアム、カンカラーが英國を征服しても英國民は反抗をせずに永いこと默つてゐたこともあつた。それは國內の警察が甘いこと行けばそれで善いと考へたからである。支那に於てもそんなことはよく見られた。日本に於ても藤氏、源氏、北條、足利、織田、豐臣、德川と警察行政官が變化して行つたが、國民全體の經濟組織はその間に別に著しく進化すると云ふことも無かつた。

こんな風であるから警察制度が專門化すると云ふことが、國家組織を要求すると云ふ社會進化の內的要求と並行し得るのであるが、極端に論ずる人は社會進化と警察制度とは二つの反對のものであるかの如く云ふ人がある。然し之は間違つて居る。

舊式國家の經濟的無解決主義

人口が增加し、人間の欲望が昂進し、社會組織が複雜となり、個性が充實して來ると共に生產の形式も社會化して來た。そして所有權の內容も變化せざるを得なくなつた。一人で山で畑を耕して一人で收穫を刈り取つて居た時には問題も無かつたが村落が出來て富めるものが村の田地を獨占するようになると問題が起つて來た。即ちそれは勞働の方面から起つて來ずして、空間に對する需要の方面から起つて來た。即ちそこに所有權の問題が、八釜敷論ぜられるようになつた。然し社會はそれに就て善き解決の方法を知ら無かつた。それで昔から持つて居るものはこの後も持つて居ても善いと云つたように相續權を認めた。それで後から生れた人間はつまり損な世界に生れねばならぬことになつた。

之が民族の間に完全な社會道德が存在して互に相助け合ふようにもなつて居ればもう少し都合のよい解決法もあつたであら

うが、個人間の道德は進まず、人々の増加と共に生産の能率が上つて來ると共に好きなことをして遊んで居て食ふと云ふ人間が多く出來た爲め解決の方法が一層困難になつたのである。

それで最初は警察制度だけですませた國家組織もかうなると色々と入り込んだ個人の權利を解釋せねばならなくなつた。そして警察官は有力であつたから、社會の有力者と警察制度を助けるものに多くの權利を與へることになつた。そして人口の増加とか經濟の進化とか云ふものはあまり頭に置かれずに、凡て新しく起つてくる問題を無解決のまゝ捨てゝ置くことにした。之が舊式國家組織の行詰の狀態である。

然し凡ての生産が農業的であり、手工業も農業的生産を助ける爲めのようなもので有つた場合には人一人の勞働の報酬と云ふものの相場が大抵定つて居て、人間の生理的エネルギーの使用量だけを支拂へば善いと思はれて居たから、勞働問題などは決して起ら無かつた。勞働者はたゞ損な地位に生れた、然し生きて行ければ善いのだと考へて滿足してゐた。そして農業時代には交換も餘りに發達して居ら無かつたから、富の著しい懸隔も無かつた。それが　十六世紀になつて世界的交通の發達と共に商業的資本主義が現れて、大きな社會を對手にして賣込むものは大金滿家となり社會に貧富の懸隔がはつきりつくやうになつた。然しそれでも世間はまだ默つてゐた。十八世紀の末になつて、機械が人力なしに富を生産するようになつて、世界に富が幾百倍になり、勞働者はもう之で今迄のような苦役に惱ま無くても食ふことと着ることゝ位は何でもなかりそうなものだと考へる時代になつても、富は舊き特權階級に集り勞働者はいつまで經つも貧乏だと云ふので此處に始めて勞働するものの權利を主張するようになつたのである。

直接行動の起原

その間に社會も進んで刀を腰に帶ば無ければ危險で步け無い時代から、軒から軒に電話がかゝり、四錢切手を貼れば萬國到る處に郵便端書が屆くような時代が來た。それで昔のような警察制度は全く笑ふ可きものとなつた。そして舊式の國家組織は誰れも信ずるものが無くなつた。それで全國各地方が代表者を送つて、議會制度を組織することになつた。そして警察本位の社會制度がより多く經濟化することになつた。然し最初の議會制度は矢張り、金を多く持つて居る、特權階級からであつた。そして勞働階級が全然忘れられてゐた。それでも社會的には著

しい進歩であつた。

然し議會制度も要するに勞働階級に對する正當なる取扱を與へ無いと見て取つた時に勞働階級は更に議會制度をも破壞して自らが新しい社會組織を持ちたいと云へるようになつた。之が即ち『直接行動』の起原である。

そしてこの勞働階級の直接行動の要求が十八世紀に起らずして、二十世紀に起ると云ふことにも深い理由がある。十八世紀には先に述べた通りに、社會がまだ農業勞働の時代で今日のように工業的勞働に乏しかつたから勞働の搾取と云ふことが明白では無かつた。然し今日になつては勞働の社會化工場化と共に勞働の搾取が一層明瞭となり、勞働階級が昔のような自足經濟で甘んずることが出來なくなつたものだから此處に、今日の搾取制度を許容する凡ての制度を凡て改革したいと云ふ要求が盛んになつて來たのである。

議會に對する四種の見解

そこで考へ無くてはならぬことは議會制度と云ふものゝ本質に就てゞある。議會制度に對する三種の違つた解釋がある。

一、代表議會は多數決による意志決定を取るが故に眞理を曲げる懼れがある故に、少數者の意志を尊重する爲めに根本的に代表議會を否定すべしとする說——即ち多數による政治と云ふデモクラシーを否定するもの。之は無政府主義。サンヂカリズムに此說を取るものが多い。

二、議會制度は今日の樣に政治的にして居るから惡いので、之を產業的に改造されれば善いとするもの。即ち之をソビエツト式に直すか產業議會式に直せば善いとするもの。之には二種の行き方がある。第一は獨逸式に社會主義の代表者を議會に送つて漸次に之を改造せんとするもの第二には今日の議會を改革して無產者專制の世界を出現せしめんとする行き方の二種である。

三、之はデモクラシーにも疑惑を抱かず、議會を產業的に改造しようとも考へず、たゞ、普通選擧及婦人參政權によつて改造しさへすれば善いと考へるもの。

以上三種の議會に對する思想の中で、第一種の思想は社會組織がたゞ個人化して行く社會であれば實行も出來ようが、益々社會化して行く社會に於ては大多數の意志を尊重するデモクラシーはどんなに否定しようとも否定し得られるものでは無い。たとひ少數黨や英雄の意志が、豪い所があるからと云つても英

雄は一個人であつて、民族では無い。一英雄の爲めに民族を否定することは出來ない。殊に滿場一致で贊成することがあつた場合にそれがデモクラシーだから善く無いと云ふ理屈は少しも無い。經濟組織が民衆化して行く今日英雄や天才の爲めに大多數のデモクラシーまでをも犧牲にする必要は少しも無いのである。

また第三の普通選擧や婦人參政權だけで社會が善くなると考へることも今日の組織が徹底的に産業化して居る今日殆ど意味の無いことである。

それでもしも代表議會がデモクラシーの爲めに必要でありとすればそれは第二の考へ方卽ち代表議會を充分産業化したものであらねばならぬ。それはたゞ政治的に議會を民衆化したところで、今日の民衆の産業生活が資本家萬能であり、今日の議會は司法、行政、立法と稱する上すべりのものであつて、産業のことは勞働者と資本家が個々別々に取扱へば善いと考へるのであれば、産業組織は少しも改まること無くして過ぎ行くより外に仕方が無いのである。卽ちたゞ普通の政治的の意味での普通選擧が不信用である理由である。

そこで代表議會を認めるとするならば産業化した代表議會を造らねばならぬ。卽ち第二の意味での代表議會であらねばならぬ。然し今日の議會は特權階級の議會であつて、デモクラシーに基く普通選擧すら採用し無い位であるから之を産業化すると云ふようなことは考も及ば無いことである。そこで、何時までも今日のような議會に信賴して居れば社會は少しも善くならないから、一氣に新社會を打ち樹てようと考へるのが直接行動論者である。

直接行動の成功の程度

直接行動にも色々な通りがある暴力革命を以つて今日の政治を顚覆せねばならぬと考へるものと、産業的代表議會を作る爲めに總同盟罷工の程度に止めんとするものとの二種であるが、社會革命と稱する暴力革命を實行して、どれだけの社會進化があるかは頗る疑問である。

政治革命――卽ち佛蘭西革命のようなものであれば、それが元來警察制度專門家に對する制裁であるから、その警察制度を民衆化したいと考へる時に或種の暴力は成功するかも知れ無い。

それは先にも述べた通りに國家と云ふものが、たゞ外部的の

征服だけで出來たものでは無くして、征服に對する防禦としての內部的要求から起つた專門的警察制度であるから、內部的にその專門家を信用しなくなる時があつたとしたらそれは倒れざるを得ないのである。其場合は政治革命は容易に專制政治を倒すことが出來る。

然しそこに眞違へてはならぬことは專制政治を倒し得るものはたゞ暴力のみであると考へる虛妄である。實際はそれでは無くして專門的警察制度の獨裁制を不信用にならしめる社會意識の進化が之を倒す主要々素であるのだ。この意識の進化が高まると共に、獨裁制度は倒れるのである。何にしても警察制度的政治の變革は社會意識に裏書せられたものでなくてはならぬ。

然し警察的政治を倒した調子で、經濟革命が出來ると考へれば非常な間違が起る。即ち政治革命に使用する直接行動と、經濟革命に使用すべき直接行動には遠い距離がある。

經濟革命に於ける暴力の程度

經濟革命は勞働者の解放と富を多く生產する爲めの革命である。今迄多くの勞働者が多く勞働して居るにかゝわらず奴隸の樣な狀態に置かれて居ることに對して反抗することである。が、たゞ反抗するばかりでは無い、より多く勞働階級が富んだ世界を造らねばならぬ。その爲めには政治革命のように破壞的な態度に出るならば、それは勞働階級の自治の世界が出現した時にそれだけ富が削減されたわけとなり資本家階級は之より困らうが、廻り廻つては勞働階級も大に困ることになるのである。それで經濟的革命に於ては富の破壞は出來るだけ謹まねばならないのである。

然し今日過激派の遣り方を見て居る人々は經濟革命の爲めには、富の破壞、勿論のこと政治革命と何等區別無く、資本家を暴君と等しく見て彼等を倒して了ふ事が即ち經濟革命かの如く考へて居るものがある。

即ち獨裁官を設けて政治革命と等しく經濟革命にも民衆に所屬する警察官を任命すれば善いと考へることが經濟革命であるかの如く考へるものがあるのである。

この考の起つた主要な原因は國家は略奪の機關だとのみ見るのと、勞働者から搾取して居る資本閥が國家と結託して飽迄產業の社會化を妨害すると考へることから來て居るのである。

國家と資本家の結託

然し商業的資本主義の出現したのは必しも國家の力を借りたのでも無い。經濟社會の需要供給の法則によつて社會の嗜好に投じたものが大儲けをするようになつたのである。然し之は最初のことである。國民經濟が確立した時に土地が特權階級の所有になつた如くに資本もまた特權階級の所有に歸し團結した傾向は無きにしもあらずである。即ち國家が資本家階級の國家に化したと考へられる節が多くあるのである。それで國家は特權階級を保護して勞働階級を保護しないと考へるようになつたのも誠に無理からぬことである。

然し、それでは國家と資本を倒せばそれで社會改造が完全に出來るものであるかと云ふに必しもそうでは無い。國家特に警察國家の存在は泥棒したいとか殺したいとか考へるもののある間は續くだらうし、資本主義的金儲けは社會が今日のように產業的に無組織に殘る間は永續するに定まつて居る。それで、もしも資本主義制度を破壞しようとするならば、たゞ社會化を妨害するから國家と資本主義を破壞すると云ふだけでは足り無い。今日の國家組織と資本主義に變る可き或者を示さねばならぬ。それで無ければ、假令暴力と資本主義とを破壞したとしても、その後には必ずまた同じ樣な警察國家と餘剩價値製造の資本主義が出現するであらう。

少なくも、暴力で倒しまた暴力で打建て得るような簡易な社會組織であり得るならば、その後にはどうしても警察國家と資本主義で無ければ治まるまい。

經濟革命に於ける暴力の無能

それで經濟革命に於て暴力を用ゐて勞働階級を解放し得る部分がありとすれば、經濟制度の政治的方面であつて、經濟制度そのものは決して暴力によつて解決し得るものでは無い。つまり暴力は經濟革命の本質に觸れるものでは無いのである。

此處に勞働者百人が製造した百萬圓の生糸製品がありとする。それが社會の需要によつて千萬圓に賣れたとする。その場合にその社會の需要が發生させた九百萬圓の餘剩價値は今日では資本家が取つて居るから惡いとせられて居るが、工場自治の時代が來て、それを百人の勞働者が分配したとしてもそれは正當であらうか?、必しもそうでは無い。それで今日の社會を不公平の無い社會にしようと思へば、社會全體が產業的に團結せねばならないのである。つまり需要に對しては消費組合を世界的に作つて、凡ての商業的の餘剩價値の發生を防ぎ、供給に對

しては生產者組合を作つて、工業的に發生する餘剩價値の發生を防がなければならぬ。即ち世界的に消費組合と生產者組合が出來る前に、どれ程暴力を以つて資本主義を倒しても、それは元の通りになつて了う。それでもし直接行動を用ゐて有効な點がありとすれば、それは生產者組合を妨害するものに對してだけである。今日に於ては生產者組合は日本に於て自由に作り得るのであるが、勞働者自身が目醒めて來ないのである。さて生產者組合と消費者組合が出來上つたとする。そこで起るのは工場管理權の問題である。然し消費者組合が全國的に出來上り勞働者及無產者がその工場に對してボイコットをする時に、個人經營の工場がどれだけ耐久力があるかは頗る疑問である。

それで經濟革命は元來暴力を用ゐても効果の少ないもので有つて、暴力的に打ち建てた社會に於てどれほど經濟が進化するかは實に疑問である。つまり直接行動を經濟進化に用ることありとせば消費者組合と生產者組合を造る爲めに用ゆべきものであり、最後に管理權を打建てる時に富を破壞せざる程度に止めねばならぬ。(機械或は工業資本を破壞するならば、勞働者が管理する場合にそれだけ富が消滅せられるから富の破壞を出來るだけ防ぐのである) 然しもし直接行動を以つて凡てが可能であると考へるならばそれは大きな誤りである。もしも直接行動の先に富の生產と消費に關する社會組織を完成するので無ければ、直接行動は何の役にもたゝぬものとなる。

そこで直接行動によつて經濟制度そのものを破壞してはならぬことが明瞭となる。

それで、もしも消費者組合と生產者組合が完全し無い文明國に於て少數の勞働階級が經濟階梯の各種の要素が含まれて居ることを知り乍ら、直接行動を以つてボルセヴヰキのように勞働者自治の世界を出現させたと考へる時に、それによつて經濟的進化は順序よく運ぶか否かをよく考へねばならぬ。

私の考では工業地では勞働者自治は完全に行へようが、農民の間では原始的生產が行はれて居る間は、その農夫が勤勉である爲めには富んでも行くだらうし、怠惰な農夫はいつも貧乏で困るであらう。然しあまり勤勉で富むと無產者がそれは勤勉の爲めに富んだのでは無くして、餘剩價値を發生させて富んだのだと云はれるから、勞働を或程度にしてわざとなまけるに違ゐない。それで凡ての人は或程度まで經濟的欲望を捨てゝわざと穢い態をして滿足するであらう。無產者の共產を標榜するならばから出るより道は無いであらう。それでロシアなどに於ても

勞働者の勞働能率は恐ろしく減退して居るのである。ロシアの一九一七年の革命當時に於ては色々と混亂もあつた爲めでもあらうが七割五分から生產能率が減退した處が少なくなかつた樣である。(E. A. Ross: Russia in Upheaval, p. 273) 今日に於ては多少能率も同復したであらうが、上から無產者獨裁官が押へ付けて居る間は矢張り能率は出まいと考へられる。それは經濟的に個人が富むことが罪惡視せられ、凡てが合衆的に分配を受けねばなら無いから、經濟組織は凡て個人的に自由な需要の上に發生する自由經濟が姿を隱し、凡てが强制的な合衆的需要の上に成立する特殊な經濟組織と變化するのである。この結果は需要の上に成立する市場は全部閉鎖し、價格はたゞ人爲的に勞働價値を假定してそれを與へねばならぬことになる。その爲めに生產はあつても需要の程度がわからなくなり、生產は徒勞となり、遂には生產費が支拂へ無くなり、社會に於ける經濟的成長は全く止つて了うことになるのである。

そこで、經濟運動だけは直接行動だけではどうともならぬ點があることが氣附かれてくるのである。即ち自由に要求せしめ無い、自由社會に眞正の經濟的進化は無い、資本主義の世界に經濟進化が充分發達し得ないと同樣に直接行動のみで打建てんとする專制的無產者社會にも眞正な經濟進化はあり得ない。即ち經濟進化に於ては暴力や直接行動は餘り効果のあるものでは無い。それは自由進化に待つより外に望みは無いのである。

たとへば貨幣制度の弊害を直接行動によつて撤廢したものがあつたとする。(數週間前にそんな電報が這入つたが私はそれが何の意味をもなさぬものだと考へて居る。)今日の貨幣制度は過激派の一片の布告文によつて撤廢されるようなそんな簡單なものでは無い。貨幣制度が撤廢せられ得る社會は自由社會が最高級に進化した時に初めて可能なのであつて、今日のロシヤに於ては貨幣制度を廢止するならば進化した意味に於ての廢止では無くして、物々交換になることの意味に於ての幣制廢止である私は暴力を用ゐて貨幣制度が廢止せられるようなことは全く無意味なことだと思ふ。或人は切符制度で善いと云ふ。然しそれはつまり切符と稱する紙幣と云ふことであらねばならぬ。それで無ければその切符は限定的な品物の外は買ふことは出來ないものである。然しそんなものであれば爲替の用には立た無い。それで一地域では貨幣は切符に代つても、全國的にはそれは全く行はれるものでは無い。米國では小切手を發行するが、之な

ども信用制度が確立するから之が出來るのであつて、社會にかて信用制度の確立が無くして、一片の布告で貨幣の撤廢は全く不可能なことである。

つまり經濟進化は、自由欲望を暴力で脅かすことの或社會では中途で挫けて了うものである。即ち直接行動は暴力を用ゐ無い範圍で、個人欲望を抑壓し無い範圍で使用せられねばならぬ。つまり直接行動はどんな場合でも資本家を强制するのであるけれども、それがたゞ資本家を强制するばかりで無しに、社會一般の經濟行爲をも强制することがあつてはならない。

つまり私は政治革命に用ゆる直接行動を經濟革命に用ゆる場合には必ず失敗するものであることを主張するものであつて、經濟革命に用ゆ可き、直接行動は暴力の加はらざる、資本家外の第三者の自由欲望を閉塞せしめざる程度の總同盟罷工以上に出てはならぬことを云ひたい。

然し政治的直接行動と、經濟的直接行動はよく混同せられる。そしてロシアに於てはこの種の混同が最も著しい。即ち私は無產者專制の冒險を敢てして、今日まで進化し來つた經濟制度を全部顚覆せしめ無い爲めに、先づギルド自由組合の方式に從つて、勞働階級及無政府階級の自覺するを待ち、その全部が自覺するを待つまでは、今日の議會をより多く勞働階級に近づける道を講ずるより外に道は無いと考へる。

議會政策の用途と新しき道

或人は今日の議會を普通選擧によつて勞働階級に近づけると云ふとを考へること――即ちブルジョア階級の議會に少數の勞働階級の代議士を送り込むと云ふことは階級意識を鈍らせ、勞働者自主の心を傷けるものであると云ふ。また或人は今日の代表議會と勞働者が作らんとする代表議會とは全然性質の變つたものであるから、今日の議會にはあきらめをつけて、勞働者はたゞ一心に自由組合と總同盟罷工の日を考へて居れば善いのだと云ふ。即ち全然今日の議會を否認する人々は總同盟罷工によつて今日とは違つた特殊な世界を夢想して居るのである。そんな人々は漸進進化を信じ無い。無理をして打建てた經濟社會がすぐ倒れることを考へ無い或種の直接行動で全部が解決するように夢想して居る。然し先にも述べた通り自由にそして漸次に進化して行くもので無くして多少なりとも暴力と强要の加はつた經濟制度は直に逆轉するから、出來ることならば、生產者のみが專制し無い爲めに、今日の議會を消費者議會と見、生產者で

無い、商人、自由職業人、老幼病者等の自由欲求を代表するものとして、彼等の意志をも尊重して、そこに勞働者側の代表者を送り、彼等の覺醒を促すことも決して悪いことでは無いと思ふのである。獨逸の社會民主黨は實に議會政策によつて今日の獨逸を贏ち得たのである。

たゞ生産者議會は今日の議會のような消費者ばかりの集る所ではその目的を達することが出來ないから、勞働組合の發達を待つて、生産者議會を造る覺悟が無くてはならぬ。かくしてあまり無理なくして行詰つた處で暴力の加らざる總同盟罷工位で止めるので無ければ、直接行動は經濟社會を必ず混亂と退化に導くことにきまつて居る。經濟的社會革命を目的とする場合には、如何なる場合でも暴力を用ゆる時に、眞正の經濟行爲は中止される。

婦人參政・拒婚同盟

政治的より社會的へ

長谷川如是閑

男子の運動が先づ政治的であつて夫れから次第に社會的に移つて行つたと云ふ事は女子の運動に於ても、同樣でなければならない理由がある。それには男子の社會上、經濟上の地位が近代の產業上革命に伴つて急激な變化を來したことに原因してゐる。政治と云ふものは政治するものから云ふと、自己又は自己の階級の生活の特權を獲得することであるが、政治さるゝものから云ふと、自己の生活に對する支配である。で政治運動は二つの方向を持つてゐる。一つは權力を獲得することによつて自己又は自己の階級の生活を特權付けることで、今一つは自己の生活を最も自己の便宜に支配されやうとする希望を實現する事である。男子の政治運動は積極的には、生活の餘力を有つたものが特權を獲得しやうとする事であり、消極的には、生活の餘力を有たないものが、其の生活の窮迫から逃れやうとすることである貴族政治に於る政權爭奪運動は前者に屬し、革命的政治運動は後者に屬する。併し、消極的政治運動も、結局は完全に自己の支配を實現するに非ざれば、其の窮迫せる生活から自己又は自己の階級を脫却せしむることは出來ないのであるから、矢張り積極的政治運動即ち政權獲得の運動にまで進むの外はないのである。

婦人運動を起した婦人達は、概して男性的の生活趣味を有つた人達であつて、自然男子の政治運動に興味を持ち、單純な男子の政治運動家と同樣な傾向に進み易いのである。其結果婦人運動の標的は男子の選擧權獲得の運動の標的を其儘持つて來たやうなものになつてゐる。併し婦人が自己の運動をさう云ふ方

向て推し進めるとの結果は如何であらうか、男子にあつては如何に消極的に起つた政治運動でも結局は自己の階級の手に政權を收むるとであつて、事實亦其目的を達してゐる。

例へば佛蘭西革命はブルジョア階級が貴族階級に其生活を壓迫され、極端の窮迫に陷つた事から逃れる運動であつたが、結局それは自己の階級に政權を握る運動となり、其目的を達したのである。今日迄の傳統國家の政治運動は、傳統的の政權なるものゝ本質を其まゝにして唯夫れを奪ひ合ふとであつた。今日の社會運動はさうでなく、國家權力の本質を改造して、夫れを今日のやうな奪ひ合ひの目的物でないやうにしやうとしてゐるのである。在來の政治運動は元の儘の政權の遣り取りであるから、比較的短年月の間に遣つたり取つたりするとが容易に出來たが今日の社會運動は左うは行かぬ。國家權力なるものを大名の寶藏に納めてある寶物のやうなものにして、夫れを取り合ふ如きエネルギーの空費を人類の歷史に於て何時までも繰返してゐるやうなことのないやうにしたいといふ運動なので、有りの儘のものの受け渡しを目的としてゐるのではない。政治運動が斯の如くに根本的性質を帶びる社會運動に變化するに至つたのは、何十年の歷史を有する征服國家の演技的葛藤が人類の幸福の爲めに其意識であるとを覺らせられたからである。

然るに婦人運動は實際的には、何うもまだ男子の舊政治運動の範圍を出ないやうである。而も其の積極的方面迄進む可能性を有つてゐないで、飽く迄消極的の範圍内に留まつてゐなければならない。男子の運動は傳統的國家權力を其儘受渡しするのであるから、直に目的を達し得るのであるが、女子の政治運動は何處まで行つても、女子の手に傳統的の國家權力を渡される見込は今の所では全く無い。とすれば、女子の運動は當然に消極的に留まる譯である。女子の政治運動家は果して夫れに滿足して居られるだらうか。

男子の運動に於いて政治運動が否定され、根本的の社會運動にまで進んだ事實は女子の運動家の注意せねばならない點である。無論男子の運動でも全く政治上の夫れを捨てた譯でなく、手段としては尙政黨運動なり議會行動なりをとつてゐるが、目的としては全く社會的大改造に標的を置いてゐる。在來の國家權力の如きは彼等の眼中にはない筈である。婦人運動も亦當然に同じ徑路を辿るべきではないか、殊に婦人にとつては、到底在來の國家權力を自己の手に收める見込はないのであるから、政治運動に閉ぢ籠つてゐるとは結局何を目的としてゐることだ

か解らないことになる。

婦人の運動が社會的の方向をとるに至つたのは、即ちフエミニズムの最近の傾向である。フエミニストと云へば、元來サフレジエツトのやうな單純な政治運動婦人であつたが、今日では寧ろもつと思想的の意義をもつた一般的女性化主義者でなければならない。男性本位に造られた社會を、女性本位に造られた社會――今のところでさへ、少なくとも男女同格の社會――に改造しやうと云ふのである。

何故に女子の運動が斯の如き方向をとるに至つたかと云へば夫れは男子の運動が社會的の方向をとるに至つたのと共通の理由を有つてゐる。近代に於ける社會の經濟上の進化は、男子の地位を在來の階級的秩序の上に組み立てた組織に、安定せしむることが不可能になつた。隨つて政治運動は、客觀的國家權力を爭奪することから、主觀的生活目的を實現することに移つたのである。女子の運動も女子の外にある何物かを奪ひ取ると云ふことから、女子自身の社會的存在に變化を持ち來さうと云ふ運動にならなければならない。それは、社會狀態に伴ふ女子の地位の變化に應じて、女子自體の地位を定めやうとすることとなのである。社會史的に見ると男子の地位も、左うして今日のやうに確立されたのである。古代の女子本位社會に於ては女子が一切の中心であり、權力の把持者であつたのである。而も其時代の生活中心並に國家權力なるものは今の家族の夫れと遠くないもので、僅に夫れに戰爭と云ふものが加つた位のものであつたが、併し兎に角も女子は其中心勢力であつた。然るに男子が當時の社會に於て、專ら外部的の活動に任じた結果男子の肉體的並に精神的發達が必要上女子の夫れを凌駕するに至り、複雜なる社會機關の中心は、生活の樣式と伴つて、女子の手から男子の手に移るに至つたのである。斯くて男子中心の社會が建設されたのであるが、今日の女子の地位は、稍當時の男子の地位に似てゐる。無論當時の男子が、社會の外的行動の全部を擔任したのから見れば、今日の女子の分擔は遙に小部分に過ぎないが、夫れでも變化の性質が稍類似してゐるのである。即ち家庭に閉ぢ籠められた女子は、次第に社會に出て外的行動をとらなければならないことになつたのである。

女子が社會的活動を分擔しなければならなくなつた事情は、近代の産業進化の結果、一方では男子全能の社會が、女子の援助を求むることとなつたと同時に、他方では、男子の生活の餘力が、女子を徒食せしむる程、豐富でなくなつたことに因るの

である。男子をして女子の扶養を負擔し得ざるやうな窮迫の事情に立ち至らしめたのは近代の資本制度の結果であつて、男子自身の失敗に外ならない。其結果女子は男子の扶養から離れて獨立の社會的生活を營まなければならないやうになり、從つて女子の教育も亦其目的に應じなければならなくなつた。而して一端社會の外的活動に任じ、それに應ずる教養を受けることになつた以上は、女子の生活目的が夫れに伴つて變化するのは當然な話である。生活目的は、生活慾望の昂進に依據する筈であつて生活慾望は生活の樣式の變化に伴つて昂進する筈である。勞働者が勞働條件を改善さるゝと、生活慾望が昂進して、生活目的の變化を來す、今迄壓迫の生活に滿足してゐたものが、壓迫に耐へることが不可能になり、進んでは自ら壓迫者たらんとする慾望を生じ、彼等の生活目的はブルジョアの夫れと變りがなく、『プロレタリヤ階級の獨裁』などと云ふ生活理想を生ぜしめる。女子の生活條件の進化も、同じ順序を踏むに相違ない。女子の社會的生活の變化——即ち女子の生活條件が男子の夫れと大差なきに至る——に伴つて、其生活目的も亦男子の夫れと等しきまでに進まざるを得ざる譯である。そこで私はフェミニズムの運動は、必然に「女子の獨裁」にまで進む論理上の可能性を有つてゐることを信ずる。

男子の政治運動の否定は通常所謂直接行動となつて現はれる政治運動が常に代表制の擴張運動となつて現はれるに對し、代表政治の否定に基く非代表即ち直接行動となるである。彼等が直接行動を採る目的は、彼等が平常重大な社會協同の分擔者であるに拘らず、社會がそれを正當に認識することを拒む故に、一時其協同行爲を拒絕して如何に社會が夫れによつて脅かさるるかを、社會に知らしめて、自己の地位を正當に認識せしめんとするのである。されば社會的協同の拒否は、社會がそれによつて攪亂され亂されゝば亂さゝる程其目的を遂する譯である。其意味から云つて婦人運動に於て、何が一番直接行動として有力な協同の拒否であらうか。男子の勞働者は、其協同の拒否を有力ならしめる爲めに組合を作り、所謂同盟罷工を行ふのである然るに女子の場合は社會の外的活動に協同してゐるとは云ひ條男子のやうに或る種の生產を全部自分の手で受合つてゐると云ふことが少ないのであるから、一切に其分擔を拒否し得る場合は二三の產業の外にはない。其代り男子の持つて居らぬ程な全的な協同行爲の拒否が可能である。それは即ち結婚を拒絕することであると一部の婦人運動者は唱道してゐる。

成る程結婚を拒絶すると云ふことは、男子に對する可なりの威嚇であるが、只其可能性が問題である。ストライキやサボタージも、始めは可能性が問題であつたのであるが、之れを可能ならしむる組織的運動が次第にそれを有力ならしめた。女子の拒婚についても同じやうなことが云はれるであらうか。或は性交は勞働と違つて抑へると出來ない慾望であつて、勞働のやうに一定期間揃つて中止することは出來ない。殊にそれは勞働のやうに公然と行はれるとでないのだから、到底同盟破りを免れないと云ふ說がある。併し理論的に云へば、衝動としては性交よりも寧ろ勞働の方が強いのであつて、一生性交を行はない人間はあつても、一生何等勞働的行爲を行はない人間と云ふものは有り得ない。慾望としての强弱は問題ではないのみならず性交の神秘的勢力、即ち所謂戀愛は、男女間の結合を機械的に處置せしむる一切の制度習慣を無效にすると云ふ說もあるが、之れも理論的には正確でない。勞働と雖もそれと人間との結合は神秘的と云へば神秘的で、或人間が或る勞働に向ふと云ふとを場合によつては、國家も法律も暴力も之を如何ともすべからざるものがある。さう云ふ事情から拒婚同盟の能不能を云ふ譯には行かないが、無論實際に於てはさう云ふ事情だけでも、事實拒婚は困難であらう。

が、元來婦人運動そのものが、それ自身に於て一種の拒婚同盟なのである。近代の社會に於て男子が結婚することの困難になつた事情、女子の生活目的の變化の爲めに、結婚を避けるに至つた事情は、相合して婦人運動の原動力を推し進めてゐるのである。其事は他の雜誌で一言しておいたので茲には略すが、左う云ふ自然的の拒婚の外に、組合的に拒婚行爲を行ふと云ふとには、舊道德の批判から兎や角と云はれる點を除外しても、其功利的精神が果して外の要求に打ち勝たれはしないかと云ふ疑ひは充分ある。拒婚を功利的と云ふのは不當のやうだが、女子にとつても男子にとつても、比較的結婚が困難である事情の下で拒婚するといふことは、寧ろ功利的の方面を持つてゐるとも見られないではない。功利的の事情は動もすると、非功利的な行動に謀反さるゝ虞がある。拒婚の實行に伴つて起る結婚以外の性交——それは現に結婚困難の今日結婚による夫れよりも遙か多數に行はれてゐるものである——を何う處理するか、夫等も問題である。

尤も今日新婦人協會で唱へてゐる拒婚同盟は或種の病氣を有つた男子に對する夫れであつて、至極常識的な所謂穩健な拒婚

で舊道徳から云つても充分肯定される筈のもので、其の事だけでは誰も反對する譯には行くまい。唯花柳病の如きは、結婚以外の性交に原因することが多いので、結婚による性交だけを無病なものにしやうとする目的は、容易に達せられないであらう結婚制度が全然今日のそれと異るものとなり、且つ性交を職業とするやうな必要のない社會が出來上り、性交の自然淘汰が自ら病的のそれを無くすやうにならない限り、病源は根絶される氣使ひはない。社會制度が改まらない以上は、大抵の優生學的方法は、根本的の効果を現はす譯には行かぬ。拒婚同盟も社會的の地位を有つた有病の紳士を威嚇する位の所で滿足しなければなるまい。それよりも前に云つた婦人運動の拒婚的効果こそ將來の婦人問題の楔子でなければならない。それに影響されるものは、單に結婚制度の將來ばかりでなく、人口問題、食糧問題、産業問題、學術、教育、司法、行政……何一つとして、直接それに關聯して變化を來さないものはない。

優生學と劣種禁婚法

法學博士　穗積重遠

優生學的婚姻制限法を制定すべしとの議は、西洋諸國に於ては既に議論の時代を經過して實行の時代に進みつゝある、殊に優生學的人種改良運動の本家本元たる米國に於ては、劣種禁婚法を婚姻法に制定して居らない州は數州に止まると云ふ。米國が特に此運動が熾んであると云ふ重大な原因は、先づ米國人の愛國心に根源すると云つてよからう。特に米國に於てやかましく議論される社會問題中優生學的人種改良問題と牽聯するものが可なり多い。例へば禁酒運動の如き、濫酒家の結婚禁止の如き、白人と黒人との婚姻の優生學的否認の如き、悪質の移民を入國させぬ様に檢査監視する如き、嬰兒死亡率問題、不良少年

問題等人種改良に好個の材料を供する。又女權擴張論者は婦人保護の立場から惡疾男子に對する禁婚及離婚の要求を叫ぶ。尙ほ又刑事政策に於ては優生學的見解が重きを占め自由刑に犯罪人の生殖阻止の爲めと云ふ新意義が附加され、更に一步を進めては常習犯人に對して其生殖を不能ならしめる爲めの手術を行ふ制度を採用した州が既に十數州に上つてゐる。而して優生學的運動が最も直接に一目標としてあるのは、劣等の素質を持つた男女の結婚を法律を以て禁止しやうと云ふ。簡單に劣種禁婚法と名けやう。新婦人協會が提唱して居られる花柳病男子禁婚法も此劣種禁婚法の一部である。

米國の劣種禁婚法には、第一種、精神病者白痴等の心神喪失者心神耗弱者の禁婚を定めたるものと、第二種、眞の意味に於ける優生學的ものである。先づ優生學的禁婚法は如何なる種類の人の結婚を禁止するかと云ふことを各州の制定別に依つて示せば左の如くである。

癲癇病者十州　Connecticut, Indiana, Kansas, Michigan, Minnesota, New Jersey, North Dakota, Ohio, Utah, Washington

花柳病者五州　Michigan, North Dakota, Utah, Vermont, Washington

傳染病者一州　Indiana

濫酒家　三州　North Dakota, Ohio, Washington

被救貧者四州　Delaware, Indiana, maine, Vermont

重肺病者二州　North Dakota, Washington

常習犯罪人二州　North Dakota, Washington

米國花柳病者禁婚法は如何なる内容を有するか。一九〇六年五月二十五日ミシガン州法は、一八四六年の法律第六條を左の如く修正し、之に違反する者は嚴重な刑事制裁を科することを注目すべきである。

精神病者、白痴者、及び黴毒又は淋病に罹りて未だ全治せざるものは結婚を爲すことを得ず。

黴毒又は淋病に罹りて未だ全治せざるものが結婚するときは之を重罪とし、五百弗以上千弗以下の罰金又は五年以下の禁獄又は右の金及び禁獄の併科に處す。

中略

癲癇、白痴、精神病等の故を以て公立病院に收容せられたる者は其疾病が全治して子孫に影響を及ぼす虞なきに至りたる旨の二名の有資格醫師の證明書を郡吏員に提出するにあらざれば婚姻を爲すこと

を得ず。

通常人にして前項の條件を具へざる前項の患者と結婚し、又は其助言媒介周旋援助等を爲したる者は重罪とし一千弗以下の罰金又は一年以上五年以下の禁獄又は罰金及び禁獄の併科に處す。

一九一三年三月一日のノース、ダコタ州法は左の如くで、四十五歳以上の女子が結婚する場合には禁止のない點に優生學的精神が顯著である。

第一條、本州に於ては四十五歳未滿の女子四十五歳以上の女子と結婚する男子以外の凡ての男子にして左の一に當るものは相互に又は他の者と結婚するとを得ず。

一、遙酒家　二、常習的犯罪人　三、精神薄弱者　四、癲癇病者　五、白痴者　六、精神病者　七、曾て遺傳性精神病に罹りたる者　八、重大程度の肺結核患者　九、傳染性花柳病患者、

第六條、本法の規定に違反する者及本法所定の申立につき不信實なることを知りつゝ宣誓せる者は五十弗以上二百弗以下の罰金、又は三十日以下の禁獄又は罰金又は禁獄の併科に處す。

一九一七年三月十四日のバーモント州法は一九〇八年の花柳病防止に關する法律を左の如く修正した、違反者に對する刑罰のかなりに峻嚴な點と醫師藥劑師の方面から花柳病患者を探知して其取締に便せんとしてゐる。

第一條、醫師より黴毒又は痳病に罹りたることを告知せられたる者が有資格醫師の全治證明なくして結婚する時は五百弗以下の罰金又は二年以下の禁獄に處す。

第三條、醫師其他何人たるを問はず其診療せしゝ者處方を與へたる者又は藥劑を賣りたる者が黴毒又は痳病に罹れる者なるとを知らざる時は直に其者の氏名國籍人種婚姻本籍州住所年齡及男女の區別を州衞生局長に報告すべし、衞生局は報告一件につき二十五仙の報告料を給す、報告を怠れる者は二百弗以下の罰金に處す。

私は劣種禁婚法の非難及び無用論に就いて一々その當否を考へて見たい。

第一非難は優生學及び其基礎たる遺傳學說に對する異論であつて、遺傳はしかく正確に行はれるものでなく、隨つて優生學はその根據を有せぬ故、劣種禁婚法の如きも元來無用な制度であると非難する。

遺傳學說がどれ丈正確であるか、また優生學に如何なる根據があるかは、專門家でない私の確知し得ぬ所であるが、兎も角も遺傳學說は或程度までは證明されたものの樣に聞いてゐる。精神上肉體上凡ゆる特質が遺傳するものであるかどうかは疑問かも知れぬが、或種の疾病が遺傳し、殊に花柳病の害毒が子

に影響することは確からしい。而して優生學にも助長優生學と防止優生學の二種があり得るのであつて、前者は人類に應用する事は困難かも知れぬが、後者は相當に効果がありさうである。而して劣種禁婚法は花柳病等の遺傳性顯著なる特殊な疾病に就いての防止優生學的手段を採らうと云ふのであるから全然根據なしとは云ひ得ない。殊に花柳病男子と結婚する女子を保護するといふ方面に於いては、遺傳問題ではなくして傳染問題なのであるから、其根據が一層正確である。

尙人類を動物扱ひにして之に人爲淘汰を行はんとする事は人類の品位を害し其婚姻制度に對する侮辱であるとの非難があるこれは感情論の樣だが、優生學論者が或ひは陷るかも知れない危險を警戒したものとして傾聽すべきである。併し乍ら人類も亦動物には相違ないのであるから、動物としても觀察せらるべきで、唯だ動物としてのみ觀察してはならぬのである。而して優生學は動物學的基礎に立つてゐるが、之を人類の婚姻法に應用するのは一面社會學問題である故に優生學的禁婚法は如何にして社會の構成者たる人類と社會制度としての婚姻を完成すべきかの考案であつて決して人類及び婚姻に對する侮辱であつてはならぬ又しか取る可きではない。

第二非難は、第一の反對に遺傳及び適者生存の原理を前提としての非難である。即ち劣種は自滅すべきものである故に、其存續を防止するのは無用であると論ずる。

併しこれは亂暴な議論で劣種は必ず自滅するとは限らず、劣種が反つて繁殖し結局人類全體の自滅となる事を心配して其豫防策を講じるのである。或ひは劣種が自滅すべきものであるとすればその自滅の悲慘事を見ない樣に豫め劣種の發生を防止せんとするのである。

第三非難は尙早論で、これは論據がある。第一には遺傳學及び優生學がまだ未熟であるに直に人生に應用しやうとするのは尙早だと論ぜられる。

これは一理ある非難で、基礎學の研究を理論的にも實驗的にも又統計學的にも尙一層深からしめねばならぬことは勿論であるが、併し今日に於ては既に或る範圍には應用實行に著手しても良い程度に研究が進んでゐるのではあるまいか、殊に花柳病に就いてはさうらしく考へられる。

第二は國民がまだまだ此の問題に就いて充分に自覺してゐないのに禁止法を設けるのは尙早だと論ぜられる。

これは至極尤な議論であつて殊に私は法律一般の本質論とし

て斯う云ふ考へ方に與みしたい。然し法律が國民一般より先んじて國民の自覺を喚び起す作用をば考へねばならぬ。即ち法律には教育的作用があり得るのである。花柳病者禁婚法の如きは多少國民一般の種族衛生的自覺に先だつたものであつても、或る程度の教育的法律として必ずしも尚早とのみ云ふべきではあるまい。

第四非難は、結婚禁止は風俗を紊亂し私生子を增加する弊があるから有害だとの論である。

然し或る程度の弊害はあつても劣種即ち花柳病者等の結婚を許すことの有害は更に遙に大なのであるから禁止せざるを得ぬ

第五非難は、結婚禁止は人口減少を來たすといふ有害論である。

これは人口增加を甚だしく妨害する程度に於いて結婚禁止を行ふ譯ではなし又量のみを殖やして質が惡くなつては何もならぬことであるからこの有害論は餘り勢力はない。

第六非難は、結婚禁止は其人の健康上有害だとの論である。

果たして生理上さうであるか否かは私は知らぬが、健康上といふよりも寧ろ精神上の苦痛であることは疑ひない。ともかくも當人たちにとつては迷惑なことに相違ない。然し社會全體の利益のために相當の程度で個人の迷惑を無視するのは社會政策の常である。[redacted]得と云ひ得るかも知れない。

第七非難は、法律で禁止し得るのは法律上の婚姻のみで野合私生を禁ずることは出來ないから劣種遺傳防止の目的を達する事は不能である。

これは極めて有力な反對論であつて、我國に就いては、特に有力であり得る。併しこれは絕體不能でなく、寧ろ困難といふべき程度であらう。元來劣種禁婚法は優生學的人種改良政策の全部ではないのであつて、それのみを以て全目的を達しやうと云ふのではなく其政策の一手段として相當の効用があると云ふ主張に外ならぬ。而して法律には教育的効果もあり得るのであるから適法な婚姻として公許されてゐると否とは當事者の心理上にも影響し、即ち法律の禁止が當事者をして自省抑制せしめる効果も亦侮り難いものであるかも知れない。大威張りで結婚が出來ない丈でも確に利目があると云へる。

第八非難は、法律を制定するは容易だが勵行不能だとの論がある。

これは又頗る有力な反對論であるがこの非難は根本的に其制

度を非とするのではないのだから、何んとか穩當な勵行手段を工夫しさへすれば宜い譯である。元來西洋諸國では結婚式は教會で擧げるのが普通であるが、其前に市町村役場で結婚許可狀（英米ではこれを「ライセンス」と云ふ）を交附して貰ふ事を要し、それを持つて行かねば教會で式を擧げてくれない事になつてゐるのが通則である。そこで右のライセンス交附の際に取締を行ふ事が出來る。即ち交附者に對して健康狀態を訊問し、惡疾患者であるときはライセンスを交附しないのである。一九一三年二月十六日のオレゴン州法には全然健康診斷書制度の規定即ち「結婚許可狀交附の條件として醫師の證明書を提出せしむることに關する法律」と題して右の如く規定してゐる。

第一條、結婚許可狀ヲ申請スル場合ニハ男子ハ有資格醫師ガ十日以内ニ作成セル傳染性花柳病ノ虞ナキ旨ノ宣誓診斷書ヲ提出スベシ。

第三條、前條ノ診斷書ニ故意ニ虛僞ノ事實ヲ記載シタル醫師ハ、本州ニ於ケル開業許可ヲ取消サル。

第三條、醫師ハ本法所定ノ診察ニ對シテハ其請求ニヨリ無料ニテ診察シ且診斷書ヲ附與スベシ。

而して健康診斷書は「ノースダコタ」州でも「オレゴン」州でも男子のみから差し出させてゐる事は特に注目すべき點で今回の新婦人協會の請求も其方針であるとの事である。要するに兎も角も斯うした取締法があるのであるから、全然實行不能とは云ひ得まいと思はれる。

第九非難は自由人權論である。各個人は行爲の自由を有する結婚の自由も其重要な一項目である。然るにこれを制限するは人權蹂躪であると論ずる。

然し乍ら結婚の自由といふものも結局相對的の話で從來も既に近親相婚を禁じ年少者の結婚を禁ずる等幾多の法律上の制限が存するのである。個人を個人として尊重すべきは勿論であるが、個人が社會生活を爲さねばならぬものである以上共同生活の必要上行爲の自由を制限されるのは寧ろ當然であつて共同生活なるものが即ちさうであるといつても良ろしい。

第十非難は、法律限界論とする。即ち花柳病者等が結婚を遠慮すべきのは道德であるが、其道德を法律を以つて强制するは法律の限界からの不當な脫線であると論ずるのであつて、法律本質論、法律道德區別論から出發した頗る有力な反對論である

私はこの論旨に至極同感なので、殊に私は法律萬能の思想に反對したい、劣種禁婚法が法律萬能思想から出てゐるならば私は卒先してこれに反對したい。然し私は劣種禁婚法が斯る自負不遜の態度を執つてゐるとは思はない。道德殊に社會道德の一

部の實現を社會生活の規範たる法律が分擔助力するのは、必ずしも法律限界の超越と云ふべきではあるまい。要するに程度の問題方法の問題である。とにかく實行困難と云ふも絕對的の不能ではないのである。

本文は曾て博士の發表されたるものなるも最も重要なる參考資料たるを以て乞ふて抄載す。(記者)

民族衞生の理想と優生學的種族改善の理想

帝大助教授　暉峻義等

一

新婦人協會は、花柳病者結婚制限の議會運動から、更に進んで、拒婚同盟のために同志を糾合し、大いに性的道德の社會的確立に對する運動を起そうとしてゐると傳へられる。

自分は今茲に、新婦人協會の拒婚同盟運動を是非するためには、未だ何等の材料を有つてゐない。だが、新婦人協會が、花柳病者結婚制限の運動から、拒婚同盟運動へと進展していつた漸進的意志的過程に對しては、頗る同感と同情とを表明せざるを得ないものである。

自分はまた、拒婚同盟が、日本の現下の社會狀態、社會組織婦人の經濟的地步、乃至婦人の公的私的生活、或は目下の日本を支配する性的道德の現狀、即ち現下の日本婦人の領有するあらゆる社會的個人的關係から觀察して、それが果して、有力なる婦人運動として、婦人自己に對しては勿論、社會の男性に對し、將又社會全般に對して、いかほどの成果をさめ得るものであるか、どうかに就いても尙多少の疑點をさし挾まざるを得ないものであるが、而もなほ、新婦人協會が、花柳病者結婚制限の議會運動によつて表明した、希望と自信に滿ちた彼の『種族改善の優生學的理想』並に『婦人及び子供の權利の擁護』の

主張から觀、性的道德乃至結婚道德の最高理想に到達せんとする意志標示としてこれを觀察するときは、拒婚同盟も亦、目下の日本の社會に於ては誠に有意義な婦人運動であることを肯定しなければならない。

尙一言するが、社會に生起する、多くの社會運動、社會改善の事業が、まゝ、我が社會の現狀に立脚せず、現存の社會的事實を握ることを極めて薄弱であつて、甚だしく非科學的、非統計的に傾き易い傾向をもつてゐたにもかゝはらず、新婦人協會の今日までに經過して來た徑路は、可なり科學的順序によつてその進路を指示せられ、日本固有の社會的事象に論據を置いてかゝつたことは、誠に多とすべきことであつたと思ふ。

二

結婚制度並に結婚道德が、種族の將來、或は民族的消長と重大なる關係にあることは云ふまでもない。而して現下に於ける結婚制度の基礎は、その價値に於ても、その確實さから云つても、種々論議すべき幾多の缺點を有つてゐることは、旣に專門學者並に思想家達に指摘した所である。近時大いに社會の注目を引くに至つた離婚件數の增加に見るも、法制の不備及び近代我が社會に於ける經濟生活の不安定に因することは勿論これを肯定しなければならないであらうが、自分は更に續々たる離婚件數の中に包まるゝ民族衞生學的原因もこれを等閑視してはならないと思ふ。（次に述べる過渡期に於ける民族心の趨向並にそれに誘發する民族衞生の諸問題參照）

若し吾々にして、結婚制度の完全と、結婚道德の確立を期するならば、自分は先づ何をさておいても、民族衞生の理想と生學的種族改善の理想とは十分に尊重せられなくてはならないと思ふ。而して戀愛結婚との關係に至つては、尊敬すべき幾多の文献は旣に吾々に提示されてゐる。

結婚のよりよき基礎の確立によつて、玆に自然淘汰は民族の質の上に加へられる。而して遺傳學並に優生學社會的實行は民衆の間に發達し、力を得、數代、十數代の後、吾々は吾々の意志する種族改善の理想を現實し得るのである。

けれども、かゝる優生學的實行は、容易に簡單に行はれ得べくもない。社會の傳統的、習俗的、敎權的障碍は優生學的努力に對する過去百年間に於ける强敵であつた。吾々は隱忍持久、優生學的彼岸への過程をば希望と自信とによつて一歩〳〵たどらねばならない。

新婦人協會の諸氏が、世界に於ける今日までの種族改善の光輝ある、だが、幾多の困難を相伴へる歴史を繼承し、眞摯なる運動に手を下されたことはその理想的意義に於ては、誠に慶賀すべきである。

三

翻つて、我民族衛生の現狀は如何であるか、自分は前に結婚は民族衛生の其他に立つて行はれなければならないことを主張したが、我が民族は日本近代の社會組織の變遷に伴ふて非社會的要素を以て惡染されつゝあるのである。即ち自分は現下の我が民族衛生に關しては、甚だ憂慮すべき徴候を觀てゐるものである。彼の獨逸近代の史學者、ランプレヒト氏が、獨逸民族の過渡期を表象して、『あくせくと忙がはしく立ち廻り、個々の力を無暗に浪費するあの大都會生活が、漸次增大して行く、と云ふ結果現象を伴つた社會のと推移、交通の可能性を世界中に異常に擴張したところの工科的進步、この擴張に從つて起つた人間の學問全體の迅速な發達、これらの及びその他千の特徴が――最も近代的な發達の特徴が、無益の新刺激を生み、その新刺激からは個人も全體も脫れることが出來なかつた。で個人も、全體にしての民族心も、新らしい印象の高まりゆく强力に絕えず包まれてゐると氣付いた時、いづれも在來支持した自己統御を失つて、殆んど意志なしに新刺激に降參した。これは初めには、より高き意志契機の强い抵抗のもとに起つた。エネルギーは大部分新刺激を感受し增大することの中に消費せられ、從つて經濟生活に於ける力强い意欲や、より高い精神文化の領域での決然たる受容性やなどの上には、あまり用ひられなかつた。それ丈一層直觀や知力が忙しかつた。丁度この兩者が先づ新刺激の不斷の襲來を感受しなければならなかつたので、最初は情感緊張や絕間なき召集なくしては、それに打ち克ち得なかつたのである。これがあの一般的な神經亢奮の理由である。あの亢奮はこの時に始まつて直ちに種々の病理的現象に現はれ、――尤もその當時は神經衰弱は一の特殊な病氣の形式として發見せられたのであるが――そして神經系統の活力の一般的な強度の亢奮や、それに伴つて變化した心的習慣即ち感受鋭敏(易百性)の習慣やなどの內に、今日まで殘つてゐる。』(和辻氏譯歷史學百十九、百二十頁)と云つてゐるが、これは直ちに近代の日本の社會に適用出來ることであると思ふ。

かゝる社會組織の變化に伴ふ民族心の一般的急速なる推移とともに、こゝに民族の數と質との上に退化的現象が現れて來ることは否むことは出來ない。

我邦の生産率は既に減退期に入つてゐるのではないかと憂慮する統計學者もゐるのであるが、事實我が出産率は、明治四十一年乃至四十五年を最高として、以後の五年間漸次減少の傾向をもつてゐる。生産率減退の原因に關しては、種々の事項の相關せることは勿論であるが、就中、智的生活の向上と増殖能力との間には、重要なる關係の存在することを認めねばならない即ち獨身生活或は結婚難と、既婚者間の意識的制限による小供の減少とは、その主要原因と觀ねばならない。

今拒婚同盟運動を以て、日本婦人界に擡頭した、婦人の智的社會生活の向上の一片の標象として見るときは、これによつて吾々は、民族衛生の將來に就いて、いろ／＼の暗示を受けるやうに思ふ。特に注目すべきことは、かゝる智的社會生活に取り殘されたる、下層階級、比較的無智なる多數者の階級に於て、拒婚同盟の理想は行はれ難く、而も出生率はこの階級によつてより多く保維さるゝの傾向の生ずることである。而してこの事實はやがて、民族改善の理想と相反する幾多の事象を誘起しないであらうか。

四

過渡期の民族の質の上に於ける退化現象とも云ふべきは、既にランプレヒトも指摘せるが如く、民族心の『都會生活への渇仰』、『外的激刺に對するエネルギーの浪費』感受過敏、或は『享樂のあらゆる秘密な隅々、極端な終點、貪欲な放恣などに於ての競爭』運動や視覺や印象や音響などの實にゴタ／＼した不調和を特徴とする街頭生活』などによつて遠因する所の、肉體的精神的の退化を意識せずにはゐられない。

見よ、近代に於ける教養ある階級に於ける齒科的疾患、近視眼の増加、並に西歐諸國に於ける授乳能力の減退を、（我國ではこれに反して、乳授能力は比較的よく保たれてゐる。尚ブンチ氏によれば、授乳能力の障碍は、父親の酒精中毒が大いに關係すると云はれてゐる。）而も我邦に於ては、花柳病、結核は益々漫延の徴がある。

又精神的方面に於ては、又神經質的退化の徴候を認むることも出來る。即ち、大正八年度警視廳統計に於ける精神病者累年比較表は明かに精神病者の逐年の増加を示し、刑法犯は逐年増

加して止まず（大正八年度警視廳統計並、日本帝國第三十八年統計年鑑）。一種の精神的異常者とも目すべき、自殺者の數は、過去五年間に於て増加せざるも、著しき減退も見えず、而も機械的産業の勃興による、職業の機械化は勞働者より職業的趣味詩的生活を奪ひ去り勞働者をして、益々飲酒の風習に近づかしめ、アルコール中毒と、花柳病とによる、民族の質的悪染は益々甚だしからんとする趨勢を示してゐる。

これらはみな過渡期に於ける民族の心的特質から誘發される民族的退化の著しい現象である。

五

しかのみならず、日本近代の社會組織の核心をなしつゝあるインダストリアリズムは、あくまでも我が民族中の最强者を蠶食しつゝある。工場、鑛山の害悪は、生活能力、勞働能力の最高の保持者として屆備された。男女勞働者の肉體並に精神の上に不斷に働いて、民族の活働能力と生命との上に、否むべからざる破壊を行ひつゝあるのである。しかのみならず、前述する所の民族を悪染する非社會的或は遺傳的素因は、不斷に勞働階級の男女に浸入して、勞働者の世代的素質を低下しつゝあるのである。

勞働階級、無産者階級に於て如上の事實があるのみでない、他方智的偏重と、過度の亢奮と、感受性過敏によつてさいなまれつゝある、上流階級並び知識階級の多數者は、前述する通りその肉體的、精神的退化の現象を表はして來てゐることは、民族衛生上、實に看過すべからざる事實であると云はねばならない。

我が民族衛生の現狀には、上記の如く幾多の危險が包藏されてゐる。けれども吾々は、かくの如き種族中に現存する非文化的非社會的要素を以て、過渡時代に於ける自然的過程と認め、手をつかねて傍觀し、唯時の推移と、事象の經過とに委すべきであろうか、或は然らずして、最善の手段と努力とを以て、かくの如き非社會的、非文化的素因の除去につとむべきであろうか。

云ふまでもなく、かくの如き自然的過程をして、そが自然のまゝに推移せしむることは、餘りに酸苦に滿ちたる悲慘事である。

自分は短かい東京の細民長家生活に於て、正常に健全に成育すべき幼兒が、その善き環境と、善良なる保育者を有たないた

めに、如何に不健康に、病的發育を餘儀なくされつゝあるかを見た。自分は又、アルコール中毒の夫を有つた妻が、蒼白なる顏色と、痩せ衰へた身體を以て、而も將來發達の希望無き精神薄弱兒を成育しつゝあつた悲境なる事實を目撃した。而もかゝる社會的悲劇は、一細民屋に於ける些事にあらずして、都鄙を通じて、生起しつゝある社會的事實である。かゝる社會的事實に對して、何等の感激と同情とを持たないものは、それは生存の社會的自覺を責めざる人間であると云はねばならない。

六

非社會的、非文化的素因の除去に對する優性學的努力は、主として下層者に對して周到に致されねばならない。それは近代の優性學的社會改善の根本立脚點とならねばならない。優性學は下層階級を目標として着々實行に入らねばならない。

上流階級、智識階級は、婚姻に關しても、優越なる地歩を占めてゐる。彼等の有する智的、經濟的社會生活は、彼等に優性學的婚姻を可能ならしむるに十分なる地歩を附與してゐる。積極的優性學の上流社會に於ける意識は、現今に於ては、單に優性學の指示する原則に從つて配偶を撰擇する個人的義務の説明たるに過ぎないものである。

然るに下層階級に於てはこれと大いにその趣きを異にする。彼等は、彼等の經濟的、智的生活のいづれからも配偶撰擇に於いての何等の保證を得ることが出來ない。彼等は常に優性學的種族改善の圏外に立つことを餘儀なんされてゐるのである。

然るに、産兒制限が既に社會的意識となりつゝあるにも不拘無産階級に行はるべくして、事實は却つて一部享樂的生活者の心理に潜入し、つゝあることは、一種の社會的過誤であるが、花柳病者結婚制限も拒婚同盟も、かゝる優性學的改善の圏外に立てる下層階級、無産階級に對する、眞摯なる同情と理解を缺如するならば、それらの運動の意義は大いに減殺されるであらう。

自分は最後に一言する。民族の淨化、種類の改善をその理想としてもつてゐる社會的立法又は社會運動は必ずや、多數の下層階級に向つて懇切にその實行が認められなくてはならない。

中產階級婦人の利己的運動

――婦人の政治運動と新婦人協會の運動について――

伊藤野枝

一

最初にお斷りしておきたいのは、私が現在の婦人の政治運動に對して、男子のそれと同樣に、何の興味をも惹かれない者だと云ふことです。そしてそれは同時に、その運動の實際に對する私の無知の表明でもあります。

しかし私は、その無知に對しては何のひけ目も感じないのです。何故なら、その位の無知は、必要があれば、何時でも補ふことの出來るものだと信じてゐますから。――ほんの僅かな時日がありさへすれば、少しの努力で、直ぐに博識を誇り得るのですから――。それよりも、持ち合はしてゐなければならぬのは、其の運動の精神に對する理解なのです。其の理解だけは、十分に持ち合はせてゐるつもりです。そして其の理解が、とにかく此のあまり事實には興味のない運動に對する批評をでも爲せる譯なのです。

私は古くから婦人參政權運動と云へば、直ぐに、英米のある猛烈な示威運動や、宣傳を第一におもひます。そしてあの婦人達の團結や意氣には感心させられもし、羨ましくも思ひます。しかし、あれだけの努力が、實際に何處まで多くの婦人達の爲めに役立つるか、と考へる時に、馬鹿らしくなつて來ます。

勿論、私は參政權が婦人にとつて餘計なものだとも思はなければ、何の役にも立たないものだなどとも云ひません。多くの婦人達が參政權を得て、現在の政治に參與し、男子の勝手な爲政から婦人や子供の權利を獲得し、擁護するのは非常に結構な事だと思ひます。それによつて幸福を保證される婦人も子供もどれ程か知れないでせう。

しかし、考へなければならぬ事は、現在の政治が、民衆の

してどのやうな役まはりをつとめてゐるかと云ふ事です。吾々は何處まで政治を信頼していゝかと云ふ事です。婦人達が政治に參與したいと云ふ希望は、いろいろな立派な理想を實現さしたいと云ふ要求から來たものです。けれども現在の政治界は、そんな立派な理想や希望を容れ得るやうな餘地を持つてゐるでせうか？

現在では、社會的事業に第一に必要な事は云ふまでもなく、なるべく多數の人々に其の事業を認めさす事です。そして、それには最も多數の意志によつて形造られてゐると爲されてゐる政府に認めさすことが最上の方法とされてゐます。婦人達が、自分等の目的を果す爲めに、やはり其處に信頼してゆくのは極く自然な事です。

然し此の『多數』の意志によつてすべてを決定すると云ふ事が今日どの方面でもどれ程民衆の上に禍してゐるかは今此處に私が何にも云ふ必要のない程明かな事實なのです。『多數』は、『もつともよき內容』を供へた『多數』でなくてはならないと云ふのが本來の理想でした。けれども、今はたゞ『最も多くの人々の心に遍在する醜惡なもの』を集めた『多數』が事實に於いてその力をたくましくしてゐるのです。即ち今はすべての方面で、すべての事が、たゞ『數』の上でのみ決定されてゐるのです。內容の如何はまるで問題にはされないのです。政府に對する民衆の唯一の代表機關である議院に於いて民衆の代表者等はどんな事をしてゐるでせう。其處では、少數の眞面目な人々は常に發言の機會を奪はれ、冷笑され侮蔑され、壓迫されてゐます。彼等が眞面であり正直である程其處の空氣は彼等を窒息させます。其處では民衆の眞の要求は常に裏切られ、蹂み躙られ侮辱されて省みられる事はありません。そしてたゞ、人間の最も愚劣な心をのみ捕へ、利用する事の出來る、權力や財貨が常に勝利を占めてゐるのです。其處には權力や財貨がどれ程の猛威を持つてゐるかをよく知り、それを欲して止まぬ醜い人々のみが殘つて、民衆の利害を取り引きし續けてゐるのです。

二

吾々の立派な理想や要求を持つた婦人代表者は此の間にはいつて何々を取り引きする事が出來るでせう。彼女達け云でせう『私共はそんな耻づべき仲間は持ちません。私共は必ず彼等のその醜い行爲を止めさせずにはおきません』と。しかし、婦人達の理想が立派であればある程、男性の修練を積んだ醜惡が一層激しく彼女達の上に押しかぶさつて來はしないでせうか。

そして、殘念ながら彼女達の立派な理想や主張は『醜い多數』の力に壓迫され通さねばおきますまい。權力も財貨もまた婦人達の立派な要求に役立つにはあまりに遠い處にかたよりすぎてはゐないでせうか。

事實參政權運動に熱中してゐる各國の婦人達はあまりに呑氣すぎます。彼女達は參政權を得さへすれば、直ぐにも自分達の主張が通るよう考てゐるらしいのですが、それはあまりに無知無批判すぎます。彼女等は無條件に政府を信じ政治に賴つてゐます。

婦人參政權運動に對する私の最初の最も大きな侮蔑は、英米、殊に英國の運動者達が、あれ程猛烈に、政府がその暴虐と、權力の極端な力を示して彼女等の上に臨んだ時、彼女等はあれ程憤激し反抗してそれと戰ひながら、猶且つその權力を認め、政治に賴る事を斷念し得なかつた事です。

彼女等はその壓迫を、女權論者特有の見地から、女性の反抗に對する男性の因習的な壓迫だと解釋してゐるようですが、しかし此の事は彼女等が、自分等の主張に熱中し固執する結果として生じた、一般の事實に對する正しい觀察や批判を缺いてゐる事より他の何物も證據立てません。

彼女達は、男性が女性に對して與へる不平等暴虐は知りぬいてゐます。けれども、もつとそれより以上の暴虐を彼女等の親兄弟達が他の婦人の良人や親兄弟に與へてゐる事實についてはまるで知りもしなければ考へて見ようともしません。

此の無知無批判は、やがて彼女達の仕事の徒勞を語るものです。彼女等の要求が如何に淺薄皮相なものであるかゞ、直ぐに合點されるでせう。彼女等は參政權は得る事が出來るでせう。現に獲得してもゐます。けれども彼女等は、其處から何の滿足を買ひ得るでせう。僅かに婦人も『男子同樣に』政治に對して發言の機を與へられたと云ふ事のみです。そして時がたつ程、彼女等は彼女等がもし本當に、婦人や子供の爲めに何かを爲さうとするならば、參政權の行使よりは他の方法によらねばならぬ事を感づくに違ひないのです。たゞ『男子同樣に』と云ふ事が立派な一つの滿足である淺薄な女權論者は論外です。しかし、參政權によつて、或る主張を實現させようと云ふ人々にとつては、それは空しい努力であつたと云ふ事が出來ます。彼女等が愚劣な政治にたゞ盲目的に依賴したことがある限りは。

三

最近日本の婦人界の一勢力になつてゐる『新婦人協會』に對し

ても、私は彼の人々の政治に對する盲目的態度を第一にあきたりなく思ひます。

新婦人協會の綱領、及びその事業に對して私は反對する何物も持ちません。それは私達婦人にとつては極めて必要な、ありがたい事のみです。しかし、彼の人達の實際運動に對しては、私は何の敬意も拂ひ得ません。

協會の規約によりますと、其の事業は實に廣汎なものです。しかし、今まで表面に現はれた處では、『婦人に不利なる諸法制の改廢』と云ふのにあてはまる治安警察法の或る部分の削除と『母性保護の要求』にあてはまるべき花柳病に對する或る制限に關する請願運動等と思ひます。

此の請願運動は、必然に參政權要求運動を引き起さねばなりますまいが、まだ其處までは行かないでゐるようです。參政權を得て議場で堂々と其の主張を通さうとする處まで漕ぎつけた處で、到底問題にはされようにもない處で僅かな同情にすがつての請願運動は先づ第一に甚だ心細い次第です。

しかし、若し此の請願運動が成功して、婦人に政治的自由が授り、また婦人の健康が保證されたとしても、何處までそれが活用されるかです。政治的自由を獲得してそれを利用するのはどんな階級に屬する婦人でせう。また結婚に際して、その健康を保證される事を要求する餘裕を持つてゐるのはどう云ふ婦人達でせう。

吾々婦人が現在決して忘れてはならない事は、どれ程多くの婦人達が、飢餓に迫られてゐるかと云ふ事です。どれ程多くの子供が寒さにふるえてゐるかと云ふ事です。そしてその婦人や子供の良人や父達が、どれ程苛酷な扱ひをその雇主等に受けてゐるかと云ふ事です。

貧しい多くの娘達は、滿足に遊ぶ時間も與へられずに。其の兩親の手からその使役者の手に渡されます。彼女達には、たゞ夜も晝も苛らい勞働が待つてゐるばかりです。そしてその報酬はたゞ不味い僅かな食物のみです。彼女達は決して利口になる事は許されません。彼女達の精力はみんな雇主達を肥やすのみにしぼられるのです。

そして、彼女等は疲れます。彼女は大きくなるにしたがつてたゞ勞働のつらさから、その賃銀奴隷の不自由な境遇から、一刻も早く救ひ出される日を熱望してゐます。その救ひ主は然し彼女達の良人となる相手か、さうでなければ、彼女を一層ひどい地獄に誘ひ込む惡魔の手ばかりです。彼女達は考へたくても

母性の保護など考へる餘裕はもてません。それが何んであらうと彼女の前にさし出された第一の手に大抵はすがりつくのです。それを、無知無自覺と教養ある婦人達は云ひます。それを自覺さすのが自分等の仕事だとも云ひます。

けれど、實際には、彼女達は彼女の自覺が拂ひ退けた惡魔が可哀相な姉妹達を、どんなに苦しめるかも知れないなどとは考へても見ないのです。自分達の傍から拂ひ退けさへすれば惡魔は何處にも居所がないと考へる程のお人よしなのです。彼女達は、可哀相な姉妹達が何に一番苦しめられてゐるかには一向お氣がつかないのです。

お高慢な知識あり教養ある婦人達よ！　どれ程多くの婦人が何よりも先づあなた方と同じ餘裕を持ちたがつてゐる事でせう。あなた方のやうに、小綺麗な家に住み、あなた方のたべものと同じように滋味に富んだものをたべ、あなた方のやうに着心地のよい着物を着たい。暖かい火にもあたりたい。心のどかに音樂も聞きたいし、ゆつくりと本もよみたい。いろんな事を知りたい。と思ふ姉妹達がどれ程あるでせう。

あなた方の子供達のやうに、自分の子供にも暖い寢床、充分なお乳、甘いお菓子、きれいな着物、可愛らしい裝身具を欲しいと思ふ母親がどの位あるでせう。彼女達はみんな、あなた方のいろいろなお心づくしの權利や利益を得る前に先づそれを欲しがつてゐるのです。私はあなた方の大きな事業がどれ程盛大に發展しようとも、それで、すべての婦人や母親や子供が、そのお蔭で救はれるとは買ひ被り得ないのです。

四

新婦人協會の運動は、私は徹頭徹尾中產階級婦人の利己的運動だと斷言して憚らないのです。

彼女達は、自分自身の生活のみに省みて、其處を根據に其の權利、利益を主張します。しかも彼女は其の自分等の生活が特殊な階級を形づくつてゐる事には少しもお氣がつかないのです。

それは丁度、政治と云ふものが、ある少部分の權力保護、利益壟斷の機關である事に少しも氣がつかず、自分等の眞正直な要求を、無條件に容れられもし、また政府者の力はその自分等の主張を助けて充分にその實を擧げさせてくれるものと信じてゐるのと同じ程度のお目出度さです。それは事實において、彼女達の社會的經驗の淺薄を語るものです。且つその僅かな周圍より他に眼を轉ずる事の出來ない證據です。

彼女達の見解の狹さは又、現在の政府と民衆とが如何んな關係にあるか、などと云ふ事には全く考慮を拂つてゐないらしく思ひます。彼女達はたゞ自己の立場にのみ汲々としてゐて、現在の社會的事態などには目を配るひまもないやうに。政府は何をし、民衆は何を欲してゐるか。それは、社會的事業にたづさはる人々の第一に見きはめなければならぬ事ではないでせうか

私は協會が、その社會狀態に關して全く無關心な立場にあり且つそれを超越した仕事をしてゐるものとは如何にしても見ることが出來ません。そして、私はこれをも、協會の運動を促すものが、眞に人類を愛する博大な心ではなく、彼女達の利己的な心である事を證據立てるものと考へます。即ち彼女等の其の社會的事實に對する無關心はたゞ利己的な立場に基く無頓着だと考へる事より出來ないのです。

斯う見て來ますと、彼女達の仕事が如何に現在の彼女達のみの生活を保護するものであるかが一層はつきり解つて來ます。即ち彼女達の仕事として必要な事は、彼女の今日までの生活に於いて不都合な自由と感じた事のみです自分達の子供に對する不安を具體的に示したものばかりです。そして彼女の知識がみんなそれを、人類の幸福に貢獻する貴い仕事だと敎へました。そしてその知識、その學問はみんな、やはり彼女と同じ階級に同じ生活を營んだ人の考へた知識であり學問です。そして彼女はすべて自分のやり方考へ方でもつて、みぢめな無知な人々を導いてゆく事が出來るのだと信じてゐます。

協會では、婦人勞働者の爲めのいろんな計畫をも持つてゐるようです。けれども彼の人々の中產階級的知識階級的の理知や感情をもつての、指導や敎育が果して何を產み出すでせうか。

私共の前には歐洲各國に於ける此の種の中產階級婦人の援助の爲めに勞働組合としての完全な發達を阻止され、その眞の利益から遠ざけられてゐる例がいくつもあります。中產階級知識階級婦人が婦人勞働者に臨むに當つて第一に恥づべき事は、彼女達の優越に對する婦人勞働者達の卑下を當然の事として受とる事です。然るに彼女達はその優越を持つて勞働者を『敎化』し指導して、婦人勞働者をして一層卑屈にしてしまひます。

若しも彼女達が本當に人類に對する愛の心から、女性全體、子供全體の幸福をねがふものであるならば、どうして現在の多くの姉妹の不幸について考へずにゐられるでせう。又どうして寒さに凍え飢に迫まられてゐる多くの子供達を他所に自分の子供に對するいやが上にもの欲望をばかり考へてゐられるでせう

現在の社會の狀態は、殊に賢い心の持主であるものゝ眼には堪えがたい重荷でなくてはなりません。まづ、此の社會狀態を如何にするかゞ男にも女にも第一の問題でなくてはなりません。私は私共の姉妹達が他の不幸な大勢の姉妹達に對して無關心だなどと決して考へたくはありません。けれども、その人達の望んでゐる、すべての女性、すべての子供達の上に、その人達の運動の結果が平等にゆきわたるには、それを受け容れる生活狀態もまた平等でなければならないのです。それを、あの人達はまるで考へてゐないように思はれます。若しも彼の人達がその事實だと氣づくならば、彼の人達の運動はもつとずつと違つたものになつて來なければならぬ筈です。彼の人達は其の時にはじめて、政治が一般民衆の上にどんな役まはりをつとめてゐるかを知る事が出來るでせう。そして又、その政治に賴る事よりも、もつと賢い、もつと正しい、もつと感激の深い、人間の持つてゐる立派な自由な意志を結びあつて、人間全體の正しい目的に向つて必要な、どんな事でもが完全に遂行されるに違いない事がはじめて解るでせう。

五

しかし、私はそれを新婦人協會の人々に強ひようとは決して思ひません。またあの人達の利己的な運動が無用だなどとも猶更思ひません。私は寧ろあの人達が自分達の立場を了解して一層利己的に固められた運動をされる事を希望するのです。私が協會の運動に希望する事が許されるならたゞ一つ彼の人達の事業の豫定の中から、婦人勞働者に對する『敎化』の仕事を放棄されん事を望むのみです。しかし、それも、決して重大な事ではありません。

彼の人達は中產階級の婦人としてあくまでその周圍と戰つてゆかれるがいゝ。そして不幸な勞働階級の婦人達は――彼女達は彼女の良人や子供等と協力して、もつと切實にかれ等に迫つてゐる悲壯な戰ひに參加するでせう。

そして、私は此處でもまた、眞に賢い心の持主であつたロシアの婦人達の事業をおもひます。彼女達は必要に應じて、どのやうな困難にでも突進する勇氣を持つてゐました。大學の開放を要求して拒絕されれば直ぐに他の方法で此の要求を貫徹したと同樣な結果を獲得しました。貧しい姉妹の爲めには、悉ゆる方法をつくして彼女の勉强を助けます。彼女達は眞に單純な賢い心をもつてお互ひに出來るだけの歡びをわかち合ひました。その心はまた一切の不正を決して許しませんでした。彼女達は

貫に利己的な安易を選みました。彼女達は人民の無知な、惡政る暴虐を許してゐるのを見ると、直ぐに其の暴虐に反抗して、人民の無知な心を叩いてまはりました。そして彼女達は一身の榮達も安樂もすべてのものを放棄して不正なものに向つては男子と肩をすり合はせて勇敢に戰ひました。

彼女等は知識も教養も持つてゐました。しかし、それによつて自分をかばはふとする利己心を缺いてゐました。彼女達は他方にどれ程死者ぐるいの鬪爭が續けられてゐようとも、どれ程みぢめな姉妹達が苦しんでゐようとも、教養あり、自覺ある婦人として、その天性の保護を完全にする落ちついたつゝしみを持つ事が出來ませんでした。此の利己心の缺乏は遂に多くの婦人達をして自ら雪の曠野にその死屍をうづめさせました。けれども今彼女達の上にどれ程暖い多くの追慕の心が拂はれてゐるでせう。彼女達が如何にその兄弟姉妹を愛したかゞ今は一層はつきり示されてゐます。

しかし、吾々の周圍の婦人達にはこんな話は無用です。彼の人達はあくまであの人達の事業が如何に偉大な立派な仕事であるかに感激しながらお進みになるがいゝのです。

彼の人達の事業には、それが大して政府の邪魔にならぬ限りは、その協力の保護も加はるでせうし、必要な助力が充分に得られるでせう。彼の人達が今の様にして、危險な社會狀態に一切無關心に、たゞ女らしい必要な円滑な運動を進めて行きさへすれば、有力な援助の下に、運動は着々其の効果を納めて行くでせう

しかし、私のおせつかいな心配は、現在ますます險惡になつて來つゝある空模様が恐ろしい洪水にまで進みはしないだらうか、と云ふ事です。其時にも彼の人達はやはり取りすまして其洪水に無頓着でゐられるかどうか考へずにはゐられないのです。

附記――私は此の一文を書くに當つていくつもの不自由を感じました。その不自由の內、最も私の筆を澁らせたのは、新婦人協會の重な人々の思想的な基礎についての批評を除外した事です。私は以前から表面に表はれた運動の批評よりは、その思想的方面に對する批評をして見ようと企てゝゐるのです。そして、其女性偏重及び教育過信に對しては充分な意見を發表して見たい希望で、其腹案も半以上は出來てゐるのです。

で、此度改造社からのお話で此の一文を書くにあたつてもそれが始終邪魔をしてどうしてもうまくまとめることが出來ないのです。それで非常に不滿足なものではありますが、僅かな時日しか與へられてゐませんので稿を新にし直すことも出來ません。それで申譯けのない次第ながら此の儘發表します。そして他日、前述のものが書けました際にまた併せて讀んで頂きたいと思ひます。

――一九二一、一、一〇――

婦人の反感と遊戯的男女關係

醫學博士　羽太銳治

結婚制限の請願

新らしい婦人達が、花柳病者に對する結婚制限並びに離婚請求に關する法律制定の請願を、議會に持出さうとする噂は豫ねてから聞いて居る。

その請願事項の主要なる點は、結婚せんとする男子は、有資格醫師が一週間内に作成せる傳染性花柳病患者にあらざる旨の診斷書を、市町村長に提出して婚姻許可證を受けねばならぬこと。婚姻許可證を持たざる男子は、婚姻をなし、又は事實上の夫婦關係を結ぶことを得ざること。結婚後當事者の一方が花柳病に罹れる場合には、他の一方は全治に至る迄の別居、又は離婚を請求することを得ること、當事者の一方が他の一方に花柳病々毒を感染せしめたる場合には、離婚の後被害者は加害者に對し、全治までの治療費と相當の慰藉料とを請求することを得ることなどであるが、此の結婚制限法を請願するの外、全國的な拒婚同盟を組織しやうと圖敦いて居る。日本の新らしい女も、斯うした實際運動を開始するに至つたが、女がかうした運動を起すのは何が故であるか。

壓迫されたる女

カーペンターは『永い間女は男に虐げられて來た。ずつと昔に溯つて、原始社會の狀態を考へれば、男女の間は平等なもので、女も亦男と同等の力を有して居たが、今日になつては、女は男の爲めに壓迫され、奴隷視されて居る狀況に墜されて來た。私有財産制度の貪慾が吾々の先祖を墮落せしめ、それが總べての人類の間に傳播し、男はすべてのものを支配し、女を自己の所有とし奴隷視するに至つたのである。故に男が權勢を揮ふに至つて以來、女は男の爲めに生活し、男の爲めに働き、こ

れが益々顯著になつて、女は家庭の中に押込められ、獨り苦しい仕事に從ふやうに囚へられた。』と云つて居る。

　此の樣に女は永い間、男から壓迫され、是れに屈服して居た。併し永い間壓迫され、屈服して來た女も遂に永い眠から醒めた。そして自分と云ふものゝ存在を知つて、自ら一個の人格を有する人間と考へるやうになつた。

婦人運動の發端

　十八世紀の末、佛蘭西に革命の火があがつて、自由民權の思想が唱へられ、政治上にも、社會上にも、思想上にも、個人を一切の束縛から解放させようとした。

　併し佛蘭西の革命は男子の權利を張らうとしたもので、女の權利には及ばなかつた。けれども斯うして刺戟された自由の思想は、遂に婦人の頭腦をも刺戟せずには居なかつた。乃ちグージは、婦人の爲めに「女權宣言」なるものを發表し、『國民は男子と女子との共同生存に依つて形成され、それを基礎として國家が存在して居る。立法は一般意志の發表であるが故に、女子も男子と同樣に自分又はその選擧した代表者を通じて、立法に與かる權利がある。』ことを叫んだ。

　グージは斷頭臺の露と消えたが、其後佛蘭西に於いて幾多の革命的婦人團體が現はれ、英國にも亦婦人運動が起つた。就中クラフトは近世婦人運動史上見逃すべからざる女傑である。クラフトは、『女子も亦人である以上　男子の生活と女子の生活との上に、區別を立てる必要を見出す事は出來ない。道徳にも、教育にも、職業にも、政治にも、男子と女子とに依つて區別を立つる事は、全く間違つて居る。女子は男子の獨立せる伴侶として、獨立して生活すべきものである。女子が結婚を目的として、男子の前に屈服すべきやうに教ふる教育は根本から誤つたものである。』と痛論した。

　此のクラフトの叫びは、當時の社會に餘程深い刺戟と影響とを與へた。これに次いで婦人運動の爲めに、身を挺して起つたのは、經濟學者ミルである。

　ミルは『婦人は、感情的であるから、家庭の事位は處理されるが、國家の事業には適しないと言はれて居る。婦人が斯る風になつたのは、昔から身を鍛へることを許されずに居たことが、遺傳となつて附き纏つて居る結果であつて、若し男子と同樣に其の方面の教養を行つたならば、男子と同じく社會的の仕事にも適するであらう』と女性を辯護し、且つ『婦人の地位を、

正義によつて定めよ。婦人は結婚と、職業と、政治との上に男子と同等の權利を得べきものである。』と力說した。

斯樣に、永く眠つて居た婦人が初めて眼醒めて、自分と云ふもの丶存在を知り、自分と云ふもの丶力を感じ、その力を自由に揮はうとするに至つた以上、その自由を束縛し、壓迫して來たものに對して解放を迫らなければならないのは、自然の勢であつて、そこに眼醒めた女即ち、新らしい女の男子に對する挑戰、爭鬪が起るのである。

婦人運動と法律

男子專制の永い間の法律は、女をその所有となして居た。古代の希臘の法律に據るに、女は男性に服從すべきものと規定されてある。羅馬法に於ても、良人は自己の權內に於て、妻に對する生殺與奪の自由を持つて居た。彼のナポレオン法典の如きにも、女は男の所有であることを明記してあつた。

彼のクラフトは『妻に對する良人の神權と、良人に對する妻の絕對服從とは共に天意に反するものである。男女は社會的地位に於ても、道德に於ても何等の差違あるべからざるものではない。』と叫んだ。この革命的婦人論者は不幸にして斷頭台に上せられた事は、前にも述べたが、其の後に於ける婦人論者の實際の要求として現はれたものが法律の改正である。現にその運動の爲めに改正された法律も少なくはない。彼のナポレオン法典に改正を加へることの出來たのもその結果である。

日本の新らしい女も、今日では只議論の上ばかりではなく、女の正當なる權利を主張し、そして女自身と子供とを保護する爲めに、法律の改正制定を請願するなどの手段を實行する樣になつて來た。即ち實際運動が行はれて來たのであるが、これと同時に男に對する挑戰が、愈々明かなものになつて來た。

結婚と花柳病

女が自己の權利を主張するに至つたのは、前述の樣に其の永い眠りから醒めたからであるが。それに隨伴して女は男の性的玩弄物でない事を自覺するに至つた。それで女の立場から、彼等自身と其の子供を保護する爲めに、花柳病者との結婚制限の必要を叫ぶのは、それは誠に至當なことである。

『佛蘭西のショウ』と呼ばれて居りブリュワの劇『壞れた品』は、花柳病が醸し出す家庭の悲劇を描いたもので、今日結婚制限法の必要を叫ぶ婦人達に、最も有力なる要書を與へて居る。

『壞れた品』の筋を云へば、ジョルヂ・デュポンと云ふ金満家の息子が、代議士として名望ある叔父の娘、すなはち自分の従妹と結婚の約束をして、ある醫者に自分の健康診斷を乞ふた。醫者は、黴毒に罹つて居るから、數年間結婚をしてはならないと彼れに忠告したが、彼は世間の手前、結婚を延ばす譯にもゆかず。遂に醫者の忠告を用ゐずに結婚した。暫らくは愉快な新婚の生活が營まれた。

しかし、間もなく新婚の樂しい夢の醒める時が來た。生れた愛兒は先天黴毒といふ怖ろし疾患に犯されて、乳母までが其の病毒の感染を恐れるあまり解傭を迫つた。妻は初めて良人の秘密を知つて、一切のことを父の代議士に打ち明ける。父なる代議士は非常に怒り、直ちに法律上の離婚の手續きをしやうと、先きにデュポンを診察した醫者に、彼の男の花柳病であることの証明書を貰ひたいと頼む。醫者はそれを拒んで、更に『私が貴方の御要求を入れないのは、寧ろ貴方のお娘さん（デュポンの妻）の爲めを思ふからです。貴方はお婿さんが、黴毒にかゝつて居るのを法廷に持ち出すために、私に證明書を書かせようどしておいでゞすが、そんなことをなさるのは、貴方のお娘さんが、黴毒に感染して居るといふことを、公けに暴露なさるやうなものでありませんか？、公にさういふことを暴露なさつたら、どうしてお娘さんが二度目の御亭主をお取りになることが出來ませう。お娘さんはもう身體が汚れて居るのです。裁判事件になされば、却つてその汚れを公けに證明するやうなものではありませんか？』と、いろ／＼に宥めるが、激然して居る父親は、容易に醫者の言に耳を借さず、『もしも法律で離婚が出來ないといふならば、俺れは法律の力は借りぬ。自分自らの手で、自分の生命を賭してもきつと離婚させて見せる』と息卷いて、デュポンを殺して復讐をして見せると亢奮する。醫者はそんなことは極めて馬鹿げたことであると說き、『今更、離婚の手續をするの、法律に訴へるの、生命を賭しても離婚させるなどと騒いで居る際に、婿さんの疾病を癒すやうにするのが、第一緊要事である。それからまた、將來、結婚生活に於ける斯ういふ悲劇事を救濟する方法としては、花柳病の害悪を一般公衆に自覺させて、『この病氣に罹つて居るものは、互ひに結婚しないといふ習慣を世間一般につくらせることが、第一の緊要事である。兎にも角にも、この場合、離婚問題を持ち出すのは、決して策の得たものでない』といふ。父親もだん／＼激怒の鎭まるに従つて、醫者の穩健な說に贊成し、二人は握手して別れ

るところで、此の劇は終つて居る。

婦人の反感的態度

概括して婦人運動といふ中には、參政權問題、職業問題、教育問題、母性保護問題などが含まれて居るが、其の基礎となつて居るのは、男女對等觀である。

日本の新らしい女も、今日に於ては、婦人にも選擧權を與へよと、衆議院議員選擧法改正の必要を叫んで居る。又婦人であると云ふ理由から、政治結社に加入する自由、及び政談集會に會同し、若しくは其の發起人となる自由を束縛するのは不合理であると、治安警察法第五條修正の必要をも叫び、それから先きから述べて居る樣に、婦人の立場から、家庭と妻たる婦人と子供とを花柳病の害毒から保護し、併せて種族の向上を計るといふ目的から、花柳病男子の結婚制限法制定の必要などを叫んで居る。そして此の三つのものを四十四議會へ請願する準備をして居る。

一千九百〇四年、伯林に開かれた萬國婦人參政權大會に於て『選擧權は生命及び自由に關して、人格的權利を主張する唯一の手段である故に、憲法政治の行はるゝ國にあつては、婦人も亦總ての政治上の特權を附與せらるべきである』と決議され、その後も各國の首府で、この會が開かれ、逐次其の氣勢を擧げ北米合衆國の約半數の各州、濠洲の一部、那威、丁抹又政も物議を釀した英國に於ても、一定の資格ある婦人は選擧權をもつに至つた今日、日本に於ても女の側から、衆議院議員選擧法の改正、治警第五條の改正を叫ばるゝのは、强ち無理とは云はれないことであるが、併しそれは果して實行して差支へないかどうかゞ問題であると同樣に、花柳病男子の結婚制限法の制定も、そういふことは無理ならぬ言分ではあるが云ふべくして行ひ難きものである。

殊にその拒婚同盟と云ふものは、永い間女は男の玩弄物とされ、男が性的生活に放縱であつたのに對する、醒めたる女の反感から來つた、一つの挑戰であると見られる。

遊戲的なる男女關係

前に述べたカーペンターは、更に言葉を續けて、『女はその身體も心も男の爲めに束縛されて、性の外には何物も持たぬかの如く考へられ、その感情も男に十分に服從されて來た、男のこのやうな壓迫に對して、女は女として自ら脫却する自由を得る

か、又は中性化するかの一つを擇ぶより途はない。そして多くの女は、堪え難い不平の仕事の裡に悲しみ、狹い範圍の家庭の事に心を奪はれ、唯其の空虛の頭を滿す爲めに、流行のつまらない事に身をやつし、良人の氣に入るやうにするの外、其の本來の眞の衝動も、品性も、才能も、智力もすべて跡形なく碎かれ盡して、頭腦は萎縮し、遂に虛僞と無智に化して了つた。』といふて居る。

文明人の間にも既にさうであるが、此の狀態が最も極端に現はれて居るのは、濠洲亞弗利加乃至亞米利加等の土人間に於ける男女關係である。それ等の土人間に於いて、男が女を得るには、其の父母から之れを買收することもあるし、或ひは他部落から、掠奪して來ることもあるが、孰れにしても男子は、女子に對して、生殺與奪の權を有し、少しでも其の意に滿たぬことがあると、忽ち之れを打擲し、甚だしきは、其の生命を絕つに至ることとすらあるので、妻妾等は、其の良人をば鬼神の如く恐れて居る。

ラポクは『此れ等の蠻人は、結婚するとも、夫婦の間に、眞の愛情なく、且つ男子は、甚だ短氣で、瑣細の過失があつても其の婦を打擲し、之れが爲めには婦は傷つき、或は死することがあつても、彼等は恬然として、毫も意に介することはない。試みに彼等に向つて、其の妻を娶るのは、何の爲めであるかと問ふならば、唯だ情を滿たし、且つ食餌、薪水の勞を執らしむるが爲めに過ぎないと云ふであらう』と云ふて居る。

斯う云ふ樣な男女關係は、女を玩弄物となし、そして性的嗜好を滿たして居るところの遊戯作用に過ぎない。昔時大名、若くは旗本などが、自己の抱へた妾に對して、瑣細な過失の爲めに打擲したり、傷けたりしたのは、野蠻人の酋長の女に對する行爲と髣髴たるもので、彼等が其の妾や、侍女などが、不義することでもあると、忽ち御家の法度を楯に、苛酷な刑罰を加へたのは、女を自己の所有する物品と同一視したからで、表面人道を正す爲めといふけれども、內面には、自己の所有する異性の、愛他心を制せんとした、嫉妬心からであつて、是れを見ても、女は男の玩弄に甘んぜねばならぬやうに運命づけられて來たことがわかり、又男の性的生活の上に放縱になつて來たこともわかる。

憎惡すべき手段

女も亦人間としての自由を得る爲に、男と同じ樣な權利を主

張することは、それは當然である。併し女が男と同じやうな權利を得ると云ふことは、女が女の美德である優淑や、女としての職分を放擲して、男と同一になることでは決してない。婦人が選擧法の改正や、治警第五條の改正を運動することは、その優淑を傷け又はその職分を放擲するものではない。唯其の手段と方法とであつて、英國の婦人參政權論者のやうな、狂暴の態度を執ることは元よりよくない。

女の側から叫ばれた、選擧法改正や、治警第五條の改正やは女が人間としての正當の權利を得やうとする叫びであつて、結婚制限法改正や拒婚同盟の叫びは、女が性的玩弄物とされて居た時代から蟠つた害惡を矯めやうとするの叫びで、如何にもけなげな事である。

けれども、自覺して居るものは、獨り女ばかりではない。男も矢張り自覺して居る。從來に於て男が性的生活に放縦であつたからとて、將來いつまでも昔と同じものではない。

結婚するに、男の方のみの健康證明書（花柳者患者にあらざる）が必要であつて、女に於ける健康證明書が必要なものでないと云ふことは、あまり男の人格を無視したことである。假令統計の上に於て男の花柳病患者が多いにしても、總ての男に健康證明書を提出しなければ、結婚させられぬと云ふのは、從來の男が女を壓迫したのと反對に、女が男を壓迫しやうと試みるものである。

英國の婦人參政權論者が、其の目的を達しやうとして、狂暴な手段を執れる程ではなくとも、女が斯うして、男の人格を無視し、男を壓迫しやうと試むる、彼等の手段に對して憎惡の感を持たしむるもので、男女共一般に花柳病の害を自覺させ、此の病氣に罹つて居るものは結婚しない習慣をつくらせるやうな性慾教育を施すべき他の方法を採ることを必要とする。

悲慘なる滑稽

菊地寛

婦人參政權そのものに就いては、自分は大賛成である。婦人の機能を家庭丈に切り縮め、男子本位の生活に奉仕せしめるこ

とは、婦人に對する壓制であることを、自分は認める。が、婦人參政權を、現在の政治組織の下に考へるとき、自分はそれが、空虛な、千里も向ふの對岸の火事のやうな氣がして仕方がない。婦人參政！、それも大に考へてもいゝ、が、それよりも、自分としては、自分の如き心ひそかに最高の智識階級を以て自任して居る男子が、何故に參政權を與へられて居ないかを、もつと痛切に考へさるを得ないのである。改造記者から婦人參政權を論ぜよと命ぜられ居る男子たる自分が、婦人同様に、現代の政治組織から扱はれて居ると云ふことが、何と云ふ悲慘な滑稽であらう。

婦人參政甚だよろし。が、自分の如き、社會の行末を國家の運命を、現代の職業政治家以上に、明確な良心を以て、憂慮して居る男子が悉く參政權を獲得したる後、初て婦人參政を論ずるのも、少しも遲くはないだらうと思ふ。

花柳病に對する結婚制限法と拒婚同盟に就いて

平塚らいてう

花柳病者に對する結婚制限並に結婚請求に關する請願書

一、花柳病者に對し、左の第一條より第十條までの意味の條項を含む花柳病者結婚制限法を單獨法として制定する事。

一、民法親族篇第三章婚姻第四節離婚の規定中の適當なる個所へ左の第十一條及第十二條の意味の條項を追加する事。右謹んで請願いたします。

第一條　婚姻をなさんとする男子は婚姻許可證の交付を住所地の市町村長に申請すべし。事實上の夫婦關係を結ばんとする場合亦同じ

第二條　市町村長は有資格醫師が一週間内に作成せる傳染性花柳病(黴毒、淋病、軟性下疳を含む)患者にあらざる旨の診斷書を提出

せる男子に對し婚姻許可證を交付すべし。

第三條　市町村長は貧困者に對してはその請求により市町村長の指定せる醫師をして無料にて診察し且つ診斷書を附與せしむべし。

第四條　婚姻許可證を持たざる男子は婚姻を爲し、又は事實上の夫婦關係を結ぶことを得ず。

第五條　女子は婚姻許可證を持たざる男子と婚姻を爲し、又は事實上の夫婦關係を結ぶことを得ず。

第六條　第四條に違反せる男子は三百圓以下の罰金に處す。第五條に違反せる女子亦同じ。

第七條　虛僞の診斷書を提出して交付せられたる婚姻許可證によつて婚姻を爲し、又は事實上の夫婦關係を結べる男子は五百圓以下の罰金に處す。

第八條　本法の規定に違反して爲したる婚姻は之を取消すことを得。

第九條　婚姻を爲さんとする女子は其相手方たる男子より傳染性花柳患者にあらざる旨の有資格醫師の診斷書の提示を請求せられたる場合はこれを拒むことを得ず。

第十條　當該吏員の請求あるとき婚姻當事者又は事實上の夫婦關係を結べる者は婚姻許可證を提示すべし。

第十一條　結婚後當事者の一方が花柳病に罹れる場合には他の一方は全治に至る迄別居又は離婚を請求することを得。

第十二條　當事者の一方が他の一方に花柳病々毒を感染せしめたる場合には離婚の後被害者は加害者に對し全治までの治療費と相當の慰藉料とを請求する事を得。但し勞働不能に陷れる場合には生活費をも請求する事を得。

請願の理由

（一）今日非常な勢を以て文明國を脅しつゝある花柳病の蔓延が、戰慄すべき害毒を個人と社會と種族との上に及ぼしつゝあることは、醫者の說明や諸種の統計を俟つまでもなく私共の絕えず目擊しつゝある悲慘事であります。斯かる國民的慘害に對し國家が種族衞生の立場から、其損害を出來るだけ輕減するやう何等かの方法手段を擇ぶべきは當然のことであつて、既に歐米に於ては花柳病豫防法を制定し國庫は莫大な經費を惜しみなく投じて其取締りに努めて居ります し又他方に於ては善種學的禁婚法によつて、花柳病者の結婚禁止を實施してゐるところも、アメリカに於ける六州、ノルウエー、メキシコ等少くありません。然るに我が國に於ては遺憾乍らまだ是等のことに全く手が着いて居りません。

（二）私共は勿論花柳病の一般的豫防法の一日も早く制定されることを望むのではありますが、更にそれ以上婦人といふ立場から、家庭と妻たる婦人と子供とを花柳病の害毒から保護し、併せて種族の向上

を計るといふ目的のもとに該病男子の結婚制限法制定の必要を痛感するものであります。何故なら私共が今日最も屢々遭遇する、しかも最も默視するに堪えない家庭的悲劇は結婚前健康であり、純潔であつた所謂良家の子女が花柳病男子との結婚によつて彼女自身と共罪なき子供と幸福なるべき家庭との上に現に蒙りつゝある幾多の傷ましき被害と、斯る大慘害を夫たる男子から受けながらそれに對して全く法律的に保護されてゐない今日の妻たる婦人の立場とであります。

(三) 花柳病を家庭内に輸入する者は必らずしも男子のみに限らないのは今更言ふまでもありません。而も私共が婦人に對しては、――わけても日本婦人に對しては男子と同樣に斯る取締りをなすことの必要を認めないのは左の如き理由によります。

(イ)該病男子の數は該病女子の數よりも遙に多い。即ち内務省保健調査會の報告によれば全國一一三四箇の公私立病院に於ける大正元年より同四年までの四ケ年間の該病患者の數に、

黴毒	男	九、五七三七
	女	四、三三〇一
軟性下疳	男	四、一〇六三
	女	一、三四〇四
淋病	男	一〇、〇四二三
	女	四、二〇八一

である。從つて家庭に該病毒を輸入する場合は男子の方に多く、女子の場合は未だ法律を設けてそれを制裁する必要を認めない程度であること。

(ロ)未婚女子に對して斯る身體檢査を行ふ事は實際に於ては習慣上可成りの困難や、又それに伴ふ危險も豫想されて、男子に於ける如く容易に實行されさうもない。その上既に述べた如く該病女子の數は男子のそれより遙に多數であつて、斯る難事を敢てせねばならぬ程の必要を未だ認めないこと。

(ハ)或地方又は社會に於ける未婚女子にたとへ該病患者の多いことがあるとしても、かゝる局部的現象をもつて全體を論ずることは出來ないこと。

(ニ)男子の性的生活は女子のそれに比し遙に放縱に流れ易き傾向ある上に、今日の男子の多くは放縱であること。それ故花柳病の媒介者となり、傳播者となる婦人は殆ど賣笑婦に限られてゐるに反し、男子はもつと一般的な意味に於て該病の媒介者であり傳播者であること、そしてその事實はそれから感染した婦人花柳病者に比し、妻から感染した男子花柳病者の極めて少ないといふ醫師の承認によつても證明されること。

(ホ)此の法律は家庭に於ける婦人保護を目的とするのみならず、婦人を通じてなし得るところの男子の放縱なる性的生活に對する一種の制裁であつて、そこに道徳的意義をも併せて含むこと。

（四）斯くの如く私共が花柳病男子の結婚の取締を要求するのは、家庭を、妻たる婦人を該病毒から保護すると同時に未來の子供を保護し國力の本源である國民の實質的改善を計り男女共同の義務であり使命である種族への奉仕を全うせんとするものであります。

我が新婦人協會は四十二、四十三の兩議會に提出いたしました「花柳病男子の結婚制限法制定に關する請願書」に今回大修正を加へ、右に擧げたものとして今議會に提出することになりましたが、この修正の要旨とも言ふべきことは法律上の結婚のみならず、事實上の結婚でも同樣に取締り得るやうにしたといふところにあります。一體我が國の現行民法は御承知の通り純粹な法律婚主義によつたもので、「婚姻ハ之ヲ戸籍吏ニ屆出ヅルニ因リテ其効力ヲ生ズ」といふ民法百七十五條の條文が示す如く只單に婚姻屆を出すといふ形式な手續だけしさへすれば事實上の關係如何に拘はらず、法律上では立派に婚姻が成立するのです。かういふ風に事實關係と法律關係とが一致しないといふやうな不都合な形式主義の婚姻制度が行はれてゐる自然の結果として我が國には法律婚のみあつて、事實婚のない所謂「寫眞結婚」の如きものがあるかと思へば、又他方には事實婚のみあつて、法律婚のない所謂「內緣の夫婦」關係も寧ろ普通な狀態として今日可成りに多く存在して居ます。のみならずたとへ婚姻屆を提出し、法律上の夫婦關係を結ばうとする場合も、今日の風習として先づ事實上の結婚生活を開始し、然る後にするといふ順序でありますから、この種の內緣關係に或期間置かれてゐる夫婦も實際は少くありません。

ここに我國に於て花柳病者の結婚制限法を實施する上に特殊の困難が橫はつて居ります。從つて又ここに實行案としての特殊な工夫が必要とされてゐるのであります。

ところが舊案は、條文を一讀すれば誰れでも氣付く通り、現行民法が規定した婚姻即ち法律婚の場合のみを取締るもので實際の場合は全然取締りを受けて居りませんから、この法律制定の目的は極く狹い範圍內に於てだけしか達せられないといふ憾みがありませんでしたが、といつて理想案ではなく、今日の我が國に實施しやうといふ目的のものである以上現行民法を全然無視して立案する譯にも行きませんし、且つこの種の法律は實施上の直接効果よりも一般世人に對する道德的な又は敎育的な間接効果を豫期するものであり、殊に上中流の今日形式のみを重んずる社會に於ては法律上の結婚が出來ないといふ丈でも確に打擊であるに相違ないといふやうなことで結局滿足しなければなりませんでした。

併し今度はこゝに今一段の工夫を加へ、現行民法の形式婚主義に抵觸しない範圍内で法律婚と同時に事實婚をも同様に取締るやうにしました。これで結婚制限法に對する最も有力な非難である法律で禁じ得るものは法律婚のみといふことがとにかく取除かれた譯です。修正の要旨は殆んどこの一點に盡きてゐると言つても差支ありませんが、なほ枝葉に亙つて言ふなら「花柳病男子の結婚制限法云々」を「花柳病者の結婚云々」と改めたことや、男子は花柳病患者にあらざる旨の健康診斷書を直接その相手方たる女子に提示することになつてゐたのを、市町村長に提示して結婚許可證を貰ふといふやうな間接方法にしたことや第五條、第六條や、わけても第九條で女子に對する男子の診斷書提示の請求權を認めたことや、第十一條及第十二條に於て、舊案の「結婚後夫が花柳病に罹れる場合云々」を「結婚後當事者の一方が云々」に改め「夫より花柳病を感染したる場合には妻は云々」を「當事者の一方が他の一方に花柳病を傳染せしめたる云々」と改めたことなどは、現社會の實狀を無視し偶々提案者が婦人であるといふ事をもつて不公平なりと難ずる男子側の反感を多少緩和し得たものと信じます。

次に刑罰の種類や輕重に就いても多少の議論がありました。私共が參考とした外國の法令はいづれも可成り嚴罰で現にミシンガ州法の如きは、重罪とし、五百弗以上千弗以下の罰金又は五年以上の禁獄となつて居りますが私共はまあ罰金刑に止めました。第七條の虚僞の診斷書を作成した醫師も無論處罰されるので、これは既に刑法第百六十條に規定されてあります。

第十一條及第十二條は舊案では同じ結婚制限法の中に入れてありましたが、併しこれは言ふまでもなく離婚請求權の要求であり、殊に民法婚姻法の離婚の規定中の第八百十三條「夫婦ノ一方ハ左ノ場合ニ限リ離婚ノ訴ヲ提起スルコトヲ得」に一項として加へれば至極簡單にいくわけですし、この上第一條より第十條までは實行を見るまでにはなほ或る時を要するでありませうが、この方は今日既にあまり反對のないことですから、却て別にして取扱ふ方が便宜であらうと考へたからです。

聞くところによりますと、兼ねてから花柳病豫防法案の起草中と聞いて居りました内務省衛生局の保健調査會も、まだ該法案を四十四議會に提出する迄の運びにはならないやうですけれど花柳病豫防の宣傳をする計畫もあるさうですし、四十一議會に「花柳病に罹れる男子の取締」を請願された田代義德博士等は今度は更に建議案として提出し、大に運動されるさうですし、

又昨年十一月四日私立衛生會が開かれた大日本醫學會總會へ滋賀縣の醫者の代表者から花柳病男子の取締案が提出されたさうで、此案が會等に於てどんなに取扱はれたかは聞きませんでしたが、ともかくも私共はかういふ提案が醫者側から出ることは提案者が婦人であるといふ只私丈のことから、ともすれば惹き起される男子側の反感や誤解を防ぐ上によろこばしいことだと思つてゐます。この上は直接婦人や子供に關係あるこの問題を男子の醫者にのみ一任せず多數の名女醫を委員とする日本女醫會あたりがこの際奮起されることを私共は望まずにはゐられません。

かういふ風で我國では今日花柳病男子の結婚禁止が漸く問題となりかけて來たやうな有樣ですが歐米諸國では善種學の研究の進捗とその應用法の發達に伴ひ、人種改良策として隔離法、絕產法など種々な方法が行はれて居りますが、傳染病者、遺傳病者、精神病者、大酒家等に對する結婚制限法の制定もこの中の一方法として既に實施されてゐるところも少くありません、そしてその多くは花柳病をも加へて居ります。

併しこれに對す非難もまだ今日全くないといふ譯ではありません。例へば結婚は個人の自由であるので、それを制限するのはよろしくないとか、法律で禁止し得るものは法律婚だけであるから、實際は効果のないものであるとか、却て風俗を亂し、私生兒の數を增加することになりはしないかとか、人口減少の虞はあるまいかとか、なほ其他にも色々の反對論が存在してゐるやうですが、いづれも直に反證し得る程度の無力なものでありますから、紙數に制限のあることとし、今は、我協會案に對する特殊の非難丈を取立てゝ論議するに止めます。

この提案に對する世間――否男子側の不平の聲は可成り大きかつたのでしたが、結局次の三點以上のものではありませんでした。

(一)、結婚の禁止を特に花柳病のみに限つたことに就いての非難。

(二)、男子のみに限つたことに就いての非難。

(三)、この提案と私が主張し且つ實行してゐる戀愛結婚との關係に就いての非難。

そして與謝野晶子さんへの中央公論春季特別號に掲載した私の答辯は偶々この三點を具備したものですから、その要點を左に掲げて直にその中の一點若しくは二點に關する他の反對者への答へとします。

□第一の非難に對して

「善種學見地から、結婚を制限すべきものに、花柳病の外、癩病結核、癲癇、白痴、其他の精神病、神經衰弱、濫酒等のあることは今改めて云ふ必要がありません。併し私は國家が法律をもつて是等の者の結婚を制限するといふことは元來の理論上からは―(若しくは理想の上からは)寧ろ大なる反對論者なのであります。それ故私共は花柳病に對して何も好んでそれが理論上正しいからとか、歐米に於て行はれてゐるからとかいふやうなそんな單純な理由からこの法律制定を望むものではなく、今日我國に於ける花柳病の蔓延が社會に與へてゐる害毒が。更に言へば結婚によつて現に我國の婦人と種族とが蒙りつゝある花柳病の害毒が敢てかかる法律を要求することとによつて一般の注意を喚起する必要を痛切に私共に感ぜしめるほど激しいことに起因するのでありますから、誰れが求めてそれほどの實際的必要に現在迫られてゐない他の遺傳病や傳染病に對してまでも同時に煩鎖にして不快なる法律的干渉を結婚の上にすることを望みませうや。例へば評者が擧げられた癩病の如きは一般から最も嫌惡されてゐる疾病のやうではありますが、その社會的害毒に至つては、今日、花柳病の如くさう戰慄すべき狀態にあるものではありません數に於て比較にならぬほど少ない上に、この病氣に對する世人の深き憎惡は該病患者並に該病患者ある家族との結婚を忌避し彼等を、隔離狀態に置きますから、今更法律の力をかりるまでもなく其の撲滅の日は自然と近づきつゝあるのであります。然るに癩病よりも事實に於ては更に恐ろしい花柳病に對する一般人の態度は案外平氣であり、無自覺であつて花柳病――殊に淋病の如きは――一人前の男子の當然有つところの疾病であるかの如く考へてゐる者さへある位です。かういふ狀態ですから一層取り立てゝ問題とする必要があるではありませんか。

なほこの外の理由として花柳病の害毒は婦人の立場から見て他の遺傳病や傳染病によつて受ける單なる肉體的苦痛の外に夫の過去並に現在の性的生活に對する種々な疑惑となつて、夫婦生活の根柢を脅かすところから、精神的にも苦しまなければならないといふことや、この病氣の性質上男子に對する一種の制裁といふやうな道德的意義をも合せて含むものだからといふことなども附け加へて置きませう。

□第二の非難に對して

「これに對する御答へは請願書の中に列記した五つの理由で十分だと思ひますから、こゝでは次の一言を申上げて置きます。評者は花柳病患者は未々男女の何れにも伏在するといふ只それ丈の理由で男女共に診斷書を必要とすると言はれますが、これも私から見れば第一の非難と同樣の單純な抽象的な議論で、今も述べた如く、私共のこの請願そのものが本來理論の上の要求から來たものでなく、今日目前の實際上の必要に基くものだといふことに對する理解を缺くところから來てゐるものだと思ひます。私共は未婚男子の中に花柳病者が伏在するか診斷書を要求するこ

ではなく未婚男子中に伏在する花柳病患者の數があまりに多數で、その及ぼすところの害毒があまり甚しく、とてもそのまゝに打捨てゝ置かれないほどの現狀だから要求するのです。ですから未婚女子中にも亦同病患者が伏在するといふ只それ丈の事實はこの場合議論になりません。

序に附言いたしますが、內務省衛生局保健調査會の報告によりますと、大正元年より同四年迄に全國一一三四ケ所の公私立病院が取扱つた花柳病患者總數、三六〇、五五二人。內男子二三七、二二三名、女子九八、八三六名。これを性及年齡の點から見ると、

		十五歲未滿	二十歲未滿	二十五歲未滿	三十歲未滿	四十歲未滿	五十歲未滿	五十歲以上	計
黴毒	男	四三六	七四五	三三、二七一	二一、七九六	二二、九八	一〇、四五三	五、二一八	九五、七二七
	女	二六七二	六五四八	一一、四四四	八九五二	七四五一	三八二	一九五三	四三、五二一
軟性下疳	男	七八	四七六五	一四、七四四	一二、四〇三	七一五九	三三五六	七〇一	四一、〇六五
	女	二三四	二九八四	五〇六	五一六八	一九七〇	四八一	一一〇	一三、四五四
淋病	男	八八七	八一六八	二七、六二一	二七、八四二	二三、七一一	九一一八	五三七七	一〇〇、四三三
	女	一〇九二	六三〇四	一五、〇〇〇	一〇、八五一	七五九九	二六〇三	六八九	四三、〇八一

一般患者千に對する花柳病患者比例は、

		十五歲未滿	二十歲未滿	二十五歲未滿	三十歲未滿	四十歲未滿	五十歲未滿	五十歲以上	計
黴毒	男	一、二五	二、〇二	六、三五	六、一六	五、九三	二、八三	一、三八	二六、八六
	女	一、三五	二、三八	四、一六	三、三五	二、七一	一、一九	〇、七一	一五、七三
軟性下疳	男	〇、〇二	一、一九	三、九八	三、〇八	一、九三	〇、一〇	〇、一七	一一、〇九
	女	〇、〇五	一、〇八	一、八二	一、一五	〇、五七	〇、〇八	〇、〇四	四、八六
淋病	男	〇、一六	二、二一	七、四六	七、五一	六、四一	二、四九	〇、八九	二七、一三
	女	〇、四〇	二、三五	四、二五	四、七三	三、九四	〇、六六	〇、三六	一五、二八

となつて居ります。

私共がこの男女及年齡別の表を見てまづ不思議の感に打たれずにゐられないのは、十五歲以上は悉く男子有病者の數は女子のそれよりも遙に多數であるのに、只十五歲未滿に限り全然正反對の現象を示して居ることであります。そしてこゝに私共は家庭傳染の戰慄すべき事實を發見します。卽ち小兒の花柳病は言ふまでもなく、家庭に於て主としてその父母から傳染するものでありますが、特に女兒に多いのは、女兒の生殖器は男兒の如くその構造上保護されてゐない爲め容易に病毒に犯されるのだそうで、有病者である父親が先づ第一に入りその同じ風呂に後から女兒達がはいるといふやうな日本の家庭に有りがちな機會から父親の病毒を受けて發病するやうな場合も少からずあるそうです。それ故家庭にもし病毒を輸入しないやうになりさへすれば花柳病婦人の數は更に〳〵減少し、該病男女間の數の相違は一層甚しくなることでありませう。

□第三の非難に對して

私が無愛結婚の主張者であり、實行者であることは今更言ふまでもありません。併しいかに自分の理想に、自分の主張に熱心な私でも多少とも現實に向つて眼を開いてゐる限り、現在最も一般に行はれつゝある結

婚は矢張り在來の因襲結婚であるといふ事實を遺憾ながら否定する譯には行きません。(中略)そこで私が評者に御訊ねしなければならないことは今日一般に行はれてゐる結婚は矢張り在來の因習結婚だといふ事實を只事實として有體に認めてゐるといふことが、どうして因習的結婚を許容したことであり、戀愛結婚の主張に反することであるかといふことです。

只事實と事實とて承認したことは、言ふまでもなくそれを「いゝ」と言つたのでも「わるい」と言つたのでもありません。即ち理想の立場から否定したのでも、肯定したのでもないのです。

併し私がこの事實を認めたことは、評者が考へられる如く戀愛結婚の主張を放棄したのでないどころか更に一層これを高調し、力說することの必要を痛切に感ぜしめる間接の理由になつてゐるのです。何故なら今日かくも多くの家庭婦人が夫の花柳病に感染して苦しんでゐるのは、そしてその害毒が今や私共をして多數婦人に代つてこんな忌はしい請願を敢てしてまでも一般社會の反省を求めねばならぬほどの嘆かはしい狀態になつてゐるのは勿論今日一般に行はれつゝある因習結婚を通じてのことであり、更に少し誇張して言ふなら、因習結婚そのものゝためだとも言へるのですから、若し一般婦人が私共少數婦人の如く戀愛結婚を實行し得るやうな時代が來るなら、その時にはもう此んな法律の制定を要求する必要も理由も何處にも見出されないでせう。併し我々の理想通りにさうすぐには戀愛結婚の時代が來ないのが實際社會の狀態なのですからそこに種々な厄介な問題がその過程として生じて來る譯なのです。

それ故私共は今日の悲慘な狀態に對する一つの對應策として不應急手段として「花柳病男子の結婚制限」の如き直接法に訴へると同時に、これをもつて滿足せず、他方に於て、益々「戀愛及結婚の正しき思想の宣傳」の如き間接なそして根本的な方法を通じてこの問題の解決に當らうとするので兩者の間に不離な互助的關係こそあれ、氏が言はれるやうな矛盾も不調和も存在する道理がありません。(中略)さて以上に戀愛結婚の主張と花柳病男子の結婚制限に關する協會の提案との關係を述べたのでありますが、私は更に進んで、私が主張するところの戀愛結婚の內容と花柳病男子の結婚禁止との間には實際に當つて何等牴觸するところのないことを證明しやうと思ひます。

戀愛結婚の時代さへ來れば、法律をもつて特にかゝる制限を結婚に加へる必要も理由もないであらうといふことは私の既に言つたところですそしてその意味は眞の戀愛の成立してゐる間柄であるならば、法律の制裁を待つまでもなく自然的に、言ひ換へれば戀人に對する彼自身の愛の力によつて、戀人と更にその間に生れるかも知れない子供の一生を不幸にするやうな結婚は思ひ止るに相違ないといふことです。ここに眞の戀愛の發動を見ることが出來ると私は思ひます。(中略)况して花柳病は不治の病ではないのですから、結婚をしないとても何も生涯に亘つてといふやうな絶對的の意味のものでなく、言はば一時結婚を中止するといふまでのことで、全治をまつて結婚すればいゝのですから、多くの場合之

れは彼等の戀愛を殺すどころではなく寧ろ眞の意味で生かし且つ完成するためになります。（中略）

「戀愛は言ふまでもなく個人の自由です。併し私は同時に言ふまでもなくその自由にも亦制限のあることを認めるものです。いかに戀愛は自由だからと言つて、或は「戀愛は高く遙に政治や法律や科學や、論理の彼方にある」からと言つて、他の個人を――子供を害し、社會を、種族を傷ける權利はない筈です。今こゝで戀愛に就いて多く言ふ暇を有ちませんが、一言で盡せば戀愛又は結婚の自由若しくは權利は、個人の幸福と種族（社會）の利益の一致の上に、個人の權利と種族（社會）に對する個人の義務との一致の上に認めらるべきものだと私は思つて居ます。

して見れば戀愛が花柳病によつて多少制限を受ける位のことは當然ではないでせうか……」

と言つて私共は花柳病者の結婚を只々法律の力のみによつて禁止し得られるものとは最初から考へて居りません。先にも言つた通りこの種の法律は實施上の直接効果よりも道德的な、又は教育的な同樣効果を期待すべき性質ものなので、どちらかと言へばかういふ忌はしい、法と殺風景極る法律がその社會に無用の贅物となるまでに各個人が――わけても種族への奉仕者である婦人各自が自覺することを切望するものであります。それ故、我が協會はこの請願に先立ち花柳病者に對する婦人の拒婚同盟を作る計畫を早くからもつて居たのでしたが、創立以來引續き多忙で、ついのび／＼になつて居りました。併し既にその組織や事業も協議し、規約草案も出來ましたから、議會の閉ぢるのを待つてこの方の運動に着手する考へで居ります。今日こゝに同盟會の規約を條文として掲げることはまだ出來ませんが、出來る丈廣く多數婦人の同盟を望むもので、只次の義務を負ふところの婦人でさへあれば誰れにも會員となれます。卽ち第一は自分自身と自分の將來生むべき子供に對し言ひ換へれば自分の幸福と種族の利益のために花柳病者と結婚しないこと、第二に自分が多少とも携つた他の結婚――例へば娘や姉妹や友人の結婚の場合も同樣の義務の履行を勸告するを負ふことです。なほこの會の事業として、花柳病に關する一般的の知識や、社會衞生に對する知識、性に關す知識、戀愛、結婚、種族奉仕等に關する正しい觀念の普及のため、是等に關する問題を出來る丈平易に記述し說明したパンフレツトやビラを家庭、學校、工場、結婚媒介所、結婚式場等へも又路上に於ても配布し專ら個人宣傳に努める考です。なほ通俗的な講演會を各地に開くことや、活動寫眞や演劇を利用するやうな事も出來ればやりたいといと[illegible]、

ひます。

この拒婚同盟會に就いては他日改めて詳細に論じる機會があると思ひますから、この邊で筆を擱きます。

（十年一月十四日）

脱獄より脱獄へ

—或る露西亜社會革命首領の生涯—

古市春彦

一、はしがき——長崎に姿を現はした虚無黨員

明治三十四年の晩春、長崎市外國人居留地のある小さな旅館に一人の露西亜人が何所からともなく飄然とやつて來て投宿した。此男が何の爲めに日本に渡來したものであるかは誰も知る者がなかつた。客も亦特別の用務を帯びてゐる風も、又別に見物して廻る様子もなく、時々散歩に出る外は毎日毎日旅館の二階の一室に閉ぢ込つてゐた。客は四十がらみの巌丈な體格をもつた男であつたが、どことはなしに永年の苦勞をしたらしい影が全身を覆ふてゐた。秀でた額と底光りのする明眼とには並々ならぬ深謀と鋭い理智の閃きが現はれてゐた。半顔を埋めた厚い髭髯の裡には思ひきり強烈な意思の力を現はす大きく廣い唇が緊つかりと結ばれてゐるらしかつた。時々發する彼の音聲は濁みがゝつては居るが、然し明晢で、厚い鐵板を敲くやうな底力があつた。

客は一と月近く滯在した上で、桑港行きの便船を求めて、或

日忽然として旅館から影を消した。後で此旅館に宿泊してゐる今一人の露西亞の商人の語る所に據れば、素性の知れないあの客は露西亞の虛無黨の一人に相違ないといふことであつた。此虛無黨と鑑定せられた客は一二度雜談をしたことのある此商人に、日本の社會がよく秩序立つてゐる事、市民が清潔を好み且つ正直である事などを心から褒めてゐたそうである。殊に或夜客が長崎の郊外を散歩した際に、其所らの漁師達が雨戸を閉めないで寢てゐる有樣をみて、日本の田舍の平穩な生活を口を極めて賞讃したり、又拾物を警察署に屆出た男のあつたのを見て、ひどく市民の正直さに感動したと話してゐたさうである。通りすがりの旅客にこれ程の好感を與へ得た日本の國民は名譽である。夜、戸を閉めないで眠る事の出來る日本人は幸福である。烱眼なる虛無黨員も二十年の後にはソシナリズムやアナーキズムやニヒリズムの思潮の流れが、此名譽ある日本の社會に滲透する時の來る可き事を想見し得なかつたのであらうか。幸福らしい社會の底には社會問題の基礎材料が埋められてゐる事を洞察し得なかつたのであらうか。

閑話休題。

此長崎の客こそは、商人によつて虛無黨員と鑑定された通り露西亞の社會革命黨員中でも最も活動的で大膽な人物の一人として、全露西亞に熟知せられてゐる脫獄囚の一人レフ、ドッチ其人であつた。ドッチは十數年に亘る西伯利亞の流刑地から逃走して、北米合衆國を經て歐羅巴に渡る目的を以て、浦鹽斯德から此長崎に渡つて來たのであつた。私は今英國のジョン、マリーで發行せられたドッチの著書『西伯利亞の十六年』(此本は今は八ケ國語に飜譯せられてゐる)の記述を骨子として、それにドッチ自身が或人に話した斷片を綴り合はせて、脫獄から脫獄への彼の生涯を、何等の誇張も修飾もなく、忠實に平板に物語らうと思ふ。

二、チグリン事件と最初の脫獄

ドッチは一八五八年キエフで生れた。十九歲に成つた一八七四年にはもう革命運動に參加した。

此運動は當時のロシヤの最も元氣旺盛で氣慨のある青年が競ふて參加したものである。彼は此年農民間に革命思想を宣傳する爲に田舍に行つて居たが、ステフアノヴッチとボアノヴスキーと謂ふ二友人と提携してキエフ州のチグリン地方の農民に叛亂を起させる計劃を立てた。當時此地方の農民は政府の希望に

反して土地を私有財產として各自に分配しないで、共有にして耕作して居たので、政府は屢々彼等に苛酷な壓迫を加へたり又は逮捕して拘禁したりして農民を苦しめてゐた。之を利用してドッチ等はザーの名義を使つた一つの僞造布告を農民の間に撒いた。實はザー自身は全國の土地を皆農民に分割して與へる希望を持つて居るけれども、頑迷なる貴族に妨げられて此希望を實現する事が出來ないから、農民は宜しく徒黨を組織してザーの反對者農民の敵なる貴族を仆して、暴力で以て土地を割取すべきであると、農民の一揆を激勵した文書を僞造したのである。ステワアノヴワチは自らザーの特使に假裝して農民の團結を促進した。此團結に加はる者は、團體に對する忠誠を誓つた上で號令一下直ちに騷動を起す軍隊組織の一員にならねばならなかつた。此運動は瞬くうちに多くの農村に擴がつて行つたが陰謀は間もなく官憲の探知する所となつた。一味は逃走した。ドッチは最初の革命的陰謀が失敗に歸したので、意氣沮喪して家に皈つた。

併し彼は直ちに活動に飢へた。彼は軍隊內で革命思想を宣傳する機會を得る事を希望し、且つ後日何かの役に立つかもしれないと思つて、義勇兵に成つて軍隊教育を受くる決心をした。露西亞の義勇兵は他の諸國のそれと性質を異にし居る。露西亞での義勇兵とは抽籤なしに補充兵になる者である。軍隊では此義勇兵を優遇して特別扱ひにした。義勇兵になるには高等教育を受けた者でなければならなかつたから、彼等は普通の無學な兵士のように毆られたり、擲られたりする侮辱を忍從する必要はなかつた。然しドッチは左記の事件で懲罰を受けねばならなかつた。或時一人の士官がドッチを「貴方」と鄭寧な言語で呼ばないで「貴樣」と云つたのに對してドッチが其士官に向つて「貴樣」呼はりをした事、兵營にゐながら五日間無斷で訓練を休んだ事、ルーヤと謂ふ政治犯人の逃亡を幇助したといふ嫌疑等で、ドッチは軍法會議に附せられて三ケ月の重營倉を宣告せられた。彼は脫倉を決心した。脫倉の唯一の方法は風呂場を利用することであつた。

こゝで露西亞の風呂に就いて說明する必要がある。露西亞の風呂は歷史的のものであり、ザーの領土內に於ける國民的制度である。露西亞の住宅は不潔で且つ密集して居る。殊に冬は密閉せられた室の內で厚つぼつたい綿羊や駱駝の外套を着て蟄居して居るので、彼等の皮膚は刺戟され易すいのである。それで度々入浴をする必要がある。彼等は貧富貴賤の別なく每週一度

つゝは必ず入浴する習慣になつて居る。こんな事情から露西亞人の入浴は一種の神聖な國民的の儀式と云つてもいゝのであつた。

十七世紀の始めに皇位に即いたデメトリオス（此人は露西亞生れではない）が『惡る者のデメトリオス』と呼ばれたのは、此の浴場に關する施設を等閑にしたからであると謂はれて居る位である。

だから、囚人を餓死させたり、笞打つたり又、親族縁者との面會を一切禁止するような非道を平氣でする露西亞の官憲も、囚人の入浴の要求だけは拒む譯に行かなかつた。風呂場は大抵監獄に附屬しては居たが、囚人が公衆浴場に行く事を要求すれば官憲はそれも許可しなければならなかつた。之れが露西亞の監獄制度に於ける唯一の光明であつて、憫れな囚人達も此制度によつて僅かに慰藉せられたのである。

ドッチのゐた聯隊には附屬の營倉がなくて近傍の民家を借りて代用して居た。此假營倉には風呂場の設けが無かつた。營倉に拘禁せられた兵士は近くにある普通の監獄の風呂場を使つて居たが、然しドッチは一般の罪人と混浴するのが厭やだといふに口實を構へて町の公衆浴場の使用を要請した。週番士官はドッチの申出を拒絕した。ドッチは更に上官に入浴の許可を受くる手續を取つた。こんな願ひは到底許可されさうにも思はれなかつたのであるが、會計課長である一士官の力によつて難なく許可を得た。此士官がドッチの爲め盡力した事に就いては、露西亞の軍隊事情を知る面白い話がある。露西亞の軍隊では兵士の食事は會計課長の請負ひになつてゐたが、又、軍隊の粗末な食事をする事を欲しいない者は、食費を自辨すれば勝手に食物を注文する事が許されて居たので、少し有福な者は殆んど總べて自辨食事をした。斯んな兵士が一人でも多ければ、それだけ、勘定方は私服を肥やし得る譯である。ドッチは入營以來ずつと自辨の食事を採つて居た。然も彼は法外に高くつけ出された月々の勘定を小言一つ言はないで請求通りに支拂つた。それで彼は大樣な紳士として會計課長の尊敬を受けてゐたのである、こんな次第で、僞善的ではあるが。皇帝と教會と祖國と法律秩序の忠實なる擁護者を以て自稱する士官が、是等の神聖なるものを人民の敵であると宣言してゐた一箇のニヒリストの爲めに、入浴許可の盡力を惜しまなかつたのである。會計課長は力說した。「ドッチは普通の兵士ではない。第二級の義勇兵だから勤務期間も六ヶ月に過ぎない。決して脫營の心配はない。今は營

倉に居るとは云ふものゝ、たゞちよつとした軍規に背いただけの事で、彼は決して底意地のある悪人ではない、寧ろ立派な紳士である。士官達はドッチが猛烈な革命運動者で、政治犯人であることをちつとも知らないのである。竟にドッチの公衆浴場行きは許可せられた。普通の場合は二人であるが、彼には三人の番兵が附けられた。

浴場に到着すると、二人の番兵は此建物にたつた二つきりない窓の外側に一人づゝ立つた。今一人の兵士が唯一の出入口の戸の内側に立つて厳重に看視した。総ての出入口は厳重に守られてゐる。此建物から外に出るには、誰でも戸の内側に居る兵士の前を通らねばならない。逃走は到底不可能だと思はれた。

ドッチは悠々と着物を脱いで、戸の内側にゐる兵士に着物と財布とを一と纏めにして渡してから、静かに浴室の内に這入つて行つた。時は二月の半であつた。外は酷い寒さである。どんな人でも裸のまゝで浴場の外に出られるものではない。番兵は大丈夫だと思つたのか、浴室内に入つて看視する爲に着物を脱がうともしないで、入口に立つて居た。それが兵士にとつては重大な過失であり、ドッチには願ふても無い幸ひであつた。

ドッチが浴室には入つて行くと、其所には兼ねて諜し合はせてゐた仲間の男が普通の市民服の包みを持てつドッチを待ち詫びしてゐた。ドッチは大急ぎて普通服を着た。そうして、兵士には少しも氣づかれないで勿論誰何もされないで、落ちつき拂つて建物の外に出た。番兵は此囚人の軍服姿は知つて居るが、普通服の彼を見たことがなかつた。其上ドッチは露西亜人がよく使用する頭巾を目深かに被つてゐたので、變装は申分のない出來ばへであつた。建物の外に立つて居た二人の番兵も、浴場から悠々と立ち去る一人の紳士に深かい注意を拂はなかつた。街路には他の仲間の者が馬車を駐めてドッチを待つてゐた。二人を乘せた馬車は疾風のように何方ともなく駈け去つた。

可愛そうな番兵は此重大な出來事を少しも識らないで永い間入浴者の出て來るのを待ち續けた。然し竟に事實は發覺せられた。誰も説明し得る者の無い逃亡事件が直ちに官憲に報告せられた。駈け着けて來た兵隊は浴場を丹念に檢索したが、蟻の這ひ出る隙間すら見出せなない。煙突の穴も人間の身體が通るには餘りに小さかつた。色々評議の上で、囚人は變装して逃れ出たものに違ひないといふ事にはなつたが、番兵には彼等の前を通つて行つたどの男が囚人であつたかすら判斷しかねた。

三、第二次の逮捕、第二次の大膽な脫獄

上記の逃走は一八七六年の二月のことであるが。それ以來ドッチは立派な兇狀持ちになつた。彼は總ゆる苦心をして變裝し僞名で、僞造の旅行券を持つて各地を轉々してゐたが。到る所に黑い影が附き纏ふので、何時捕まるかもわからない不安に襲はれて、おちおち眠る事さへ出來なかつた。

當時露西亞の國內には澤山の革命黨の兇狀持ちがゐた。到る所に警官と革命黨員と向ふ見ずの格鬪を演じた。革命黨員の一人ゴリノポッチが捕へられて拷問を受けた。彼は半死半生になつた苦しまぎれに仲間を裏切つて黨員の在家を密告した。其結果忽ち澤山の革命黨員が逮捕せられた。彼はその功勞によつて釋放せられて仲間の所に歸つて來た。最初のうち彼が裏切者である事が判らなかつたので、仲間の者は此犧牲者を大に劬つてゐたが終に眞相が暴露したので、ドッチ始めオザッサに居た黨員は彼を黜殺しにして逃亡した。然し一八七七年の秋ドッチは再度捕縛せられてキエフの監獄に拘禁せられた。此所に彼は友人のステフアノポッチやポハノウスキー等を暫時同じ監房にゐた一八七八年の始めに、彼等三人は比類なき放膽的な方法で脫獄した。其次第はかうである。彼等の友人のフロレンコガミカエルといふ名で此監獄の雜用人夫として住み込んだ。フロレンコのミカエルは忠實なまめ〳〵しい働き振りは、大に典獄の信用を博して、間も無く普通刑事囚人の看守に登用せられた。彼は一層精勵した。典獄は全く彼を信用しきつて今度は政事囚人の看守に任命した。ミカエルは自分が友人たる政事囚人を逃走させる計劃をたてゝゐる事を覺られないように充分の用心を以て着々と其日の準備を續けて行つた。監獄外では有名な革命黨員オシンスキー（此の人は間もなく捕へられて殺された）が萬端の手筈を定めた。彼はドニエフ河上にボートを浮べてゐた。其ボートには仲間四人の食糧と四着の通常服とが積み込まれてゐた。豫ねて牒し合はせてゐた夜が來た。ミカエルは囚人達が寢靜まつてからこつそりと監房の鍵を外した。三人の囚人は一人づゝ靜かに監房を出た。

惡運の神に祟られたものか。暗らい廊下を探り足で歩いてゐた時、一人の男が何かに躓いて仆れかけた拍子に壁際に垂れてゐた大きな綱を攫んだ。それが警鐘の綱だつたとは、何たる情ない事だ。忽然として大音響が全監獄に響き渡つた逃亡は失敗したに違ひないと思はれた。然しミカエルは此重大な瞬間にも平

常鍛へた心根の平靜を失ひはしない。驚いて四方から駈けつけて來た看守に向つて彼は靜かな口調で「私が便所に行かうとして躓いたので偶然綱に觸れたのだ」と說明した。看守達は勿論典獄も彼の說明に少しの疑ひも挿まない程彼の平常の信用は厚かつた。皆が安心して再び靜かな眠りに就いた後で、ミカエルは看守に變裝してゐた仲間を獄門に連れて行つた。門番は少しの注意も拂はないで四人　看守を門外に出して吳れた。士官に變裝したオツシンスキーが監獄の高塀に沿ふたドニエーブ河上にボートを浮べて待つてゐた。彼等は一週間ドニエーフ河の下流に漂ふてゐたが、オツシンスキーが尠からざる旅費と僞造旅行券を持つて來て吳れたので、ボートを棄てて、目立たないように思ひ〳〵に四方に散つて行つた。

此脫獄は一八七八年の春の出來事である。それから二年ばかり、種々の危險を冒してドツチはプロパカンダを續けてゐた。然し官憲の警戒が嚴重で、革命の實行に着手する事は到底不可能であつた。其上刻々に危險が身に迫つて、何時逮捕せらるゝかも判からない狀態になつたので、彼は外國に亡命する決心をして一八八〇年の始め無事に露西亞を逃げ出した。

四、獨逸での逮捕と露西亞への引渡し

一八八〇年に露西亞を逃げ出したドツチは、四年間を獨逸や瑞西で安穩に過した。彼は其間種々の學術的の研究を續け、傍ら露西亞國内に在る同志の革命運動に有力なる後援を與へた。一八八三年には有[illegible]露西亞の革命家フレカノフ、ヴエラ　ザソーウリイツチ、アツセルロード（彼等は全て當時瑞西に亡命してゐた）等の人々と協力して『勞働者解放聯盟』を組織した彼等の最初の事業は、露西亞語や獨逸語でマルクス主義の著作殊にパンフレツトを出版したり、新聞を發行して露西亞の勞働者の間にプロパガンダをする傍ら同志との聯絡をとることであつた。一八八四年三月、ドツチは澤山の出版物を携へてチユーリヒからバーデンのフライブルグに嚮ふて旅出つた。其本は露西亞の國境に近い獨逸の或る地點に運んで置いて、其所から露西亞に密輸入をする算段になつてゐた。

當時獨逸では社會主義　動が嚴重に禁遏せられてゐたので、社會民主黨の機關新聞『社會民主々義』は瑞西で印刷して獨逸に密輸入せられてゐた。それで、獨逸國境の文書檢閱は特に嚴重であつた。ドツチが泊つたフライブルグの宿屋の主人は、秘

ねて、警察から「何か印刷物らしい荷物を携帶して瑞西から來た者があつたら即刻届出るように」との命令を受けてゐた。ドッチと一つ緒に運ばれて來た木箱は普通の手荷物としては重量があり過ぎた。警察は密告を受けた。正式の令狀も無しに警察はドッチの荷物を檢閲し始めた。木箱の中からは社會主義に關する露西亞語のパンフレットや獨逸語の著書が澤山探し出された。ドッチは直ちに警察署に運行せられた。然し此本は獨逸に殘らないで露西亞に運ばれるものだといふ事が判明したので、ドッチは二三日拘留の上で釋放せらるゝか、或は少許の罰金を科せられる位ひの事ですみそうであつた。然し獨逸官憲には重大犯人ではないかとの懸念があつた。ドッチは其儘留置せられた。バーデンの官憲は綿密な取調べに着手した。ドッチはモスコウの學生でブリキンと謂ふ者だと名乘つてゐたが、それな名前は露西亞の官憲から通牒せられてゐた革命者の名簿に見當らなかつたので。ドッチの嫌疑は晴れそうになつた。ところが、まだ釋放されない前に瑞西から本もののブリギンの寫眞が送つて來た。此ブリギンと謂ふ男は、ドッチの親しい友達で、時々ドッチに旅行券を貸してくれた男であつた。露西亞の探偵は捕へられてゐるブリギンが實は逃亡囚人のドッチに相違ない事を探知し得たので、其報告に基いて露西亞政府は、ドッチが純然たる政事犯人である事を匿して、一八七六年の五月に探偵のゴリノウッチを殺害した普通の政事犯人としてドッチの引渡し方を獨逸政府に要求した。此詐稱は露西亞政府にとつては已むを得ない手段である。當時露獨兩國には國事犯人引渡し條約が締結せられてゐなかつたからである。

露西亞政府はドッチの引渡を要請した同一文書でドッチの共犯者たるチャコフ、ステファノヴィッチ等の引渡しをも要求した。實は此兩人はずつと前に露西亞で捕縛せられて或る鑛山で刑の執行を受けてゐたから、此虚僞の引渡し要求が何の目的の下に爲されたかは了解に苦しむ所であるが。察する所、露西亞政府は後日獨逸で捕縛せられた國事犯人があつた際に、兩人の名義を使つて引渡しを要求する下準備をしたものらしい。

ドッチ引取りの爲めに派遣せられた官吏はエム・ボグドノヴッチと云つた。此男はウーフアの知事をしてゐた時に起つた同盟罷業の參加者を數百名撃ち死した事件で有名になつた男で、一九〇二年の五月に革命黨員から暗殺せられた時は露西亞全土の喝采を受けた程の男である。當時彼は表向き檢事の職名を帶びてゐたが、實はペテログラート警察本部所屬の探偵であつた

ボゴダノヴワチは借物の勲章を澤山胸に飾つてゐた。此勲章に幻惑せられたフライブルグの警察署長は彼の言ふ事を能く信用して、政府に對して露西亞側に有利な報告をした。

バーデンの政府は、ドッチが正則の裁判に附せらるべき事、ゴリノヴッチ事件に關してのみ審問せらるべき事の二條件を附してドッチの引渡を承諾した。犯人は獨逸官憲の警護の下に露西亞の國境に向つてフライブルグを出發した。

五、挿話チューン教授の改宗

ドッチの引渡しに關連してフライブルグで起つた一挿話がある。此物語の本筋には餘り關係がないが、此挿話それ自身に興味があるからちよつと寄り道をする。

ドッチはフライブルグで捕縛せらるゝ前に一年半ばかりニコラス・クリンダーと謂ふ假名でバーセル大學に入學して、有名なチューン教授の經濟原論と統計學の講義を聽いたことがある教授は生れはライン人であつたが、ドルパトの大學で數年間在學してゐたから、露西亞語も話せるし、露西亞の事情にも通じてゐた。殊に露西亞の革命運動に興味を持つて種々苦心して材料を蒐集して居た。一八八三年には研究の結果を出版した。教授は自分の研究の材料を得る爲めにバーセル大學に在學する露西亞の留學生と親密に交際してゐた。ドッチも教授の家に度々出入してゐたおかげで歐羅巴諸國の露西亞革命黨員に對する態度の變化や政事犯人逮捕の計劃やに就いて樣子を聞き知る事が出來た。或時チューン教授が露西亞の革命運動に就いて公開の特別講演をしたことがあつた。教授は其の講演の一挿話として、ドッチ、ステフアノヴッチ、ボハノヴスキーの三人がキエフの監獄から逃亡した事件を述べ、三人の犯人は不幸にも未だ逮捕せられないから、確か、何處か外國に亡命してゐるに相違ないと思ふと附け加へた。ドッチは此講演會に出席してゐたが、其後教授に會つて此事件に就いて話をしてみた結果、ドッチは若しも此のニコラス・クリンダーと稱する露西亞の學生が重罪犯人のドッチだといふ事を識つたならば、教授は勿論自分の逮捕に就いて官憲を援助するに違ひないといふ心證を確かめ得たので其後教授には近づかないようにしてゐた。ドッチは間もなくバーセルを去つた。

ドッチがフライブルグで捕へられて審問を受くる爲めに法廷には入つて行つた時、彼は其所の通譯官席にチューン教授が居るのを見出して驚いた。法廷には教授の外に露西亞語の判る者

はゐなかつた。教授は露西亜語でドッチに話しかけた。教授が今はプリキンと詐稱してゐるドッチの本名を知つてゐる事、若しもドッチが逃げたいと思ふならば充分援助してやる事などを話してドッチを二度吃驚させた。クリッドナーが未だ瑞西に居る事や教授の私宅は國事犯人の隱匿所になつてゐる事などを話し、又自分が助くれば逃走は譯なく出來るから是非その氣になれと奬めたりした。然し逃走は出來なかつた。既に露西亜政府は此犯人が二度も脱獄したことのある男であることを獨逸官憲に注意したので充分に逃亡豫防の方法が講ぜられてゐたのである。それでドッチの逃亡は所詮不可能であつた。が、チユーン教授が革命黨員の一人となり、露西亜の革命黨員を援護してゐたことは疑ふ可らざる事實であつた。ドッチは此不可思議なチユーン教授の改宗を心中私かに驚いたのであつた。

六、露西亜政府の詐欺とドッチの審問

ドッチの引渡條件、即ちドッチを正式の裁判に附し、探偵ゴリノヴイッチの殺害事件のみに就いて審問するといふバーデン政府に對する露西亜政府の約束は全然反古にされた。ドッチは露西亜の國境に入るや否や憲兵隊の手に引渡され、純然たる政事犯人のみを收容することになつてゐるペーター、ポールの城砦に拘禁せられた。此事は當時の露西亜政府が外國と公式に締結した條約を如何に取扱つたかを識るに足る好適例である。ドッチが若しも普通裁判所で裁判せられるものとすれば、重くて七八年の西伯利亜流罪ぐらひのところに判決せらるゝ筈であるが。特別裁判所の裁判にかゝると、そんな輕易な事では濟まされない。ドッチは先づ私的の皇族會議の裁判に附せられた。會議では引渡條約の改定を獨逸政府に要求して、ドッチを死刑に處する方針をとらねばならぬと主張した者もあつたが、そんな事をしては外國政府の露西亜政府に對する信用を毀けるばかりでなく、將來に起る可き犯人引渡しに關して種々の故障が起る事が明瞭だからといふので、穩和說が勝利を占めてドッチはゴリノヴイッチが殺されたオデッサの監獄に一時留置せらるゝ事になつた。

ドッチはオデッサでは純然たる政事犯人として取扱はれた。露西亜政府は、何とかして、彼を政府犯として處分し度いと種々の苦心をした。勿論、普通の刑事犯と政治犯の裁判には本質的の差異がある。露西亜では普通の刑事犯は或法によつて取扱はれ、正規の公平な公の裁判を受くる特權を持つて居るが、

政治犯は全然法の保護を受けず、正式の裁判を受ける資格もない。唯行政上の取扱ひを受けるに過ぎない。政計はドッチを政事犯として處罰する口實を求めたが、適當な口實が見つからないので、犯人は其儘永く留置せられた。

ドッチは眞暗な獨房にたゝき込まれた。監房には寝具も無く便器すら與へられなかつた。夜となく、晝となく、大きな鼷鼠が部屋中を飛び廻るので夜もおち／＼眠れなかつた。彼は早く裁判をして何とか判決を與へてくれるやうに幾度となく願ひ出たが、全ての抗議と訴願は何の役にもたゝない。そこで彼は傳習的ではあるが餓死を圖る決心をした。彼は三日間食物を拒み續けた。此窮策は効果を現はした。竟にドッチは曾て義勇兵であつたといふ口實の下に軍事裁判に附せられる事になつた。裁判が正規なものでなかつた事は勿論である。ドッチは少しの抗辯も許されなかつた。ゴリノヴイッチを襲撃したのは、公訴狀に認められてあるような個人的の復讐でなくて全く政治上の性質を有するものであるといふ事に就いての彼の抗辯すら途中で中止せられた。獨逸との引渡條約によれば、ドッチが宣告せらる可き最長刑期は十三年四ケ月であつた。簡單で不正規な裁判に依て彼は此最長の刑期を言渡された。

七、西伯利亞への旅、驛々での悲慘な光景

ザーの銀山

ドッチが後日起稿した『シベリヤの十六年』の中に記されてある『十三年四ケ月』の刑の服役中の記述——彼の苦痛、困憊其他無數の悲劇に就いての——には他の政事囚人の經驗と大して違つた所はない。シベリヤの曠野を漂泊し行く囚人の行列、驛路や監獄に於ける悲慘な狀態、同盟飢餓、囚人の殉死等に關する種々の悲慘な物語は、既に度々私共が新聞雜誌に依て報道せられ、彼等の生活を實寫した寫眞や繪畫も周知の事ではあるが、然も、ドッチの『シベリヤの十六年』中に書き現はされてある樣な精密で如實なものは無いと云つていゝ。少しの虚僞も誇張もなく書き現はされたドッチの個人的の實感はシベリヤ流罪人の生活狀態を知るに最も適當な材料であると思ふから、少し面倒ではあるが、私はこゝに『シベリヤの十六年』の中のトムスクを起點とせるシベリヤ横斷記（キエフやモスコウの監獄に於ける種々の興味ある記述を除いて）の中から特に重要な點を拔萃する事にする、

『今、モスコウからトムスク迄の旅行は多少文明的であつた

が、これから先は驛から驛を辿つて全然徒歩で旅を續けねばならなかつた。恐ろしい程極寒の朝、鐵を溶かす様な灼熱の日、晴雨を論ぜず續けねばならぬ旅行の爲めに、百名を一隊とする囚人の群が規則的に毎週一定の日にトムスクの監獄から送り出された。彼等の一日の行程は大概十六哩から十二哩の間である。此龜の旅行の様な歩みで日を經、週を累ねて不攝生な旅が續いた。驛々に設けられた宿泊所の薄暗いじめじめした部屋は堪へきれない程の惡臭で充されてゐた。囚人達は

壁に沿ふて上下二列に並べられた木製の棚（それが寝臺である）の上に折り累なるようにして寝た。夜中は蚤や蝨に刺されて碌々眠られもしないのに、朝は未明に起きて、困難で不愉快な旅行を始めねばならない。まだ太陽が上らない前に囚人の分隊は庭に集まつて凍る様な寒氣の中に、震へながら點呼の濟むまで永い間立ち續けた上で、やつと行進の號令を受けた。行列の先頭には最も猛惡な重罪囚の一隊が立ち、いくらかの距離を置いて、其次に普通の男女の囚人の一隊が苦痛と鬪ひながら不規則な群をなして行進した。第三番目には病人や弱身の者やと荷馬車から成る一隊、殿りには二人か三人づゝ小ない箱馬車に押し込められた政事囚の一列が特別の監視を受けつゝ進行した。此奇怪な行列は三分の一哩ばかり續いて居たが、先頭から蹴り揚る砂埃の爲めに殿りの一隊は特に苦しんだ。其上吾々總てが惱まされたものはシベリヤ名物の蚊であつた。此恐ろしく猛惡な毒虫は、頭部や手を猛烈に襲撃して、口、鼻、耳、穴といふ穴に潜り込んでは容赦なしに毒汁を注ぎかけた。着物の下に浸入せられたが最後、吾々の全身は忽ち眞赤な斑點で塗り潰された。此蚊軍の襲撃を防ぐ唯一の手段は、馬の毛で造つた手製の頭巾と手袋とであつた。

最初の五哩ばかりを進んだ時分、森の木陰や流れの畔に休んで、一塊の乾ききつたパンと素水とで朝食を喰つた。私達は毎日旅程に應じて一日五ペックから十二コペックまでの手當金を貰つた。それで私達は一日の食事をしなければならない。然し囚人達は大概其金を最後の一錢まで賭博に使つた。そうして彼等は饑へた。彼等の自己救濟の唯一の手段は乞食である。囚人達は兵士に看視せられながら行く村々の戸口に立つて食物を乞ふた。彼等は帽子をたゝいて拍子をとりながら憫れな小唄を歌ふた。シベリヤの女達は是等の乞喰兒にパンの切れ端しを投げ與へた。途中で出會つた旅の者も幾何かの

穀物を乞食の一隊に與へた。これ等の食物が晝食や夕食として囚人達に配られた。

『暫時休んだ上で行列は進行を命ぜられて、暑くならないうちに驛に到着するようにと途を急いだ。宿泊所が見え出すと先頭の部隊は駈け出した。彼等は入口が開かれるや否や宿泊所に突入して、少しでも良い寢場所を占領する爲めに入口の所でわい／＼と喚きながら押し合つた。弱い者は强い者の爲めに押し除けられ、突き飛ばされた。私が此の狹い入口での格鬪を始めてみた時は、怪我人が出わしまいかを惧れたのであつたが、此の押す、蹴る、擲るの騷動も不思議に負傷者を出さないで、囚人全部が無事には入る事が出來た。然しこんなにまでしては入つた部屋の中は、埃と臭氣と騷音と雜沓とで、まるで、地上の地獄そのものであつた。

『政事囚には特別な部屋が與へられた。宿泊所に到着してからの第一の私共政事囚の任務は、婦人や子供の爲めに敷布や毛布を掃除してやる事であつた。近親の人々と一つ緒ではあつたが、若い娘達は人一倍の苦勞があつた。私は兵士と共に是等の憫れな娘達の爲めに出來るだけ廣い寢所を作つてやつた。私共政事囚は比較的優遇せられたが、永い間朝寢の習慣をもつてゐる私共には、暗いうちから起されるのが何よりも苦痛であつた』

ドウチ等の旅行の途上暫く滯在してゐたネルチンスクの監獄の生活に就いて彼は次の樣に述べて居る。

『私はあのネルチンスクの監獄の悲慘な囚人の生活を永久に忘れる事は出來ない。私は或晩此の監獄の廊下の一隅に立つた薄暗くはあるが、其所からは澤山の囚人達が眠つてゐる各監房が一と目で見られる。夜は闌けてゐた。彼等は木造の寢台——壁に沿ふて平行してゐる二枚の長い——棚の上ばかりで無く、床板の上にまでも。足の踏み所もない程にぎつしりと目白押しに寢てゐた。大抵の男は襯衣と股引きのまゝで不潔な床板の上に何も敷かないで、寢て居る。中には股引きだけで寢てゐる者もあつた。惡性の臭氣が息詰る程部屋や廊下に溢り溢れてゐた。所々に置かれた木桶はどれも皆一つ杯になつて、溢ふれ出た糞尿が床の上を流れてゐた。大概は眠つてゐたが、床の上や部屋の隅に集つて、カードを賭けてゐる五六人の群が蠢めいてゐるのが見られた。唯も意識的に話しをする者はなかつた。然し建物中には一種名狀し難い氣味の惡い騷音が漲つてゐた。人か獸か。私は覺えず戰慄した。』

ネルチンスクは「ネルチンスクの銀鑛」を以て有名な土地である。過去二世紀以來此銀鑛はザーの私有財產であつたから、計上し得られない程の莫大な富をロマノフ家に與へてゐる。シベリヤの農民は永い間無報酬で強制的に此銀鑛で働かされた。一七二二年から政府は刑事囚を歐羅巴露西亞から送つて發掘にめた。一八六三年に波蘭人の叛亂があつてからは三年間に一萬從事せし八千六百二十三人以上の波蘭人がシベリヤに流された此内約七千人（其内には四千二百五十二人の波蘭貴族がゐた）は懲役に處せられて他の政事囚と共に此銀鑛で働かされた。斯くの如く、無報酬の勞働によつてザーは數千萬圓私有財產を增加したけれども、勞働者　生產者はその疲れきつた身體を橫たゆべき監獄の不潔な床板の上に、手足を充分伸ばして寢るに足る場所すらも與へられないのである。

八、カラの悲劇－同盟饑餓、毒藥自殺－監獄からの釋放

一八八五年の十二月二十四日ドッチはウスト・カラに到着した此所が彼の旅行の最終點であり、又十三年四ケ月の永い刑期を過さねばならない土地である。彼がフライブルグで捕はれてから既に二十二ケ月が過ぎた。彼は其間にフライブルグからペテログラード、オデッサ、モスコウ、トムスクと、數千哩の窮屈な汽車旅行を爲し、トムスク以來八千哩以上の徒步旅行を強制せられ、百以上の監獄に泊り、あらゆる辛酸と勞苦を嘗めた大理想――社會改造の聖業に對する燃ゆるが如き信念と情熱の刺戟なき者には、到底堪へ得る困難ではなかつた。此の人間最大の苦難、彼は前途に望む光明と人類愛の熱情とによつて忍び來つた。

ドッチはカラの囚人植民地で世界を驚歎せしむる壯烈な英雄的行動を爲した澤山の男女の政事犯人を觀た。彼の口吻に從へば『此所には、少しの誇張もなく、眞實に露西亞の華と謳はるべき社會の各階級の人々が犯罪人と稱せられて流されて居た。鐵の如き性格を有てる男、最高、道德の典型、柔和善良なる淑女輝ける天才的叡智と能力の持主他の立憲國に於ては政治上科學上文藝上其他の文化的事業の最善の指導者たるべき運命を持てる男女が澤山ゐた。此所で彼等は多幸なる可き生涯の最初の芽を摘みとられ、能力と體力とを疲弊させた。そうして彼等の大多數は黑鬼の鞭にさいなまれつゝ或は發狂し、或は自殺して輸雖の短かい一生を終つた。』ドッチはカラにおける監獄生活の叙

獄に於て、彼等の內的生活、官憲と囚人との衝突、其他彼の永い服務中に起つた樣々な悲劇を物語つて居るが、此所にはそれ等の事件を一々紹介する紙幅が無い。私は其中の最も悲慘な同盟饑餓に就いて述べる。

事件の發端

時は一八八八年である。或日此所の州知事コルフ男爵がカラの監獄を巡視した。其時庭の木蔭のベンチに腰掛けて編物をしてゐた女囚のエリザベス・ロヴアールスカヤは、知事が彼女の前を通り去る時、起立して敬意を表しようともしないで、せつせと編物の手を動かしてゐた。彼等露西亞の政事犯人達は當時の政府及び其官吏に對して共道德的權威を否認してゐたから、政府の官吏に對して特に敬禮する必要がないと此女囚は考へてゐた。此際コルフ男爵にとつて最も賢明なやり方は、我儘な女囚と同樣にそしらぬ顏をして無言で行き過ぐる事である。然し男爵は不幸にして露西亞官僚氣質の持主の一人であつた。

『私は此內で最高の官吏だぞ。おい女、立ち上つて敬禮をしないか、……』

男爵はせきこんで怒鳴つた。コヴアールスカヤは腰かけたままで、靜かに、少しの嘲弄の意味も含めないで

『私は露西亞の國民ですけれども、貴下をそんな位の高い官吏にした事には少しの關係もないのでわ……』と答へた。

此場合に於ける此簡單な言葉には、年若い女囚の胸に充ち滿ちてゐた反抗の心の全量が包まれてゐた。男爵はそれを聞くと眞紅になつて怒つた。其結果彼女はヴエルクニー・ウヂンスクの中央監獄に移される事になつた。知事は彼女を其政友から引離してやる事によつて自分の受けた侮辱に對する復讐をしようと考へたのである。

コヴアルスカヤはカラの監獄に飽き果てゝゐたので心の裡では此移官を喜んだ。然し典獄はそんなことを知らないので、譯もなく彼女や仲間の反抗を惧れた。それで典獄は皆の囚人が熟睡した刻限を見はからつて、突然、眞夜中に、彼女の監房に憲兵と看守とを侵入させて、寢衣のまゝの女囚を廊下に引き摺り出した。彼女のけたゝましい叫び聲に深夜の夢を破られた同じ棟にゐた女囚達が驅けつけて來た。彼女はすぐもとの監房に歸された。女囚達は翌日自身達の仲間を凌辱した獄吏に對する抗議として一同で同盟饑餓をする決議をした。

政治犯女囚の企てた同盟饑餓が、全露西亞を震憾し、典獄に對する猛烈な詰責の輿論を喚起する事は明瞭であつた。典獄は

種々の斡解を試みて彼女等の斷食を止めさせるように苦心したが女囚達は典獄が資を負ふ迄は此同盟飢餓を繼續する決心を表白して、辭任か轉任かの何れかを選ぶように典獄と知事とに要求した。典獄は轉任を承諾した。女囚達は若し期限の到來する迄に此約を果さないならば復た直ちに斷食を始める旨を宣言して一時同盟を解いた。約束の期附は來たが典獄は轉任しない。女囚達は復た同盟飢餓を始めた。此時の人數は七人、總て政事犯人であつた。

女囚の監獄は男囚の監獄から十二哩ばかり離れた所に在つたが、兩つの監獄の間には樣々の手段で通信が取り交はされてゐた。女囚の同盟飢餓の報が男囚に傳はると、彼等も亦同盟飢餓をして女囚を應援する事になつた。女囚が斷食を始めてから第三日目に、女囚監、典獄は一週間以内にカラを引き拂ふ事を約束した。男女の囚人 直ちに斷食を罷めた。此度の女囚の斷食は實に八日間に及んで居たのである。

然し時日は徒らに經過した。典獄は轉任しない。女囚達は必死の覺悟で第三回目の同盟飢餓を決議した。

女囚の中の一人であるシギダ夫人は、仲間の者を自殺から救ふ爲めに自ら犧牲になる決心を定めた。夫人は個人的の私用の名目で典獄に會見を申込んだ。夫人は許るされて典獄の室には入つて行やく否や、憲兵や看守等の澤山ゐる前で、つか〳〵と典獄に近づいて行つて其横面を渾身の力で毆りつけながら叫んだ。

『これが典獄たる貴方への私の贈物です』囚人に凌辱せられた典獄はきつと他の監獄に轉任させられる習慣になつてゐた。其代り凌辱を加へた女囚は殺されなければならない。シギダ夫人は死刑を覺悟したのである。

此襲撃の後に直ちに女囚達の斷食が始まつた。十六日間誰も食物を峻拒した。彼女等の衰弱は日に日に加はつて、行つて、今は死が眼前に迫つて來た。典獄も知事も困り果てた。斷食が始つてから十六日目の晩。知事は典獄は轉任させないが、其の代り女囚達を他の監獄に移管する旨を通告した。此通告によつて其翌朝から女囚達は食事を始めた。

毒藥自殺

平和は半日も續かなかつた。他の恐ろしい暴風を監獄に起す新たな通告が政事犯の女囚に與へられた。それは、飢餓同盟に對する罰料として彼女等を笞刑に處する知事の命令である。笞刑は囚人に對する罰料のうちでも最大の凌辱であつた。女囚達は如何なる犧牲を拂つても此の凌辱から免ればならないと決

心した。然し彼女達の衰弱しきつた體力では到底積極的な反抗を企て得ない事が明瞭であつた。よし僅かばかりの抵抗をした所が結局笞刑を逃れる見込は毛頭ない。皆は全く失望の極に達した。男女の囚人の間には、獄吏達が此凌辱を女囚に加へる前に、男女共に毒藥自殺を圖る外はないといふ提議に關しての協議が始つた。此評議がまだ纏まらないうちに、典獄を擲つた咎によつてシギダ夫人か先づ笞刑に處せられた。斷食の爲めに憔悴しきつてゐた夫人は、殘忍な笞刑を受けた翌日死んで仕舞つた。他の女囚達も數回の斷食が齎らした衰弱から恢復し得る見込が無いので、マリー・コヴアレヴスカヤ、マリー・カルユシユヤナナデスダ・スミルニチユカヤといふ三人の女囚は。毒藥を呷いで、殆んど同時に監獄内の病舍で死んだ。此悲報が男囚の監獄に傳はつたので、彼等も今は躊躇すべきではないといふので、女囚の例に倣ふ事を協定した。當時男囚の監獄には三十九人の政事囚が居たが、愈々自殺の決心をした者は十七人であつた。彼等は樣々の手段を講じて監獄外から阿片とモルヒネを手に入れた。或夜、點檢が濟んで仕舞つてから監獄の一隔に悲痛な訣別の小唄の獨唱が始まつた。唄が終らないうちに各房にゐた十七人が一齊に毒藥を嚥んだ。

其凄慘な情景(シーン)は文字に現はすには餘りに深刻である。人類の歷史あつて以來、斯る慘事を充分に筆にし得た人はゐない。ド・ウチは次の樣に敍述してゐる。

『私は思ふ所があつて毒藥を嚥まなかつたが、此共同自殺事件に就いて後日の證人になる爲めに自殺の模樣を精密に觀察しなければならない役目を引受けた私の苦痛は、自殺の苦痛よりは遙かに深刻であつた。私は此痛ましい慘狀にうたれて、間もなく數回の眩暈と猛烈な頭痛に襲はれた。醫師も私を診察して服毒者と同一の症候が現はれてゐると云つた位である。

『私の仲間は自殺の目的を達する事が出來なかつた。其時服用した阿片は、古くなつてゐたり。混入物があつたりしたので人を殺す程の力がなかつたのである。不幸な兄弟達は翌朝胸腔を掻き捲られる樣な痛苦の中に醒めた。然し失敗は彼等の決心を鈍らさない。十七人のうち三人だけは自殺を思ひ止つたが、殘りの十四人は更に強烈な死藥―モルヒネを嚥む決心をした。

『翌日の夕方死の情景(シーン)が再び展開せられた。死の苦しみを眼前に見ながら憫れな兄弟達を扶ける事の出來ない同監者の苦痛は何に譬へん樣もない。此時の生存者ほど慘酷な境遇に置かれた者はない。然しモルヒネも亦風化してゐた。服藥者は強烈な

苦痛を甞めたにも拘らず今度も亦死きれなかつた。彼等のうちボマホヴとカルユシユニイとの二人は各々三倍の分量を嚥んだので、服藥すると間もなく人事不省に陷つたが、ボボホヴは夜中に今一度眼を開いた。彼は傍に仆れてゐるカルユシユニイの咽喉が渇ききつてゴロ〳〵鳴つてゐるのを聞いたので、いざり寄つて彼を抱き起して、氣絶してゐる友達の身體を二三度、激しく搖り動かしてみたが、友達は醒めさうにもなかつた。ボボホヴは殘つてゐた阿片を大摑みに摑んで渾身の力を咽喉に集めて、噎びながら呑み下した。カルユシユニイの傍にその儘仆れた彼の眼はもう永久に閉された」。

「翌朝憲兵と看守が巡視の時まだ息の通つてゐるらしい二人を見つけた。醫師が來て應急の手當を加へたが、カルユシユニイは其夕方。ボマホヴは其翌朝絕命して仕舞つた。二人の屍は埋葬地に運ばれて、曩に死んだ四人の女囚達の墓に並んで埋葬せられた。憫れな六人の犧牲者の墓標は每日生き永らへた兄弟の淚に洗はれて寂しく監獄に近い小丘の上に立つてゐる」

此悲劇のあつたのは一八八九年の晩秋であつた。女囚に對する**肉體上の刑罰は中止せられた。**

××××××

一八九〇年の末にドッチは他の政治犯と共に監獄から出されてそれからはカラの囚人植民地で勞働する事になつた。植民囚人には幾分かの自由が許される。ドッチは每朝監視人が持つて來る帳簿にサインさへすれば、八哩以內は植民地を離れる事もでき、また何でも好きな仕事に從事する事が許された。

ニコラス二世の卽位の際に發布せられた政治犯に對する一般大赦令に依て、ドッチは刑期の三分の一を免ぜられた結果、殘り十數ケ月を服役すればいゝ事になつたが、此大赦令とは別に此囚人植民地域內に適用せらるゝ知事の布令に依てドッチ全刑期を免せられたので、カラの植民地を退去してもいゝ事になつたが、其代り彼は尙ほ十年間何處に居ても一般の免囚と同樣に監獄官の看視を受けなければならなかつた。彼は個人的の理由を構へて、カラ傍近に居殘ることにした。

×××

一八九六年の末から同七年の春の始めにかけて、ドッチは當時露西亞一般に施行せられた全國人口調査の地方部の事務擔保を命ぜられた。此調査に從事してゐる間の種々の興味ある經驗が**語られて居るが玆には省略する。**

一八九七年の五月二日にドッチは知事の許可を得てカラの地

を去り、アムール河の支流シルカ川の沿岸にあるストレトエンスクの村や町を轉々してゐた。彼は其所で敷設中の西伯利亞鐵道に關係ある或職務に就いた。其所の住民達は「驚く可き貪婪と富みに對する强烈な欲望」に燃えてゐた。詐欺、窃盗、其他の物財に關する總ゆる不正不義が白晝公然と行はれ、官吏の無責任と專恣とは益々人民の道徳的墮落を助長してゐた。而して官吏も亦短日月間に莫大な蓄財をしてゐるのを見ると、ドッチの清廉な心はたまらなく不快にされた。彼は復た許可を得て近世史上の暗黑舞臺と謂はれるブラゴエチエンスクに移り住んだ

九、アムール河畔の大虐殺

ドッチが一八九九年の秋ブラゴエチエンスクに到着した時は一九〇〇年の七月まで續いた武裝しない數千の支那人の大虐殺が起る少し前であつた。

ブラゴエチエンスクはアムール州に於ける都會らしい唯一の町で當時人口三萬八千、東部西伯利亞での大都である。此町の場末には支那人町があつた。露西亞人に雇用せられたり、共同して商賣を營んでゐる支那人も澤山ゐた。アームルを挾んでブ市の對岸にサハレンの支那人植民地が在る。支那の植民はボートヤジヤンクまでブ市と交通してブ市に食糧品を供給してゐた。

一九〇〇年明治三十三年の春の始め頃までは露支兩國間は平穩無事であつたが、間もなく支那に義和團事件が起つて支那と各國との間に紛爭が生じ間もなく支那と各國との間に戰爭が起つた。此戰爭に參加した露西亞政府がシベリヤの駐屯軍を動員する事になつたので、此アムール河畔に對峙する露支の植民地にも今にも戰爭が起りそうな風雲が動き始めた。アムールの知事はブラゴエチエンスクに駐屯してゐた守備隊の大半を移動せしむる命令を發した。軍隊は數艘の御用端艇でアムールの下流に移送される事になつた。端艇が支那植民地の前面を通過しようとする際であつた、突然何の豫告もなく支那人は此ボートに砲撃を加へて、端艇の引返しを要求した。ブ市の市民は此豫期しなかつた戰鬪開始に愕然色を失ふたが、市長は守備隊長と協力して義勇兵を募集して一軍團を組織し、アムール州の軍司令官グルヴスキー將軍に向つてブ市及び其近傍に在住する支那人襲撃の命令を與へて貰らい度いと申達した。然しグ將軍の返事は、まだ露支兩國間に公然の宣戰布告が無いから今支那人を襲撃する事は不正で不穩當である。といふ事であつた。支那住民の方でも亦グ將軍に對して支那人は露領地域内から直ちに撤退

する必要があるか、どうかを訊ねたが、將軍は非戰鬪員たる外國人には絶對に危害を及ぼさないから安心して業務に從事するように支那人側に回答すると同時に、若し平和的な支那人に對して危害を加へた者は嚴罰に處すべき旨を露西亞人側に布告した。然し此回答並びに布告が到達した日の午後二時頃、ブ市の市民は對岸からの二三發の砲擊を受けて不意討を喰つたが、幸にも支那人の射擊が拙劣であつた爲めに、砲彈は空しくアムール河の水を騷がせたに過ぎなかつた。此支那人の突然の砲擊に酬ゆる大虐殺が起つた。其模樣はドッチの記述を借りる。

「支那人町には商人や勞働者としてブ市の爲めに必要な支那人や滿洲人が住んでゐた。彼等は多く正直で、從順で、且つ勤勉であつたから露西亞人は信用して彼等を使つたり、又彼等と取引したりしてゐた。若い支那人を家僕として雇入れてゐた多くの露西亞の家庭では、支那人を殆んど家族同樣に待遇して、閑々には露西語を敎へたり、裁縫などを敎へてやる家もあつた。ブ市の支那人はグ將軍の誓約と布令とに信頼しきつて、支那植民地とブ市との間の紛爭が起つてからも依然としてブ市に從つてゐた。然し彼等は間もなく其忠信を後悔しなければならなかつた。

「砲擊が始つてから第二日目に將局の士官に指揮せられた徒歩のコサック兵と警官とがブ全市に亘つて各戸毎に住み込みの支那人を豎束し始めた。雇主なる露西亞人が「何の爲めにそんな事をするか」と訊ねると、警察に連行して一時監視するまでの事だと何氣無い返事をしてゐたが、どうせ好い事でないに極つて居ると思つたので、多くの家では倉庫や地下室に支那人の婢僕を隱匿した。官憲の搜索は嚴重であつた。鞭や劍で脅迫されて多くの家庭では已を得ず支那人を引渡した。此搜索は五日間で一と先づ終了した。支那人は此不意打ちに周章狼狽したが施す可き手段をなかつた。彼等の或者はさゝやかな荷物を自分で警察に持つて行つた。或者は露西亞人たる主人に自分の財産の保管を依賴し、或は借金の免除を債權者に哀願し、或者は高價な貨物を蓄へてゐる住宅や店舖の自由處分を其の歐羅巴人の友人に賴んだりした。「警察に連行さる彼等の顏は名狀し難い苦痛を現はし、其眼は限りもなき哀愁の涙を湛へてゐた。彼等にはグ將軍の不信を憤る力もなかつた。或者は自分達の悲運を豫想して「私共は皆殺されて仕舞ふのでしようか」と、コサック兵に小聲で訊ねてゐた。コザック兵の取扱が如何に冷酷であつたかは想像に難くない。

彼等は荒れ狂ふ劫火の如くに無意味に無辜な支那人を殺戮した。彼の中世紀のスペインに於けるユダヤ人やムア人やの異教徒の虐殺の他には、文に記すような平和な人間の大虐殺は未だ曾て世界の何處にも行はれた事はない。

支那人の溺死

ブ市から二三十町距つたアムール河の上流の右岸にコサック兵の駐屯所がある。或日の日出前に捕虜になつた數千人の支那人はコサック兵や警官に追ひたてられて此駐屯所の前の河岸に連れ出された。中には老人や癈人や病人や女や子供が澤山ゐた。病氣や老衰の爲めに遠く歩行の出來ない者は、途中でコサック兵の銃劍で衝き飛ばされて、道側に仆れ死んだ。支那人の或る大商店リー・ワンチヤンの支配人の一人は、進行を拒んで、露領内に住居する非戰鬪員を安全に保護する事を吾等支那人側の委員に誓約した知事やグ將軍の前に連れて行つて對決させてくれるようコサック兵に要請した。然しコサック兵は彼に一言の答へもしないで其場で彼を叩き殺した。それを觀てゐた警察署長は此不法行爲に對して一言の抗議も云はない。

「憐れな支那人の群が駐屯所の前の河岸に追ひ下ろされた。コサック兵の隊長は「此河を泳ぎ切つて支那植民地に渡れ」と命令した。此地點に於けるアムールの川幅は三分の一哩ばかりある。然も流れは強く大きく渦巻いてゐる。「游ぎ渡れ」とは「溺れて死ね」との命令である。此苛酷な命令を受けた捕虜は色を失つて戰慄した。彼等は跪いて、兩手を高く天に差しのべながら、或は胸の上に兩手を緊りと握りしめながら此慘刑を赦してくれることを口々に哀願した。多くの者は基督教に改宗して露西亞に歸化する事を誓つた。然しものゝ哀れを知らない此命令の遂行者が此無援の哀願者に與へた答へは銃劍であり、ライフル銃の臺尻やコサック兵の長鞭での打擲であつた。擲りつけられ、蹴飛ばされ、押し倒されて支那人は段々河の深みに身を沈めて行つた。いやがる者は胴を突き刺されたり、腦天を打ち破られたりして、水中に投げ込まれた。」

「夫婦と子供と四人の滿洲人の家族とがあつた。兩親は水には入る時、各々一人づゝ子供を抱いてゐたが、水が深まるにつれて子供を片手で高く差上げながら游ぎ始めた。然し一二間も進まないうちに母親は子供といつしよに渦に卷き込まれて仕舞つた。それを援けようとした父親も、覺悟をしたもの

か、力の限りに子供を岸の方に投げ飛ばして置いて沈んでた子供は岸には屆かないで途中で水の中に落ちた。一人の母親は殺戮者の前に跪いて、懐の乳房に縋り着いてゐる幼児を引き取つて育てゝくれるようにと頼み廻つたが、誰一人口をきく者すらなかつた。母親は決心して子供を岸の草叢に寢せて置いて一人で水中には入つて行きかけたが、五六歩行つて、引き返して來て、子供を抱いて、水中に歩み入つた。然し水が胸あたりの高さに屆くと。身慄ひしながら復た岸に取つて返して一人のコサツク兵の足下に其子供を寢せながら一生懸命で命乞ひをした。此情景すらもコサツク兵の涙には値しなかなつた。彼は銃劍で母子二人を重ねて衝き差して仕舞つた。斯のような殘忍な場面を誰も涙なしには想像し得るものではない。警察署長のシャベノプさへも、あの恐ろしい光景を最後まで觀るに忍びないで、途中から逃げ歸つたと、後日話したくらひである。

『游泳の達者な者で向ふ岸まで游ぎ着いた者が二三人ゐたが彼等が水際を離れる前にコサツク兵の銃丸が背後から雨の樣に浴びせかけられた。

『七月十七日の朝、澤山の屍がアムール河を流れ下るのを觀つけたブ市の人々は、知事や司令官に安全を保障せられた非戰闘員の支那人がコサツク兵に虐殺せられて仕舞つた事を知つた。一般市民、殊に正しい考へを持てる人々は、此慘狀を觀て、知事の不信とコサツク兵の殘忍とに對して燃えるが如き憤怒を感ぜざるを得なかつた。其後恐るべき慘話が人々の口から口へ涙と戰慄とを以て語り傳へらるゝに及んで、市民の有志者は此非人道的な虐殺と當局の欺妄に對して政府に抗議する爲めに協議會を開いたが、然し此日――七月十七日――ブ市郡方一帶に戒嚴令が布かれたので、政府に對する抗議、も沙汰止みになつた。唯、此時まで支那人の婢僕を自宅に隱匿してゐた人々のみが、個別的に、是等の支那人の身柄を保證して助命を願ひ出た。然し殺されずにすんだ者は官憲との間に特別の關係を有する少數者の庇護を受けた支那人のみであつた。

『ブ市で有力な商人のマケエバ夫人は、五年間忠實に自分の家に仕へた支那人を何とかして助けたいものだと思つて、僧正の援助を願ひ出た。夫人が既に永い前から基督教を信じてゐた忠實な下僕を助ける爲めに正式に洗禮を授けてくれるようにと懇望すると、僧正は「貴女が特定の支那人の爲めに命

乞ひをされる事は貴女御自身のお爲めになりますまいよ」と云つて之れを拒んだ。夫人は僧正の卑怯を衷心から輕蔑せずには居れなかつた。夫人は更らにグ將軍に直接下僕の助命を乞ふた。夫人の言葉が終らないうちに、「何、支那人ですつて？」將軍は叫んだ而して兩手で自分の咽喉を摑みながら「これが私達の一切の支那人に對する態度ですよ」と云つた。夫人が更らに將軍の食言を詰責すると「あの溺死や虐殺に私は何の責任もありません。あれは警察署長とボルコヴイルスキイ大尉に全責任があるのです、」と、責任を轉嫁して取り合はなかつた。

「彼等不正なる官僚と軍人とは此慘虐を正當ずける爲めに種々に苦心して虛僞の報告書を政府に送つた。中には支那人は露西亞人の大虐殺を計畫して、澤山のダイナマイトを製造したゐたなどと全然痕跡のない事を書いた報告書もあつた。殺戮せられた支那人が殘して置いた澤山の財產は警官やコサツク兵に掠奪せられた。署長や士官は下僚に命じて公然と是等の財貨を沒收して私有物にした。銀行は支那人の預金を基本金に繰り入れた。是等の掠奪に就いてドッチは詳しく實例を擧げてゐるが此所には簡單に紹介する。

「ある地主で蒸汽製粉所の持主であつたブヤノフは農園や工場に澤山の支那人を使用してゐたが、彼等が溺死すると其財產全部を橫領して、隣人の眼につかない地下室にそれを隱匿した。同じブヤノフと謂ふ彼の從弟は以前同居したことのある支那人の雜貨店の店舖と自分の住宅との間に隧道を造つて支那人の店の品物を殘らず自宅に運び込んで仕舞つた。是等の實例を擧ぐれば際限はない。後日是等の橫領は發覺せられたけれども決して表沙汰にはならない。警官やコサツク兵には是等の犯罪者の罪蹟を庇ふてやることが自分達に有利だつたからである。又支那人町に在つた數百の店舖と倉庫には幾百ルーブルの財貨が蓄へられてゐたが、所有主が溺死してからは暫時警察の監視の下に置かれてあつた。然し是等の財實も何時の間にか行方が不明になつた。警察署長は自分が監埋してゐた是等の品物のうちの最も高價な物を荷車數臺で自宅に運んだので、後日裁判に附せられたが、署長は罰科を受けないばかりか、依然として其他位に止つてゐた。

「數日の間、毎日毎日、支那人の死體がアムールを流れ下つて行つた。河中に揚がつた屍は數へきれない程澤山あつた。此前代未聞とも謂ふ可き大虐殺に對する報告は全部が虛僞そ

のものであつたと云つてもいゝ。アムール・ガセツトは此事件を報道するに左の簡單な數語を以てした。「露西亞領内に居住する支那人は對岸に退去すべしとの官憲の命に從つて、勇敢にも河を游ぎ渡つて對岸に避難した」。アムール州の知事グロデコフはペテルブルグの長官に次の如く報告した。「支那人側からの砲擊によつて開始せられた戰鬪の場合に死傷した支那人は全てアムール河中に投じたが、其數は約四十人である」。又他の公文の報告書には「激戰があつたとか、多數の支那人が虐殺せられたとい謂ふことは皆虚報である。只混雜の際少數の女や子供が溺死したに過ぎない」と、記されてある。澤山の支那軍隊を少數の手兵で擊破したと報告したカノノヴチッチ大佐は其勳功によつて高級の勳章を貰つたが、大佐が文書中に指摘した地點では、たつた二名の日本の醜業婦が凌辱せられた上で殺されてゐたに過ぎなかつた事が後日明瞭に立證せられた。是等の報告を基礎にした露西亞の歴史が如何に記述せられてあるかは、讀者の推測に委せる。」

××××

九月三日步兵とコサック騎兵の一隊はアムール河を渡つてサハレンを占領して、支那人の植民地に火を放つた二日二夜に亘つて。遠くの下流まで火焔が反映してゐた。數日の後にはブホの住民の大部分に食糧を供給して繁榮してゐた支那植民地には黒焦になつた柱と崩れ落ちた壁の外何物も殘らなかつた。露西亞の軍隊はサガレン州一帶は勿論廣く滿洲全土に侵入して行つたが、其行程は燃え上る滿州人の住宅の火焔に依つて明かに知られた。露西亞軍の進軍する所。何物に限らず燒き拂はれ、人といふ人は老幼男女を問はず斬殺せられた。若い女は凌辱せられて、屍は黒燒にされた。斯くの如き文明人と稱する蠻人を呼稱するに、知事のグロデコフは「吾が勇敢なる英雄」と呼び、其行動は「賞讚の言葉なき程勇壯」であると政府に報告した。

富有で稠密な人口を持てゐた町や村は數ヶ月の後には焦土と化し、到る所に廢墟が見られた。露西亞兵の足跡の及ぶ所、如何なる肥沃の地も忽ち化して不毛の荒地となつた。人は野生の大根のように斬り殺され、其屍は狼や兀鷹の餌として曠野に晒された。

でドッチは次の如き言葉で此大虐殺の記事を結んで居る。

「全て是等の露西亞軍の暴虐なる武功（？）は、直接間接に政府によつて是認せられ、賞讚せられた。此非人道的行動も何等の加罰なしに進行した。然し眞理と正義とは露西亞に於

てすら此非行を許さない。グ將軍は彼の部下の非違の行動（實は將軍自身の命令を實行したに過ぎない）に關する責任上裁判を受けて所罰せられた。又新聞紙は後日次の如く報道した。「ブ市の警察署長は三ケ月の輕禁錮に處せられた。それは一萬乃至一萬五千人の武裝しない支那人を溺死せしめ、斬殺し、又は銃殺した爲めである」。然し其刑は完全に執行せられたか、どうかは誰も知る者がない。」

一〇、西伯利亞からの逃亡、外國への亡命、

私はドッチに關する記述の結果を急がねばならない。

上述の大虐殺の後、支那人の亡靈に嚇かさるゝ苦痛に堪へかねて良心ある市民は次第にブ市を去つた。ドッチは監視期間が滿了して居ないので無斷で西伯利亞を去る事が出來なかつたので、第三回目の逃走を企てゝ準備の完成をまつて一九〇一年の春、浦鹽斯德に向つて密かにブ市を去つた。彼は浦鹽斯德から日本に渡り、更らに北米合衆國を經て歐羅巴に渡る計劃を立てた。此逃走は成功した。ブ市を退去した彼は巧な變裝に信頼して、ニコリスク・ウスリスク州の或町に暫時滯在して健康の恢復を圖つた。此時此地方には日本との戰爭の準備をして澤山の軍隊が駐屯してゐた。各所に軍隊の假宿舍が兵士によつて建てられてゐた。露西亞政府は息を凝らして日露開戰の時機の到來を待ち詫びてゐたのである。然し此時分までは日本では此露西亞の戰備に就いて少しも探知してゐなかつた。

長崎に航行する一汽船に乘込んだ時、ドッチはホッと廿年來の溜息を吐いた。

長崎の滯在は永くなかつたが、美はしい自然の慰籍と安穩な生活によつてドッチの英氣は充分に恢復した。彼は長崎から太洋を渡り米大陸と太平洋を横ぎつて一九〇一年の歳末に歐羅巴の土を踏んだ。それから數年間彼は歐羅巴の各地に轉々しつゝ倍舊の熱心を以て露西亞民生の解放運動を援助した。

日露戰爭は露西亞の解放運動の一轉機であつた。一九〇五年の十月ザーは憲法を發布した。各國に散在した革命家は大赦を受けて安全に露西亞に歸つた。ドッチも形式的には明瞭に言論と結社の自由の許されたザーの憲法を信頼して十二年振りで懷しい故郷の土を踏んだ。然しザーの宣言は相變らずの欺妄であつた。或者は入露と共に捕はれて復た西伯利亞の曠野に送られた。ドッチも一九〇六年の正月全く豫期しなかつた捕縛を受けて、

彼にはファミリアーなペーター・ポルの城砦へ投げ込まれた。半年ばかりの出閉の後、彼は仲間の者と一つ緒に極北に在るツルカンスクの最惡の植民地に移されることになつた。今度はもう二度と歐羅巴露西亞の土を踏むことはあるまいと思はれた。彼の仲間の者は皆釋放の時の到來に全然望みを絶つた。然し吾がドッチは少しも不撓不屈の精神を失はない。彼は旅行の途上で逃走する決心をして、心中竊かに好機會を窺つてゐた。ドッチは自的地への途上にある小都エニセイスクで巧に好機を捉へた。此所からツルカンスクまでは一千哩以上の道程があるが、其間に買物をする程の町はない。ドッチは着物と食糧を買い整へる許可を士官に願つた。警護の士官にとつては囚人が自費で食糧を買い入れる事は少らぬ利益であつた。囚人の食糧費として政府から支拂はれる金錢の一部はかくして士官の私財を増加するからである。ドッチは二人の番兵と一つ所に或る吳服屋に立ち寄つた。當時の間は買ふ可き品を定めないで種々の衣類を選擇するふりをして時を過してゐた。時が經つにつれて、番兵の注意力は緊張を弛るめて來た。番兵は大事な囚人を監視すべき自分の重大な役目を全く忘れたかの様に、打ち寛いで店員と雜談を始めた。囚人は今は全く安全すぎる程安全だと思つた。静かに席をたつたドッチは、誰にも氣附かれないで、静かに店に連つてゐる店主の住ひの方に歩るいて行つた。奥庭に出た。裏門は明け放たれてゐた。彼は裏門から静かに街路へ歩み出た。

エニセイスクにはドッチの政友が隱棲してゐた。友人は數日彼を匿まつた後で、相當の旅費を與へた。憲兵士官に變裝したドッチはエニセイスクからフインランド鐵道の便を利用し、瑞西から英國に落ちのびた。

一九〇七年五月、英京倫敦で秘密の會合が開かれた際には、ドッチは露西亞の社會民主黨員中最も有力なる黨員であつた。露西亞の密偵は嚴重に此會合に參加した各地からの代議員を監視した。此會合には第一議會の解散後に選ばれた二三の議員も參加してゐた。

此會合以後のドッチの生涯に就いては記述すべき材料が無いのを筆者は甚だ殘念に思ふ。

此秘密會合が終ると同志はそれ〲の使命を帶びて各地に四散したが、ドッチは倫敦に殘つて、漸く爛熟しかけて來た露西亞の革命運動に今一度直接參加する爲めに露西亞に歸る計劃を立てゝゐた。此記錄はもうおしまひである。彼は果して再び懐しい故郷の土を踏んだであらうか。彼は何時までも生き永らへて彼が畢生の活動を續けたか。此革命家は果して自由なる露西亞の誕生を觀た上で滿足の笑の裡に其薄倖な一生を終り得たかそれを私に語つてくれる者はない。(完)

一九二〇・八・三一・露波間ノ紛擾愈々難局に入れる頃

上海印象記

成瀬無極

一　船

船に乗ると世界が變る。生れてまだ日本の土地を離れたことのない私は質に取られた猫のやうに船室の一隅に小さくなつてゐた。一人の客は入ると直ぐ鏡の前に立て顔を剃つてゐる、男ながら七道具を携へてゐる。眞似をしようにも生憎髭が延びてゐない。もう一人の客は長椅子の上へ手足を延ばして踏反返つたが、やがて輕い服に着換を始めた。この客は夕方風呂場へ行つて歸つて來てから、頻りに物を探す樣子だつたが、到頭仕舞に私に、

「君、僕の犢鼻褌を知りませんか。」

と尋ねた。見ると私の寢床の裾の方に越中が丸めて置いてあつた。二人にとつては船は自分達の家だ。私には質屋の藏だ。

私は四五日前に品川沖へ網船を出して御臺場附近で船暈を起こした。

「この邊は淺いから、一寸水へ入つて御覽なさい。すぐと氣分が癒るから。」

と三十貫もあらうといふ相撲の年寄が笑止らしく云つて呉れた。獲れた魚を天麩羅にして皆が喰べてゐる。烏賊は船に乘るとき河岸で買つて來たのだ。その傍で私は蒼い顔をしてゐた。少し大きい船が眼に入ると年寄に「あれは何噸位かね？」と聞いてみた。

「さうさね！」と云つて凡その處を話して呉れた。何でもよく知つてゐる男だ。惜しい事に怠け者で稽古嫌ひなので體も技もありながら、まだ若いのに隱退して仕舞つたのだ。

「あの位の船なら少し位暴れても大丈夫だらうね？」と沖の方に見える大きな汽船を指して云ふと、

「なあに、お前さん、一つ暴れたら、何千噸あつても木片みた

いなもんでさ！」

と、どういふ積りか片手でどんと厚い胸を叩いてみせた。

ハウプトマンが船暈を形容して「粘液でぬらぬらしてゐる蛇のやうな物を口一杯に頬張つてゐるやうな氣持だ。その頭は内臓に喰ひ入つてゐて、尻尾は無限の海底へ延びてゐる。呑み込むことも出來なければ、吐き出すことも出來ない。」といふやうな意味の事を書いてゐるが、船暈は全く薄氣味の悪い粘液質の怪物だ。考へただけでも胸が悪くなる。船は好きな癖に恐ろしく船に弱い私が、劇しい膓加答兒で二日間も絶食した後の話だ。船は私にとつて病院になる筈であつた。質屋の藏か、病室か。どつちにしても居心地の好い處ではない。二人の相客は差し詰め看護夫と云つた役廻りになるのだと思ふと氣の毒で勢ひ退け目になる。名刺の肩書に船暈患者と書いて置きたいやうな氣持で、恐縮しきつて自己を紹介した。無論食堂へは出ずに、船室でオートミイル一點張りで通す積りであつた。それが不思議にも足かけ四日といふもの一度も食事も缺かさず、元氣旺盛で上海の埠頭に横附けになつたとは僞のやうな話だ。尤も藥劑は約十種程携帶した。それを上海の税關で支那人の役人が犬の様に一々嗅いで見た。ハムの中から阿片が發見せられたり、氷詰の魚の腹に同じで魔藥が潜んでゐたりする世の中だから無理はないやうなもの丶、消化劑「ゴルフ」の瓶まで嗅いだのは御苦勞千萬の話だ。

服裝獻立、喰べ方、すべて儀禮に關する知識の皆無な私は、造り付けの食堂の椅子を一生懸命に引き寄せようとしたのを手始めに、可なり色々の失策をやつたが、それでも命に關はるやうな事は無かつた。夜會へ「モーニング」で出かけても"Good Morning, Sir!"と皮肉に出る西洋人も無く、船内も上海も赤毛布で押し通した。旅で横道へ入つても「大抵は生きて歸れるものなり」と誰かゞ云つたが、禮儀作法もそんなものだ。滅多に一命を落すやうな事は無い。

船中では神戸のS氏の家族が自ら中心を成してゐた。美しい二人の令孃と、可愛い、悧發な二人の少年とが朝夕の甲板を賑かに彩つた。然し、私の屬する食卓には、大して遠慮す可きやうな客筋は見えなかつた。二人の年増の婦人は間も無く姿を見せなくなつた。船長も主人役に二日目位から食卓を共にしたが、どつちかと云へば寡默な人で、話の中心を作るやうなことはしなかつた。そこで、私は一々服裝を更めることも御免蒙つて大抵詰襟で通した。それでも、"Old boy"といふ綽名を貰

ひはしなかつた。玄海で一寸粘液性の怪物が首を擡げかけたが、ぐいつと臍下丹田に力を入れて押へつけた。その代り南京蟲に二の腕を刺されて所謂「寄取る」の御世話になつた。船醫位呑氣なものはあるまいと外目には見える。もう一人氣樂相に見えたのは歸りの船で話した理髪師だ。行きは上海航路の船だから理髪室は無かつたが。歸りは米國航路で、それがある。

「昨夜は長崎泊りかね？」

「えへ、丸山へしけ込んでしまひました。」

セルドギラのそれではないが、私の理髪師は中々粋に出來上つてゐる。港々の女の品さだめから、各國船客の氣質、船中の秘密まで、諸方面の智識を私はこの若い男から得た。どんなに暴れても、船が顚覆しない限り剃刀は使へると自慢してゐた。

瀨戸內海は雨になつた。島も山も朧々として夢の中を船は行く、音も無く。亂れかゝる髪も白い指で掻き上げながら、濡れる頰に青春の血を沸かせて少女は歌ふ、戀の歌か。

いつか馴染になつた「越中」君に支那の歌を教へて貰ふ。柄に無く優しい處があると見えて、少年達にお伽噺などをしてやつてた。「剃刀」君は長崎で情話の本を二三種買ひ求めて、耽讀するかとみると、いつの間にか鼾をかいてゐる。

十一時過ぎに人が寢靜まつた頃二人は窃つと喫煙室に忍び込んだ。泥棒をするのではない。碁をうつ爲だ。人に見せられない碁なのだ。私も十三四歳の時に碁を闘んだ事がある。賊茶は二葉から臭かつた。到底發達の見込はないと見限つて止めて仕舞つた。生れて始めて好敵手が私を待てゐた。剃刀君は越中君に勝つた。その剃刀君を私は美事に負かした。船に乘ると世界が變る。

越中君が隱袋から一枚の樂譜を出して、ピヤノに向つた。片手でぽつ〱彈く音の斷片を綜合してみると、それは一昔前に流行した「空に囀る鳥の聲、峯より落つる瀧の音」とかいふ歌だ。やはり十一時前に彈けない代物である。船客名簿に依て三人は同年輩であることを知つた。中で私が一年の年長者だ。私と互先で打つ碁客が期せずして二人まで同じ船室に乘り合はせた事だけでも天下の奇蹟である三人は手を握つて上海で分れた。越中君には後に色々世話になつた。剃刀君は北京へ廻つて漢口へ歸つて行く人である。上海パレース、ホテルの階下で賣つてゐるといふ船暈の名藥 Sea-Sick Remedy を越中君から餞別に貰つた。私は幸にそれを試る機會を有たなかつたが、人に貽てみて其靈驗を確めた。朝鮮海峽でいつも醉ふ人が今度に限つ

ご平氣だつたと云ふ。それ以來海を渡つて行く人には必ず吹聽してゐる然し、別に頼まれたのではない。ハウプトマンにも序でに知らせようと思つてゐるが、まだ其暇が無い。

歸りの船は大きさから云つても、設備から云つても比較にならぬ位立ち勝つてゐた。然し、新たな失策も之に伴つた。一等船客の半分以上が歐米人だ。それでも、日本の船だといふので威張つてゐたが、今度は同室が二人の波蘭土人だ。一人は船長、一人は畫家である。船長は「春秋要義」一名「支那の精神（チャイニース・スピリット）」といふやうな露語の本を讀んでゐる。葉卷を燻らしながらロゼツゲルの小説を讀む獨逸の商人であつた。私はこの人とよく話をした。波蘭土の船長は波露戰爭の成行を氣遣つてゐた。獨逸と波蘭土とは敵同志である。船の中で私は兩つの國民の間に挾まつた。この他、飼犬を連れて甲板を散歩する、女優とも見える若い米國婦人や、西班牙の血が混つた美しい比律賓の女などもゐた。私の食卓は馬尼剌から乘り込んだ血氣の日本人に依て占められた。長崎でのこの人達の發展振りは素晴らしいものだと云ふ。私は急に老人めいた氣分になつて、上海のG氏と食堂の一隅で謡曲を數番謡つた。長崎までは上海の實生流の師匠の息も加はつて賑かであつた。

船の話はこの邊で打ち切る。船は世界の縮圖だ。それを少し擴大したのが上海だ。

二　公園

朝、K夫人に案内せられて新公園へ行く。柔かい芝生の上をよちよちと坊ちやんが歩く。向ふのベンチに零落したタゴールのやうな印度人が横になつてゐる支那の苦力（クーリー）が草刈機械を押して行く。池畔にはパウソルを持つた日本の娘が立つてゐる。靜かで、清新だ。こゝは殆ど日本人に依て占領せられてゐると云ふ。葡萄牙人が庭球をするのも後で見た。

上海租界内には二十數個國の人種が雜居してゐると云ふ。それが音樂の夜にパブリック・ガーヅンに集まる。

「そこは私の席です？」

「君の席？では何故坐つてゐないのですか。」

日本人は默つてゐる。英人が悠々と其處へ懸ける。一萬五千餘人ゐても日本人の勢力はまだ振はないやうに思はれた。一つは「言葉」の問題である。世界の言葉の中へ投げ込まれてみると、日本語の不自由さがわかる。

濁つた黄浦の水も夜は燈火を映じて美しく輝いてゐる。畫舫

めいた小舟を浮べて遥かに音樂を聞く人もある。對岸にはホテルや商館の大建築が電飾せられて夜の空を彩つてゐる。白衣、碧眼、金髪の人が行く。絹擦れの音、香料の薫り、滑かに流れる會話、その間を音樂の柔かい波が漂ふ。

「こゝは何處？」一瞬間、私の腦は混迷した。支那であつて支那人を見ない公園、飽迄西洋趣味であつて、しかもどこかに東洋の空氣が濃く淀んでゐるやうな處。今朝船から上つて、今此處に立つてゐる私。時處の觀念が一刹那擾亂せられた。燈火と音樂と滑かな皮膚と甘い香料と、公園の夜は蠱惑に滿ちてゐた。

ジエスフイールド公園は、廣やかな、郊外の氣分に充ちた處である。若い戀人同志が腕を組んで歩くに適するやうな。子供を連れて妻と長閑な日曜を過ごすのにも似つかはしいやうな處だ。N君の好意で此處を經て郊外を自働車で一周した。此上も無く快いドライヴであつた。

フレンチ・パアクとペビーガーヅンとは飽迄瀟洒な、可憐な花園である。官能の鋭敏な、美意識の發達した佛蘭西人の趣味は藝術ばかりで無く、かういふ方面にも豐かに現はれてゐる。

明るい、華かな、純化せられた世界、暗い、濁つた、矛盾と爭闘の世界、二つのものが同じ力を以て私を牽く。

三羅子の歌

薄青く隈取つた眼、
底の無い湖のやうに
男の心を吸ひ込む眼、
情熱に輝いては、ふとまた
疲勞と自棄とに
冷たく外れてしまふ。
はち切れさうな胸、
丸く萎えた腕、
弛く束ねた暗色の髪、
血の唇から光る雪の齒、
動かぬ眉、縺れる指。
媚と誇と
愛慾と憂愁と
虐げられた肉に魂に
漂ひ漂ふ。
つらら、つららら、つらららら。
樂は響く

脂粉と酒精とに
噎せかへる
カフエーの夜を！
つららら、つららら、
誘惑の
つららら、つららら、
眼は光る、
つらららら！

露西亜の女が踊る、
二人抱き合つて踊る、
眼と眼と胸と胸と腰と腰と
足と足と、
合つては離れ、
離れては合ふ、
つらららら！
踵の高い靴の運び、
流眄する眼の光り、
印度の客は盃を持て
躍り上がつた、
狂暴の血の騒ぎが、
黒い皮膚を透して見える。
女は微笑んだ、
米人は歌牌を落とした。
踊を止めろ！
男と男との間に
今に血が流れる、
獣と獣との間に！
女と女とは笑み交はして
踊る、
残忍な慾に駆られて
踊る、
つららら、つららら、つらららら！

四　野鶏の歌

ここと啼いて
雌鶏の背に
雄鶏が載る。

四馬路(スマロ)の夜を
色どる野鶏(ヤアチイ)の
聲は悲しい。
街ばたに、
茶樓に、
鏡の前に、
ソーフアの上に、
卓のまはりに、
群がる野鶏(ヤアチイ)。
青、綠、淡紅色、
小さい絹の沓、
垂髪と耳輪と、
あはれ少女盛りを
市に立つ野鶏(ヤアチイ)の群よ。
人買船に乘せられて
知らぬ他國に漂浪(さすら)の、
それもさるもの、
これは生き恥を
故郷に曝す
淺猿しい女人の市場(マアケット)。

青蓮閣の階下の
怪し氣な覗眼鏡(からくり)、
吸ひ附くやうに寄る
嫖客の群。
上の鏡の間には、
幾千の眼が光る、
野鶏の黑い眼が！
阿片の香が滲み込んだやうな
長椅子に凭つて
憎さ氣な青衣の老婆と
取引をする男。
茶の香りと
髮の匂ひと、
溫い手と、
甘い囁きと、
それも一組づつ
いつか消えて

寂れてゆく
四馬路(スマロ)の夜更け、
人間の市場の
引けた後の
荒涼たる心もちを
何に譬へよう！

五　劇場

歐米流行界の粹が見られるといふライシヤム・ラターのギヤレリーに座つてみた。此處は劇通が觀る場所だとK氏が云ふ。然し前列の男女は大抵英米の巡査と其家族だと云ふから、巡査は概ね劇通だといふ結論になる。今頃はボックスもストールも淋しい。輕いヴアリエテエ風の出し物で、米國の旅役者の群れが渡り鳥の様に海を越えて國から國へと流れてゆく、その途次(みちすがら)なのである。一人の歌ひ手がステージに立つて何か通俗な歌を歌ふて、見物の男女が足拍子を取つて合唱するのを珍らしく思つた。私達の周圍の棒を持つ劇通連は最も熱心に歌つた。この小屋はまづ神戸の聚樂館といふ處であらう。

支那劇の小屋では天蟾舞臺が第一だと云ふ。T氏、N氏達に案内せられて一寸覗いて見る。天井も高く、席も廣く取つてゐつて、凡てが大規模だが、暗く灰色に濁りて、劇場と云ふよりも、何かチャリネ式の競技場か相撲の常設館のやうな感じがする。茫漠として雜然たるものだ。出て來る役者は皆陰鬱な顔をしてゐる。音樂も哀調を帶びてゐる。看戲する男女も押し默つて彼處に此處に襤褸の様に塊(かた)まつてゐる。後でT氏が聞くところに依ると、俳優は蘇州の旅役者で、阿片喫煙者(オピヤム・イータア)である。從て看客も多くはこの秘密な歡樂に耽る者だと云ふ。それは、不思議な頽廢した、陰慘な世界であつた。明るい、耻かしい上海の都會生活とは全く切り離された、暗い、淋しい、窖(あなぐら)のやうな氣分が漂ふ處である。老い、衰えた「支那」そのものが杖に縋つて出て來たやうな、「疎懶(ものぐさ)」と「諦觀(あきらめ)」とが糜爛し切つた、濁つた、じめじめする空氣の中に抱き合つて蠢動(うごめ)き啜り泣いてゐるやうな感じである。

夏の夜を半裸體で軒下に屍の様に算を亂して横臥する男女や、「黄包車(ワンポオツオ)」を曳く苦力(クーリー)や、田舍の路傍に蹲つて哀號する乞食や、路傍に肉を鬻(ひさ)ぐ野鷄の群や、またかうした病的の漂浪の旅役者などを見ると、現代の支那人といふものに對する限りない憐愍の情が湧いて來る。殊に無心の小兒が營養不良らしい蒼白な顔

をして、南京蟲の巣窟のやうな暗い部屋に、大きな、潤んだ眼を瞠いて眤と一つ處を見詰めてゐる姿などを見ると涙ぐましい心地になる。一體この國はどうなるのであらう？この人口の運命はどうなるのであらう？

「新世界」は公園から排斥せられる支那の持つ、殆ど唯一の明るい歡樂場である。そこを漫歩する支那の青年男女の中には恐ろしく變化したのがある。鏡を光らせ、外輪に瀟灑な靴を踏む少女達の精巧な羅衣は歐米婦人の服裝に比べて少しの遜色も無い。貴公子のやうな洋裝をして巧みに英佛語を操る若い支那人のやうにリファインした日本青年を唯稀に吾々は見る。美しい西湖畔には熱い革命の血に若い一生を燬き盡したやうな少女秋瑾の墓が南齊の名妓蘇小の墓と並んで立つてゐる。それは沈滯し、腐敗した水の上に浮いて咲く一輪の水蓮のやうなものである。寂しい荒庭に眞紅に燃える鷄頭のやうなものである。ツルゲーネフの「處女地」の世界が自ら髣髴せられる。

死毒ともいふべきものがこの國の體内に醱酵しつゝある。

（一九二〇、十）

後藤新平論

ポンポン花火を揚げる事だ

=市長及首相としての後藤新平君に注文す=

堺 利彦

人の人氣は種々なる差引算用の結果である。圓滿、溫厚、善良、正直の君子人に必ずしも大した人氣があるわけではない。缺點はあつても、失策はあつても、可なりのヘマはやつても、馬鹿々々しいほどの氣障や見えはあつても、甚だしきは隨分勝手な眞似を仕兼ねない事が明かに分つてゐても、それでも絕えず可なりな人氣を持つてゐる人物がある。

後藤君も確かに一種の人氣者である。何か少しくらひ思ひ切つた事をやりそうに見える所に人氣が生じてゐる。內面には種々の生氣が鬱勃として居りながら、表面はいつまでも沈滯しきつてゐる今日の現狀の下に於いて、誰でも構はない、多少飛び放れた事をやる者があれば、直ぐにヤンヤと喝采を博する。後藤君は少なくとも一時的に其種の喝采を博し得べき素質を持つてゐるらしく見える。

其の意味に於いて後藤君の東京市長は多少の見ものである。首相の椅子を犧牲にして市長になるとすれば、少し算盤が合はないだらうが、それも遣方次第である。ナニ今度の市長は永くやる必要はない。疾風迅雷的に何んでも構はずドシドシやつてのけて、多少なり人心を新たにすれば役目は濟むのである。どうせ今のところ根本的の改革が出來よう筈はない。兎にかくポン〳〵ポン〳〵と花火を揚げる事だ。花火を揚げる事なら後藤君得意の壇場だらう。そうして置けば存外首相の椅子の踏臺になるかも知れない。後藤君に其の位の術策はある筈だ。

ついでに首相になつた時の後藤君に望む。どうせ過渡期の政治家だ。辻褄などは合つても合はなくても構はない。そして二度と首相になれる見當もつくまいから、出來る限り腹を太くして、何んでも思ひ切つた、飛び放れた藝當を見せる事だ。元老も政黨も全然無視して、一あばれあばれて見る事だ。そこに存外堰き止められてゐる社會進化の潮流を切つて流す効果を生ずるかも知れない。さすがは後藤だと云はれて、最後の花を咲か

せる事が出來るかも知れない。

市長としても、首相としても、こういふ注文に應じ得ない程なら折角の人氣に背くといふものだ。後藤新平の値打はない。

東京市長としての後藤新平

室伏高信

東京市長の後任者としていよ〳〵後藤男が推された。これより先き市長候補者としては仲小路廉氏あり、阿部浩氏を推さうとするものさへあつた。そのうち阿部氏は一般の氣受けがあまり惡る過ぎるので流石に引込まなくてはならなかつた。仲小路廉氏は司法官出の人であるだけ、どことなく檢事流に物事を考へる風があるので東京市のような伏魔殿掃除人として適任らしく思つた人が少くないように見えたが、仲小路氏自身は、志天下にありと云ふ理由で、區々たる一地方行政の任に當るものは他にそれ相應の適任者があるだらうといふ高いとまり方をした明治初年に、口を開けば必ず天下國家を論じ、そして天下國家を論じなくては豪傑の士でないと考へた書生の面影が、今の仲小路氏において見られる。この仲小路氏に比べると、頭腦は縱令放漫にしても、兎も角も、世間的には一段と地位も聲望も高いし、そして自分自身もそう思つてゐるに相違ない後藤男が、仲小路氏の捨てゝ顧みない東京市長の椅子を引受けるのを見て私は矢張り世間の評判通り、後藤男の方が一段と物事を新らしく考へてゐる人物であるといふことを考へる。後藤男の人物性格については私はあまり多く知るところがない。また私の知つてゐる程度は世間が一般に知つてる程度である。この人は官僚系の人としては、しつかりしたところのないにしても、何かと新らしいことを考へたり、書いたり、行つて見たりする、或はしたがる風のある人物と認められてゐる。この點が後藤男の身上の一つであつて、あの人は何かする人、將來のある人物だと六十四歲の今日になつても、尙ほ一部の人々から望みを屬されてゐるにも、つまりこうした一面をもつてゐるためであらう。髓に化石しきつてゐる今の官僚や軍閥や政黨の人達の間にあつては、彼れは、一方に當てにならない人物であるとされるとともに、他方に未だ彼の頭腦の何處にか化石しない部分を殘してゐるかのように思はれる。就中、彼れが地方自治政、特に都市行

政のことに注意を拂つてきたことなぞは、所謂天下國家のことではなくては大政治家のすることでないと決めこんでゐる多くの政治家連の間において、尙ほ現代に有用、――實際には有用ではないまでも、彼れ自身が現代に有用であることを常に期待しつゝある證據を見ることができるのである。しかし後藤男の所謂新らしがる程度はどの程度であるか。パウルゼンの書物を擔ぎまわる程度の後藤男、植民政策に熱狂してきた後藤男、そして最近にはハアンショウの「岐路に立てるデモクラシー」といふ無雜極まる書物に感激した後藤男の、所謂新らしいといふ程度が、綿入の新らしいものであることは多くを語ることの必要はないであらう。彼れは市長に推されて後に、地方自治の尊重すべきことを新聞記者に語つてゐるようであるが、彼れの謂ふところの「自治」とは何か。彼れが自治重んずべしといふ時に、彼れは國家に對してコムミユーンを尊重しようとするの意味があるのであるか。Centralization に對して Decentralization を重んじなくてはならないといふことを考へてゐるのであるか。彼れの政治的生活は、今日まで民主々義の反對者として立つてきた。今日においても、彼れに若し政治的の立場があまされてゐるとすれば矢張りこの點に變りはないであらう。その民主々義を排斥して「自治」を口にするといふことが、私たちの常識と兩立することができようか。總じて官僚系の人々は、山縣公にせよ、平田子にせよ、一木博士にせよ、また後藤男にせよ、地方自治を口にするとにおいて熱心であり、また地方改良といふことを屢々宣傳し廻つてゐるのであるが、彼等の地方自治とは、みな等しく民主々義の排斥においての地方自治である。然り、自律自定を排しての自治である。從つて彼等の謂ふところの自治とはたゞ政黨勢力に對抗するための自治、官僚組織における地方自治、また從つて官僚主義のための地方征服である。これが彼等の謂ふところの地方自治の正體である。一皮剝けば、彼等の謂ふところの自治とはかくのごとき正體を包んでゐるのを見る。地方自治尊重は大に可なりである。地方自治は後藤男等の云ふごとく大に可なりである。しかし地方自治に徹した時に、私たちは、東京市民は、金權によつて團結する政黨勢力とゝもに、官僚一派の謂ふところの瞞着虛僞の「自治」を土とゝもに葬るであらう。そして後藤男のごとき「自治」論者をも土とゝもに葬りさるであらう。後藤男が市長に推されてから、市政改革に對する抱負を語つて、市長を誰れにするかの問題は末であつて、市民の教育が第一だといつたそうだ。その通

りだ。がその教育のために、實は日本國民はどれだけ世界に後れてきたかわからない。といふのは今の教育が人の目を開くためでも、個性を呼び起すためでもなくして、權力に對する崇拜と屈從とを教えてきたからである。この種の僞瞞の教育が、明治政府の事業であつた。私たちは今まこの教育から解放されなければならない時に立つてゐる。だから私たちが教育が重要だといふ時に、私たちの言葉には虚僞瞞着の教育を排斥する。そして眞實な教育が與へられた時には、私たちは後藤男が排斥される時であるといふことを思ふの外には、何ものを考へることができない。その市民教育が足らない間こそ、後藤男が市長として推される時代である。今日はその時代だ。後藤男に適した時代である。今の東京市政の狀態こそ後藤男に適した狀態である。否、この腐敗の市政では、阿部浩氏の方が一層箝まり役であらう。

本稿は昨年後藤氏が市長に推薦された際思はせ振りな逃げ口上で人焦らせをして居た最中に起稿したものであるので事實の經過を批判したとしては痒きに爪の及ばぬこと甚しいと思ふけれども、後藤市長の人爲りの一面を知ることの出來るものであると思ひ、玆に載錄することにした。室伏氏は已に海外に遊び、堺氏は匆匆の際とて、何れも注筆を願ふことの出來なかつたのを遺憾とする。(記者)



——(創作)——

◆布施太子の入山　倉田百三

◆暗夜行路　志賀直哉



布施太子の入山

倉田百三

此の物語を長與善郎兄に捧ぐ。兄と予との古典に對する趣味の一致を記念するために。

人　物（登場順）

濕波（葉波國王）
侍從
寡婦
子供
門衛
市民甲。乙。丙。
騎馬兵
馭者
須太拏（太子）
曼坻（太子妃）
耶利（その息）
罽拏延（その女）

近臣　甲。乙。
女官
夫人
乳母
使者
王妃
兵士　甲。乙。
群集
波羅門　甲。乙。丙。丁。但し墮落して乞食、盗賊等を業とせるもの。
帝釋天
侍童
畜生の群
處。印度
時。古代

第一幕

東宮城門外。左手寄りやゝ奥に大いなる城門。厳めしく鎖されあり。その側に門衛の屯所。城門の右手より前面にかけて城壁

城壁の後ろに宮殿の甍、天守閣、鐘楼、樹立等の一部見ゆ。右手遥かに、塀を繞らせる城壁の層重なりて見ゆ。夏の黎明。残月あり。

（濕波王侍従をしたがへて登場。）

濕波王　（四邊を憚りながら）人影は見えぬであらうな。

侍従　幸い人影も見當りませぬ。消え殘つた月がひとり淋しく空にかゝつてゐるばかりでございます。

濕波王　（溜息をつく）余が微行で此處に來て。他所ながら太子を見送ると云ふことが知られたなら、また大臣たちが余を厳しく責めるであらう。

侍従　諸大臣は口を揃へて陛下が太子殿下を牢獄に幽閉なさらなかつたことを非難致した位でございますから。彼等とても子を持たぬ人たちばかりではございますまいに。

濕波王　彼等には太子の一身よりも葉波國の社稷が重いのぢや。

侍従　大義のために親を滅して、愛する獨兒を異域の深山に追放遊ばされる陛下のお心をお察し申し上げるのも畏れ多う存じまする。

濕波王　（月を仰ぎながら。）月も悲しう見えるわい。あの月が太子の馬車の崎嶇として行く旅路を獨り照らすのかと思へば。檀特山へは道も遠いのぢや。

侍従　あの月が菩提樹の梢にかゝつて、葉陰に半ば隠れた太子殿下の御書院の窓から、なつかしい咿唔の聲の漏れるのを私はほんの此の間まで床しい氣持で聞いたものでございますが。

濕波王　太子は小さい時から書を讀むことが好きであつた。わしは煩はしい政事に疲れた時、太子に尊い書物を讀み聞かせて貰ふのが何よりの樂しみであつた。わしは若い時から戰陣の間に月日を過して、書に親しむ暇が無かつたから。わしは太子の學藝に秀いでてゐるのを誇りにしてゐた。荒い頑固なわしの心が少しでも和らぐことを知つたのは彼の感

化であつた。彼は攻略や宴醼の樂の外に、聖賢の道を學ぶ清い喜びのあることをわしに教へてくれた。わしの政治が壓制に過ぎると云つては戒め、誅歛が重きに傾くと云つては諫めてくれた。

侍從　政治は自由になり、税役は輕くなり、訴訟は正しく裁かれるやうになつたと民は皆陛下の御德をたゝえて居りまする。殊に太子殿下が寶藏を開いて度々行はれたあの莫大な布施には人民ども、驚いてゐたやうでございます。前代未聞の御仁政であると百姓悉く擊壤鼓腹して居ります。飢えたるものは食を、凍えたるものは衣を、病めるものは藥を得て淚をこぼして喜んで居りまする。遠國のものも傳へ聞いて、仁政を慕うて集つて參りますので葉波國の人口は益々繁昌致しまする。

濕波王（苦笑して。）いや人民は肥え太るが、御影で王室の寶庫は空にならうて。その太子の立てた布施行の大願が禍て身を過り、國を危くし、父子の恩愛を割く刃となつたわい。太子は幼い時から施すことが不思議と好きであつた。まだ元服もしない時、四人の乳母に守られて遊樂のために出城したことがあつた。馬車がやつと城門の外に出ると彼は道の邊りに跪いて施を乞ふてゐた盲者や啞者や聾者や癩病やみの群を見つけて、顏色を變へ、車を旋らして歸つてしまひ、そのまゝ部室に閉ぢ籠つてふさぎ込んでしまつて乳母が幾ら慰めても駄目であつた。そして彼が再び娛樂の學びや、歡謔の遊びに就くまでにはわしが庫を開いて七日の間その乞食の群に布施をしてやらなければならなかつた。

侍從　殿下のその慈しみ深いお心に誰か感動せぬものがございませう。たゞその御慈愛がある節度を保ちさへ致しまするならば——

濕波王（嘆息を吐き乍ら。）太子の布施行には限りが無い。彼は衣食、田宅、車馬、什器、宮殿内のあらゆる財寶、いや宮殿そのものをも施してしまはねば止むまい。此間も大藏大臣が嘆息してわしに訴へた。「國庫は空しくなりまする。國內のすべての穀物、すべての獸畜は盡きました。此分では今に我々百官の愛する妻子が人民の僕婢として施されることでございませう」と。

侍從　けれどあの須大延のみは――穀物は散じ盡されるかも知れない。妻子は僕婢とならしめられるかも知れない。けれどあの靈象のみはいかに太子殿下と雖も決して布施さるゝことはあるまいと確信して居りましたが。

濕波王　（青ざめて）わしは陸軍大臣がそれを知らせに來た時初めはどうしても信じられなかつた。が大臣の沈痛な顏付きで愈々本當だと知つた時わしは不意に大地が搖らいだやうな氣がして眼の前が暗くなつた。

侍從　陛下があの時昏倒して玉座からお落ち遊ばしたのも無理ではございません。

濕波王　あの靈象は濕波國の守護神であつた。近國が我國を憚れて敢て近かづかないのもあの須大延のゐるためだつた。わしの軍隊が戰へば必ず勝つたのもあの靈象の威勢のためであつた。

侍從　あのヒマラヤ山に積る雪のやうに白い靈象が榕の樹の株よりも太い鼻を扛げ、金鞍の上に嚴めしく軍裝せられた陛下を載せて敵陣めがけて突進する時には、まるでガンヂス河の氾濫が堤を切つたやうに敵はなだれを打つて潰走致しましたが。

濕波王　あの須大延はわしが祭司百官を率いて、徒歩にて蓮華に詣り、神聖な儀式を以つて軍神に獻げた神象だ。わしは右手に象鉤を持ち、左手に金甕を提げて、自ら象の足を洗いで奉つたのだ。

侍從　そのかけがへの無い靈象を國もありませうに、あの祖先以來の宿敵たる烏留國から遣した梵士に施しておしまいになりますとは！

濕波王　わしが幾百度の戰勝の度毎に、戰利品や珍寶で眩ゆく飾つた黃金の凱旋車を曳かせて、わが都の街々を練りあるかせたのであつたが。

侍從　（感慨深かさうに）あゝあの神のやうな白象が新月のやうな優しい眼をして、宮殿の柱のやうな太い足でしつかりと大地を踏んで、大山の移るやうに悠々と歩く英姿を最早永久に見ることは出來ないのか！

濕波王　（青ざめて。）いや。今に再び見るかも知れないぞ。我めが戰陣の眞先きにあの象を押し立てゝ、攻め寄せ、味方

を散々蹂み躙るのを。（默想に沈む）

侍從　あゝ取り返しのつかない一大事だ！

濕波王　（決心したやうに。）いや。今は徒らに嘆いてゐる時ではない。祖國を護り、侮りを禦ぐ策を立てなくてはならない。今夕諸大臣初め百官諸將を招集して、わしの面前にて直ちに善後の計を議することにしやう。

侍從　大臣達の憂慮されるのは尤もでございます。さすがの太子殿下も今度ばかりは後悔しておられるでございませう。

濕波王，いや太子は自分の所業を惡いとは思つてゐない。却つて自分が天の名によつてなしたる布施の酬ひで葉波國は祝福されるであらうと云つてゐる。

侍從　（驚いて）私は葉波國が滅びはしないかと恐れて居りますのに。

濕波王　そればかりではない。わしや諸大臣が最重の刑罰の威嚇を以つて、またわが尊い先祖代々の王達の名によつて彼が將來此の上祖國の安危にかゝるやうな布施を思ひ止まることを保證せしめやうとしたのに對して、彼は自分の立てた檀波羅密事の本願が滿足するまでは決して布施は止めない、自分は自己のため、血族のため、萬人のためにこの本願を立てたのだ。自分は何ものをも所有しない誓ひを立てた。自分が一物でも所有してゐる間は決して乞ふものに拒むことは出來ないと答へた。そしてわしや諸大臣の眼の前で地に跪き、天を拜して彼は一度その誓ひを新らしくした。

侍從　それでは諸大臣が激昂して嚴罰を申請されたのは、畏れながら止むを得ないことかと存じまする。

濕波王　わしも諸大臣の申請に對して何と言葉を返すことも出來なかつた。そして默然としてゐた時に、あの老いたる宮内大臣がわしの心を察して、太子を拘禁することは穩かでないから、國外に追放することにしやうといふ議を立てた。諸大臣も流石にそれに異議を申し立てるものはなかつた。わしはせめて太子の生命の無事であることに滿足して

その建議を裁可するより道がなかつた。それに出家して檀特山に行くことは太子の兼ねてからの願であつたので、彼が今日まで城に留まつてゐたのはたゞわしと妃との悲嘆を慮れてゐたために過ぎなかつたのだから。

侍從　最愛の太子を、最重の國寶と共に同時にお失ひ遊ばさなければならない陛下のお心を思へば私は涙がこぼれまする。

濕波王　あゝ誰か來るやうだ。人目にかゝらぬやうに早く身をかくさう。

侍從　あの門衛の屯所に。もう夜も明けまする。太子殿下の御馬車の出城するのも程なくと思はれまする。

（王と侍從退場。引き違ひに一人の寡婦襤褸をまとひ、泣き叫ぶ子供を背負ふて登場す）

寡婦　あゝ。やつと來た。此處があの御慈悲深い太子樣のゐらつしやるお城なのか。もつたいない。もつたいない。亡くなつた夫は決してお城の方へ足を向けては寢なかつた。夫にあのやうにおやさしくして下さつた太子樣だもの、夫に先き立たれたふしあはせなやもめにきつと惠みをかけて下さるだらう。どうか太子樣にお目にかゝつてわたしや夫がどのやうに太子樣の御恩を一生感謝してゐたかをお傳え申し上げたい。そして無慈悲な稅吏（みつぎとり）のためにどんなに酷い目に遇つて死んだかを訴へたい。（泣き叫ぶ子供をすかしながら。）坊や。お泣きでない。坊や。いゝ子だから。もうわたしたちは太子樣のお城の門の前まで來たのだからね。もう跪いてお願ひ申しさへすればいゝのだからね。

子供　（泣きながら。）ひもじいよ。ひもじいよ。

寡婦　（子供を下ろし）あゝひもじいだらうね。もう二日も食べないのだからね。今に太子樣が食べるものを澤山惠むで下さるよ。

子供　（地べたに足を投げ出して）あゝ。痛い。痛い。

寡婦　（面をしかめて）はだしで、石ころ道をよつぴてい歩いて來たのだもの。（子供を抱き胸をひろげて。）さあ母さんのお乳を。

子供　（ちよつとしやぶつて直ぐ放し、泣き出す。）

寡婦　乳も干あがつてしまつた。もうわたしの膚を傷けて血でも飲ませるより仕方がない。（石の上に腰をかけて泣く。）

（城門内にて鈸（らつぱ）の聲きこゆ。）

寡婦　（立ち上り、子供の手を引つぱつて門の側に行く。）もう朝だ。今朝太子様が御出ましになると聞いたのだが。（門、内より開かる。）

門衛　（登場）此の門を衛るのも今日限りだ。主人を失つた城の門は今晩から永く〳〵陰氣くさく鎖されるだらう。今日まで貧乏な餓鬼どもが極樂の門でもあるやうに、ありがたがつて居たのだが。

寡婦　（門衛の側に行く。）お役人様。お願ひ申します。お惠みをおかけ下さいまし。貧しいやもめでございます。

門衛　（泣き叫ぶ子を見て眉をひそめながら。）門前でそんなに八ケ間しく泣き立てゝは困る。今朝はことに靜かになくてはならないのだ。

寡婦　父のない不仕合はせな子でございます。（子供に）これ、泣かないでお役人様にお惠みをお願ひ申さないかい。

子供　（泣きながら跪きて器械的に。）お惠みを。父のない子でございます。

門衛　おや、この子は物乞ひすることを教へられてゐると見える。

寡婦　（節のついた白にて。）ふしあはせな母子でございます。何にも食べてゐませんので。夜通し歩いて參りましたので。

門衛　惠みなら太子様に乞ふがいゝ。

寡婦　その太子様にお目にかゝりたいのでございます。今朝お出ましになるときゝましたので。

門衛　うむ。今にお出まし遊ばされる。お前たちは片筈な處に來合はせたものだ。

寡婦　何んでございますつて？

門衛　（考へつゝあちこち歩みながら。）もう半日遲かつたらもう太子様は此の國を去つてゐらつしやつたであらう。

寡婦　え。太子樣が此の國をお去り遊ばすのでございますつて？

門衞　（己れに物云ふ如く感動を以つて）今朝出城遊ばしたら、もはや永久にみ車をお迎え申すことはないかも知れない。

寡婦　（子供を突き放ち、顚倒して）あの太子樣がでございますか。あの國中のものが讚めたゝへてゐる太子樣が！　それは本當でございますか。

門衞　（默つてあちこち歩む。）

寡婦　（すり寄つて）もう二度とお歸り遊ばさないのでございますつて。あゝどうしたらいゝだらう。どうぞおつしやつて下さいまし。何處にお出で遊ばすのでございますか。

門衞　お前たちに云ふようなことではない。

寡婦　（泣き出しそうになつて手を絞りながら。）どうぞ聞かせて下さいまし。お慈悲でございます。おつしやつて！

門衞　檀特山にいらつしやるのだ。

寡婦　檀特山？　あの遠い〳〵荒れた山へ！　恐ろしい獸のおるといふ深山へ！　どういふわけで？

門衞　それはお前たちに云はれない。だがあまり施しが過ぎたからだといふことだ。（憤慨するやうに。）あまり人民が貪慾すぎた。太子樣のお慈悲深かいのにつけあがつて、飽くことを知らずに乞ひむさぼつたからだ。

寡婦　（地に倒れて。）ではお布施のために王樣のお氣にふれて。

門衞　そうだ。云はゞお前たちの犧牲におなりなさつたのだ。

寡婦　（取り亂して）あゝ、どうしたらいいだらう。私たちのためにあの太子樣が國をお追はれ遊ばすのか。赦して下さいまし。赦して下さいまし。皆があまり欲深いものでございますから。あまり愼みがないものでございますから。けれど私たちだけは本當に貧しかつたのでございます。本當に困つてゐたのでございます。こんなことになるのだつたら、假令私たちは飢えて死んでしまつてもお施しをお願ひ申すのではなかつたのに！　申しお役人樣、私たちはもう

施しを乞ひはいたしません。人民はどうなつてもよろしう御座います。どうぞ太子様がいつまでも此の國にゐて下さるやうにして戴きたうございます。お願ひでございます。

門衞　そんな重大な事件が俺らの手に合ふものか。それが出來る程なら俺らもこんなに愁嘆するには及ばないのだ。（子供の泣き立てるのを見て泣面をつくりながら。）あゝ。退け。退け。こんなに門前を騷がすのは畏れ多い。今朝は皆様の永いお別れにふさはしいやうに靜かに、嚴かにしてゐなくてはならないのだ。（家婦、子供を連れて門前をはなる。）もう御車の出るのもすぐだ。（門内に退場。）

家婦　子供をゆすぶり乍らお泣きでない。お泣きでない。あゝ、どうしたらいゝだらう。あの太子様に行かれてしまつては世は眞暗になるやうな氣がする。私たちの望みの綱は切れてしまう。私たちは今よりもつと〳〵酷い眼に遇はなくてはならなくなるだらう。本當に漿一杯だつて頂かなくても此のお城に太子様がじつと住んでゐて下さりさへすれば私たちにはどんなにか慰めになるんだが。（間。）あゝ試つて見やう。跪いてお願ひして見やう。太子様の御車にしがみ着いてもお止まり下さるやうにお願ひしなくては！（子供を賺しながら）もう泣かないで。（抱いてあちこち歩く。子供泣きつゞける。自棄に揺ぶりながら）靜かにおしつてば！（子供火のつくやうに泣く。子供を地に下し泣き聲になつて）後生だからもう泣いておくれでない。母さんは氣が氣ではないのだから。（石の上にうつ伏し己れも泣く。）

（市民甲、乙、丙しやべりながら登場。）

市民甲　大言を吐くなあもういゝ加減にするがいゝや。少し廻りがよくなるとすぐこれだ。

市民乙　（よろめきながら。）俺はお前のやうに吝嗇ではないのだ。

市民甲　ふむ。ひどく景氣がよさゝうだが、お前さん半月ばかり前あんなにしよげ込んでわしに無心に來たことを忘れやしまいね。（傍白）臭え呼吸だ。

市民乙　（唾を吐く。）大きなお世話だ。お前そんなことを云つてこれつぱかしでも貸してくれでもしたのかい。

市民甲　それあお前さんが碌な質房も持つて來なかつたからさ。ところでお前さんがそんな大きな口が利けるのも此の前の大布施の時にせしめた馬をうつた金をもとでに、やつた危ぶない勝負が、たま／＼うまく當つたからだぜ。

市民乙　うむ。俺あ賭け事にかけちやあ膽が太いからね。だがお前だつてあまり大きな顏は出來まいぜ。あの大布施の時のお前のやり口にや驚かされたよ。お前はめそ／＼泣き聲を出してやつてゐたじやないか。「私は貧乏です。私は馬にやる切藁を喰つてゐます。子供はみな白痴(ばか)で、みな片端で」なんかしやべり立てゝゐたじやないか。お前の庫には米を腐る程貯め込んでゐやがるくせに。

市民甲　それが羨しいと云ふのかい。それは私が正直に稼いで少しづつ儲けた金をお前さんのやうに飲んでしまはないで貧乏なものに廻してやるからさ。

市民乙　ふむ。眼玉の飛び出るほど高い利息をとりやあがつて。

市民丙　おい／＼お前さんたちそんなにがみ／＼云はないで、少し靜かにしたらどうだ。此處は太子殿下の御城の前だ。

市民甲　本當にそうだ。此奴があまり利いた風なことを云やあがるものだから。

市民乙　なんの。わしは地道に貯めることは好きだが、高言を吐くことはあまり好まぬ方だ。

市民甲　太子殿下に敬意を表しやう。

市民乙　そうだ。福の神は大事にしなくてはならない。

市民丙　（頭巾を脱いでお辭儀をしながら。）やれ／＼、ありがたいことだ。太子樣が此の城に住んでゐて下さりさえすりあわしらは安心だ。わしらは丹精に百性をするが幾らはたらいても食へない時がある。何しろ幾ら凶年でも稅吏(みつぎとり)は年貢を高くして懷を肥やすことを止めはしないから。そんな時には太子樣にお願ひすれば飢え死にすることはない。わしは此の前のお布施の時に牛をいたゞいたが、お影でそれからは田を耕すのがどれほど樂になつたか知れない。

市民乙　太子樣は私たちにとつては何よりも大切な寶槌だ。いざとなつたらそれを振りさへすれば田地でも車でも衣物

でも何でも出て來る。
市民甲　何處までも勘定高いことをいふね。俺などは困つた時には貰ひに行きはするが、御恩はいつも忘れたことはない。おやあれは何だ。
市民乙　女と子供だ。
市民丙　かはいそうに子供がひどく泣いてゐる。
市民甲　あのお婆は子供の泣くのもほつたらかしにして何か獨りでぶつ〳〵云つてらあ。
市民丙　お祈りしてゐるのだ。
市民甲　施物を貰ひに來た乞食だらう。
市民乙　御覽、いゝ女だぜ。
市民甲　此奴は女を見るとすぐこれだ。
市民乙　惜しいことに氣が狂れてるやうだ。
市民丙　いや。そうでもないらしい。
（市民丙、女の側に近づかんとす。その瞬間に女市民等を認めて飛んで來る。）
寡婦　（狂ふやうに。）皆さん。大變です。どうかして下さいまし。行つておしまいなさいます。
市民甲　何だ。
市民乙　どうしたと云ふのだ。
寡婦　行つておしまいなさいます。太子樣が――
市民丙　太子樣がどうなさるつて？
寡婦　檀特山へ行つておしまいなさいます。今すぐに。今朝のうちに。

市民丙　檀特山へ？これ。お前さん。もつと氣を落ちつけて話して御覽。それは本當かい。どうして知つたのだ。

寡婦　門衛からきゝました。本當です。だから早くして下さい。早く太子様がお止り遊ばすやうにお願ひして下さい。

市民丙　もつとくはしく――靜かにして――太子様がどういふわけで――

寡婦　（少し落ちついて。）王様のお氣にふれたのです。太子様があまりお布施をなさつたのがいけなかつたのですつて。

市民甲　そいつは大變だ。

市民乙　それはいけない。嘘じやあないか知ら。門衛奴が嚇かしたのじやないか知ら。

市民丙　（考へて。）いや。本當だらう。ありさうなことだ。

寡婦　早くして下さい。早く。もう太子様の御車が直ぐに出るのですから。

市民甲　是非止まつてもらはなくてちやあ。どうしたらいゝだらう。

市民乙　役人に賄賂を使つてどうにかならないか知ら。

市民丙　お願ひするより外はない。皆で車の前に跪いて一生懸命お願ひして見るのだ。

市民甲　さうだ。こんな時にあ拜み倒すのが一等だ。

（鼓の聲城外よりきこゆ。）

寡婦　あゝ、もうお出ましになる。

騎馬兵　（門より登場）退れ。退れ。

（市民等道を開く。騎馬兵退場。）

市民甲　行つて皆に知らせてやらなくちや。

市民丙　さうだ。皆呼んで來てお願ひしやう。わしらだけでは駄目だ。

市民甲　皆びつくりするだらう。太子様を慕つてゐないものは無いから。

市民丙　太子様に行かれては葉波國は暗闇だ。

（市民甲と市民丙退場。）

市民乙　（退場しながら。）關の神を通しちやあならないぞ。わしの金函が乾上るから。

寡婦　あゝ。どうしたらいゝだらう。どうしてお止め申したらいゝだらう。太子様を失つたら國中の貧乏人はどうなるのだらう。國中の寡婦(やもめ)は、孤はどうして生きて行くのだらう。行つて女たちを呼んで來やう。孤をみんな連れて來やう。皆で私たちの厨(くりや)がどんなに乏しいか訴へたら、ふしあはせな孤がみんなひもじいお腹を絞つて泣き立てたら太子様も役人たちも心を動して思ひ止つて下さるかも知れない。さあ。今のうちに。大急ぎで。（泣き立てる子供の手を曳いて退場。）

（鼓の響きこゆ。やがて先驅の騎馬兵數名消え殘りたる松明を持ちて登場。太子、太子妃、及び二人の王孫を乗せたる馬車次いで登場。その後より多數の廷臣、女官及び八人の夫人。四人の乳母馬車に從つて登場。）

太子　（馭者に假くばせして馬車を止めしめ、一同を顧みて。）見送りは此の門限りで辭退しますぞ。

廷臣甲　我々は是非國境まで殿下をお見送り申上げたう存じます。

廷臣乙　若し殿下のお許しが御座ゐますならば檀特山までもお伴申したいのでございます。

女官の一　一度御車をお送り申し上げたならまた、いつの日にお迎へ申し上げるのかわからないのでございますから。

太子　一同の厚い志はうれしく思ひます。わしも名殘り惜しくおもひます。だがもはや見送りは辭退しますぞ。わしは父王陛下の御勘氣を受けて國を去ち退くのだから。それにいつまで送られても限りが無いのだから。

夫人の一　ではございませうが、も少し名殘を惜ませて下さいませ。私たちはいぶせき深山(みやま)の奥までもお隨ひ申して、朝夕おかしづき申し上げたい切なねがひをも、お言葉ゆえにあきらめたのでございますもの、このまゝお別れ申し上げるのはあまりに淋しうございます。

乳母の一　（涙ぐみ）せめてこの城が見えなくなるところまでお見送りをお許し下さいまし。今日の行啓の後私どもが二度と殿下におまみえ申すことは御座ゐますまい。私どもはもうあまりに年が寄りましたから。

太子　いや。いつまで見送つても悲しみは盡きまいぞ。（蕭然として。）別れに臨んで皆に一度だけ云つて置くぞ。わしが今日此の住み馴れた城を去つて山に行くのはお前たちすべての悲しみを負ふからだ。お前たちと永久に別れたくないからだ。わしが今此の城に留まつたなら私たちはいつまでも別れないですむのであらふか。いや／＼ぢきに苦い別離が來るのだ。時が刻々に冷めたい死の塀を築いて否應なしにわしらの間を割いてしまふのだ。その時になつてお前たちは今の悲しみが手習ひに過ぎなかつかと思ふ程嘆き悲しむであらう。が、葉波國の全國民が聲を限りに泣き叫んだら、此の城の門は崩れるかも知らぬが死の鐵門は金輪際揺らぐことはない。そしてその後はどうなるのだ。お前たちは今日まで心をつくしてわしに事へてくれた。その君臣の深かい契りはどうなるのだ。夫人たちがいくたびかその清い珠飾りにかけて示しくれた誠の誓はどうなるのだ。乳母たちが私を抱いて、襁褓の間から幾百度となく立てた愛の證は？　わしはそれを思ふと此の城も塚のやうに見えるのだ。わしの萬歳を唱へてくれる聲も挽歌のやうに聞えるのだ。（夫人達の間からすゝり泣きの聲が起る。）わしは愛する者と永久に別れないですむ國を求める。その國の民となることが許されるならば、たとひ最も卑しい僕であつても、今の太子の位を喜んで捨てたいと思ふのだ。あの檀特山には阿周陀といふ聖人が棲まれ、常に果蓏を喰ひ水漿を飲んで道を修め、無上の知慧と絶妙の徳を備えて猛獸や毒蛇まで喜び從ふてゐると聞いてゐる。わしは行つて教えを乞ひたい。道を求めたい。死に打ち勝つ知慧を得たい。わしが山に行つて無上の悟りを成じたならば、その時わしは再び喜び勇んでお前達の處に歸つて來やう。その時は葉波國の太子としてゞはなく、精神の國の王としてお前達に迎へて貰ひたい。その時こそわしはお前たちを不滅にする本當の寶を與へることが出來るだらう。わしは今日まで持つてゐるすべてのものを惜まずに布施して來た。だがわしの布施したものには一つとして不滅なものはない。わしは貧しい人々がわしの布施した財寶を得て喜んで歸るのを見る時に彼等

お當座の困窮から免れるのを喜びはしたが心の底にはいつも〲深い淋しさがあつた。わしは知つた。わしは貧乏人だ。彼等に與へる本當の寶を一つも持ち合はせてゐない貧乏人だ。わしの財寶で、わしの城や冠で彼等を救はうと思つたのは愚かな〲ことだつた。わしは行かう。行つて不滅の寶を發掘しやう。お前たちはわしが無上微妙の知慧で莊嚴せられて歸るのを待つてゐてくれ。きらびやかな行列は今日の旅にはふさはしくない。わしは太子としてゞはなく本當に貧しい求道者として行くのだから（一同しばらく黯然としてゐる。）

廷臣甲　殿下の世にも尊いおこゝろを承はりまして、何と申上げてよろしいか私共はたゞ頭が下がるばかりでございます。

廷臣乙　此の上は心をこめて殿下の御念願の一日も早く滿足するやうお祈りしていさぎよくお送り申上げるほかはございません。

女官の一　私どもゝ心を奮ひ起して殿下の御決心に副ひたてまつらねばならぬと存じます。

廷臣甲（嘆息して。）此の期に及んでもはや殿下をお止め申さうとは存じませぬ。たゞ心にかゝるのは殿下を失つた後の業波國の運命でございます。慈父の如くに慕うてゐた殿下が國を去られたと知れ渡つたら人民がきつと騷ぎ出すに相違ございません。それに乘じて敵國が攻め寄せたら――

太子　國は滅び、國は起こる――さながらベンガルの濱邊に起伏する砂丘のやうだ。（默然として。）よくお聞き、そして忘れずに覺えてお置き。わしは永久に滅びることのない國を求めに行くのだ。わしがふたゝび歸るときにはお前達を不滅の國の民として永久に渝ることのない福祉にあづからせるぞ。（馭者に眼くばせして。）では左様なら。愛する人々よ。これでお別れ致しますぞ。

夫人の一人　あゝ、ではどうしてももうお別れ申さねばならぬのでございますか。わが主、わが師としてお仕へ申上げ

るのも今が最後となつたのでございますか。お恵みを受けた此の幾年の間の樣々な思ひ出が今夜から私たちを眠らせぬことでございませう。露よりもしげくおかけ下さつた愛のお言葉が永く〳〵私たちを泣かせることでございませう。もう夜衣に殘つた移り香の外には殿下をお偲び申上げるよすがはないのでございますか。せめて俤となつて淋しい閨の戸に立つて下さいまし。（頸飾りから眞珠をとつて捧げながら）此の眞珠をわたしたちのかはらぬ愛のしるしにお身におつけ下さいまし。

（他の夫人達も各々一個の眞珠を太子に捧げる）

太子　（眞珠を受け取つて。）わしは遠く別れてもお前達のことを決して忘れはしない。いつもお前たちのために祈ります。お前達はつゝしみ深く暮らして、わしが望みを達して歸るのを待つてゐてくれ。お前たちが心をこめて餞けにしてくれた此の眞珠の報いにわしが山からかへる時には七倍も美しい不滅の法珠でお前たちを飾つてあげますぞ。

乳母の一人　（涙ぐみながら）ではその時には私たちには香華をお手向け下さいまし。私たちは冷めたい墓になつてゐませうから。（馬車の側に走せ寄つて。）あゝこれが一生のお別れでございます。も一度玉體に觸らせて下さいまし。（太子の差し延べたる腕をさすりながら。）あなたさまにお哺ませ申上げた乳房はもう萎み果てゝしまひましたが、私のこゝろはあのあなたさまを籃に載せてお搖ぶり申上げた頃と少しも渝つては居りませぬ。どうぞどうぞお體を大切に遊ばして下さいまし。山にお入り遊ばしたら恐ろしい虎や毒のある蛇がお體を傷けはしまいかと私は心配でなりませぬ。あなたさまの玉のやうな膚をいばらが破らぬやうに氣をつけて下さいまし。本當にあなたの樣のお肌のどの隅にある小さな黒子（ほくろ）にも、わたしの唇の痕のつかぬのはない、程でございますのに。山にお入り遊ばしても、わたしたちのことも時々は思ひ出して下さいまし。わたしたちはあなた樣のお體のつゝがないことゝ御念願の遂げられる日の一日も早く來るやうにとお祈りすることを、たゞそれだけを死ぬる日までの仕事にするでございませう。その日はもう間もなく來るのでございますから。（小さな錦襴の袋を捧げながら。）これはあなたさまの守護神の帝釋天樣のお守りでございます。

いつも肌身につけてゐて下さいまし。あなた様は帝釋天様の御申兒で御幼少の時から御病氣の折にはいつも帝釋天様にお祈りして不思議に御本復遊ばしたのでございますから。

太子（涙ぐみながら。）乳母よ、お前たちの悲しみはわしの胸を千切るやうだ。だがわしは行かねばならない。今わしの行くのはお前たちと永久に別れたくないためだ。お前たちは老いた。お前の云ふ通りにお前たちは程なく此の世を去るだらう。わしが今千年の齢(よはひ)をお前に約束してやつたとて、それが何の慰めにならう。わしが今たとひ此の城に留つても私たちはもうぢきに別れねばならないのだ。今別れたらわたしたちはもう此の世では二度と逢へないかも知れないが、もはや二度と別れなくてもいゝ國でまた逢はう。わしはさういふ國を求めに行くのだ。さういふ國は屹度無くてはならないのだから。其の國でいつまでも／＼わしを愛してくれ。小さい時からお前たちがどんなにわしを愛してくれたか、それを思へばわしは涙ぐむ。此の城の廻りはどの丘も、どの樹影も、あらゆる徑(こみち)あらゆる隈(くま)がみな一つとしてお前たちに守られて一緒にした幼ない遊戯の思ひ出の殘つてゐないのはない位だ。そのなつかしい城を見棄てるのはわしの深い、深い決心からだ。わしの氣持は解つてくれると思ふ。どうぞ達者で暮らしてくれ。わしは山に入つてもお前たちのことは一生忘れることはない。平和な晩年と靜かな眠りとを祈つてゐるぞ。（廷臣の一人に。）此の老婆たちが一生不自由をしないやうに厚く扶養してやつてくれ。

廷臣　畏りましてございます。

乳母（泣きながら。）あゝ、もつたいないことで御座ゐます。

太子（一同に會釋して。）ではお別れしますぞ（馭者に眼くばせして。）行け。

（使者急ぎ登場）

使者（恭しく。）只今王妃陛下がこれへお成りでございます。

太子　母上が！

（鐘の音、轍の響が聞える。）

廷臣　王妃陛下の御車だ。

（間。）

（王妃の馬車登場。供奉の列なく只一人の女官陪乗せるのみ。馬車止る。王妃馬車より下りて太子の馬車に走せ寄る。太子急ぎ馬車より下りる。）

王妃　おゝ。須太拏や。（太子を抱いて。）わたしの愛兒、わたしの寳！（嗚咽のために聲がつまる。間。）お前は行つてはならない。行つてはならない。

太子　（やさしく王妃を抱いて。）母上よ。お心をお靜かに。

王妃　そなたに行かれてわたしは何うして生きて行かう。わたしの望みはなくなつてしまう。わたしのいのちは滅びてしまう。わたしは——

太子　（しづかに。）昨夜くれぐれも申し上げてお暇乞ひ致しました如く——

王妃　あゝ。昨夜、夜どほしわたしは考へあかしたのだよ。そなたを離れてもこれから生きて行かれるかどうか試めして見たのだよ。わたしはお前はもう私から去つたものと思ひ定め、神々にわたしの心を支へて下さるやうにお祈りして、できるだけ耐えやうと努めてみたのだよ。けれどわたしは昨夜そなたのない私の生活がどんなものであるかといふことを知つた。とても私には耐えられるとは思へない。お前はどうあつても去つてくれてはならない。

太子　（毅然として。）母上よ。私は行かねばなりませぬ。

王妃　いゝえ。そなたは行つてはなりませぬ。わたしが崩れて死んでしまうことをそなたが望むでくれるのでなかつたら。須太拏や。どうか思ひ出しておくれ。わたしがどんなにしてそなたを育てゝ來たかを。そなたが小さい時私はそなたを私の瓔珞を飾つてあるどの珠よりも美しい、どの珠よりも稀な珠のやうに愛でました。實際にそなたにそれだ

けの價があつたのだ。そしてそなたが長じてからはそなたは私の誇りであつた。私の師であつた。私は葉波國の全土よりもそなたを尊んでゐる。そなたのやうな氣高い人の母であることの名譽を王妃の位いよりも重んじてゐる。思へばそなたは私の胎に宿るにはあまりに尊かつたのだ。抑も私はどのやうにしてそなたを私のものとすることができたのだとおもふ？そなたの場合では私は特別に私のものといふ感じを私が持つてゐることが許されねばならないと思ふ。何故と云つて私はそなたを神に祈り求めて授けられたのだから。王樣と私とは世嗣のないのを嘆き悲しんだ。その他のすべての充ち足つた幸福もその嘆きの前に輝きを失ふかと思はれる程だつた。王樣は尊敬すべき祖先から傳へられ、多くの記念すべき名譽ある戰爭によつて外敵から完全に護られた此の美しい豐饒な國を嗣ぐものゝないことを思ふことに嘆息遊ばした。そして遂に王樣と私とは寢物語りに相談して帝釋天樣に子種をお授け下さるやうに祈願を立てることになつたのだよ。私たちはどんなに嚴かな儀式と、淨い齊戒と永い斷食とを以て熱心に祈つたことだらう。そして終に私たちの切なる祈りが聽かれて、私は身重になり、軈てそなたが生れた時に私たちの喜びはどんなだつたらう。その時程王樣のお顔が幸福に輝いたのを見たことはどの凱旋の時にもなかつた。金甕の水で玉のやうな肌を洗い、練りのいゝ絹布で裹んで、しみ〴〵とそなたの顔を見た時に私は涙がこぼれて止まらなかつた。その瞬間からそなたは私のいのちになつてしまつたのだ。そなたはまたあの立太子式の日のことを思ひ出しておくれ。そなたが元服するのを待ちかねて、あの盛んな、目の眩ふやうな華麗な儀式で、王樣の手づからそなたの頭に冠が載せられた時宮殿も搖らぐやうな萬歲の聲の裡に、そなたが百官と庶民の前に太子として初めての挨拶をした時そなたはどんなに立派で、王者の威嚴を備えて美しく氣高く見えたことだつたらう。その時私は母の幸福に醉ふやうな氣がした。須太拏や、考へてみてをくれ。その幸福が皆空しくなつてしまうのだ。幸福が大きかつたゞけに、それを失つた後の苦しみは一層ひどいだらう。どうぞあはれな母をその恐ろしい淋しさのうちに殘さないでおくれ。

太子　母上よ。あなたのお心はよく〳〵解ります。あなたはどんなに私を愛して下さつたでせう。色々思ふと私の胸は潰

い清い涙で一杯です。あなたは此の法界に愛といふものゝあることを私に知らせて下さつた最初の方でした。私がそれを至上の眞理と認め、その眞理に私の一生を捧げて奉仕しやうと思つてゐる、その愛といふものは實にあなたから初めてその觀念の種子を賜はつたのでありました。あなたは私にありあまる程の母らしきめぐみをかけて下さいましたが、その種子こそあなたの私に賜はつた一番尊い賜物でございました。私はあなたから賜はつた生のまゝの愛の粗鑛から、純粹の黄金を錬り出しました。（涙と道徳的興奮とを同時に感じながら。）あゝ母上よ、私が今あなたとお別れせねばならぬと決心するのも實にその愛のためです。その愛の至上命令に從ふのです。あなたと今お別れするのが却つて本當にあなたを愛する道であると信じるからです。永久にあなたとお別れしたくないからこそ今お別れせねばならないのです。昨日呉々も申上げた通りです。不滅の都で、ふたたびお目にかゝり、そして其處なる宮居に永久に共に棲みませう。何卒私をいさぎよく送つて下さい。

王妃　須太拏や。私はそなたの心が解らないのではありません。そなたがどんなに母思ひであつたか、わたしの思ひ出が一杯です。それがわからないでどうしませう。それだからこそそなたと別れることが耐えられないのだよ。わたしどうあつてもそなたを遠くの山に遣つてしまうことは出來ません。年とつた母親の愛といふものがどんなに切ないものだかどうか察しておくれ。そなたに云ふが、わたしは此の二三年めつきりと體が衰へてきてゐますよ。老いの淋しさがもう私をとりまくやうになつて來ました。見ておくれ。わたしの此の鬢の霜を。

太子　わたしの心を弱くしないで下さい。

王妃　私の白髮頭が冠の重さにも耐えられなくなるのはもうちきです。そなたと別れてしまつたらわたしは乾度床につきますよ。

太子　あゝ。

王妃　わたしが死ぬときそなたは私の臨終の枕べに侍しては下さらないのですか。わたしの最後の息が呼ぶのは乾度そ

なたの名にちがひない。その時そなたは私を抱いては下さらないのですか。母親がその獨兒を育てるときに、自分の末期の唇を潤ほして貰ふことを願はないものがゐるだらうか。

太子　母上！

王妃　そなたはわたしの葬らひの列にもつらなつて下さらないのですか。

太子　お聞き下さい。母上。あなたの母としての執愛が今の私を曇かすならば、あなたにとつて恐ろしい禍ひですぞ！母なるものの名の上に永久に天の呪ひを呼ぶのですぞ！母性の愛の中に巧みにつくられた惡魔の陷穽が今はつきりと私に見えます。よくお聞き下さい。私は母上から愛の觀念の種子を賜はりましたが、私はそれを地に蒔いた時に不思議にも其處には藥草と毒草とが同時に生えました。私がその二つを見分けることが出來るやうになつたのはほんの最近のことなのです。これは實に恐ろしいことでした。一つは人類を平和に導き一つは爭鬪に誘ふのです。一つは涅槃に一つは輪廻に。其處に深い陷穽がかくされてゐるのです。種族の愛はそれが法の光で照らされないならば眞の愛と異るばかりでなく相乖くのです。母子も一度隣人でなくてはなりません。隣人の愛のみ眞の愛です。世嗣に豐かな領土を遺したい欲望が父上を多くの戰ひに驅りました。我子の聲色に溺れてゐたい執着が今世にも尊い大願の旅程から私を阻まうとしてゐるのです。今私が退轉して此の城に留まれば母上も私も共に滅ぶのです。葉波國の人民も滅ぶのです。どうぞ私を行かせて下さい。勇しく送つて下さい。

王妃　（すゝり泣き乍ら。）あゝ、わたしはどうしても遣らねばならぬのか。（太子をつくづくと見る。やがて取り亂して）いゝえ。いゝえ。わたしはやることは出來ません。別れることは出來ません。

太子　（跪きて母の手を取り）尊き母上よ。勇氣を奮ひ起して下さい。あなたの生れながらの美しい知慧と、敬虔なこゝろを呼び醒まして下さい。假令今お別れ致しましても、やがて天上で、限りないいのちを持つて――

王妃　わたしは眩ゆい天上よりも此の葉波國の黒土がなつかしい。假令短かいいのちでも、そなたの黄金色の髮を見、

わたしの胎から出たその蜜色の肌に觸つてゐたい。（全く取り亂れて）あゝ、わたしは今の苦しみを見るよりは母とならなかつた方がよかつたと思ひますわい！（地に伏して泣き崩れる。）

太子（無言のまゝ王妃の瓔珞の揺らぐのを凝つと見つめて居る。）

（間。群衆の喧噪の聲舞臺の後ろに起り次第に近づく。「太子殿下！」「檀特山へ！」等の叫び聲時々聞ゆ。）

太子（突然立ち上がる。）ではお別れ致しまする。（馬車の方に行かんとす。）

王妃（起き上り、恨めしそうに）あゝ、そなたはどうあつても行くのですか。（咽び泣き乍ら）お行き！死んでしまふから。わたしは生きてはゐられないから！

太子（思はず、二三歩母の方に寄らんとし、踏み止まり、顔色蒼ざめ、一瞬間沈默の後決然として）お死になさい！母上。

王妃（眞青になつて）えゝ？

太子（天を仰しながら）惡魔よ退け！今のわしの決心を鈍らさうとするものは禍ひだ。永恒に呪はれるであらう。假令肉身の母であつても外道だ。惡魔だ。我前に立つ女人よ。汝と我と何の關はりがあらう！

王妃 須太拏！

太子 今の私の發心を妨げて永久の王爵を蒙るよりも恵み深き天よ、願はくば速かにわが母に死を給へ。

王妃 おゝ。（太子に飛びつかんとし、太子の威に打たれてそのまゝ立ち竦み、やがて瞑目して沈默す。）

太子 女人よ。私は今そなたの子としてそなたの前に立つてゐるのではないぞ。今私は衆生のものだ。今私は私を孕んだ女に屬くものでなく、天に屬くものだ。あゝ今私の道を阻むよりも、死は寧ろそなたにとつて幸ひだ。今私をそなたの懐から人類の手に返せ。そなたが帝釋天からあづかつてゐた私を、も一度帝釋天に返せ！

王妃（天に向つて兩手を拱り乍ら）南無帝釋天！

太子　天王帝釋よ。此の女人を守らせ給へ。

王妃（地にひざまづく。）

（間。群衆の喧噪益々はげしく、近づき來る。）

王妃（突然、涙に洗はれたる顔を上げ）行け！須太拏よ。行つて無上の悟りを開け。道を成じて父と母と葉波國の先祖代々の靈と、すべての人民を救つておくれ！

太子　おゝ母上！（走せ寄つて王妃の腕に身を投げかく）

王妃　おゝわたしの愛兒！（一度抱き緊め、やがて靜かに太子を放し、跪きて太子を拜し。）

太子（瞑目して佇立す。）わが師よ。

王妃、そなたは私の善知識です。わたしの救主です。もつたいない。もつたいない。そなたを孕んだわたしの胎は何んといふ祝福されたものであつたらう。わたしに何の價があつて數多い女の中から選ばれたのだらう。いつくしみ深き天よ、いと小さきはした女が今さゝげまする心からの感謝をお受け下さいまし。

太子（涙ぐみ。）あなたのお言葉はあまりに畏ろしう御座ゐます。若し私に何か尊いものがありますならば、母上よ、それは實にあなたに、かくも高貴なあなたに負うてゐるのでございます。

王妃　そなたを私の私有と思つたのは私のあやまりであつた。私の思ひあがりであつた。私は今はつきりとそれが解りました。天よ、わたくしの僭冒をお赦し下さい。そなたは本當に人類の有です。天のものです。わたしは今そなたを私の手から放します。天に返します。お行き。須太拏、そなたの使命のために！そなたを産んで人類に贈つた私の勳は永久に人類の記憶から滅びることはないであらう。私の名譽は眩ゆい程です。

太子　尊き母上よ、諸天もあなたを嘉し給ふでございませう。

（群衆の喧噪いよ〳〵烈しくなる。遂に二、三の市民群衆に押し出されたるさまにて、右手の端より登場す。）

兵士甲　退け、退け。

兵士乙　寄るな。無禮者！

（二、三の市民退場す。喧噪いよ〳〵烈しくなる。）

騎馬兵　（示威的に群衆の前に馬を驅けさせつゝ。）叱ッ。靜かに！御前だぞ！

寡婦　（突然台場群衆を押し分け、子供を抱きたるまゝ太子に馳せ寄らんとす。）

兵士甲　無禮者！（槍の柄にて押し出さんとす。）

寡婦　（槍の下をくぐり抜け、太子の側に突進し、その足下にうつ伏し。）お願ひでございます。お願ひでございます。

兵士甲と乙　（左右より槍の鋒先を揃しながら）退れ、退れ。

寡婦　太子様！

太子　（靜かに兵士を制して。）捨てて置け。今日は何人も拒みたくないから。（兵士後ろに退く。）願ひの筋を云ふがよろしい。

寡婦　ありがたう御座ゐます。有り難う御座ゐます。お止まり遊ばして。どうぞお止まり遊ばして！

太子　（稍おどろいて。）誰から？そなたは何人か。

寡婦　貧しいやもめでございます。名もない小商人の妻でございます。（泣き立てる子を揺ぶりつゝ。）お泣きでない。お泣きでない。あはれなみなしごでございます。

太子　（顧みて）女と子供に食物をやれ。

寡婦　いゝえ。いゝえ。それがお願ひでございません。

太子　飢えてゐるのではないのか。ひどく疲れて見えるが。

寡婦　倒れ込みそうでございます。もう三日何も食べません。夜通し歩いて來たのでございます。あなた様にお目にか

かつて、親子が千死するのを助けていたゞかうと存じました。けれど〳〵恐ろしいことを聞いた今そんなことは何んでもございません。おつしやつて下さいまし。あれは本當でございませうか。あなた様が檀特山へゐらつしやると申しますのは。

太子　（しづかに肯く）

寡婦　（背ざめる。）あゝ、やつぱり本當だつたのか。（泣き出して）お止まり下さいませ。太子様。どうぞお慈悲に。あゝ、どうしたらいゝだらう。（手をもみながら。）おなさけでございます。おなさけでございます。國中のものがどんなにお頼り申してゐるか知れないのでございますから。それはもうみんな親の様にお慕ひ申してゐるのでございますから――

太子　（感動を抑え乍ら。）女よ、わしは行かなくてはならない。

寡婦　いゝえ。いゝえ。どうあつても止つてゐたゞかなくてはなりません。あなたさまがおいで遊ばしたら國中のものがどんなに嘆くでございませう。どんなに困るでございませう。明日から此の國には日輪が昇らないのと同じでございます。國中の貧しいものや、年寄はどうするのでございませう。私たちのやうなやもめや孤兒はどうして生きて行くのでございませう。

太子　わしが行くのは皆のためだ。

寡婦　皆のため？　そうでございます。皆があまり貪欲なものでございますから。あまりに――

太子　そなたは間違へてゐる。

寡婦　いゝえ。あまりに愼しみが無いものでございますから。あなた様が皆を憐んで布施して下さいましたのに、皆はつけ上つて欲張り過ぎました。そのために自分等が何より頼りにしてゐるあなた様を失はなければならないやうな羽目になるとは何といふ淺間しいことで御座ゐませう。嘸愛想が盡きませう。でも赦してやつて下さいまし。皆馬鹿でございますから。皆後悔してゐるのでございますから。

太子　いや、わしは皆を責める氣は微塵も無いのだ。皆は責めるにはあまりに人が好い。あまりに自分を知つてゐない。自分の運命の恐ろしいことを知らない氣の毒な人たちだ。わしが行くのは皆に布施するためにもつと〳〵尊い寶が欲しいからだ。

寡婦　（驚いて。）此の上にまだでございますか。あゝ、何處まで御慈悲深いでございませう。そのお心のために王樣の御勘氣をお受け遊ばして國を立ち退き遊ばさなくてはならないとは！（四邊を見廻し）申しお役人樣、どうぞ太子樣をお止め遊ばして下さいまし。お立退き遊ばさなくてもすむやうにおとりなし遊ばして下さいまし。（地に頭をすりつけて。）お慈悲深いお妃樣。どうぞ王樣にお願ひして御勘氣の解けるやうお計ひ下さいまし。皆はもう決して お布施をねだるやうなことは致しません。皆本當に後悔してゐるのでございますから。それはもう私が承け合つてもよろしいのでございますから。

（一同沈默）

寡婦　どうぞ小さなものゝ願ひを斥けないで下さいまし。（一同の答へざるを見て突然に、狂ふやうに）わたしに命がある限りはおみ足にすがりついても此處からおたゝせ申しは致しませぬ。強いてお立ち遊ばすのでしたら、あの御車の軌でわたしの體を轢いてお通り下さいまし。（地上に身を投げて、泣きくづれる。）

太子　（深く感動して天を仰ぎ。）天よ。此の小さきものからこれほどまでに慕はれる價が私にありませうか。私は恐ろしうございます。何卒私がそれに價するほど偉大にして下さい。（愛憐の眼を女の埃にまみれた背に注ぎ乍ら。）女よ。わしの云ふことを心を落ち付けてよくお聞き。――

（此の時群衆の喧噪極度に達し、群衆の中より「お慈悲でございます。」「國が亡びます。」「暗闇になります。」「餓死します。」等の叫び老若男女入り混じりたる聲にて聞こえ、やがて數名の市民後より押されて右手舞臺の前に登場す。兵士、騎馬兵等群集を押し止めんとして鎗を揮い、馬を驅つて叱咤す。）

太子（兵士達を制して。）止めなくてよろしい。人民を集まらせてくれ。わしは彼等に別れの挨拶がしたいから。

（兵士等道を開き太子の後ろに警戒す。群衆入り來り皆、太子の前に跪く。）

太子（天を拜して）天よ、私の言葉を祝福して出來る限り眞理と愛とを含ましめ、且つ理解し易く語らしめ給へ。人々の心の耳を聽からしめて、よく目前の傾好の情を抑へ、永久の眞理に聽く知慧を眼ざめしめ給へ。（沈默）

（太子の一心に祈禱せる樣を見て群衆は自づと靜肅になる。）

太子（靜かに、親しげに群衆の側に數步近よりて。）愛する葉波國の人々よ、わしが今心の底から眞心をこめて語る言葉をどうか心を靜かにして聞いてくれ。わしの言葉は訣別の挨拶なのだ。わしは今そなたたちとお別れすることを堅く〱決心して此處に、そなた等の前に立つてゐるのだ。

（群衆色めきお止まりなされて！といふ聲方々に起るが、叱ッ叱ッと制する聲に壓せられて再び靜かになる。）

太子（聲を勵まして。）わしはお前たちの意に逆らうて此の決心を語ることを決して恐れない。何故なれば、その決心こそお前たちに對する私の愛の印だから。わしは本當にお前達を愛してゐる。わしはかういつて何者の前にも僞はつてゐるとは思へない。これまでもわしの器量の及ぶ限り愛して來たつもりでゐる。これから後も永久にわしの愛の愉ることはない。お前達はそれを信じてくれるであらうか——

（「信じます、信じます」と興奮した、おろ〱聲で叫ぶものがある。「太子殿下」とだけ云つて涙ぐんでゐるものもゐる。方々から歔欷の聲が起る。）

太子（涙ぐみ。）皆信じてゐてくれるね。皆よく聞いてくれ。わしはそのやうに心からお前達を愛してはゐるが、幾ら一生懸命に愛しても、本當にお前達を助ける力がない。どうしたら助けることが出來るかといふ知慧がない。わしが行かなくてはならないのは畢竟そのためだ。——

（群集動搖し、布施は？布施は！といふ聲方々に起る。）

太子　お前たちはあの布施のことをそれ程にいふのか。あの平凡な、下手な、効果の乏しい贈物を！　だがせめてあれがわしのお前達に與へ得る最大の贈物だつたのだ。それがわしの器量の限りを露骨に示してあまりある。わしの力の足りなさを！　またあれだけの布施でそれ程に喜ぶお前達がわしは氣の毒でならないのだ。御覽、わしがどれ程布施をしてもお前達の間に乏しいもの、飢えるものは無くならないではないか。布施の度毎に集る人々は殖えるばかりではないか。王室の寶藏が幾ら豐かに見えても、國庫を空しくして布施しても、それを以て人民の苦艱を救はうとするのは、恰も水盤を以て恒河の砂を潤ほさうとするやうなものだ。假令それが出來たにしても米穀、金帑、蓄什の類を以て人間の性命の苦患を醫やすことは絕對に出來ない。若しそれで幸福になれるものなら、それ等に事缺かぬ此のわしは幸福でなければならない筈だ。だがわしは果して幸福であらうか？　わしは心の內に深い〳〵不幸を感じてゐる。わしが宮殿や、父母や、人民と別れて山へ行くのも實にその不幸に堪え切れなくなつたからだ。わしは自分が生を享けてゐる此の法界が調和あるものであることを感じてゐなくては幸福であることは出來ない。しかし此のまゝでは世界は生あるものが互に鬩ぎ合ふ鬪場としか見えない。でなければ空しい墓場だ。私達は生を悅ぶ。しかしながら私達はいつまでも生きられるのか？　あゝ私たちは死ぬのだ！　これは實に〳〵恐ろしい。嚴肅な事實だ。若し私達がいつまでも生きられる道が此の法界の何處かに無いならば、私たちが生を享けたといふことは實に恐るべき禍である。わしはその道が乾坤なければならないと信ずるのだ。だからその道を求めに行くのだ。私達は愛に生きる。若し愛が無かつたら私達は恐らく生きたいとは願はないだらう。だが愛するものゝ不幸を助け拯ることが出來るのか？　いや、それよりも淋しいのは愛するものと別れなくてはならないことだ。これは實に云ひやうのない悲い事實だ。若し相愛するものが永久の別離から免れる道が此の法界の何處かに無いならば、人間に愛のあることは實に恐るべき禍いだ。わしはその道が必ずなければならぬと信ずるのだ。だからその道を求めに行くのだ。實にその道を求めに行くのだ。若し私達が永久に愛するものと共に生きることが出來るならば、他のすべてのものが缺けてゐても猶且つ幸福で

あり得る。がその事が許されないならば、假令他の凡てのものが備はつても決して幸福であることは出來ない。がその一番大切な、なくてはならぬものが、私たちには缺けてゐるのだ！　あゝ生きるものが必ず滅び、會ふものが定めて離れるこの永久の、人類に課せられた運命に打ち克つ時にのみ初めて人間は救はれるのだ。本當に幸福になれるのだ。此の難題を解決しないで、宮城が何であらう。王冠が何であらう。あゝ、わしは行かねばならない――

（欷歔の聲が方々から起る。「葉波國は滅びます」と叫ぶものがある。）

太子　（囈のやうに）葉波國は滅びるであらう。わしは永久に滅びない國を求めに行くのだ。

（呻吟の聲が群衆の中に充ちる。或る者は地に倒れ、或るものは號泣し、或るものは手を天に伸ばして祈つてゐる。「人民は死にます」と叫ぶものがある。）

太子　人間は皆死ぬのだ。人間は皆死ぬのだ。わしは永久に死なゝい命を求めに行くのだ。

（「お止りなされて！」と云ふ聲が天地に充ちる。）

太子　わしの此の決心は、須彌山にかけて搖らぐことはない。わしが止まるならばお前達も共に滅ぶのだ。わしが行くならばお前達も共に救ふのだ。決してわしを止めやうとはすな――

（群衆は、自づと垣をつくつて太子の行く道を塞いでしまう。）

太子　（大音聲にて）皆よく聞け。今のわしの行く道を遮ぎるものは恐ろしい／＼ことをしてゐるのだぞ。天の意志に適はないことをしてゐるのだぞ。諸天も鼓を鳴らして讃め給ふわしの今日の旅をお前達も祝して勇しく送つてくれ。

（群衆は堵列して、動かうとしない。）

太子　（嘆息して。）お前達は遂に理解してくれないのか。此の一番大切な、一番普遍な、何人にでもその心の奥の理性の耳で聽きさえすれば、必ず解らなければならない眞理を受け容れることが出來ないのか。わしが行くのはお前達に取つて益なのだ。人類にとつて益なのだ。お前達が理解しないのを見ても、わしは益々わしが行かなければならない使

命を感じる。あゝ天よ、彼等の心の耳をお啓き下さい！

寡婦（此の時まで跪いて、始終注意深かい耳を傾けてゐたが、突然立ち上つて）太子様、おいで下さい、私はもうお止め申しは致しませぬ。あゝ、尊い、〳〵太子さま。私にはわかりました。あなたのおつしやることは私に、此の何も知らないはしためにはつきりと解りました。あなたの求めにいらつしやるものは本當に私の要るものです。私の欲しいものです。私たちがいつまでも生きられるため、愛するものと一緒にいつまでも生きられるためにはどうすればいゝかといふことを學びにいらつしやるのでございますね。そしてそれを私たちに教へて下さるのでございますね。三年前私の主人がなくなりました時に私はそれをどんなに求めたでせう。あゝそれさへ私に解つてゐるのだつたら！ 私はそれは出來ないものとあきらめてゐました。いつのまにかそれを求める氣をなくしてゐました。それは私が心の底では一番欲しがつてゐるものでございますのに。あゝしかしあなたの今の御言葉でやつぱりそうかと思ひました。あの時私が馬鹿氣たことを考へたのではなく、あなた様のやうな尊い方でもやはり同じ事なのでございました。あゝあなた様は何てお優しく、お勇しく、そして私たちにお近い方でございませう。私はやがて此の坊やとも別れなければならない時が來る。此れ程お慕ひ申し上げてゐるあなた様とお別れしなくてはならない時が來る。それは屹度來る。その時どんなに苦しいでせう。今日お別れするのはどんなに淋しくても、またお目にかゝれる望みがございます。あなた様をたゞ一圖にお止め申さうと思つたのは私の間違でございました。勇ましくお出でなされて下さいませ。あゝ太子様、しかしきつと〳〵また歸つて來て下さるのでございますね。

太子　あゝ、屹度歸つて來るぞ。その時はそなたの本當に求めるものをあげることが出來る。そなたの亡くなられた主人と、も一度逢へる道を教へてあげることも出來るのだぞ。（群衆に向いて）人々よ。お前たちは此の女の言葉を何と聞いたか。此の小さき者の言つたことはわしの心に適ふた。お前たちもいさぎよく送つてくれ。わしが今度歸つて來る時には、これまでした布施が塵埃と見える程盛大な布施をするぞ！ 此の葉波國が累散の邊地であつたかと思はれ

る程光榮ある國の王として歸り、そしてお前達をその國の民としての福祉に與らせるぞ！　其の國土と其の人民と壽命は無量無邊であつて、阿僧祇劫に到るも盡きないであらう。

（群衆は猶ほ口々に何か云ひ合ひつゝ、堵列して道を開かない。）

太子　あゝ。わしは行く。徒らに別れを惜んでゐる時ではない。一刻遲くなれば、その一刻の間に人類の受ける害惡は測り知れない程だ。わしは旅を急がなくてはならない。（王妃の側に行き、跪きて）母上よ。私はこれにてお暇申します（高まつて來る感動を抑えやうと努めつゝ）今日まで母上がおかけ下さつたありあまる程の恩愛は私の胸の底に深く〳〵沁み込んで居ります。滑い〳〵感謝で一杯です。私はあなたを思ふ毎に一生感謝といふことを忘れることはございますまい。そしてその度毎に道に勵む心を燃え立たせられるでございませう。あなたのお名によつて天地をはぐゝむ「母」なる愛を懷念するでございませう。今日までお心をお傷め申上げた事の多かつたのをお許し下さい。私は今日の旅が眞實の報恩に適ふ道であることを信じます。それを信じます故に勇んで參ります。何卒お體をおいとひ下さい。私が成道して歸るのを待つてゐて下さい。（涙を一杯眼に溜めて。）若し私が歸りますまでに——

王妃　（涙を抑え乍ら）若しそなたが歸るまでにわたしが死ぬやうなことがあつても、須太拏や、そのために決して志を挫いてはなりませんぞ。それは却つて私の心に適ひませんぞ。今いさぎよくそなたを送る以上私はそれを覺悟してゐますのじや。その時は私をそなたの母らしく死なしておくれ。假令葉波國がいかなる危難に逢はうとも、そなたは成道するまで歸つてはなりませんぞ。若し落城の知らせを山で聞いたならば、私がどんなに王妃らしい死に就いたかを信じておくれ。私の罪の多い魂がどんなに恐ろしい地獄に墮ちやうとも、そなたが必ず救ひ攝つて下さることを信じてゐますから。

太子　（母を拜して）尊き母上よ。あなたの强い〳〵御言葉は今の私をどんなに勵ましてくれたでせう。今あなたは何といふ美しく、そして神々しく見えるでせう！　私は今程あなたのお顏の輝いたのを見たことはありませんでした。あなた

は星のやうです。あゝ。私はあなたを讃仰します。あなたはこれまで一つの冠に充分價ひして來られましたが、今やまたも一つのもつと高貴な、天的な冠にふさはしくなられました。「法母」の冠があなたの頭に載せらるべきです。今より後萬代までもあなたの御名は人類の子々孫々にほめ傳へられるでございませう。

王妃　（涙ぐみて）あゝ私は今選ばれた母の悲しみと誇りとを同時に感じます。高い〳〵絶頂と深い〳〵淵とを同時に感じます。私は昇天するやうな氣がする。けれどまた死ぬやうな氣がする。諸天よ、私をお讃め下さい。あゝけれど私をお憐れみ下いまし。私が燈盞に注いだ油がどんなものか見て下さいまし。私の獨兒、私の誇り、私のいのちを――（自分を制して）惠み深き天よ。（一心に祈る。）願はくば此の小さき母を憐れみ給うて、我子を守りてつゝがなからしめ、彼の念願を祝して道を成ぜしめ給へ。

太子　（默禱す。）

（間）

太子　（決然として）ではお別れ申しまする。（馬車の方に行きかける。）

王妃　あゝ。待つておくれ。須太拏や。――も一度抱かせて――

太子　（王妃の腕に身を投げる。）

王妃　（太子を抱きしめて）氣をつけておくれよ。からだを大切にして――

太子　母上にも、おいとひ遊ばされて――

（間）

太子　（靜かに母より離れ、一同に一揖して）ではお別れしますぞ。

廷臣　御健勝に渡らせられまするやう祈り奉ります。

女官　御念願の一日も早く滿たされまするやう念じまする。

夫人　再び御車を迎えまつる日を——それのみ待つて居りまする。
乳母（泣々と太子の顔を眺め）お氣をつけ遊ばして——お體をお大切に遊ばして——（泣く）
（一同恭しく頭を下げる。）
太子（馬車に乗り、人民に向つて一揖しながら）わしは行くぞ。お前たちは互いに愛し、赦し、和らぎ合つて暮らしてくれ。
お前たちは軈てわしが權威あるものとなつて法輪を轉じつゝ歸つて來るのを迎えるであらう。（馭者に）行け。
（馭者車を進めんとす。群衆は口々に叫びつゝ馬車の前に堵列して道を塞ぐ。馭者ためらふ。）
太子（火の如く。）行け。蹂み躙つて行け。今わしの車を阻むものは永劫に呪はれるであらう。
（馭者馬に鞭打つ。馬車群衆の中に衝き進む。群衆思はず道を開く。此の瞬間に寡婦は己れの衣を脱ぜて馬車の前の道に布く。群衆
皆これに倣うて衣を脱ぎて道に布く。）
寡婦（涙と共に聲を振りしぼつて叫ぶ。）太子殿下萬歳。
（群衆これに和し、一齊に太子殿下萬歳を叫ぶ。）
太子（車上より廷臣を顧みて）東宮の寶庫を開け。すべてわしに屬する財帑を一物も殘さず、人民に施せ。何者にも拒
むな。わしがする最後の布施だ。
（太子殿下萬歳の聲天地に充ちる。鐃鈸の音。馬車粛々として進む。群衆は口々に或は萬歳を叫び、或は歔欷しつゝ馬車の後を追うて
退場す。急に森とする。）
（間）
王妃（倒れんとしてわづかに女官の腕に支へられ乍ら）おゝ諸天よ。お守り下さい。小さき母をお憐れみ下さい。今私から
失はれたものが私にとつて何であるか、見そなはし給うでございませう。わたくしがさゝげた[illegible]重の價にかけて
めぐみ深き諸天よ。願はくば私が、今は私にとつて望ましいものとなつた永き眠りに就きますまで、「法悦」としての

詰りを支へることが出來ますやうお守り下さい。（女官に扶けられて退場す。）

（一同妃に從つて肅然として退場す。一時間舞台空虚。渦波王侍從をしたがへて登場）

渦波王　おゝ須太拏よ。此の父もそなたを勇しく送りますぞ。そなたは誠に王の胤であつた。それをはづかしめなかつた。いや〳〵そなたはもつと高い天の胤であつたわい。あゝ葉波國はそなたにとつてあまりに小さい。そなたは法の國を嗣がねばならない。わが氏はそなたによつて永久にほまれあるものとなるであらう。（間。急に意氣沮喪して）あゝわしの幸福は去つた。今より後葉波國の政治はわしの負ひ目となるであらう。

侍從　（暗然として）陛下の御悩みを深く拜察申し上げまする。

（間。突然殷々として鐘聲起る。）

侍從　陛下！　警鐘でございます。

使者　（騎馬にて急ぎ登場、馬より飛び下り。）申上げまする。鳩留國の軍勢が須太延を眞先きに押し立てゝ國境に侵入致しました。

渦波王　（愕然として青ざめる。やがて決心せる如く勇氣凛然として。）直ちに將軍に余の命を傳へよ。全陸軍に出動の準備をなせ。今日正午に余が親ら閲兵するであらう。

使者　かしこまりました。（退場す。）

渦波王　戰ひは初まつた。わしは世嗣を失つたが、わしは猶此の葉波國をわが先祖代々の王達の靈に負ふてゐる。わしは祖國を守らなくてはならない。わしは最後までわしの義務を果たさなくてはならない。わしに生命がある限り葉波國は神聖で且つ自由であらう。（侍從をしたがへて退場す。）

（警鐘ます〳〵はげしくなる。）（幕）

第二幕

第一場

菩提樹の並木に圍まれたる泉の邊。岸邊には曼陀羅華、素馨、百合、蘭等の種々の夏草青々と茂り、泉の中には萍蓬、菱、睡蓮、等様々の水草の花の中に一際美しく紅、白、黄等の蓮の華が咲いてゐる。並木を透して遙かに檀特山及びその山脈を望む。道は泉の傍を過ぎ、遠く檀特山の方に向つてつゞゐてゐる。空は晴れ渡り、眞夏の日盛りの太陽は赫々として照つてゐる。三人の波羅門泉の傍の草の上にだらしなく寝そべつてゐる。

波羅門甲　（衣を脱して醜き肌を表しながら）馬鹿に暑いじやねえか。これぢや遣り切れねえな。

波羅門乙　無遠慮に照りつけやがるね。（裳を捲くりあげて太股のあたりまで泉に浸りながら）涼しいぞ。冷めたい水がチヨロ〳〵と股倉のあたりを擽つて乙な氣持だ。

波羅門甲　跨を突込んで水を濁すのは止せ。今俺が飲まうと思つてゐるのだに。（水上の方の泉から瓶に掬みぐつと飲み干して。）あゝ、うめえ。恐しく渇きやがる。

波羅門乙　（岸に上つて）幾ら波羅門が死太くても、から焼き付けられちや參つてしまう。（樹蔭に晝寝をしてゐる波羅門丙の方を見ながら。）此奴氣持好さそうに眠り込んでゐやがらあ。

波羅門甲　どうだ。隨分醜い面付きをしてゐやがるじやあねえか。ひどく平べたい小鼻のあたりに寝汗までたら〳〵きやがあつてさ。

波羅門乙　（何か感じたやうに波羅門丙の寝顔を眺め）つまり波羅門の十二醜の中に數へてある鼻正匾遍と云ふのはあれだらう。

波羅門甲　すると汝(てめえ)の腹の恐ろしく膨れて突き出てゐるのは大腹凸讚といふのに當るわけだらうな。

波羅門乙　(舌打ちしながら)なる程な。汝がひよろ〳〵とひん曲つた足付きで歩くのが脚復線戻つて云ふ奴だらう。

波羅門甲　(忌々しさうに)つまりお互に俺たちはあまり美しくは生みつけられなかつたのさ。云ひ換へて見れば善い行ひが出來ねえやうに生みつけられたのさ。

波羅門乙　それはさうさ。幾ら善い行ひをしたつて面が醜いからと云つて嫌はれるのじや始まらねえからな。

波羅門甲　左樣さ。そんなものはあの葉波國の布施太子にでも任かせて置けばいゝのだ。

波羅門乙　だが彼奴は奇持な奴だな。あんなに惜し氣もなく金や寶をうち撒くなんて一寸俺たちには飲み込めねえ話しだ。

波羅門甲　なあに金に困らないものゝやる贅澤な遊びさ。あんな眞似の出來るのも、金や寶が塵埃のやうに見える程不自由したことのねえ結構な身分だからさ。

波羅門乙　だが彼奴は今度宮城や位を捨て、擅特山へ行つてしまふと云ふじやねえか。

波羅門甲　それだて。彼奴の醉狂が何處まで嵩じやうと彼奴の勝手だが、お影で俺たちの折角の寶藏が無になるのには大頭痛だて。何しろ俺たちは彼奴から是まで金銀や牛馬や穀物や、しこたま絞りとつてゐたものだからな。

波羅門乙　魁が今朝事實を探りに葉波國の方へ行つたのだが吉い報らせを持つて歸れやいゝが。

波羅門丙　(眠りながら突然に)もう放せ。阿魔、そんなに云ふならまた來てやらあ。

波羅門甲　(噴き出して)此奴眞晝中にいゝ夢を見てゐがやるぜ。いゝ加減にして起きろ。(揺り起さうとする。)

波羅門乙　ほつて置いてやれ。此奴が女の子に可愛がられるのは夢のなかより外ねえんだから。

波羅門丙　(突然に立ち上る。)可愛い奴め。(眼が醒めて、きまり悪るさうに、毛だらけの脛にとまつた蚊を平手て打ち殺し)あゝ痒い。

波羅門甲　(笑ひ乍ら)おい〳〵お安くないぜ。何だか面白さうな夢を見て居たやうだつたじやねえか。

波羅門乙　折角の佳境を眼が醒めて合憎だつたね。

波羅門丙　(苦笑して)冗談じやねえぜ。(溜息を吐いて)恐ろしく蒸しあがるね。あゝ。やり切れねえ。眼を醒ますとすぐ地獄だ。(三人苦々しく沈默す。遙か向ふの砂漠の道を象や駱駝を連れた隊商の列が通るのが見える。)

波羅門丙　(何か感じたやうに。)ねえ。一體俺たちはどうして生まれて來たのだらうね。

波羅門甲　それやおやぢとお袋とがこしらへたのだらうじやねえか。(叫ぶ)おや蛇だあの泉のそばの曼珠沙華の叢の中に這ひ込みやがつた。

波羅門丙　(考へ乍ら)變だな。俺が氣がついた時には俺はもう此の世に生まれてゐたのだ。どうしてさうなつてゐるのだか自分にも解らねえ。そしてまはりの皆がして居たから、俺も毎日此の砂漠で乞食と泥棒とをしてゐるのだ。

波羅門甲　(欠伸をしながら)止せ。俺は可愛い女のおのろけでもしやべる時の汝は好きだが、そんな悟りめいた口をきく時にはちつとも好きじやねえや。

波羅門乙　おや。魁が歸つて來たぜ。向ふの坂を目懸に馬を驅けさせて。

波羅門甲　ふむ。何處かでまた馬をせしめてきやがつたね。

波羅門乙　彼奴は强欲な、慢ちきな野郎だが何しろ稼ぐことにかけちや凄い腕だね。

波羅門丙　俺は彼奴などの下に働きたかあねえんだ、彼奴に喰つ付いてさへ居れや何とか彼とか儲け口を見付けてくれるもんだからね。

波羅門甲　それやお前なんかより、どの道段違いに役者が上だあね、それに實のところ彼奴の仕返しがこわいからね。

(波羅門丁馬に乘つて急ぎ登場。馬より飛び下りて)何だ。汝たちはまた泉の側に座り込んでなまけてばかりゐやがつて。俺は汗みどろになつて一と働らきして來たのに。

波羅門甲　（追從笑ひして）お歸りなさいお魁隨分暑かつたでせう。
波羅門乙　（泉に浸した布切れを絞りながら。）何しろ汗を拭はなくつちやあ。
波羅門丙　まあ冷い水を一ぱい飲むことだ。（瓶をさゝげる。）
波羅門丁　拭け。（正に肌を拭はせ乍ら瓶から水を飲む。）
波羅門甲　（馬を幹につなぎながら傍白）ふむ。歸るとからがみ〳〵怒鳴りがつて。
波羅門乙　（恐る〳〵）お魁。布施太子の方の首尾はどうでした。
波羅門丁　（不機嫌に。）駄目だ。彼奴とう〳〵底拔けの醉狂になつてしまやあがつた。東宮の寶庫は俺が行つた時にはもうすつかり空になつてしまつてゐた。彼奴が門出に人民にみな撒き散らしてしまやあがつた。
波羅門丙　そいつあ惜しいことをしたね。みなで早く行けばよかつた。
波羅門甲　癪だね。そして太子はどうしたい。
波羅門丁　太子は妃と二人の王子を連れて馬車で檀特山へ向けて出發した。
波羅門乙　じやあいよ〳〵駄目なんだね。
波羅門丁　なに。まだ絞れるだけは絞らなくちやあ。俺は貧乏百姓の風をして太子の馭者をねだりとつてやつた。田地が荒れて耕作するものがゐねえからと云つて。
波羅門甲　よく手放したもんだね。
波羅門丁　なあに彼奴は否とはいえねえわけがあるんだ。其處をチヤンと捕まえてゐるんだ。俺は早速その馭者を奴隷にたゝき賣つて、馬を買つて、乘つて驅けつけて來た。
波羅門甲　旨いもんだね。
波羅門丁　あんな不細工な馭者より馬の方が調法だからな。

波羅門丙　一體太子は後でどうする氣だらう。

波羅門丁　自分で馭すさ。

波羅門丙　いやはや。

波羅門丁　また／＼絞れるだけは絞らなくちやあ。

波羅門丙　まだかい。

波羅門丁　何だ。欲のない奴だね。まだ馬がある車がある。太子と妃と王子と王女との寶衣もあるじやねえか。

波羅門乙　へえ。

波羅門丁　汝たちはもつと／＼腕を鍛えなくちやあ駄目だ。

波羅門甲　（感心して）なる程な。だがどうしてれだるのだ。彼奴が手放すか知ら。擅特山まで乘物も着物もなくてどうして行くだらう。

波羅門丁　（冷笑して）ひどく思ひ遣りがいゝね。裸かで跣足で行くさ。

波羅門丙　あゝ。太子が自分で馭して向うの坂をやつて來たぜ。

波羅門丁　叱ツ。籔の陰について來い。彼處でねだる手を仕込んでやるから。

（丁さきに立ちて退場。甲。乙丙。馬をつれて後より退場。太子自ら妃、王子、王女を載せたる馬車を馭して登場。）

妃　（馬車の上より）あゝ涼しそうな泉だこと。

王女　綺麗な水がふつ／＼と噴き出してるわ。

王子　水草の花が澤山咲いてるよ。（母の袖を引つぱり乍ら）下りて見たいなあ。

妃　（太子に）殿下。御覽遊ばせ。美しい泉ではございませんか。

太子　（馬車を緩め）涼しそうな並木だね。

妃　あの深々とした菩提樹の陰で少し休んで參らうではございませんか。

太子　いや休まないで行かう。俺は心がせかれるから。御覽。向ふに檀特山が見えてゐる。あの山を見ると、俺はじつとしてゐられない氣がする。

妃　でもあまり暑うございますから。私たちはあんなに燒けるやうな砂漠を旅して參りましたのでございますもの。それに馭者がなくなつてからはあなたは馴れないお手で御自分で馭していらつしやらなければならなかつたので、大變お疲れ遊ばしてお見えになりますわ。

太子　いや。俺は少しも疲れを感じない。俺は念願で燃え切つてゐるから。

妃　でもお顏色は蒼く、お額には玉のやうなおみ汗が滲んでゐますわ。（無意識的に小さな扇で太子を煽ぎ乍ら）それに子供たちも大變疲れてゐますから。

王女　（嘆願するやうに）あたしくたびれちやつたわ。

王子　咽喉が乾いて、乾いて――

太子　（一瞬間默想の後）では少し休んで行かう。

（馬車駐る。太子先きに下りて妃を扶け下ろす。王子、王女は飛んで下り嬉々とし先きに立つて泉の側に走り寄る。）

王女　（泉の縁の綠草の上に足を投げだして）あゝ。いゝ氣持だわ。

王子　（しやがんで泉の中に手を突つ込み）冷めたい。冷めたい。

（太子と妃は大きな菩提樹の陰の下草の上に座す。二人とも自づと沈默す。）

妃　（越し方をふりさけ見て）山や川を越えて乘つて參りましたのね。もう餘程遠く故郷を離れたのでございませうか。

太子　もう二百里も離れたらう。山まではもう三日の旅程だ。

王子　（手にて水を掬んで飲み乍ら）冷めたくておいしいよ。姉樣いらつしやい。

王女　（木の葉で盃をこしらへて水を掬つて飲み乍ら）おいしいね。母樣も召しあがらない？

妃　母樣もいたゞきますよ。ころぶと危ぶないよ。

王女　（小さな履を脱ぎ、裳をからげて泉の中につかり乍ら）大丈夫ですわ。淺いのだもの。ほんの踝（くるぶし）飾りの珠がやつとかくれる位なのだから。

王子　姉樣あれとつて頂戴。あの水の上に浮いてる紅い蓮の花を――

王女　あいよ。あたしとれるかしら――試つて見やう。

妃　（淋しそうに。）お城のお庭で遊んでゐるのと同じ氣持なのでございますね。

太子　（元氣に充ちて）無邪氣なものだ。これからは山で色々な獸や鳥などゝ一緒に遊ぶだらう。

妃　まあ、危ぶないではございませぬか。

太子　いや。あの山では獸も鳥も少しも人間を傷けないそうだ。子供と動物と位ふさはしい友達はないと俺は思ふ。（微笑し乍ら）俺にはもう見える樣な氣がする。耶利が獅子の背に乘つて威張つてゐるところや、闍孥姬が孔雀の尾をつかまへていたづらをしてゐる樣子などが――（夢見るやうに）子供たちは無心のまゝで毎日鳥獸と嬉戯して遊び、樂しむだらう。

妃　けれど宮城でこれまで毎日大膳所から供奉されてゐたおいしい羹や、膾や、滋味の豐かな肉類やまた、子供たちのよろこぶ饅頭などは無いのでございませう。

太子　いや。あの山には樹木は繁茂して折り傷けるものなく、技にはさまざまの甘果が實り、樹かげには美泉、清池があつて、山中のものは人間も、鳥、獸もその甘果を啖ひ、水漿を飲んで、飢え渇くことを知らないのだ。私たちは一日も早くその聖地に行つて道を學びたいものだ。（波羅門甲、叢の陰より現はれ鞠躬如として太子の前に近づく。）

波羅門甲　太子殿下に御挨拶申上ます。

太子　何者だ。此の邊地にわしの身分を知つてゐる汝は？

波羅門甲　私は貧乏な人夫でござります。あなた樣のことを知らぬものがございませうか。葉波國の須太拏太子樣と申しますれば、私たちには天道樣と申すのも同じことでございます。

太子　そのやうな畏ろしいことは云はぬがいゝ。

波羅門甲　（跪いて太子を拜し乍ら）世にも尊い太子樣。あなたは今日まで宮城のあらゆる財寶を惜しげもなく、貧乏人にお施し遊ばされました。皆は喜んで涙をこぼし、あなた樣を布施太子樣とお呼び申上げて居ります。あなた樣のお慈悲深さには限りがございません。

太子　いや。俺は俺に不用なものを、それを入用な人々に頒つたゞけだ。

波羅門甲　左樣でございます。私共にとつて尊い寶物もあなた樣にとつては塵や埃も同然でございます。あなた樣の無欲なお心は本當にあの雪山に積む雪よりも淸うございます。

妃　（氣味惡るさうに）そなたは太子樣をたゞ讃仰するためにお出でたのだらうね。

波羅門甲　（追從笑ひして）これはお妃樣でいらつしやいますか。それはもう讃めたゝへてお禮を申上げたさに參つたのでございます。

妃　（太子に小聲にて傍白）御用心遊ばせ。また今朝の農夫のやうなのかもわかりませんから。

波羅門甲　お慈悲深い太子樣、人の話ではあなた樣は一物でも所有しておられます限りは必ずそれを布施することを天にお誓ひなされたと申しますが。あれは多分本當では無いのでございませうな。ものには限りといふものがございまして――

太子　いや。俺が帝釋天にその誓言を立てたことは本當だ。

波羅門甲　え？　本當でございますか。それは實に驚き入ります。あなたは愈々たゞの人間ではゐらつしやいません。

私はかうしてお言葉を交はしてゐるのも、もつたいない氣が致します。

妃　（傍白）此のおべつか使ひをお斥け遊ばせ。

波羅門甲　實は私は貧乏な人夫でございまして、人樣の荷物を荷車で運びまして、その賃金で渡世致して居るのでございます。何しろ御覽の通りあまり、いゝ體ではございませんのに、人と競爭することの嫌な弱氣なたちに出來てゐますのでその日、その日の細い烟もたてかねるやうな次第でございます。何しろ女房が長わづらひで、子供が澤山でそれが皆馬鹿でございますので、それに——

太子　願ひの筋を眞直に申せ。

波羅門甲　はい。實は馬が一頭欲しいのでございますが、車を曳く馬をな。そうすれば荷物を三倍以上も積むことができますので、そして體も無理をしないですみますのでな。

王妃　此の馬はとてもあげるわけには行きませんよ。私たちの車を曳くたゞ一頭の馬なのだから。

太子　俺は決して吝んで、あげないのではないのだが、私達はこれからあの遠い檀特山まで行かなくてはならないので馬がなくては困るのだが——

波羅門甲　なる程な。私たち下々のものは重い荷車を曳いて歩いてゐますが、上つ方はお徒歩では行けますまいて。

妃　私たちがあの遠くの山まで燒砂の道を車を曳いて行けるものですか。考へて御覽。

波羅門甲　御尤で御座います。たゞし私共は遊山に參ります時でも、子供らを荷車に載せて、私が曳き、女房が後から押して參りますが、それは無論私共下賤のもののすることでございます。幾ら大勇猛心を起して修道にいらつしやるのだからと云つて高貴の方は——

太子　馬を持つて行け。

波羅門甲　（跪いて太子を拜し）え？本當でございますか。その馬を私共に下さるのでございますか。

太子　（無言のまゝ肯く。）

波羅門甲　（ピヨコ〳〵頭を下げ乍ら）のり難う御座います。ありがたう御座います。御影で今日から樂になれます。女房や餓鬼共も助かります。

妃　（心配さうに。）あなた、その馬をやつてしまつてどうして山まで參りますおつもりでございますか。

太子　俺が車を曳いて行かう。

妃　そのやうなことがあなたにお出來になるものでございますか。馴れないお身で！　今日御自分で馭していらつしやつたのだつて、隨分御無理だつたのではございませんか。

太子　いや。俺は施しを乞ふものに拒むわけには行かないのだ。

妃　ではございませうが。

波羅門甲　太子殿下に榮あれ。（わざと聞こえるやうに獨白）流石に偉いものだ。これでこそ布施太子の名に乖かないといふものだ。女が男より吝臭いのは下々のものも上つ方も同じことゝ見えるわい。

妃　何ですつて。

波羅門甲　（馬の手綱を樹から解き乍ら）いやなにお妃樣、お美しい御婦人方は、其の上にまたお慈悲深くていらつしやいます時には、一層お美しくお見えになるものでございますて。

太子　馬を可愛がつてやれ。

波羅門甲　（馬を撫で乍ら）はい、はい。可愛いがりますよ。あゝ立派な馬だ。今日から俺が飼つてやるぞ。前の主人よりちつとばかり下作ではあるが、ずつと上手な馭し手だらうて。（手綱を曳つ張り乍ら）ウムついて來い。ついて來い（馬が動かないのでピシャリと鞭を當てゝ）歩めやがれ。畜生奴！（荒々しく、馬を引き立てゝ退場）

王女　馬は行つてしまうの。

王子　いやだなあ。あんなにひどく打つて。

妃　（淋しそうに。）本當にこれからどうなさいますおつもりでございますか。

太子　お前と子供たちは車に乘れ。俺が自分で曳つぱるから。

妃　そんなことが出來ますものでございますか。

太子　いや。これしきの事が出來なくて、これから先きの修行をどうするのだ。もう行かう。愚圖々々してはゐられない。

妃　私もこんな處に永く休んでゐたくは御座ゐませんわ。けれどこれからどうして、長い燒砂の道を行つたらいゝのでございませう。

太子　さあ。皆乘れ。今の人夫は天王帝釋が仕成して俺の安逸になるのを戒めて下さつたのだ。

妃　だつてあなた——

太子　（嚴しく）お乘りなさい。出發だ！

（妃、王子と王女をつれて車に乘る。太子自ら轅の中に入り、力をこめて車を曳く）

妃　（車から飛び下りて）あゝもつたいない。私が後から押しますわ。（車を押す。）

（車動く。太子と妃と汗を流し乍ら、まだ五、六間と曳かないうちに波羅門丙襤褸をまとひ、老いたる人夫の裝ひして登場）

波羅門丙　（いきなり太子の前に跪きて）お願ひでございます。お願ひでございます。

太子　（車を止め）何者だ。

波羅門丙　お慈悲深い太子樣。私は貧乏な、年老つた人夫でございます。女房も子供もない頼りない獨りものでございます。私は先刻道で仲間の人夫から太子樣がこれに渡らせられるといふことを聞きまして、取るものも取り敢えず、やつて參りましたのでございます。有り難い太子樣のお顏を一度拜ませて頂きたいと存じまして。私は強欲な仲間と

ちがひまして、まだ一度も柴波國へ施しをお願ひにあがつた事はございませんので。私は他人の無心はなるべく聞いてやるが、自分の事は自分でやつて、他人に無心を云はないのが私の主義でございますので――

太子　願ひの筋は何事だ。

波羅門丙　それがでございます。太子樣。（めそ／＼泣き出して）私がこんなに貧乏致しましたのもその主義のためでございます。實は私は仲間の奴の係蹄にかゝつたのでございます。その私を裏切つた奴はあなたから先刻あの立派な馬をねだり取つた人夫でございます。彼奴は實に憎い奴でございます。私は彼奴が貧乏してゐる時にこれまで幾度無心を聞いてやつたか知れません。私は年老つて貧乏になりましたが、それでも彼奴に無心に行きませんでした。すると彼奴が親切そうに金をやらうと申しますので、私は初めて彼奴から借りることにしました。高い利息で僅かばかりの金を。處が運の悪い時には何處までも悪いので、私が長わづらひを致しまして、その利息が拂へなくなつたので、彼奴は私の渡世の只一つの道具である車を取り上げてしまひました。無論拂つた利息はもう疾くに元金の幾層倍になつてゐるのでございますが。

妃　（傍白）此のおしやべりの申すことはどうもあてにはならないやうで御座いますよ。

波羅門丙　私をお憐れみ下さいまし。尊い太子樣。私は車が無くては渡世を致すことが出來ません。あの憎い奴は先刻私に道で太子樣から頂いた馬を見せびらかして、私からもぎ取つた車を曳かせて行きました。彼奴の馬小屋では雌馬が仔を三匹も生んだばかりでございますのに。私はくやしくて／＼死にたい氣が致します。私は生れて初めて人樣に無心を申しますのでございます。それはあなた樣のお優しいお心をよく存じ上げてゐるからでございます。

妃　此の車は迚もあげるわけには行きませんよ。

波羅門丙　（聞こえぬふりをして）私はその車でその日／＼の渡世のたづきを得たいばかりでなく、あの憎い奴に、車を見せつけて、太子樣からかけていたゞいたお惠みを誇りたいのでございます。

太子　俺はあげたいのだが、お前も見る通り、俺たちは二人の子供を此の車に載せてあの遠方の擅特山まで行かねばならないので、車が無くては困るのだが。——

波羅門丙　（わざと聞きちがへて）はい〳〵。その、車が無くてはまことに困りますのでな。老いぼれて、荷物を擔ぐことは迚も出來ませんので——

妃　お前よく御覧よ。殿下が自分で車をお曳きになつて、此の私が後押しをしてゐるのですよ。

太子　決して吝むのではないが、俺たちに無くてはならないものだから——

波羅門丙　（急に皮肉に笑ひ乍ら）無くてならないものでございますつて。へゝゝゝ。世間の誰でもが、施しを求める者に拒むときにはいつでもそう申すものでございますて。どんな物持でも何一つ無くてもすむものだと思つて貯へてゐるものはありませんからな。

妃　お前そうお云ひだけれども私たちは今は物持ちなんかではありませんよ。私たちは一嚢の金貨も、一枚の着替へも持たないで城を出たのだから。

波羅門丙　（ニヤ〳〵微笑し乍ら）金貨や着替へがないのでございますつて。なる程な。落ちぶれた王妃は、景氣のいゝ匹婦よりも氣位が高いつて申すのは本當でございますな。

太子　（考へ乍ら）俺と妃とは徒歩でも行けるが、二人の子供は車で無くては無理ではないかと思ふのだが——

妃　どうして子供達があの遠方まで歩いて行けるものでございますか。お城ではやつと園のなかを歩いたきりでございますもの。あの柔かい足はきつと石ころで傷いてしまいますわ。それに燕々した燒砂の照り返しで氣息が窒つてしまうでせう。

波羅門丙　私達貧乏なものは男の子供は父親が背負ひ、女の子供は母親が抱いてゞも、渡世のためには隨分遠方までも歩いて行くのは常のことでございますさあ。

妃　でもお前、少しは考へて見ておくれ。私たちはちつとも歩くことには馴れてはゐないのですよ。本當に私たちは此處まで旅して來るのでもどんなに苦しみを忍んで來たでせう。

波羅門丙　と申しますのはつゞまりそれ程までにあなた様方がこれまで結構な眼ばかり味はうてゐらつしたといふことになりませうなあ。

妃　まあ、何て意地悪るな、思ひ遣りのない人だらうねえ。

波羅門丙　え？　思ひ遣りでございますつて。滅相な。それは豐かなものが、貧しいものに對して負うてゐる義務かと私は心得て居りますが。

妃　お前、幾ら貧しくても施しを乞ふのは權利ではありませんよ。それは豐かなものが自由意志でする恵みです。ましてお前の様な物の乞ひ方はゆするのも同然です。

波羅門丙　（露骨に岡々しき態度を示して太子に）　如何でございませう。その御車を頂戴することは出來ないものでございませうか。

太子　（妃と丙との會話の間始終默想してゐたが）車を持つて行け。

波羅門丙　（一寸拍子抜けのしたやうな面をするが、やがて追従笑ひをし出して）有難うございます。あり難うございます。（妃の方を横眼で見乍ら、己れの所有權を確めるやうに車體を色々と撫で廻し）どうも立派な車だ。（わざとらしく）流石に腹のさつぱりした太子様だ。

妃　（淋しさうに傍白）彼んな奴に大事な車を遣つておしまひになるなんて。

波羅門丙　いや。私などは遣り甲斐のある人間でございませうて。若し一番正直で、一番感謝する人間が、一番遣り甲斐があるものと致しますればな。

太子　行け。

波羅門丙　はい〳〵參ります。（轅の中に入りて、車を曳き試み乍ら）あゝ。有難い。お影で早速あの強欲な、罰當り奴に此の車を見せびらかして、腹の癒えるまでしつぺい返しを喰はしてやられると云ふものだ。

太子　彼の男は赦してやるがいゝ。

波羅門丙　（無造作に）心得ました。（べら〳〵と）太子殿下のみ名によつて赦してやりませう。なに、私はたゞ此の車でその日〳〵の渡世が出來さへすれば、外に望みはないのでございます。（大袈裟に、跪きて太子を拜して）布施太子殿下に榮えあれ。（立ち上り、重たそうに車を曳きて退場）

妃　（心配そうに）本當にこれからどう遊ばすおつもりでございますか。

太子　王子は俺が背負つて行く。王女はお前が手を曳いて行け。

妃　お言葉に乖くのではございませぬが、そのやうなことが出來るとは迚も思はれません。

太子　いや、試つて見よう。これしきの事が出來なくて是れから先きをどうするのだ。凡そ此の世の一番貧しいものゝする事を俺等も負はなくてはならない。彼等が已でに耐えて來た事を俺らが耐へられないことはない筈だ。それを忌ひ避けてはいけない。それを忌ひ避けやうとするのは俺等がこれまで安樂に暮らして來た餘勢のためだ。

妃　お言葉を返すやうではございますが、私は是まで妃らしい華麗な生活に慣れては參りましたが、それは決して私が特別に安逸を好みましたと申す譯ではございませんわ。私はたゞ生れ乍らに與へられた幸福を享け、またあなたから妃として選ばれて、許されたものを素直に樂しんでゐたのに過ぎないと存じますわ。

太子　お前がそう云ふのは本當だ。お前は決して奢侈ではなかつた。お前の育ちは寧ろ質素な方であつた。お前の生活が多少でも華麗であつたとすれば、それは妃としての位を辱めない莊嚴を保つための必要と、そしてお前の妃らしい上品な趣味のためであつた。たゞそういふ生活が他の無數の衆生の勞苦の上に築かれてゐたのであつた。それが私達が無意識に積んでゐた業であつたのだ。それは恐ろしい事であつた。それに氣の付いた以上は出來る限りその償ひを

しなくてはならない。そのためには貧しいものゝ、押し付けがましい、布施の要求も拒まないで、受け容れ、また私たちには慣れない勞苦をも辭してはならない。それは實に私たちの業の報いなのだ。それを勇しく忍受することは諸天の心に適ふに相違ない。

妃　（素直に）御教え下さいましたことは淺墓な私の心にも深く沁みました。私はあくまでも殿下にお順ひ申します。ただ私たちの業のために幼いものに難儀を負はせなくてはならないのが、どんなにか苦しうございませう。

太子　あゝ妃よ。それは此世界で恐ろしい事の中でも一番恐ろしいことの一つなのだ。親の業が子に報いるといふことは！　俺が城を捨てたのは葉波國の先祖代々の攻略と誅斂と榮華との業報を背負うたのだ。我が子々孫々の業報を償ひたいためなのだ。

妃　（眼を閉ぢて、沈默す。）

（其の瞬間に並木の陰より、乞食の裝ひせる波羅門丁盲者に變裝せる波羅門乙を杖にて導きつゝ現はれ、太子の前に跪く）

波羅門丁　御願ひで御座います。御願ひで御座います。

太子　何者ぢや。

波羅門丁　盲目の父を連れた惨めな乞食で御座います。お慈悲深い太子様。殿下のみ惠みはヒマラヤの山よりも高く、ベンガルの海よりも深く、ありとあらゆる衆生に限なく行き渡り、さながらガンジス河の水が兩岸の罌粟畑を潤ほすやうでございます。

妃　（堪えかねたる如く、太子に小聲にて）また阿諛使ひが出て參りました。今度はお相手に遊ばしますな。

波羅門丁　何卒お憐みをお垂れ下さいまし。困り切つてゐますので。此奴が因果な片輪なものでございますので。

波羅門乙　（つくり聲にて）惨めな盲目でございます。死に損ひ奴でございます。

波羅門丁　（手をしばりつゝ）お布施をお願ひ申します。

乙と丁　（聲を揃へて）　おめぐみを！　お施しを！

太子　俺はあげたいのだが、持つてゐた物は皆施してしまつて、もう何もあげるものがない。汝も見る通り、車も馬もなく檀特山まで子供を背負つて徒歩で行かうと思つてゐる所だ。金も、食物さへも持つてはゐないのだ。

波羅門丁　へ、、、。失禮ながらまだ充分にお持合はせのやうに見受けますが。

妃　いゝえ。本當に何も持つてはゐませんよ。

波羅門丁　これはしたり、お妃樣、御手の扇は大層立派なものでございますな。

妃　（眉を顰め乍ら）　お前此の扇が欲しいのならあげてもいゝよ。

波羅門丁　（直ぐ手を出して扇を受取り）　いや、どうも有り難うございます。（太子に）　その立派な寶衣を戴きたうございます。

太子　（一瞬間沈默の後寶衣を脫して與へる。腰部に纏へる薄き衣の外裸體となる。）

妃　（驚いて）何て酷い――

波羅門丙　冠を！　冠を！

太子　（決然として冠を脫して與へんとす）

妃、殿下！

太子　いや、城を出た時から俺はもはや太子ではないのだ。

波羅門丁　（冠を受取つて）　ありがたうございます。あり難うございます。（妃に圖々しく）　寶衣を戴きたうございます。

妃　不作法者！

太子　妃よ。お與りなさい。今はすゝんで錦繡の衣を脫ぐべき時が來たのだ。

妃　（一瞬間躊躇して後寶衣を脫して與へる。薄き肌衣一枚となる。）

波羅門丁 (寶衣を受取るや否や) 瓔珞を！

妃 (嚴しく) お控え！

太子 (靜かに決然と) お與りなさい。

妃 殿下。これぱかりは！ (涙ぐみて) あゝ殿下から選ばれた日の光榮の印でございます。

太子 おゝ、妃よ。潔くお與りなさい。その寶石の眩ゆい瓔珞とても今のお前の胸を飾るにはあまりに光たきものになつたのだ！

妃 おゝ殿下！ (決然として、瓔珞を與ふ。)

波羅門丁 ありがたうございます。ありがたうございます。生れてからこんな立派なものを手にしたことはございません。(裏を返し、表を返しして眺め乍ら) いや、どうも素敵なものだ。眼がチカ〳〵する程だ。

太子 行け。

波羅門丁 はい〳〵參ります。(貪欲な、鷹のやうな眼付でジロ〳〵王女の方を眺めてゐる。)

妃 (不安を感じつゝ) お前はもう充ち足りたのだらうね。

波羅門丁 十二分でございますよ。お妃樣。此の上頂いては罰が當りますさあ。私はな。處であの困果な盲目奴はまだ何も戴いてはゐませんですが。なあ。おやぢさん。

波羅門乙 (おろ〳〵聲にて) お施しを！ おめぐみを！

波羅門丁 お前の洞穴のやうな眼玉にやあ何も映るまいが、王子樣と王女樣はそれや立派な寶衣をめしてゐらつしやるのだぜ。

波羅門乙 寶衣を下され。寶衣を下され。

妃 (涙ぐみ) お前たちは幼いものゝまで剝がうとするのかい。

波羅門丁　此の死に損ひ奴は强欲でございますな。

太子（決然として）王子と王女の寶衣をお與り。

（妃、溜息を吐き乍ら、王子と王女の寶衣を脱がして與へる。王子と王女は裸體となる。）

波羅門丁（寶衣を乙に渡して）これをお前に與らうとよ。果報者奴が。

波羅門乙（襤褸だらけの肌を寶衣にこすりつけて）肌觸りのいゝ、やはらかものだ。おまけに何ていゝ薫りだらう。

波羅門丁（感心したやうに王子と王女を眺め）何て綺麗な頸輪と腂飾りだらうなあ。

波羅門乙（頭を大地にこすりつけて）頸輪を下され。腂飾りを下され。

妃　何てしつこい！

太子　與つてしまへ。

妃（頸輪と腂飾りを解いて與へる。）

波羅門丁（頸輪と腂飾を丁に渡し）今日はお前は大當りだね。お前が盲目で却つて結構かも知れないぞ。こんな眩ゆい寶石を見れや、眼がまうてしまうからな。

波羅門乙　やれ〱。有難いこつた。長生きはして見るものだ。

太子　行け、

波羅門丁　はい〱只今。（眼敏く太子をヂロリと一瞥して）へゝゝゝ。思ひ切りの悪い申出ではございますが、お別れ際のお景物に一つ序でに戴きたいもので。なに。その小函と寶華とをな。

太子　いや。これは與るわけに行かない。これは俺を深く愛するものが、はなむけに、自分の愛の證にくれたのだから。外の俺の所有物とはちがうのだ。

波羅門丁　なる程な。私が勘違いをしてゐました。（獨白の如く）それはそうだらう。どんな偉い人にでも程度といふも

のがあるのは當然だからな。幾ら一生懸命の場合、天に立てた誓ひとは云つても例外は一つ位はあることは許さなくてはならないからな。

太子　持つて行け。（寶華と眞珠の小函を丙に渡す）

波羅門丁　えゝ？、頂きましてよろしうございますか。これは〳〵どうも。（華と函とを懐ろに收め乍ら）どうも有難うございます。（猶もジロ〳〵と油斷なく一行の身邊を目察し乍ら）勿體ないことでございます。（丁の耳元に囁く）もう何も眼ぼしいものはねえぜ。

波羅門乙　畏れ多いこツた。いつまでも業晒らしな姿を御眼にかけるより、もう御前を下ろうぢやねえか。

波羅門丁　それがいゝ。それがいゝ。（跪きて）太子殿下に榮えあれ。安らかな御旅行をなされますやうに。今日のみ恵みの功德が倍になつて殿下に返りますやうに。おい、おやじさん。お禮を申上げねいかい。

波羅門乙　（よぼ〳〵屈で）やれ〳〵、勿體なや。お影さまで親子が助かりました。

波羅門丁　ぢやお暇しやう。さあ立つた。枕はこつちだ。しつかりつかまえろ。（わざと聞えるやうに）あれこそ本當の施主だ。一物も吝まれなかつた。あれでこそ布施太子の名にそむかねえ。（退場）

妃　（涙ぐみて）深いお教えを受けました今道のためには苦しみを避けやうとは存じませぬが、あまりに私たちの姿が慘めな氣が致しまして――

太子　いや。昔前よりも清く、美しく見えるぞ。私たちは世俗の裝飾を振り捨てた。これからは與へられた。生れ乍らの、美を「法」の光りで飾るのだ。慚愧を上服とし、深信を華髮とし、戒品を以て塗香とするのだ。妃よ。そなたたちのその玉のやうな體を、七淨の華を布いた浴池で潔いだなら、どんなに美しく、淸らかになることであらう。私はそれを見たく思ひますわい。

妃　（淋しく微笑して）殿下の御意に適ひさへ致しますれば、私はどのやうな姿も本望でございますわ。

太子　（決然として）さあ。行かう。勇氣を出し試つて見やう。さあ。耶利よ。お出で。（王子を背負ふ）

妃　（その様を見るや、決然として立ち上り）悶拏延や。私についてお出で。母樣が手を曳いてあげるからね。

太子　行かう。お前たちの雄々しい姿は俺を奮ひ立たせる。擅特山は遠いとはいへ既に彼處にあのやうに見えてゐるのだ。泰然とした、嚴かな山ではないか。實に靈山だ。「法」そのもの丶やうな崇高な、しかも調和した姿だ。鐵のやうに凝り固まつた勇猛心の前に燒砂の道が何であらう。眞夏の太陽がなんであらう。さあ、行かう！　（一同退場す）

（引き違ひに波羅門甲、乙、丙、丁並木の後ろより登場す）

波羅門甲　うまく行つたな。

波羅門乙　何もかもほうり出しやあがつたな。

波羅門丙　見ろ。向うの道をとぼ〳〵行つてらあ。

波羅門甲　翼を拔かれた孔雀といふざまさね。

波羅門丙　（丁に）だが魁の凄い腕前にや今更だが驚いちやつた。

波羅門丁　（靴を脫ぎ捨て乍ら）何だ。これしきのことに。

波羅門乙　（立つたま丶尿をして）だがよくほうり出す奴も、ほうり出す奴ぢやねえか。

波羅門丁　飛んだ所に感心する奴だね。それやそうさ。若し太子が貴樣のやうな奴ぢや、迚も幾ら俺らが逆立ちしたつて鐚一文出しやあしめえからな。

波羅門乙　（考へながら）併し考へると少し氣の毒だなあ。

波羅門丁　ふむ。間拔け野郎が。同情心なんか起したけれや、初めつから俺らの仲間に入らねえがい丶や。

波羅門甲　處で獲物の分配はどうして呉れるんだ。

波羅門丙　今日のやうにしこたま獲物のあつた日にや各々勝手なものを取つたらい丶だらう。

波羅門乙　それや無論そうだ。

波羅門丁　なに。鬮だ、さもなきやどうせ喧嘩なしに分けられつこはねえや。だが冠と寶石の函とは俺らがとるのだぞ。

波羅門甲　ふむ。うまくやつてやがる。

波羅門乙　（丙と函を見合せて、囁く）何處までも強欲な奴じやねえか。

波羅門丁　（路傍の草を引抜いて鬮をつくり乍ら空とぼけて）何とか云つたかい。さあ鬮を引け。

波羅門乙　いやなんでもねえ。お前さんの腕前をほめてゐたのさ。（鬮を引く）

波羅門丙　（同じく鬮を引き乍ら）ねえ。魁、俺らもなまじつかな弱氣は止しにして、ちつとお前さんにあやかりたいもんだ。だが今日のやうな根こそぎふんだくりや流石のお前さんも本望だらうな。

波羅門丁　（冷笑して）何だ。欲の少ない野郎だね。

波羅門丙　えゝ？まだですかい。

波羅門丁　無論さ。まだ大獲物が殘つてるじやあねえか。（甲に）さあ引け。

波羅門乙　（眼を圓くして）おや、おや。

波羅門甲　（鬮を引いて）もう眼ぼしいものは何も殘つてないじやねえか。

波羅門丁　（あざ笑つて）頓馬奴。まだ殘つてるじやあねえか。あの上玉と二人の餓鬼が――

波羅門乙　（びつくりして）いや、はや。

波羅門丁　おどろくにや及ばねえ。さあ鬮をあけろ。早く獲物を分配して、また仕事にかゝらなくつちやあ。

波羅門甲　（鬮を投げ出して）畜生。また貧乏鬮が當りやがつた。

波羅門丁　（先きに立つて退場し乍ら）さあ。藪の後ろへ來な。俺が手をしこんでやるから。俺は是から大急ぎで馬で間道から先廻りして待伏せしてゐなければならねえ。これからいよ／＼大仕事だ。

（甲乙丙隨うて退場）

第二場

鬱蒼として繁茂した密林。重なり合つた梢や葉の間から月光さし込み舞臺仄白く照らされてゐる。一面の滴るやうな厚ぼつたい青々とした葉蔭に處々　い濃艶な色彩の花が燃えるやうに咲いてゐる。其の花は非常に大輪で人をして車輪を聯想せしめる。大きな天を摩すやうな榕の樹の下に美しい斑のある大きな虎が前足の上に猛々しい頭を載せて眠つてゐる。遠くの森の奥から獸の吠える聲、近くの樹の枝から夜啼く類の鳥の聲が時々聞える。外はひつそりとしてゐる。風無く、樹の葉は少しも動かない。突然青葉の繁みが風に撫でられた樣に搖らいで、榕の木の枝から一頭の大蛇が垂れ下り、鎌首を擡げて虎の鼻尖きに擬する。虎はすやすやと眠つてゐる。と蛇に驚いた鳥がけたゝましく鳴く。虎眼を醒ます。蛇を見るや猛然として背を擡げ、牙を剝ぎ、飛びかからんとする姿勢をとり、烈しく咆吼す。蛇は一瞬間對峙して後、波のやうに體軀を迂ねらして樹上に引きあげる。虎は猶ほ二三度樹上を睥睨して咆哮して後密林の後ろに姿を隱す。またひつそりとする。舞臺一瞬間空虚。と波羅門丁及丙馬を驅つて登場す。

波羅門丁　（馬をとゞめ）さあ。此處だ。此處で森の蔭に隱れて一行を待ち受けやう。

波羅門丙　（同じく馬をとどめ、四邊を見廻し）氣味の惡い程ひつそりしてゐやがる。

波羅門丁　一仕事やるのにや持つて來いの處だ。惡くすると荒療治をやらなくちやならねえかも知れねえから。

波羅門丙　そんなことをやるのかい。

波羅門丁　何だ。もう怖氣づきやあがつて。（刀檢し乍ら）萬一の時にやあこれでやつつけるのだ。だがそんなことは恐らくあるめえ。

波羅門丙　だが幾ら太子だつて子供は可愛いからな。それに鬼のやうな奴にくれてやるのじやあな。

波羅門丁　だから貴樣を選んでやつたのだ。貴樣なら幾らかやさしさうに見えるだらうからな。鬼子でも可愛いのと、憎々しいのとあるといふからな。使ひ道はあるものだ。だが度胸を据えてしつかりやりな。

波羅門丙　俺らが一人でやるのかい。

波羅門丁　俺は森の後ろで樣子を覗つてゐる。若し貴樣の手に負へなけれや俺が出てやる。だが拜み倒せば彼奴は屹度倒れるんだ。嫌とは云へねえ譯があるんだから。

波羅門丙　試して見やう。俺らは嚇しは利かねえが。愁ひは隨分利くのだから。だがこんなに苦心して生白い餓鬼を二人ものにしたところで何になるだらうな。

波羅門丁　馬鹿。王の種じやあねえか。どんなにいゝ値にだつて賣れるさ。

波羅門丙　ふむ。何處までも褒い――

波羅門丁　叱つ！　向うにやつて來た。森の陰へ！

（丙と丁退場す。）

（間）

（太子王子を背負ひ、妃王女の手を曳きて登場）

妃　（喘ぎ乍ら）あゝ。私はもう步けさうにはございません。

太子　（疲勞のために蒼白くなつた額に冷汗をべつとりと滲ませて）勇氣を出せ。今は大事な時だ。もつと行かう。

妃　私は一生懸命氣を張つてはゐるのでございますが。（ぐつたりとくづ折れて）もう迚も駄目でございます。暫らく休息させて下さいまし。

太子　此の森林だけ越えてしまへばまたあの擅特山が見えるのだ。あの山さへ行手に見えればまた勇氣が奮ひ起つだらう。

妃　（嘆願するやうに）どうぞお休み遊ばして。闍犂延も足を傷めてゐますから。

王女　（母の傍に坐し、足を投げ出して）こんなに血が出るんだもの。

妃　ひどく痛むかい。お待ち。くゝつてあげるから。（衣を引き裂いて繃帶してやる）

王子　（父の背にて小さな足をバタ／＼させて）下りるよ。下りるよ。

太子　では暫らく休んで行かう。（王子を下ろす）

王子　（すぐに母の傍に馳せ寄つて）母樣お乳頂戴やう。

妃　あゝ。ひもじいだらうね。今朝から何も喰べないのだから。（乳房を擴げ）さあ。

王女　あたしも渇いて、渇いて。

妃　あゝ。渇くだらうね。お前もおあがり。（も一つの乳房を王女に哺ませる。）

太子　待つてゐろ。わしが木の果を採つて來てやるから。

（も寄りの林の中に行く）

（間）

妃　（思はずうと／＼眠りかけるがすぐに眼を醒ます。）あゝ。二人とも眠つてしまつた。疲れてしまつてゐるんだわ。（涙ぐみ兩腕で子供を抱きしめて、接吻し、自分の肌衣で掩ふやうにして）かはいさうに！

太子　（林の中から出て來る。）さあ、採つて來たぞ。

妃　さつきまで乳を飲んでゐましたが、寢入りましたわ。

太子　ではお前おあがり。

妃　はい。（食べやうともしないで考へ込む。）淋しい森でございますのね。

太子　淋しい森だね。（勵ます樣に。）だが日に照りつけられて、砂道を歩くよりか涼しいゝね。

妃　（耳を傾け）獸が吼えてゐますわ。

太子　擅特山へ急がう。彼處では聖人の徳で淋しい森の中も樂園だ。獸も少しも害をしないのだ。

妃　（淋しそうに考へ込み、やがて涙を膝の上に落す）御免遊ばせ。（あはてゝ涙を拭ひ）私今夜は何だか淋しくて、淋しくて——

太子　氣を强く持て。今は大事な時だ。

妃　何うしたのでございませう。私勢一杯氣を引き緊めてゐるのでございますけれど。何だか此の森にさしかゝつてから、氣が變になつて急に歩るく力もつきてしまつたのでございますの。あんなに月が照つてゐますのに雨が降るやうに思へたり、森の樹が皆倒れかゝるやうな氣がしたり、左腕がむつ痒く、右瞼がうるみ、兩方の乳房が變に痙攣（ひきつ）つたり致しますの。何か子供達の身の上に凶い事でも起るのでは無いのか知ら——

太子　何をつまらない。お前の氣根が弱つたので色々なことを考へるのだ。

妃　左樣だとよろしうございますが、（身慄ひして）また獸が吼えましたわ。（子供をしつかり抱きかゝへて）子供をとりに來はしないでせうか。

太子　大丈夫だ。あんなに遠方だから。お前氣をしつかり張り〆めてゐなくてはいけませんぞ。

（間）

（突然近くの森の中で角笛の音が聞える。）

妃　（訝しげに）何でございませう。

太子　あれはたしか角笛だが。狼から羊たちを守るために羊飼が鳴らしてゐるのだらう。

（一瞬間沈默。波羅門丙羊飼ひに變裝して角笛を腰に佩し鞭を持ちて息を切らして登場。）

波羅門丙　（いきなり太子の足下に跪き歔欷し乍ら）お願ひでございます。お願ひでございます。

妃　（ギクッとして本能的に子供達を後ろにかばふ。）

太子　何者だ。

波羅門丙　（やつと泣き止めて）私は貧乏な羊飼ひでございます。やれ〳〵。やつと追ひ付きました。坂道を走りつゞけて參りましたので息が切れそうでございます。あなたがあのお慈悲深い布施太子樣でゐらつしやいましたか。

太子　願ひの筋を申せ。

波羅門丙　はい〳〵。有難うさございます。私の牧場は荒れ果てゝ居ります。實は女房が長らく病みついたきりでございすのでな。迚も私一人ではあの氣まぐれな羊どもの世話を燒く手が廻りません。毎晩狼や虎が襲つて來て荒らし廻ります。それで私は羊の番をしてくれる牧童が欲しいのでございます。

妃　（眞靑になる何か云はうと試みて、唇が烈しく痙攣する。）

波羅門丙　で誠に申兼ねますがお子樣方のお手をお借り申上げたいのでございます。

妃　（せき込んで）お前お願ひ出來ることゝ、出來ないことの別は心得てゐるだらうね。

波羅門丙　（おづ〳〵して）左樣仰せられますと誠に恐縮致します次第でムいまして。尊い王子樣に賤しい牧童の仕事がふさはしいとは決して思はないのでございますが、何しろあまりに困り切つてゐるものでございますから。それに人の話では、あなた樣方はお城をお立ちになりました時から、もうお位をお捨て遊ばして、世の一番賤しものと同じ列に身を落し、下々の貧しいものと苦しみをお頒ち下さるのだと聞いてゐました。私はそれを聞いて勿體なくて涙がこぼれました。そしてそれではと存じまして、お願申して見る氣になりましたのでございます。決しておなさけにつけ上る氣ではないのでございますが。

太子　（考へ込み乍ら、）それ程までに難儀致してゐるのか。

波羅門丙　全く持ちまして、困り切つてゐるのでございます。病氣の女房のために藥が得られないことなどは無論あきらめて居りますが、食べさせる事さへも出來兼ねるのでございます。たゞ羊の番さへしてくれるものさへ居てくれゝ

ば助かるのでございますが。炊事と看護とでぐた〳〵に疲れ切つてしまひますので。

太子　それは不便なことだ。助けてくれる隣り人は無いのか。

波羅門丙　（悲憤するやうに）殿下。番人のゐないのをねらつて墻を越えて羊を盗む奴はゐましても、不幸な隣りのもの丶ために一摑の秣をも刈つてくれるものはございませぬ。

太子　……

波羅門丙　（めそ〳〵と泣き出して）此の様子ではあはれな妻は屹度今に死んでしまうでございませう。私は貧しいもの丶悲しみと人情の冷めたさとを沁々と感じます。私は寧ろ女房が一層の事邪慳な奴ならまだ心の苦しみは少なからうにとさへ思ひます。女房はどんな乏しさにも、病氣にも少しも不平を申しませず、私を心配させまいと思つてわざと呑氣なやうな風をして見せるのでございます。普段あれ程の働き手であつたのに、それを少しも鼻にかけず、たゞ私に手間へさせる事を氣の毒がつてばかりゐるのでございます。もうすべての苦しみを忍び受けて、運命に身を任せ切つてゐるのでございます。私は襖越しに私の眼の前では苦しい顔を見せない女房が、うめき聲を立て丶お腹を押へ乍ら、早く死の來るやうに天に祈つてゐるのを見ました。私は今日も女房の枕元に凝つと坐つてその青ざめた寢顔を見てゐました。あ丶女房もかうして死んで行くのかと思ひました。何一つ悪い事をしない、従順な、働き手の女房が、何うしてこんなに苦しまなくてはならないのだらうと思ひました。何一つ樂な目もさせないで見す〳〵死なせる自分を腑甲斐なくも思ひました。あ丶、牧童さへあつたらと思ひました。その時私は殿下のことを聞きました。そして矢も盾も堪らなくなつて、後を追つて參りましたのでございます。

太子　（涙ぐみ）世にも氣の毒な夫婦だ。俺に出來る事なら何とかして助けてやりたいが——

妃　（せき込んで）子供たちには迚も羊飼ひの仕事は出來ないのだから——

波羅門丙　大丈夫でございます。お妃様。遊び半分にでも出來ます。牧場は廣くて、青々として、お子様方のためには

此の上もないゝ遊び場でございます。角笛を吹いて、鞭を以て羊たちと遊んでゐてさへ貰へばよろしいのでございます。

妃　でもお前それでは危ぶなくて仕樣がないからねえ。

波羅門丙　どう致しまして。お妃樣。對手は獸の中で一番柔しいと云はれる羊でございます。決してお子樣方をお傷け申すやうなことはございません。

（子供達不意に眼を醒まし、見知らぬ人と父母の語れるを見て、母に縋り付く。）

妃　（子供を抱きしめて）　怖がることはないよ。怖がることはないよ。（丙に、訴へるやうに）ねえ。お前。お前は惡い人では無さうだから聞き分けておくれ。私はお前のお連れ合ひの人を本當にいとしく思ふのです。けれどそれだからと云つて迚も子供たちを手放す氣にはなれません。なれる筈がありません。どうぞお願だから私の心を察してあきらめておくれ。

太子　（妃の樣子を見て動かされて）　わしは汝を助けてやりたいのは山々なのだが、他のものと違つて幼い者の事ではあり、また汝も見る如く、妃があの樣に手放すことを悲しがるから、不本意乍ら汝の願ひを叶へてやることが出來兼ねる。氣の毒だが牧童は外で求めねばなるまい。

波羅門丙　あゝ、可愛想な女房よ。お前はどうあつても死なねばならぬわい。（地に倒れ伏し號泣す。）

太子　（默然として聞いてゐる。）

波羅門丙　お前の運が拙いとあきらめてくれ。わしを不甲斐ない夫だと思はないでくれ。何一つ樂な目に遇はせることも出來ないで苦勞ばかりさせたのを恕してくれ。（間）わしは太子樣が若しか救ひ下さるかと果敢ない望みをかけてゐた。併しその只一つの望みの綱も切れた。お慈悲深い太子樣もそなたをお助け下さる譯には參らぬそうだ。そなた程の善人が太子樣のお慈悲に洩れなくてはならないといふのもよくよく不運な生れだなあ。お前は多分今頃明りも點け

ないで蚊蚋に責められ乍ら、痛む腹を抱へて俺が吉い報らせを持つて皈るのを待つてゐるだらう。俺はどう云つて皈つたらいゝだらう。お前が俺の云ふことを聞いて失望して息が切れはしないかと心配だ。（間）いや〳〵お前は初めから當てにしてはゐなかつたらう。屹度そうだ。お前は人情の冷たいことは知り拔いてゐたからな。そうだ。俺は今思ひ當る。俺が太子殿下の處にお願ひに上ると云つた時、お前が變に淋しく〳〵笑つたのを。どんなに慈悲深い人でも他人の幸福よりは自分の幸福を願ふものだといふことを俺は今こそ本當に知つた氣がする。——

太子　（苦しそうに）待て！もつとよく考へて——

波羅門丙　（耳に入らないやうに）だが恨んではならないぞ。考へて見れば御尤な事だ。此方の運が悪いのだ。誰だつて子供は可愛いのだ。幾ら天に立てた誓ひだといつても、背に腹は換へられない。慈悲と云つたつて程度問題だ。自分の幸福の保てる限りの話だ。誰を恨むわけもない。不運な星の下に生れたのだ。あゝ、あきらめて死んでくれ。お前を見送つたら俺も後からついて行くぞ。俺は甲斐しよは無かつたが、どんなにお前を愛してはゐたかといふことをそれで知つてくれ。そして俺をあはれみ赦してくれ。（泣きつづける。）

太子　（眼をしばたゝき）氣の毒な羊飼よ。汝の言葉はわしの心を搾めつけるやうだ。汝が愁嘆するのは本當に尤もだ。汝の身になつたら實に堪へられまい。俺は心から不便に思うぞ。

波羅門丙　（我に返つた如く、やうやく面を上げ）御免下さいまし。太子様。取り亂した姿をお目にかけまして。あまり絶望致しましたものでございますから。

太子　いや。苦しうない。誰かそなたの様な身の上になつて取り亂さずにゐられやう。

波羅門丙　もつたいなうございます。太子様。あなた様からそれほどのお言葉をかけていたゞきますれば死ぬる女房も本望でございませう。ではお暇申上ます。（立ち上りコソ〳〵身仕度をする。）

太子　（凝ツと眺めて）もう行くか。

波羅門丙　はい。女房が待ち侘びてゐませうから。（眼をしよぼ〳〵させて）では御健勝に渡らせられまするやう。（妃に）あなた様にもおいとひ遊ばされて。

妃　（始終うなだれて聞いてゐたが）お丶。お行きか。（心苦しそうにしながら）くれ〴〵もお連れ合ひに氣をつけてあげてね。

波羅門丙　（わざと殊勝に）　あり難うございます。欽いお妃様にそうおつしやつていたゞいたことをせめて土産に致しませう。嘸女房もよろこんで死ぬるでございませう。（大地に頭をコスりつけてお辭儀をし）ではお暇申上げます。（行きかける。）

太子　丙のしよんぼりとした後姿を見送つてゐたが、堪えられなくなつたやうに）待て。

波羅門丙　（振り返り）お呼びでございましたか。

太子　お前に訊くが、お前は連れ合ひの病氣が恢復して、牧童が要らなくなつたら、子供たちは必ず返すであらうか。

妃　（思はずギクツとして不安に堪えぬ面持で二人を見比べてゐる。）

波羅門丙　（瞬間的に得意の表情を浮べるが、直ぐ巧みに押し隱して、）それは無論でございます。太子様。私はたゞ可哀相な女房の一命を助けたさに、無理とは知りつゝあんなお願ひを致しましたのでございます。お子様方に羊の守りをしていたゞきまして、女房が恢復し、その日〳〵の業が立ちさへ致しますれば、私はもう直ぐにも檀特山へ飛んで行つて、お子様方は屹度お手許にお返し申し上げます。

太子　しかと左様か。

波羅門丙　（大袈裟な誓ひの徴をしながら）恒河が逆まに流れませぬ限りは——今のあなたを欺きましたら天罰があまりに恐ろしうございます。

太子　そなたの誓ひを信じるぞ。

妃　（堪へ切れぬやうに）殿下、御考へ下さいまし。如何に精好な、信じ易いお心とは申しながら——

波羅門丙　御安心下さいまし。お妃樣。私はよく〳〵存じて居ります。幼な兒は親に、とりわけ母親に屬くものであると申すことを――私は屹度お手までお屆け申します。

妃　（太子に、嘆願するやうに）殿下。私をお憐れみ下さい。母に取つて子供がどんなものだかお考へ下さい。私はすでにすべてのものを與へました。持物も、衣服も、あの私の、最高の誇りと記念の徴であつた冠までも！　其の事で私が殿下の御教へにお乖き申上げるつもりでは無いことをお信じ下さいまし。若し私がまだ他に何物かを身につけてゐるのでございましたら、私は卽座にそれを惜し氣もなく與へるでございませう。けれど子供達だけは！　私は堪へられませぬ。私の二つの乳房を切り取つて與へるのでも、まだ〳〵それに比べればた易い氣が致します。何卒お赦し下さいませ。

太子　そなたの母らしい恩愛には深く同情する。そなたは嘸苦しからう。だが妃よ。勇氣を出せ。そなたの胸の底の愛を燃え上らせろ。他人の危難を助けるためにそなたの肉身の愛を供へ物にしろ。

妃　でも私の苦しみを忍ぶだけではございません。幼いものがあまり可哀相でございますから。

太子　可愛いゝ子供たちに善い奉仕をさせて、その善行のために諸天の祝福を招いてやるのだ。それが一番正しい親の愛だ。

妃　（泣き乍ら）殿下、それはあまりにお嚴しい――

太子　妃よ。今は俺の生涯で一番嚴しさの必要な時だ。若しその嚴しさに耐え得ないならば俺はあまりに器量不相應な大願を立てたことになる！　運命が今俺を試みて居るのだ。俺は道のためには恩愛に打ち克たねばならない。

妃　あゝ。私は躓きさうでございます。人は道で生きるのでございませうか。愛で生きるのでございませうか。

太子　おゝ。妃よ。愛こそ唯一の道なのだ。若しその愛が純粹無垢でありさへするならば！　純粹無垢の愛は法の愛だ。母性の愛はまだ不純なものを含んでゐる。それは法の愛まで淨化されて高められなくてはならない。母性の愛を否定

するのではない。それを法の愛で包攝するのだ。法の光で照らされた時母の愛は一層生かされて輝くのだ。母の愛の名によつて、法の愛をなみするものは禍ひだ。そなたはその愛で生きてくれ。法の愛に照らされた母の愛で子供たちを愛してくれ。今その愛がそなたに子供たちを放つことを命じるのだ。そなたはその命令に從つてくれ。それは最も深く子供たちを愛する所以なのだから。そなたの胸に法の愛の火を點してくれ。蕊を切つて焰を燃えあがらせてくれ。その火を高くかゝげて見よ。その時其處には子供達しか見えないそなたの眸にも可哀相な羊飼の妻が獨り淋しく臥てゐる姿が映つるだらう。彼の女は死にかけてゐる。妃よ。子供たちを彼の女に送らう。若し私たちが拒むならば彼の女は死んでしまふのだ。

妃　(身を悶へ乍ら)おゝ。私はどうしたらいゝのだらう。私には憐れみの心が乏しいのだらうか。眞理への愛が足りないのだらうか。私はやつぱり子供が放したくない。尊いお教へもよくは耳には入らない氣がする。

太子　今そなたの耳には俺の言葉は空しく聞えるかも知れない。切迫した苦しい心には迂濶にも冷淡にも響くかも知れない。だが俺は飽くまでも道を說かずにはゐられない。そなたや子供たちを愛すれば愛するだけ道に嚴しくならないではゐられない。俺は假令死に瀕してゐるそなたの耳元にでも道を說かずには置かないだらう。俺は說教者としての使命を感じる。法輪を轉するために此の世に遣はされたものゝ天務を——

妃　あゝ。私は息が塞りそうです。

太子　俺はそなたを我が身に親(ちか)く考へる程そなたに眞理を强ゐたくなるのだ。

妃　(眩暈を感じて)あゝ。

太子　(蒼白になり乍ら)子供達を放せ!

妃　(額に手を當て乍ら一生懸命の努力にて)お許し下さい。私は子供たちを施すことは出來ません。

太子　暫くの間貸し與へるのだ。彼の妻の病氣が癒えるまで——羊飼ひが左樣申してゐるではないか。

妃　でも若しその時になつて――

太子　俺は人間の内にある良心に望みをかける。それはどんな人の心の内にも乾度ある筈なのだから。若しそれが無いとしたら俺がこれから成し遂げやうとしてゐる大願は最後の據り處を失ふ事になる。(跪きて)天よ。私の今かけます望みは乾度眞正な、公けな道の上に立つてゐることを信じます。天の祝福を受けてゐることを信じます。

妃　(抵抗し難きを感じ、慄え乍ら沈默す。)

太子　二人の子供を貸し與へる。連れて行け。

波羅門丙　(跪いて太子を拜し)有難うございます。勿體なうございます。お慈悲深い布施太子様。女房よ。喜べ。太子様がお助け下さつたぞ。此の世で誰れも顧みてくれるものゝないお前を葉波國の御世嗣ぎに渡らせられる須太拏太子殿下がお救ひ下されたのだぞ。これからは附き切りで看護してやるぞ。食物も藥も不自由はさせないぞ。お前は乾度快くなるだらう。此の喜びと感謝とだけでも快くならずには居られまい。(空涙をこぼして)そうだ。お前が恢復したら。夫婦連れであらゆる村々を駈け廻つてふれて歩かう。太子様がどのやうにして貧しい羊飼の女房に惠みをかけて下さつたか。どのやうにしてお妃様がその玉のやうに愛でてゐらつしやるお子様たちを貸し與べて下さつたかを。

太子　行け。

波羅門丙　はい〳〵。(王子と王女に愛嬌をして狎れ〳〵しく近寄り乍ら)坊ちやま。孃ちやま。さあ〳〵此のおやぢの牧場にお伴致しませう。

王女　(母に縋り付き)いやだよ。いやだよ。

王子　(面をしかめて)こわいよ。こわいよ。

波羅門丙　(ますます愛嬌よく)こわいことはございません。おやぢが可愛がつておあげ申しますよ。おやぢの處には澤山かわいい羊が居りますよ。

王子　いやだよ。行くのはいやだよ。

太子　お前たちは此のぢいやの所に暫らく行つておいで。ぢきに返つて來るのだから。（丙に）連れて行け。

波羅門丙　さあ參りませう。參りませう。

妃　（絶え入るやうに）お前本當に返しておくれだらうねえ。返して——

波羅門丙　（鞭て誓ひの印をしながら）羊が肉を喰ひませぬ限りは——屹度お返し申します。

王子　（泣き出して）行くのはいやだよ。いやだよ。

太子　行つてぢいやを手傳つて羊の番をしておやり。

王女　（猶も母に縋りついて）離れるのはいや。離れるのはいや。

妃　（優しく）しばらくぢいやの處に行つておいで。ね。いゝ子だから。そしてぢきにまた歸つておいで。ぢいやが可愛がつてくれるからね。ぢいやの處には廣い牧場があつて可愛い羊が澤山ゐるから、羊たちと遊んでおいで、いゝかい。ぢきにまた母さまの處に歸るのだよ。（涙ぐみ乍ら）羊たちの草を喰べるのを見るのはおもしろいからね。え。

太子　（嚴しく）ぢいやと一緒にいらつしやい。

波羅門丙　（せき立てゝ）さあ。行きませう。行きませう。

妃　（猶も縋りつく子供たちを放して、立たせ丙に渡し乍ら）お前可愛いがつてやつておくれよ。可愛がつて——

波羅門丙　御安心下さいませ。羊の子でさへ優れた種を大切にせねばならぬことは羊飼の一等よく心得ねばならぬ事でございます。まして至尊の王種たるお子様方をおろそかにしてなりませうか。

妃　（も一度子供たちを抱きしめて、接吻して）氣をつけておいでよ。早く歸つておいでよ。

波羅門丙　（鞭を出して）御免下さいまし。（ジロジロ妃の面を見乍ら）なに若し途中でうつかりして谿間などにお轉び遊ば

すと大變でございますから。（子供の腰に縄を結び付ける。）

太子　（瞑目して）早く連れて行け。

波羅門丙　（子供たちを引き立て乍ら）さあ參りませう。行つて羊たちと駈け比べをして遊びませう。（角笛を吹いて見せて）かうして吹くと羊が皆集つて參りますよ。それは面白うございますよ。（丁寧にお辭儀をし）ではお二方氣をつけてお越し遊ばしませ。今日のお惠みは孫子の末まで云ひつたへて忘れませぬ。（泣いてゐる子供を引き立てゝ退場）

（森の奥で、獸の吠える聲聞ゆ。）

妃　（狂ふやうに。）待つておくれ。も一度子供を見せておくれ。私はまだ云ひ殘した事がある、も一度子供を――（後を追うて退場）

太子　（後見送り暫く不安の表情にて突き立つてゐるが、軈て跪きて）私はなすべきことをなしました。諸天よ。子供たちをお守り下さい。（一心に祈る）

（間）

妃　（息せき返つて來て）あゝ、行つてしまひました。（くづ折れて）子供達は行つてしまひました。

太子　（強く）心を鎭ませ。今は大願の門出だ。

妃　まるで屠所に曳かれる羊のやうだつた。素裸かの腰に縄をくゝりつけられて！

太子　勇猛心を奮い起こせ。今退轉してはなりませんぞ！

妃　（獨白のやうに）もう二度と子供達に逢へないのではないか知ら。子供達の運命は――

太子　わしは諸天の守護を信じる。妃よ。試みに敗けてはならないぞ。出城の際に母上が世にも見事に打ち克たれたあの同じ試みに、そなたも立派に勝つて見せろ。

妃　（一生懸命心内に闘ひ乍ら）殿下に選ばれた名譽に適ふために！

太子　勝て。勝ち誇れ。祝福はそなたの頭に下るであらう。

妃　（太子の腕に身を投げて）殿下を、たゞ殿下を命と致しまする。

太子　おゝ妃よ。（妃を抱く）

（間）

太子　（妃を静かに放し、立ち上り）さあ、行かう、一刻も猶豫してはゐられない。

妃　參りませう。今は疲れを恐れてはゐられませぬ。此の恐ろしい森を早く出ませう。

太子　（勇しく）そうだ。森を過ぎれば山が見える。聖山の姿は勇氣を奮ひ起たせてくれるだらう。

妃　（見廻して）おゝ、いやな森だこと！（身慄ひして）惡魔が潜んでゐるやうな！

太子　私達は勝つた。だが新しい試みの來るのを畏れねばならない。まつしぐらに檀特山へ！（先きに立ちて退場）

妃　（森の奥の方へ道を振り返りながら）あゝ。子供たちよつゝがなく行つておくれ。（太子に從うて退場し乍ら）森を越え、谷を涉り、何處何處までもお隨ひ申上まする。

波羅門丁　（森蔭より登場）腰拔け奴が出かし居つたぞ。案の條太子奴が拜み倒されやがつた。なる程俺のやうに嚇かすばかりが手でも無えわい。（間）處で二人の餓鬼はうまく賣りつけなくちやあならねえが、一等いゝ價の出相なのは何處か知らんて？

（波羅門丙、王子達を引き立てゝ別の道より引き返して登場）

波羅門丁　（笑ひ乍ら）出かしたぞ。貴樣にしちや少し上出來だつた。

波羅門丙　魁、冗談じやあねえぞ。俺いらあ少し此の稼業がいやになつた。

波羅門丁　何だ。これしきのことが。

波羅門丙　あの妃にや少し藥が利き過ぎたて。

波羅門丁　なあに。俺あ貴様が嘘をつくことの甘いのには少し感心した。あんなに出任かせに嘘がぺら〳〵しやべれたあ頼もしい。その道にかけちや俺もかなはねえや。

波羅門丙　（考へ乍ら）どうもいけねえ。彼奴が鳩のやうな眼付をしやあがつた言葉が妙に耳に喰つ付きやあがつた。「そなたの誓ひを信じるぞ」つて。

波羅門丁　（丙の肩を叩いて）おい〳〵。しつかりしろ。折角少し腕前が上つたかと思つて望みをかけてやつてるのに。

波羅門丙　（頭を振り乍ら）「ガンジス河が逆まに流れませぬ限り」か‥‥

波羅門丁　（王子の顔を眺め乍ら）ふむ。流石に格のある面をしてゐやがるな。（王女の顔を手の平に載せて）ふむ。綺麗だな。‥‥好色な金持ちのペルシヤ人にでも賣り飛ばすかな。それとも俺らが使はうかな。美少年や美少女の一人位使うのも悪かあねえからな。

波羅門丙　（何か思ひついたやうに）丁。此の餓鬼を賣るなあ俺いらに任せてくんねえ。

波羅門丁　ふむ。それや望みならさうしてやつてもいゝ。貴様の手柄だからな。だがぬかりはあるめえな。

波羅門丙　大丈夫だ。

波羅門丁　ぢやあこの餓鬼等は貴様に任せたぞ。俺らあこれからまた仕事にかゝらなくちや。

波羅門丙　まだかい。

波羅門丁　まだ上玉が殘つてゐらあな。（馬に乗り乍ら）　間道から先廻りだ。

波羅門丙　いや、どうも。

波羅門丁　（考へ乍ら）俺あくまでも「嚇し」でやらう。（馬首を巡らし二、三歩行きかけて振り返り、凄い目で一瞥して）云つて置くが、萬一餓鬼を逃がしでもしやうものなら後は恐いぞ。

波羅門丙　（ギクッとするが、笑つて見せて）まさか自分が骨折つてやつとせしめた獲物を遁がす馬鹿もあるめえよ。

波羅門丁　ちやあ任せたぞ。しつかりやれ。(馬に一鞭當てゝ)どれ。また一汗搔かせなくつちやあ。

波羅門丙　俺らも歸らう。(傑食に繩を曳ばり)さあ歩め。(王子達を鞭打ち)歩まねえか。

(王子と王女悲鳴をあげて抱き付く。)

波羅門丁　(心地好げにその狀を眺めて)ちやあ任せたぞ。

波羅門丙　うむ。しつかりやりな。

(丁馬に鞭打つて退場)

波羅門丙　(後見送つて)チエツ、何處までも酷い奴だ。(間。考へる。)俺あ少し嫌氣がさした。何だか腹の底がゾク／＼する。どうもさつき彼の太子に齎はされた時には變に恐ろしかつた。(あちこち歩く)どうも俺には此の稼業は少し向かねえやうだ。彼奴に何日まで喰つ付いてゐたつて碌な事は無えのは知れてゐる。もういゝ加減に彼奴との腐れ緣を切らう。逃げ出さう。さうだ、せめて王子たちを連れて葉波國の宮城へ行かう。彼處なら王孫達をどんなに高くでも買うだらう。其の金を資本にして、さつぱりと足を洗つて、堅氣な小商なひでも初めやう。さうだ。鬼の歸らぬ間に早く逃げやう。(王子達を連れて退場す。)幕

第三幕

巖石よりなれる險阻なる山道。間近く檀特山の麓の一部をなせる幽邃なる森林を望む。山道と森林との間に聖地と穢土とを區劃するが如くに一條の淸らかなる溪流横はる。綠滴たる無憂樹の森林と、全く草木なき磽确なる巖山とは著るしき對立をなす。夏の正午の太陽は赫奕として巖山を照り付けてゐる。岩石の形狀は不思議に或る醜きものを聯想せしむ。

波羅門丁　(馬に鞭打つて峻しき坂路を登つて登場。四邊を見廻して)何て醜い、露骨な山だ、剝き出しの地肌を無遠慮にかッ／＼と日が照りつけてゐやがる。(泡を一杯噴き出して苦しさうに腹を波打たせて喘いでゐる馬を無暗にピシヤ／＼と鞭打ち

乍ら）歩めやがれ。痩馬奴。（たら〱流れる抉だらけの汗を筋の一杯浮き出た手の甲で拭って）恐ろしく燒けつけやがるな。（ウロウロ見廻して）何だ。休まうにも木影と云つちやあ一つも無えや。馬鹿に蒸々しやがるな。やり切れねえ。息が窒りそうだ。まるで焙烙の上に居るやうなものだ。咽喉がヒリ〱する程乾きやあがる。（怪しげなる鳥群の鳴き聲聞こゆ。）ふむ此の山にや屹度行き倒れの死骸があるな。あの人喰鳥が集つて來るからにやあ。（下を覗いて）恐ろしい崖だな。あゝ地獄だ。（間。向うを見て）あれが檀特山か。馬鹿に綺麗な水だな。（咽喉を鳴らし乍ら）一口飲みてえな。（考へて）だが待て。あれは滅多に飲めねえぞ。惡人があの水を飲むと恐ろしい疫病に取つ付かれると云ふからな。俺はどうもあまり自信は無えからな。畜生。地べたにへたばつてしまやがつた。立ちやあがれ。四ツ足奴。（鞭打つ。）何だ馬鹿に臭えと思つたらあづり糞を垂れやがつたな。（向うを見て）來たぞ！　立たねえか。（馬をつゞけざまに鞭打つ。馬ヨロ〱として立つ。）歩め。（岩影に隱れる。）

（太子と妃喘ぎ喘ぎ登場。）

妃　あゝ。とても苦しくて。苦しくて。

太子　しつかりしろ。もう一息だ。

妃　（足を引きずり乍ら）とてももう歩けませんわ。（岩角に躓く）あツ！

太子　（腰布を引き裂いて）血を拭へ。俺が縛つてやるから。（跪いて妃の足の傷をくゝらうとする。）

妃　いゝえ。よろしうムいますの。私息が窒りそうで。窒りそうで。私精々の限りは默つて耐えてゐたのでムいますけれど。

太子　氣を確かに持て。

妃　（地べたにへたばつて）あゝ。胸が苦くて、胸が――

太子　（妃を扶け乍ら）しつかりしろ。氣を緊き締めろ。

妃　（眞青になつて倒れかゝつて）水を。咽喉がくつ付いて！

太子　（妃を抱きかゝえて）氣を張れ。一生懸命勇氣を出せ。御覧彼處に、崖の下にあんなに綺麗な溪川が流れてゐる。俺が下りて水をとつてくるから。

妃　（太子にしがみついて）いえ、私の側をお放れ遊ばさないで！　私何だか恐くて、恐くて――

太子　恐いことは無いよ。心を靜かにして俺の腕にもたれて居ろ。苦しいのは今一息だ。御覧。あの聖山を。あの眼のさめるやうな無憂樹の森を。

妃　（一生懸命自分を支へやうと努め乍ら。）此處まで來たのだ。もう此處まで來たのでムいますもの。

太子　さうだ。此の崖を下つて、あの溪川を渡りさえすればもう檀特山だ。あの長い間憧れ進んで來た靈山だ。

妃　あゝ。あの聖山へ早く入りたい。

太子　今一息だ。あの川に足を浸せば痛みも直きに去るだらう。あの森の靈氣に觸れゝば疲勞も直ぐに醫されるだらう。

妃　（再び青ざめ乍ら）私どうしたのでせう。氣がさして、氣がさして――（四邊を見廻し身震ひして）あゝ、此處は何て嫌な、不作法な、醜い處だらう。

（此の頃より黑雲檀特山の一角に起り、見る見る四方に擴がり一天俄かに掻き曇る。）

波羅門丁　（岩影より身を現はす。）

妃　（思はず聲を立てゝ）鬼が！　（しがみつき）殿下。あの異形の者は何でございませう。

太子　（ギクッとするが歸視して）人間だ。恐れる事はない。

波羅門丁　（つかつかと太子の前に進み）葉波國の太子須太拏に挨拶するぞ。

太子　何者だ。

波羅門丁　俺は波羅門だ。

太子　俺に何用あつて參つた。

波羅門丁　布施の所望があつて參つた。

太子　（靜かに）俺は既に凡てのものを布施して餘す所がない。

波羅門丁　凡てのものを？　汝は一番貴重な寶を所持してゐるではないか。

太子　いや。一物も持つてはゐない。俺はそちに吝んで施さないのではないのだ。

波羅門丁　（齒をむき出して皮肉に薄笑ひして）汝の最愛の者を除いてはな。

太子　（思はず妃を後にかばひ。）俺は二人の子供さへも施したのだ。

波羅門丁　他のすべてのものを施しても、最愛のものを施さないならば、一物をも施さないのに去ること遠くはないわい。

太子　（嚴しく）去れ！　そちに施すものは一物もないのだ。

波羅門丁　（から／＼とあざ笑ひ）虚言者よ。汝の後ろにかばうてゐるものは何ものだ。

太子　…………

波羅門丁　俺はそのものを所望するぞ。

太子　（青ざめて）これは余の妃だ。

波羅門丁　汝の妃を俺に施せ。その時初めて汝は凡てのものを布施したといひ得るであらう。

太子　妃は俺と一心同體だ。二體にして一體だ。分け施すことは出來ないのだ。

波羅門丁　誣言者よ。汝は一波羅門の耳を瞞まし得ても、天を欺くことは出來ねえぞ。

太子　惡人よ。天の名を呼ぶことを恐れよ！

波羅門丁　僞善者よ。天の名を呼ぶことを恐れなくてはならないのは寧ろ汝であらうぞ。

太子（眼を閉ぢる。）

波羅門丁　汝は自ら僞はつてゐるのだ。妃を施せ。俺は是非とも所望するぞ。伴ひ歸つて俺の婢とする。

妃（慄へ乍ら）退りや。無禮者。

波羅門丁（一向頓着せず、圖々しく太子に詰め寄りて）汝の誓ひは守られねばならねえぞ。

太子（やゝ和睦的に）施すものは拒んではならない。だが乞ふものは強ゐてはならない。乞ふものには乞ふものの踏むべき道があるのだ。

波羅門丁　はゝゝゝ。汝はあまり甘へ過ぎたな。汝は初めから衆生の欲望はこれ位なものと高を括ねてゐたのだな。それならば汝はあまり大言を吐き過ぎたのだ。天を輕ろしめたのだ。

太子　いや俺は決して天を輕ろしめたのではない。俺は何ものをも何者にも拒ばまない決心で誓つたのだ。だがよもや妃を乞ふものがあらうとは思はなかつた。

波羅門丁　須太拏よ。甘いぞ。甘いぞ。若し善人がその「善」に於て賭けるものが、惡人がその「惡」に於いて賭けるものよりも小さいならば。その善人の權威はどこにあるのだ。俺に敗けずに賭けろ。俺はたつて汝の妃を所望するぞ。

太子（思はず數歩のり出して何か言ひかけるが、妃の青ざめて、慄えてゐるのを見て再び思ひ返したやうに。）善行に賭けるのは、惡行に賭けるやうに容易なものではない。それには恐しい犧牲が要るのだ。

波羅門丁　惡行に賭けるのにも恐しい犧牲が要るのだ。それには良心を賣らねばならない。汝が拂ふ犧牲は、汝が贏ち得てゐる名譽に對する當然の代價に過ぎないのだ。

太子　俺はその代價は已でに充分に拂つてゐる。

波羅門丁　いやまだ決算は濟まなかつたぞ。今こそその刹那が來たのだ。汝は回避[illegible]ることは出來ねえぞ。天はその[illegible]

によつて立てた汝の誓言實行を迫るのだ。

太子（天を仰いで）あゝ、天よ。生を人身に享けたるものゝあはれな愛をお許し下さるでムいませうか。

波羅門丁（嘲笑して）何だ。汝は此の期に及んで天の課税の割引を哀願しやうと思ふのか。俺は驚いた。實の處少し失望した。俺は汝はもつと偉大な奴かと期待してゐた。しかるにどうだ。汝は先きには詭辯を以て事實を瞞着しやうと試みるかと思へば、今は哀訴を以て負擔を輕減しやうとあせつてゐる。實に見られた態ではない。

太子（憤然として色をなし、決心せる面持にて手を高くあげ、二三歩波羅門丁の方に進み近づく。）

妃（太子の様子を見て無意識的に二人の間に身を投げ出し）私を憐れんでおくれ。汝が若し鬼でないならば、汝が今要求してゐることがどんなことだか考へて見てお呉れ。そして此の上もう私達を苦しめないでおくれ。

波羅門丁（空嘯いて）泣いて見せるのは止した方がいゝ。俺の無慈悲な本能を挑發するばかりだから。

太子（妃の泣き崩れたる態を見て再び決意の鈍りたる様にて空しく佇立してゐる。）

妃（突然羽衣を脱ぎ捨てゝ丁の前に投げ出し）お前、この肌衣をあげるからこれで滿足しておくれ。それは一等練りのいゝ絹で出來てゐるのだから。私の肌の匂ひが一杯にこもつてゐるのだから。私はどんなことがあつても此の薄絹一枚だけは脱ぐまいと思つてゐた。けれどお前のためにはこれを脱いだのだ。殿下にさへも一番秘密な闇の中でなくては決して見せない肌を、そちの眼の前に露したのだ。お前これで滿足しておくれだらうねえ。

波羅門丁（恐る〳〵妃の裸身を眺めながら）何だ眞晝中に丸裸かになりやがつたな。（眼をぱち〳〵させて）少し眩しいぞ。いや、俺も流石に汝の肌をほめないではゐられねえわい。だが汝は逆上して、一番無分別な振舞をしたと云はなければならねえ。俺は益々汝を欲するぞ。そちのその玉のやうな乳房を見た今、俺はもう金輪際汝を斷念することは出來ねえぞ。

太子（堪えかねたる如く。）恥を知れ。無作法者奴が。

波羅門丁　所望だ。所望だ。妃を我が所有となす迄は那落にかけて此處は動かねえぞ。

妃　（眞青になつて手を捩り乍ら）天よ。波羅門の心に慈心を催ほし下されませい。

波羅門丁　俺は外道の名によつて誓ふぞ。此の禿山から青草が生えねえ限り、俺の心から慈悲は起こらねえぞ。

妃　おゝ殿下。（太子の胸に倒れかゝる。）

太子　（妃を抱きかゝえて。）しつかりしろ。（玉のやうな汗を額に一杯浮いて）波羅門よ。汝が今起こす一念の善心は、千金萬金の菩提心よりも優るのだぞ。汝が若し冥罰を恐れるならば――

波羅門丁　（哄笑して）醜いぞ。須太拏。汝はまことに烏滸がましい僞善者であつたわい。或は憐みを求め、或は嚇かし文句を使つて、いかにもして汝の當然負はねばならない課税を免れやうと藻掻く態は、寧ろ笑止千萬だ。何處に大願を立てた大行者の權威があるのだ。汝は空恐ろしい大言をほざきすぎた。天を指し、地を指して途方もない恐ろしい誓言をしたその罰を汝が受くべき時が今來たのだ神妙に刑罰を受けろ。

太子　（妃をしつかりと抱きしめ、顔色土の如く、焔の如き眸にて波羅門の面を直視せるまゝ無言にて彫像の如く突き立つてゐる。）

波羅門丁　さあ答へろ。度胸を据えて返答をしろ。さうして返す言葉もなく立つてゐる態はまるで木偶だ。おゝ聖人の假面をかぶつた無細工な木偶だ。

太子　（卒倒せんとて僅かに自ら支える。）

波羅門丁　笑止な僞善者よ。假面を脱げ。己れが約束した布施を己れが拒むのなら、もつと露骨な堂々とした方法をとれ。汝は武力を以つて男らしく俺と闘へ。雌を争ふ二頭の猛獸のやうに、此の燒山の上で闘はう。

太子　‥‥

波羅門丁　さあ。武器を執れ（二つの劍を出し、一つを抜き放ち他の一つを太子に差し出す。）闘へ！

太子　（無意識に劍を抜き放ち、波羅門丁をめがけて突きかゝらんとす。）

（此の刹那突然電光閃めく）

太子　（愕然として自己に氣付き、劍を地に投げ捨てる。）

波羅門丁　何だ。劍を投げ出したな。汝は鬪ふことも出來ねえのか。卑怯者奴。ではいよ〳〵妃は俺の所有だぞ。

（雷鳴す。）

太子　あゝ天よ。（地に倒れる。）

波羅門丁　はゝゝゝ。須太拏よ。汝は今こそ知つたらう。汝が大それた身の程知らずの大願を立てたことを！　汝は今汝の大願を捨てゝ、俺の前で彼の恐ろしい誓言を取り消せ。しからば俺は汝の負擔を許してやらう。汝が妃を布施することを免かれるためには唯其の一つの道が殘されて居るのみだぞ。

太子　（身を起し。跪きて天を拜し一心に祈る。）

波羅門丁　（太子の答へざるを見て）取り消さねえな。よし。（つか〳〵妃に近寄り）婢よ。俺に從へ。（妃の手を捕へんとす。）

妃　（ぶる〳〵と慄え哀願に充ちたる聲にて）殿下！

太子　（妃の聲を聞くや思はず）待て！

波羅門丁　取り消せ！

太子　（顏色を失ひ、膏の如き汗をたら〳〵と垂れる。はげしき苦悶と、心的鬪爭と祈禱との數瞬間の後突然立ち上り、兩手を天に延ばし）誓言は神聖であるぞ。妃を汝に與へるぞ！

妃　おゝ。（地に倒れる。）

波羅門丁　（一瞬間茫然として突き立つてゐるが軈て獸の如く飛びかゝつて妃の腕を摑み）來い。

妃　（波羅門丁の手を振り放し）寄るな。無禮者！

波羅門丁　太子は汝を俺に與へたのだぞ。

妃　（太子にすり寄つて）殿下。あなたは――あなたは。

太子　（無限の感じを含めて）曼抵よ。諸天の名によつて立てた誓ひは守られねばならない。

妃　（顛倒して）わたしを此の下司に――鬼にお與へ遊ばすので御座ゐますか。

太子　（一生懸命に）今退轉しては凡てを失ふのだ。

妃　いやです。いやです。あゝ考へても恐ろしい。私に出來ることか出來ないことかお考へ下さい。私はとても、とても――

太子　大願を捨てることは法界を亡ぼすことだ。

妃　あゝ死んでも！　私は死んでも彼に從ふものか！

太子　妃よ。汝の決心は三千大千世界を救ふのだぞ。

妃　あゝ世界も滅び失せよ。私が惡魔に嫁かなければならないのなら！

太子　（一生懸命に）汝一人の犧牲は一切の衆生を救ふのだ。

妃　私は既に衆生のために二人の愛兒を施しました。それでまだ犧牲が足りないのでムいますか。

太子　汝自らを捨てゝ俺の成道を助けよ。

妃　おゝ。あまりに酷い――

太子　捨身せよ捨身せよ。

妃　人身御供をお强ゐ遊ばすのでムいますか。

太子　おゝ。俺は强ゐるぞ！　わが成道のために汝の身を鬼に供へさせるぞ！

妃　おゝ地獄よ。足下に口を開いて私の體を嚥み込んでくれ。（地に倒れて慟哭す）

太子　（妃の泣く狀を凝視し乍ら）今の俺のために己れを失ふものは畢竟己れを得るのだ。無量劫に亘つて不滅の法身を得るのだ。今俺は如何なる犧牲を拂つても成道しなければならない。成道は今の俺にとつて、唯一の善、唯一の愛だ。今俺が退轉するならば俺は一切衆生と共に汝をも滅ぼすのだ。俺が成道した時俺は汝を鬼の手から奪ひ返すことが出來るのだ。汝に不滅の生命を與へることが出來るのだ。

妃　——

太子　曼抵よ。汝を伴つて聖山に入らうとしたのは抑も俺の誤りであつたのだ。汝は忘れはしまい。城を出る時俺は汝を伴ふことを力をつくして拒んだのだ。その時汝がどうしても聞き入れぬ故俺は萬一の時には汝をも布施する覺悟を語り、汝は堅い決心を示してそれを拒ばぬことを誓つた故、俺は汝を此の千載一遇の重大な旅に伴つたのだ。が運命は甘えることを許さなかつた。嚴しい恐ろしい、試鍊の時が今來た。捨つべきものを一絲だも携えて聖山に入ることは諸天のみ心に適はぬことであつたのだ。曼抵よ。受くべきものを受けてくれ。俺の成道の礙きとならないでくれ。俺を助けて大願を成就させてくれ。そなたが若し今の俺をつまづかすならば億千萬劫は汝にとつて恐ろしい呪咀となるであらう。俺はそなたに强ゐずには居られないのだ。

妃　（太子にしがみつき）助けて！　お助けなされて——

太子　行け。妃よ。（骨が碎けるやうに妃をしつかり抱きしめ、妃の眼の底に己れの魂を射込むやうに見入り乍ら）俺は此の瞬間俺の生涯のどの瞬間よりもそなたを愛してゐるのだぞ！　どの瞬間よりもそなたは俺のものなのだぞ！

妃　おゝ。（太子の腕の中にて慟哭す。）

太子　（燃えるやうに妃を接吻し、やがて決然として妃を突き放つ。）

波羅門丁　（猛々しく妃に近寄り）さあ。行かう。もうい丶加減にしろ！　俺に隨いて來い。連れて歸つて可愛いがつてやる。（妃の腕を捕へんとす）

妃（突然落ちたる劍を拾ひ波羅門丁をめがけて突きかゝる。）

波羅門丁（體をかはし、妃の腕首を捕へ劍を叩き落し）あぶないぞ！　際どい眞似をやりをつたな。はゝゝゝ。だが美しい女が危ない眞似をするのは味なものだて。（振り放さんとして身をも搔く妃の腕を鷲掴みにして）ふむ。何て柔かな、尋常なお手だ。

妃　あゝ。どうしてもどうしても行かねばなりませぬか。

太子　行け。そなたは神聖な神聖なさゝげ物だぞ。人類の救主をつくるために供へられた贄だぞ。衆生の罪業を贖ふために、魔王の怒りをなだめるために選ばれた人身御供だぞ。おゝ。法界を溺らす大洪水を治めるために建てられた人柱だぞ。

波羅門丁（妃の腕を捕えて引き立てながら）婢よ。さあ。俺に從へ。今日から俺が汝の主だ。

妃（引き立てられながら太子に畢生の力をこめて）あゝ。我が主、我が夫よ。私は今こそあなたの婢、あなたの妻でムいますぞ。あなたのために私は行きます。あなたの大願を成就させるために、あなたの最も忠實な妻であるために、私は鬼に嫁きますぞ。

太子　おゝ。我が眼、我が玉、我がいのち！　そなたは今こそ正眞正銘の我が妻だぞ。夫の使命を助けるものこそ本當の妻だ。今こそ俺がそなたを選んだことを天に感謝するぞ。尊き尊き妻よ。あゝ我が母は我れを産んだが、我が妻は我を成したのだ！

妃（汪然として涙を垂れ乍ら）あゝ。我が脊よ。その御一言のために私は勇んで嫁きまする。

太子　我が妹よ。俺は汝を鬼の手から奪ひ返さずには置かないぞ。汝を攝取せずには置かないぞ！

妃。その日を、その日を信じて待ちまする。

波羅門丁（いらたゞしく）さあ。行かう。乘れ。（妃を馬に載せ自ら轡をとる）

妃　（馬上より振り返り、渾身の愛をこめて太子を凝視し）殿下！

太子　妃！

（暫間沈默。此の時沛然として大雨到る。）

波羅門丁　ひどい雨だな。（天を仰いで）眞暗になつて降りやがる。

妃　あゝ。鬼神よ。我がために哭け。迦毗羅國の華、全印度の女の誇りなる耶輸陀羅は卑しき波羅門の醜男に嫁くのだぞ。（檀特山の方を仰いで）諸天よ。私をお守り下さい。お嘉し下さい。私を最も美くしき女、最も忠なる妻とお賞め下さい。（傍白）私は絶體絶命の場合には自ら玉の緒を斷つことによつて、此の下司男の凌辱を避けることが出來るであらう。

波羅門丁　（ピシヤリと馬を鞭ち）さあ。しつかり歩め。畜生奴。貴様の載せてゐるのは印度第一の美人だぞ。

（妃振り返り〳〵波羅門丁に伴はれて退場。）

太子　（妃の去るや張り詰めし勇氣の緩みたるさまにて、岩の上にくづれて慟哭す。やゝあつて立ち上り、大雨に濡れながら、暫らく身動きもせず石像の如く突き立ちゐる。軈て奮然として垂直に峻しき斷崖を攀ち下らんとす。）

（電光、雷鳴はげしくなる。）

騎馬兵　（甲冑を裝ひ武器を持ち、息せき登場。太子を見るや馬を飛び下り。）殿下。これに渡らせられましたか―大事でムいますぞ。

太子　何事だ。

騎馬兵　鳩留國の大軍が侵入致しました。

太子　なに。鳩留國の大軍が？

騎馬兵　彼等は須太延を眞先きに押し立てゝ攻め寄せました。大王親ら迦毗羅國の全軍を率ゐて防ぎ戰はれましたが、戰

ひ利なく味方は苦戰に厶りまする。

太子　父王殿下の御安否は？

騎馬兵　大王は戰陣の先頭に立つて、亂れ足の立つた味方の軍勢を叱咤して、勇ましく奮戰せられましたが、味方は陣形が崩れて、遂に潰走致しました。何しろ敵は霊象を得て勇氣が百倍し、味方は士氣沮喪して居りますので、遂に葉波城は重圍に陷りました。

太子　天よ。葉波國を守らせ給へ。

騎馬兵　私は重大な使命を帶びて、單身重圍を破つて、殿下の後を追つて參りました。殿下、一時も早く御歸國下さい。殿下が御歸國下されば、人民は殿下の旗下に馳せ集つて侵入者を撃ち退けるで厶いませう。敵は間諜によつて殿下が國を出られて、民心の離散したことを知り、隙に乘じたので厶います。祖國の安危は殿下の一身にかゝつて居りまする。一刻も早く御歸國下さい。御伴仕りまする。

太子　（默然として、瞑目し）俺は歸國致さぬぞ。

騎馬兵　殿下！　祖國は危殆に瀕して居りますぞ。

太子　俺は山に入らねばならない。

騎馬兵　兩陛下の御生命は風前の燈火の如くで厶いますぞ。

太子　（木石の如く）恩を捨てゝ無爲に入らねばならないのだ。

騎馬兵　若し一度葉波城が陷落致しますれば、神聖なる國土は荒らされ、祖先の墳墓は發かれ、處女は犯され、人民は永く他國の壓制の下に塗炭の苦しみに哭かなければなりませぬぞ。

太子　俺は不滅の國を求めて行くのだ。無闘の土と無窮の民とを創りに行くのだ。

騎馬兵　殿下！　今は夢を追つてゐる時では厶いません。祖國は現前に修羅の巷で厶います。歸つてお救ひ下さい。

人は殿下の御歸國に只一縷の望みをつないで居るのでムいます。事は切迫して居ります。夢をして夢を葬らしめて下さい。火は已でに眉を焦して居るのでムいます。
太子　火宅だ。火宅だ。三界を焚燒する劫火を治するものは只法水あるのみだ。
騎馬兵　殿下！　卽刻に御歸り下さい。
太子　俺は歸ることは出來ないのだ。
騎馬兵　殿下は兩陛下の御最後を傍觀遊ばすのでムいますか。無辜の民を見殺しに遊ばすのでムいますか。辱かしめられる少女を！　虐殺される嬰兒を！
太子　（死灰の如く）俺は山に入らねばならないのだ。
騎馬兵　殿下！　敢えて申しまするが、一大事を招いたのは重寶を敵國に布施なされた殿下の御責任でムいますぞ。
太子　（心内に苦鬪しつゝ涙を振りしぼつて）惡魔よ。退散せよ。（駈け出さんとす。）
騎馬兵　（追ひすがつて）お待ち下さい。（無限の哀願と詰責とをこめて）殿下はどうあつても御歸國なされませぬか。
太子　（決然として）金輪際歸國は致さぬぞ。（檀特山を指して）俺はあの山に行く！　あの山こそ俺が據つて以つて魔軍を防ぐ法城であるぞ！
騎馬兵　（全にがつかりしたる體にて茫然自失する。一瞬間沈默。軈て奮然地を蹴つて馬に飛び跨り、天を仰いで）おゝ鬼神よ聞け。而して左右に命じて記錄せしめよ。（無限の怨嗟を含めて）葉波國の太子須太拏は祖國を滅ぼし、父母を殺し、人民を賣つたのだぞ。（熱涙をハラ〳〵滾し）俺は最後まで闘はう。祖先の墳墓を枕にして死なう。（馬を鞭打ち、疾風を衝いて退場）
太子　（後を見送り大地に打たれながら、巖上に立つ。一瞬間沈默。軈て朽木の如く卒倒す。）
（雨俄かに止み、雷、電去り、黒雲天際に四散し、青空現はる。軈て檀特山の一角より巨なる白雲頭を出でゝ、動き、微妙の音樂聲

空に聞こゆ。）

帝釋天（侍從を隨へて天に現はる。）善哉（ぜんさい）。善哉（ぜんさい）。太子。須太拏。

侍從等。（天鼓を打ち鳴らし聲を合せて歌頌す。）

一人出家則九族生於天。一人出家則九族生於天。

（大地六種震動。異香薫じ、虛空より花降る。帝釋天と侍從消ゆ。）

太子（我に返り、四邊を見廻す。）今のは幻であつたか。あゝ。聖なる、聖なる御姿よ！嵐は去つた。おゝ俺は試みに勝つたぞ。勝つたぞ。（勝ち誇つて）天王帝釋も鼓を打つて嘉し給ふ。此の大勝利をあゝ全世界の山川草木も讃めたゝへよ。（歡喜の涙をはら／＼とこぼし）祖國よ。父母よ。妃よ。子よ。人民よ。須太拏は汝等を此の世界の誰よりも一番深く愛したのだぞ。一番深く、一番末通りて愛したのだぞ。俺は汝等を悉く救ひ取らずには置かないぞ。天に生れしめずには置かないぞ。（跪いて天を拜し）諸天よ。彼等の運命を守らせ給へ。（間）（立ち上り勇氣凛然として）さうだ。一刻も早く檀特山へ。（險崖を下らんとして路を選ぶ。）

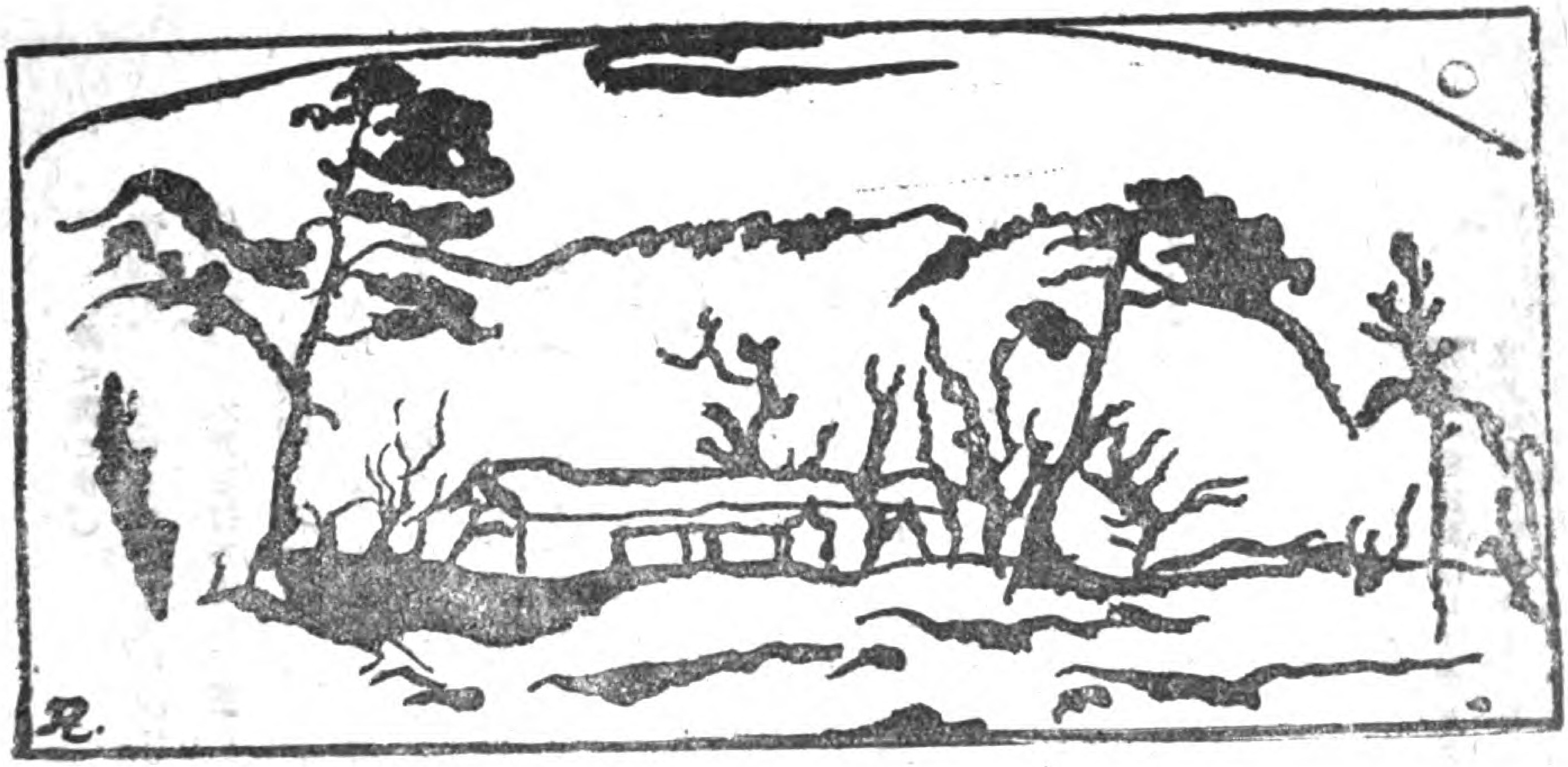
（此の時檀特山の麓の無憂樹の森より、孔雀。鸚鵡。舍利。伽陵。頻伽。共命。鴛鴦。翡翠。等の禽鳥、猩猩。獅子。象王。虎。牛。羚羊。栗鼠等の諸獸、及び蛇。蝮。龜。蜥蜴。蟇。百足。守宮。蠍。蝸等の爬ふもの類、群をなして溪流を渡つて太子の方に向つて來り、歡び迎え、信じ、順ふ態をなす。）

太子（法喜に輝き）あゝ。禽獸や爬蟲も俺を歡び迎えるのか。（親しげに彼等に近づきて）愛する畜生達よ。俺は今親しく汝等に挨拶するぞ。俺に道を教へてくれ。案内を賴みますぞ。さあ、聖山へ！（畜生の群に圍繞せられて溪流の方へ崖を下る。）

——幕——

（一九二〇、十二、十七）

附記。此戲曲はレーゼドラマであつて實演を意圖せざるものである。自分はレーゼドラマに實演と關係なき純粹文學としての獨立的根據を要求する。此自分一家のレーゼドラマについての意見は他日詳しく書きたいと思ふ。）



暗夜行路

志賀直哉

八

暫く上方の旅をしてゐた宮本といふ謙作よりは年下の友達が、松茸の籠を下げて訪ねて來た。

二人が二階で話してゐると、夕方になつて、近所の仕出し屋から電話を取次いで來た。

「直ぐいらつしやいませんか？」それはお加代だつた。

「緒方は居るの？」

「いらしてよ」

「そんならね。別に御馳走はないが、京都の松茸があるから、直ぐ此方へ來て下さいと云つて呉れないか」

お加代は例の怒つたやうな早口で「そんな事、いやよ」と云つた。

「それから又一緒に其方へ行けばいゝぢや、ないか」と謙作は云つた。

「面倒臭い！　Oさんばかり御苦勞だわ」

二三度押問答の末、

「よろしい。そんなら飯を食つてから出かけよう」かう云つて謙作は電話を斷つた。

それから二時間程して、謙作は宮本と一緒に濱賓亭へ行つた。

緒方は小さな部屋で、お鈴とお加代を相手にウヰスキーを飲んで居た。

「どうも怪しからんよ。折角の御招待を間で勝手に斷はつたりして」緒方は左う云ひながら竝んでかけてゐたお加代の肩をクリ〳〵と摑んだ。

「本統にねえ」とお鈴がいつた。「どんなに御馳走があつたか知れないにねえ」

「御馳走はないがつて云つてらしたわ。ねえ時任さん」

「當り前さ」とお鈴は云つた。「誰れが御馳走がありますからつて云ふ人があるものかね」

「眞に受けた方が都合がいゝからぢやないの」とお加代はお鈴を睨んだ。

「オイ、君々」と緒方はお鈴の膝を叩いて、「橋善の天ぷらで日本酒を飲まう」と云つた。

「天ぷらは見るのも苦勞らしいな」と内氣らしく宮本が云つた。

「いやかい？　そんならよさう」

「本統に左うですよ。陽氣の變り目ですから、若しもの事があるといけませんからね」

「何んだか、此人の云ふ事はお婆さん染みてるよ」左うお加代は傍白のやうに云つた。

宮本は酒が強かつた。そしてペツパーミントのやうな甘い酒を一緒に飲みながら少しも醉はなかつた。そして變に沈んだ顏をしてゐた。前夜の夜汽車でよく眠れず、宮本は元氣がなかつた。

「どうしたのよ」謙作と竝んでゐたお加代は向ひ合つた宮本の俯向き顏を覗込んだ。「いやあね。さつきから一人で悲觀ばかりして……」そしてお加代は謙作を顧みた。「全體どうしたの？」

左う云つてお加代が身を起こした時に謙作は何氣なくお加代の椅子に手をかけてゐた、その指を背中ではさまれた。

「寢不足なんだ」から答へながら、謙作は其指を靜かにぬかうとした。

「イキな寢不足ぢや、ないの？」お加代は却つて謙作に誘惑的な眼つきを向けながら心持、背中に力を入れた。

「イキなもんか。夜汽車の寢不足だ」謙作は不愛想に云つて、ぐいと指を拔いて了つた。其時彼はお加代が不快な顏をするかと思つた。が、お加代は如何にも無關心らしくしてゐた。

謙作には女から左う云ふ遣方で交渉される事は餘り氣持よくなかつた。それで不愛想に指を引き拔いて了つたが、矢張り一方ではそれを後悔してゐた。こんな事に變な潔癖を見せつけたやうな自分も氣に食はなかつたし、一つの機會を見すく\に逃がした事も惜しかつた。皆が醉つてゐる中で自分だけが醉はずにゐるからだと思つた。そして氣まぐれな心持で、

「その酒を呉れないか」と一度斷つたペッパーミントを注がして、それを一ト息に飲んだ。

「隅に置けないわ」

醉ふに從つてお加代の眼は又美しくなつた。唇も美しい色になつた。そして動作が段々に荒つぽくなつて行つた。のりの利いた厚いテーブルクロースに綠色の酒がこぼれたのが白熱瓦斯の下で一層美しく見えた。

「まあ奇麗だこと、――」かういつてお鈴がそれへ顏を寄せると、

「もつと作つて上げよう。ねえ？」お加代はぞんざいにかう云ひながら、小さい盞の匙を取つて、矢鱈に其酒を撒散らした。

「又そんな亂暴をする」

「奇麗だつて讃めたからさあ」とお加代はお鈴をにらみ返えした。

「全く奇麗だ」と謙作が云つた。

お加代は直ぐ謙作の方を振り向いた。そして、

「ねえ——」と額と額をつける位までに近づけて首肯くやうな事をした。謙作は今度は故意に、それに應じて、同じやうに首肯いて見せたが、それが自分ながら一寸調子がはづれて居た。氣が差してゐると、今まで默つてゐた宮本が、

「仲のえゝ事」と京都訛りを眞似て冷やかした。謙作には妙に皮肉に響いた。彼はそれに抵抗しようとした。すると尙調子がはづれて來た。彼は椅子をづらし、お加代の方へ身を寄せながら、

「僕は君が好きなんだ」と云つて了つた。

「ありがたう」お加代は謙作の不意な變りやうに一寸まごつきながら、それでも今の荒々しい樣子とは全く變つた、思ひがけない可愛らしい顏つきをした。

「どうしよう？」謙作の方は大膽になつて、肩でお加代の肩を押した。

「どうかしませうよう」とお加代は甘つたれた聲をした。其時は何時かお加代も自身を取返えしてゐた。そして、首を傾け、謙作の胸へ額をつけて其儘凝つとして了つた。髮の毛が謙作の頰に觸れてゐた。

「こりやあ、たまらない」お鈴は大きな聲で笑ひ出した。

謙作はお加代の首へ腕を巻いて、顏を寄せて接吻する眞似をした。二人は米嚙と額とを合はして居た。然し唇と唇とは三四寸離れて居た。そして只凝つとしてゐると、醉つた皮膚からの溫かみが額と額の間に立迷つて居るのが感じられた。謙作は意識の鈍ぶるやうな快感を感じた。

不圖、其邊が急に靜かになつたので、彼は額を擧げた。皆は何時か入口の厚いカーテンを下ろして何所かへ行つて了つた。お加代も少し汗ばんだ額を擧げた。二人は不意に變に覺めた氣持に突きもどされた。笑談一ついへない氣持だつた。

「乾度降りよ」

「行つて見よう」

二人は直ぐ其部屋を出た。隣りへ入つて見たが、誰れも居なかつた。

皆は其先の廣い部屋に居た。山崎と云ふ、元、同じ學校で三つ程上の級にゐた、今、辯護士をしてゐる男が緒方と宮本とを捕らへて如何にも醉漢らしい大聲で何か饒舌つて居た。お清といふ肩の薄い美しい小柄な女中が山崎の傍に腰かけて居た。

謙作は前から此山崎といふ男が嫌ひだつた。そして會へば毎時、知らず〲脅迫する態度を取つてゐたが、今は其毛嫌ひをおさえて腰を下ろした。

山崎はお清の手を握り、しつつこく酒を飲まさうとした。お清もいやだ〲と云ひながら、平氣でそれを飲んだ。

お加代も醉つてはゐたが、もう靜かな氣分でお鈴と並んで腰かけてゐた。

謙作は何んとなく落ちつかない氣持になつて、西緑へ行く事を小聲で緒方と宮本にすゝめた。宮本ははつきりした返事をしなかつた。

「電話で訊いて見よう」彼はかういつて立上がつたが、いきなり椅子の足に蹴躓いて其所へ倒れた。

「段々があぶなくつてよ、時任さん」とお加代がついて來た。

「大丈夫。君は來ない方がいゝんだ」

「憎らしい！」お加代は謙作の脊中を平手で強く叩いた。彼は振りかへらずに默つて行かうとしたが、其時の自分の頰の肉が氣の利かない笑ひを浮かべてゐる事を感じた。彼はそれを面でも脱ぐやうにして、振り返へつた。

「そんなら來ないか」

「行きたくなくつてよ」

謙作は用心しながら、一人段々を下りて行つた。そして電話口へ立つたが、胸が惡く、直ぐは掛けられなかつた。

「登喜ちやんは遠出ですが、小稻ちやんの方はたしかにあります」

「左う……」
「いらつしやいましな」
それが、あべこべだつたら行きたいがと彼は思つた。
又靜かに段々を上つて來ると、山崎の大きな聲だけが聽こへて居た。
山崎はお清の首にかぢりついて、接吻しようとしてゐた。お清は顏だけ反向けてそれを避けた。山崎は仕方なしに眞白に塗つた襟首へ顏を埋めて、そこへ唇をつけたらしかつた。お清はくすぐつたさうに顏をしかめて傍に立つてゐるお加代を見上げ、
「桑原々々」と云つた。
お加代は悄々しさうに下唇を嚙み、山崎の頭の上で拳固を振つて居た。謙作は判明りせぬ不快を感じた。
西緣へ行く事はやめにして、暫くして三人は其所を出た。

九

その翌々日の朝、謙作が未だ寢てゐる所に信行が訪ねて來た。會社の出がけで、上つてはゐられないといふので、謙作は眠むさうな顏をして玄關へ出て行つた。寒い朝で信行は元氣さうな赤い顏をしてゐた。
「咲子にこんなものを寄越した奴があるんだがね」
かういつて信行は無造作に外套のポケットから草色の洋封筒に赤インキで書いた手紙を出して渡した。弱々しい安つぽい字で、裏には第〇高等女學校寄宿舍より、志津子、封の所には「津ぼみ」と書いてあつた。
「此手紙は昨日、此所から廻はした手紙ぢやないか」
「左うだ。お前の妹といふ事を知つてるんだ。それで此所にゐると思つてるらしい」

謙作は曲の浮く不快な文字を豫想しながら讀んだ。其豫想があつた爲めか、思つたよりは厭味のない手紙だつた。「男女交際の眞正なるものは一向差支えなきものと私推仕り候。就ては少々御面談致度明後六日貴嬢之學校歸り途中（二時及び三時）氷川神社境内にて數分間拜顏致度候」こんな事が書いてあつた。「私は此夏某私立大學を卒業致し只今は麹町區〇〇町〇子爵方へ止宿罷在候」そして繰返えし〳〵秘密にして貰ひたいと云ふ事、然し若しかう云ふ事の爲めに結婚前の貴女に障りが起こつては氣の毒に思ふから、左うなら遠慮なく斷つて呉れと云ふやうな事を書いて居た。

「曖昧な態度で瀨踏みをしてる」と謙作は笑つた。

「此前寄越した奴程不良性はないやうだ。然し兎も角、どんな奴か、お前見といて呉れないか。場合によつては嚇つけてもいゝし」

「うん」

「俺がいつてもいゝけど、そんな事で會社を休むのもいやだから」

「それぢやあ僕が行つて見よう。〇〇町の〇子爵といふのは松山のお祖父さんにあたる人だ。松山に訊けば直ぐ分かるが、そんな事をする必要もないだらう」

「左うだ。こいつはそれ程惡い奴ではないかも知れないよ。然し嚇かす爲めにそれを云つてやるのもいゝや」

信行は直ぐ歸つて行つた。

其日は寒いばかりでなく時々思ひ出したやうに細い雨が止んだり、降つたりする日だつた。謙作は二階に火を入れさして、久しぶりで机に向かつた。彼は長い間怠つてゐた日記をつけ始めた。

――何か知れない重い物を背負はされてゐる感じだ。氣持の惡い黑い物が頭から被かぶさつてゐる。頭の上に直ぐ青空はない。重なり合つた重苦しいものがその間に擴ろがつてゐる。全體此感じは何から來るのだらう。

――日暮れ前に燈ぼされた軒燈の灯といふ心持だ。青い擦硝子の中に橙色にぼんやりと光つてゐる灯が幾ら無心

つた所でどうする事も出來ない。擦硝子の中からキイ〳〵爪を立てた所で。日が暮れて、灯は明るくなるだらう。が、それだけだ。自分には何物をも燒き盡くさうと云ふ慾望がある。これはどうすればよいか。狹い擦硝子の函の中にぼんやりと燈ぼされてゐる日暮れ前の灯りには其慾望はどうすればよいか。嵐來い。そして擦硝子を打破つて與れ。そして油壺を乾いた板庇に吹き上げて與れ。自分は初めて、火になつて燃え立つ。そんな事でもなければ、自分は生涯擦硝子の中の灯りでゐるより仕方ない。

――兎も角、もつと〳〵本氣で勉強しなければ駄目だ。自分は非常に窮屈だ。仕事の上でも生活の上でも妙にぎごちない。手も足も出ない。何しろ、もつと〳〵自由に延(のん)びりと仕たい事をずん〳〵やつて行けるやうにならねば駄目だ。しどろ、もどろの歩き方でなく、大地を一歩々々踏みつけて、手を振つて、いゝ氣分で、進まねばならぬ。急がずに、休まずに。――左うだ、嵐を望む軒燈の油壺では仕方がない。

――或る所で諦める事で平安を得たくない。諦めず、捨てず何時までも追求して、其上で本統の平安と滿足とを得たい。本統に不死な仕事を仕た人には死はない。今の自分は藝術の天才に就いて左う思ふばかりでなく、科學の天才に就いても左う考へる。キューリー夫妻の事はよく知らないが、然し彼等が人類の間に落として行つたものゝ確かさは彼等にどう云ふ運命が來ようとも決して動搖する事のない平安と滿足とを與へてゐるに相違ない。自分は左ういふ平安と滿足とを望む。嘗て人の見た事のないものを見、嘗て人の聞いた事のない音を聞き、嘗て人の感じた事のないものを感ずる。

――人類の運命が地球の運命に乾度殉死するものとはかぎらない。他の動物は知らない。然し人類だけは其與へられた運命に反抗しようとしてゐる。男の仕事に對する、あく事なき本能的な慾望の奥には必ず此盲目的な意志がある。人間の意識は人類の滅亡を認めてゐる。然し此盲目的な意志は實際少しもそれを認めようとしてゐない。

人類の發達は地球のコンデイションと正比例する。地球のコンデイションが人類に段々よくなつて來る。人類は發達

して來た。が、ある時からそれが段々に惡くなつて行く。段々と寒く、乾いて來る。其時から人類は漸次に退化して行く。そして到頭或る日哀れな最後の一人が死んで、人類は絕へて了う。人類ばかりではない。總ての生物が段々に死に絕へて行く。そして總てが氷の下に入つて了う。此考へは誇張でも何んでもない。此儘で行けば當然これが人類其他總ての生物の恐ろしい運命だ。然し人類は――――此苛々と、殆ど無目的に發達しようと焦つてゐる人類はどういふ運命を素直に受け入れるだらうか。地球のコンディションが段々に惡くなつて、知らず／＼に退化して了つてからは吾々の子孫も彼等の祖先がそれ程にも焦つた事すら知らず、焦りぬいて築き上げた發達の價値に就いても無關心に、今は何等利用する事も出來ない左う云ふ發達の遺物を、冷やかな眼差しで眺めながら空虛な希望も何もない頭で、結局、その運命を素直に受け入れるやう、餘儀なくされるかも知れない。然しそれは人類が左う退化し終つてからの事だ。左うなる前、地球のコンディションが未だ人類に惡くなる前、それ迄に人類は出來るかぎりの發達を遂げようとしてゐる。そしてそれで與へられた運命に反抗し、それから人類を救はうとしてゐる。

　女は生む事。男は仕事。それが人間の生活だ。人間が未だ發達しない時代には男の仕事は、自分の一家族、自分の一部落の幸福の爲めに働けばよかつた。それが段々發達して、一部落の輪が大きくなつた。日本なら男は其藩の爲めに働く事で仕事の本能を滿足させて居た。それが一國の爲め、一民族の爲め、そして人類の爲めといふ風になつた。

　例へば永生といふ考へでも、子供の頃は此身の永生でなければ感情的に滿足出來なかつた。然し今は、――――今でも死は恐ろしい。然し永生は、個人々々のそれはどうでも差支えなくなつた。同時にその信仰も持てなくなつた。只自分は自分達の仕事を積み上げて行く、人類の永生、これだけはどうしてもあつて呉れなければ困ると云ふ感情になつてゐる。やがては此感情からも解脫するかも知れない。解脫した思想がある。然し今の人類一般の何んでも彼でも、發達しようと焦りぬいてゐる仕事に對する男の本能、或る場合それは盲目的で病的になる事すらある。本來の目的を見失つて却つて人類を不幸にするやうな發達へ入り込む場合もある。が、それにしろ左ういふ本能的な慾望の奧には矢張り人

類の永生を願ふ、即ち與へられた運命に反抗し、それから逃れ出ようとする、共通な大きい意志を見ないでは居られない。自分はマースといふ飛行機乘りが初めて日本で飛行機を飛ばした日の事を憶ひ出す。滑走から、機體が何時か地面を離れ、空へ浮かんで行く、其瞬間、不思議な感動から自分は泣きそうになつた。此感動は何から來たか。亢奮し切つた群集心理からも來たらう。然し何かしらそれだけでないものがあつた。其場合は假りに群集心理の支配を受けたとしても、異う場合、例へば、誰かが科學上の偉い新發見をしたといふやうな新聞記事を讀む。其時にも自分は泣きたい程、感動する事がある。これは何から來るか。意識しない人類の意志が奥底でそれに應ずるからではないか。そんな氣がする。

人類が滅亡するといふ事を吾々は知つてゐる。が、それが吾々の生活を少しも絶望的にしない。それに想ひを潜める時に淋しい堪えられない感じを起こす事はある。然しそれは丁度無限を考へて變な淋しい氣持に導かれる、それと變りない感じである。實際吾々は人類の滅亡を認めながら感情的にこれを勘定に入れてゐない。此事實は寧ろ不思議だ。左うして一方吾々は出來るだけの發達をしようと焦つてゐる。これは結局吾々は地球の運命に殉死するものではないといふ希望を何所かに持つてゐるからではないか。そして左う云ふ大きな意志が誰れにも無意識に働いてゐるからではないか。

十

半月程、つけ怠つてゐた日記に謙作はこんな事を書いた。此考へは此間中から漠然彼の頭に往來してゐた考へであつた。實際彼には今の人間が總て何かはつきりしない目的の爲めに焦りぬいてゐるやうに思はれた。何か知れない大きい意志に追ひ立てられてゐる。藝術でも宗教でも科學でも總てにこれが種々な形で現はれてゐる。左う思はれた。彼は現在の自身に就いても左う感じられた。謂はれなく苛々と焦せり立つ時に彼は何か左ういふものに追ひ立てられるのを感

した。
彼は九畳から部屋の中を歩き廻はつてゐた。
「謙さん。謙さん」段々の下でお榮の聲がした。「お晝はどう？」
彼は一寸夢から覺めたやうに感じた。朝寢の習慣から謙作は大概朝と晝とを兼ねた食事をしてゐた。然し其日は信行に起こされ、珍らしく九時前に朝飯を食つてゐた。
「左うだな」と、彼は少し不機嫌に云つた。「空いてもゐないが、行きませう」暫くして彼は階下へ降りて行つた。
食事中、お榮は「不良少年なんて、一人で出掛けて心配ないの？。龍岡さんに一緒に行つて、頂く方がよかないの？」と心配さうに云つた。
彼はさう〳〵と思つた。そして、「大丈夫です。不良少年といふ程でもなさゝうだし」と、いひながら、然し先の出やうでは割りにかつとする性質の自分に一寸不安を感じた。
食過ぎたので、彼は消化劑を飲んで、「そして二階へ上がると机の下にあつた籐の紙屑籠を枕にして、横になつた。亢奮し過ぎた後の淋しい氣分が來た。
間もなく宮本が來た。
「龍岡さんの送別會は何所がいゝかね。早く決めないともう日がないから」と云つた。宮本が其世話をする事になつてゐた。
「未だ決めてないのか？」謙作は非難するやうに云つた。「一週間ないぢやないか。何所でもいゝから、龍岡の空いてる日を聽いて早く決めたらいゝぢやないか」
「日は聽いてあるんだよ。だけど場所が未だ決まらないんだ。淸賓亭とか西緣とか、左う云ふ家でない方がいゝだらう？」宮本は少し氣をひくやうに云つた。

「無論、そんな家でない方がいゝ」

「左う。さう君に聽けば安心なんだよ」と宮本は笑ひ出した。「あゝいふ家も惡くはないが、送別會は一寸いやだらう。でも君達に無斷でよしちやあ惡いやうな氣がしたから」

二人は笑つた。

「僕は富士見軒か三縁亭にしようと思つてゐるんだ。料理はどうだか知らないが、何んとなく昔の洋行のやうでいゝだらうと思ふんだ。それから寫眞屋も少し舊い家でね。富士見軒なら武林か何んかを呼ぶといいと考へてるんだ」宮本は彼等仲間でのディレッタントだつた。

　謙作は妹に手紙を寄越した青年のある事を話した。

「一緒に行つて見る氣はないかい？」

「可恐。若しピストルでも出された日にはこれだからね」と宮本は兩手を擧げて見せた。

「そんなら待つてたまへ」

　二時になつた。丁度雨は止んでゐたが、謙作は蝙蝠傘を突いて一人、二三町離れた氷川神社へ出かけて行つた。常には近所の子供の遊び場だが、雨で、今日は一人もゐなかつた。只神樂堂の裏に二十二三の顏色のよくない痩せた若者が石に腰かけ、此寒空に薄よごれた白がすり一枚で身を縮め、物怯したやうな眼で謙作の方を見てゐた。「あれではない」左う思ひながら謙作は其邊を一と通り歩いてみた。額堂に茶店を出してゐる男が、客がないのでもう床几を積み重ねてゐた。その他は誰れも居ない。彼は暫らく、ぶら〳〵と歩いてゐた。時々境内を通り拔けて行く人があつた。然しそれらしい男は來なかつた。

　其内、不圖やつれはてた滑玄の聯想から、彼は其見すぼらしい若者を若しやと云ふ氣になつた。信じたわけではないが、先刻から同じ所に凝つとしてゐる、其樣子が人を待つて居ると見れば見られる氣がしたからであつた。彼は若者へ

方へ行つてみた。大きな銀杏があつて濡れた地面へ其黄色い葉が落ち散つてゐた。彼は蝙蝠の先で銀杏の落葉を一トつ差しながら二三度若者の前を往つたり來たりした。若者は不安さうに、時々眼だけで彼の方を見た。

到頭謙作は前へ行つて、

「誰れか待つてるのか？」と訊いてみた。

若者は直ぐ返事が出來ない程の恐怖を現はした。其急にキヨト／＼し出した樣子で、謙作は矢張り此男だな、と云ふ氣になつた。

「何故、此所に居るんだ」

「まゝ待つて……」と息を切りながら、頭を振る事で後をおぎなひながら、「ゐるんぢやない」と漸く續けた。自然に身體が震へて居る。眼がをびえ切つてゐた。二寸位に延びた薄い髮の毛は營養不良から、まるで光澤がなく、手や足の皮膚はカサ／＼になつて、白い粉を吹いてゐた。

「家はあるんです。簞笥町十九番地です」若者は謙作の怒つたやうな顏を凝つと見上げながら、あへぎ／＼云つた。そして殆ど無意識に親指のさゝくれをむしり出した。さゝくれからは血がにぢみ出て來た。それでも痛さを感じないやうに尙無暗とむしつた。若者は浮浪罪に問はれる事からすつかりおびえて了つたのだ。謙作を刑事と思つたのだ。

「失敬しました」かういつて謙作は一寸頭を下げたが、未だ怒つたやうな顏をして居た。

彼は鳥居の側へ來て立つてゐた。謙作は若者が恐る／＼神樂堂の裏からそつと此方を覗いてゐるのを見た。

十八九の學生らしい若者が帽子も被らず着流しで、本を一冊持つて、時々それを見ながら歩いて來た。何か暗記物をしてゐる風だ。謙作はこれかなと思つた。暗記物をしてゐる風を粧つて、誰れか他の人の來る場合に用心してゐるのかも知れないと思つた。じろ／＼見てゐるので青年の方でも拘泥してゐた。

訊いてみるより仕方がないと思つて彼は近寄つて行つた。前で懲りてゐたから今度は叮嚀に云つた。

「失禮ですか、君は人を待つてるんですか？」

青年は至極穩やかな顔をしてゐた。そして、

「いゝえ」と答へた。生意氣な所がなく如何にも良家の子弟らしかつた。

「左う」謙作は頭を下げた。

兎も角三時まで待つ事にして、額堂の茶店へ入つた。そして毛布も何も掛けてない積み殘しの床几に腰を下ろしたが、茶店の主は客扱ひにする氣がないらしく、

「いらつしやい」と云つて、其儘熔岩を組み合はせて作つた庭石の間に散り込んだ落葉を草箒で丹念に掃き出して居た。謙作は秋らしい靜かな氣持になつて烟草を吸つてゐた。手紙の主と會ふには丁度いゝ氣持だと思つた。兎も角三時まで待つて來なかつたら歸るつもりで時々時計を見てゐた。先刻の見すぼらしい若者は未だ腰かけてゐる。血が出るまでに無暗とむしつたさゝくれが痛んでゐるだらうと思ふと何とか云つて慰めてやりたい氣がした。然し何故あんな風に何時までも凝つとしてゐるのかしら。病人でもない、乞食でもない若者が十一月の寒い日に白地の單衣一つであんな事をしてゐる、左ういふ人の生活が彼には一寸見當がつかなかつた。

餘り長くゐるので、茶店の主は茶と菓子を持つて來た。もう來さうもない、左う思つて彼は茶代を置いて立ち上がらうとした時に石段をあがつて來るお榮の姿が見えた。何といふ事なし兩方で微笑した。

「此方から歸りませう」彼は直ぐ往來へ出られる小さい門の方へ足を向けた。彼は一寸先刻の若者に言葉をかけて行きたい氣がしたので、其方へ近よつて行くと、若者は急に首根を堅くして、顔を反向けて了つた。謙作は言葉をかける事をやめ、其儘お榮と一緒に往來へ出た。

「先が分かつてゐるのだから手紙で云つておやりなさい」

「左うしませう」

歸ると直ぐ彼は宮本に待つて貰つて手紙を書いた。松山とは子供からの友達だと云ふやうな事を書いて置いた。

宮本は不意に、「不良少年もいゝなあ。不良少年にならうかしら」といつて笑ひ出した。謙作も釣られて一緒に笑つたが、何んだか不快な氣がした。宮本が不良少年と云ふ言葉を使つて自分達に共通な一つの要求を露骨な調子で指摘したやうな氣がしたからである。

叉霧のやうな雨が降り出した。二人は將棋をさした。そして五六度さして、もう疲れ、盤の上も稍暗く、少し不愉快になつた時に電氣が來た。暫く考へて、いゝ考へも出ずにゐた謙作は「よさう」と云つた。

「よさう」宮本も直ぐ手の駒を盤の上へ投げ出した。そして倒れるやうに後ろへ仰向けに寢て了つた。謙作は風邪をひきやすかつたから、二重廻しを抱へて行つた。

用意が出來てゐたので、食事を濟まして、二人は直ぐ戸外へ出た。溜池から電車に乘つて、新橋から銀座へ出た。街燈と竝んで立つた柳の細い枝が風に揺れながらキラ〳〵と美しく光つてゐた。

宮本は袋物に興味を持つて、左ういふ店の前へ來ると、必ずショウ、ウインドウに額をつけるやうにして根氣よく眺めた。

「近頃は荒物趣味の方はどうだい？」

「勿論あるよ」と宮本は答へた。

袋物は本統に凝つた物だと、どうしても古物で、前にどんな奴が使つたか知れない物だから、よくても或る意味では甚だ不潔だが、荒物の方はどれもこれも新しく安く、其割りに趣味があつて清潔だからいゝ。よごれたら直ぐ捨てゝ惜しくない所もいゝ。歩きながら宮本はこんな説をはいて居た。

「今度の旅でも大分買つて來た。其内朝鮮へも行かうと思ふんだ。朝鮮のは中々いゝんだよ」などゝ云つた。

臺灣喫茶店の前を通る時、謙作は何んとなく緒方が居さうな氣がした。そして實際奥の方に帽子のふちを下ろし、雨外套を着た儘の其姿を見た。

「緒方がゐる」と注意すると、宮本は少し後もどりをして入口から近視の眼を細くして見てゐた。

「寄らうか」と謙作が云つた。宮本は

「よさう。蜘蛛猿が來てるよ。それより緒方さんを呼び出さうよ」宮本は給仕女に云つて緒方を呼び出して貰つた。出て來た緒方は直ぐ承知した。そして又入つて、ステツキを取つて出て來た。

二人は其儘京橋の方へ歩いた。

「君は蜘蛛猿が嫌ひなのかい？　謙遜ない〻奴ぢやないか」と緒方がいつた。

「別に嫌ひでもないがネ。何んだか閉口ぢやないか」

「どうも君達は一體に氣六ケしくていかんな」

尾張町の乘換場へ來た時、

「あすこはどうだい？」と緒方は向ふ側のカツフエを指した。

「蜘蛛猿より閉口なのが居さうだな」と又宮本がいつた。

「どうしたんだい。大變氣六ケしいんだネ。酒はいやかい？」

「酒はい〻んだよ。だけど、何んだか急に人が可恐くなつちやつて……」と宮本は笑つた。

「人が居なくて、酒だけあるとこなんかないね」

結局引きかへして清賓亭へ行く事にした。

二階の小さい室のカーテンを下ろし、三人は其所へ落ちついた。お鈴は階下の掛りで餘り出て來なかつた。其所にはお加代の他にお牧といふ餘り美しくない女中がゐた。

謙作は其日割りに靜かな氣持でゐた。酒を飲むのもいやだつた。

お加代も幾ら緒方が勸めても飲まうとしなかつた。

「理由があつて、お酒は斷つちやつたのよ。――本統に散々叱られちやつたわ」左う腹立たしさうに附け加へた。

「又お酒で失策をしたんですの」

「又なんて、ひどいよ、お前さん」お加代は多少下品な調子でいつて、お牧の肩を突いた。そして「出世前の者はお酒なんか飲むもんぢやないのよ」と獨りで云つた。

謙作は前日自家で不圖お加代が一トかわ眼か二タかわ眼かといふやうな事を考へて、それを緒方への端書の端しに書いてやつた、それを憶ひ出した。所がそれと同時に緒方が其事を云ひ出した。

「おい〳〵お加代さん。時任がね、君の眼が一トかわか二タかわか考へたさうだよ。一寸見せてやり玉へ」

今まで少しむつとしてゐたお加代は急に媚びるやうな眼をして謙作の方を向いた。

「兩方あるのよ。ね、此方が一ト重でせう？　此方が二タ重」

「あべこべだ」

「おや、左うかしら」お加代は指で眼瞼を擦りながら、眼をぱち〳〵さした。「左うだわ」

そしてお加代はもう一度、嬉しさうな變に誘惑的な眼を向けて默つて、微笑した。居ない所で一トかわか、二タかわかを考へたといふ事は偶然効果の多すぎる世辭になつて居た。

然し其夜はとかく話が絶えがちだつた。謙作は氷川神社へ行つた時の話をしようかとも思つたが、後で客との話の種にされても妹の爲めに困る氣がしてやめた。皆が默つてゐると、お加代とお牧は勝手に自分達の話をしてゐた。

「ほら、運送屋の横丁さ」

「運送屋つて、あのいゝ男の坐つてる家かい？」

「あゝ」

こんな事をいつてゐた。

「怪からんな。いゝ男がどうしたんだい」緒方は興味のない氣持で無理にそんな事をいつた。

お加代は直ぐ剣突くらしく答へた。

「いゝ男の話ぢやない事よ。いゝ男のゐる横丁の話よ」

「横丁なら尚怪からん」緒方は出鱈目を言つて、つまらなさうに笑つた。

「此邊はそりやあ、いゝ男が多いんですよ」とお牧が云つた。

「つまり君達の岡惚れだな」

「Oさん、此間ね」といつてお加代は笑ひ出した。「お清さんが露月町の方にそれは〳〵いゝ男の散髪屋さんが居るつて云ふのよ。それを又、よくきかずに此人と出かけちやつたものよ。所がどうしても家が知れなくて、一軒々々散髪屋を覗いて歩いちやつた……」女二人は横眼を見合はせ、顔を眞赤にして笑つた。其時のお加代の顔には變に下等な感じが出てゐた。謙作は或る不安から宮本の方を見た。宮本も謙作の方を見て居た。其顔には意地悪いやうな同情するやうな笑ひを浮べてゐた。

お加代とお牧は圖に乘つて堺限の「いゝ男」の噂を始めた。運送屋の番頭も其一人だつた。八百屋の息子と云ふのもあつた。自動車の運轉手と云ふのもあつた。それを聽きながら宮本は露骨ににが〳〵しい顔を女達に見せてゐた。

お加代は毎日晝前十時頃錢湯に行くと丁度空いてゐる時で、誰れもゐないと、兩方に留桶を抱えてよく泳ぐといふやうな話をした。

「此人はそりやあ上手なんですよ」と傍からお牧が云つた。

肉づきのいゝ此大きな女が留桶を抱えて風呂の中で泳ぐ様子が謙作には可成無格好な形で想像された。そして其無格

好さがいやに肉感的に感じられた。

お加代は瓦斯會社の工夫が大きな脚立を流しへ持ち込んで、損じた瓦斯燈が直つてからも何時までも愚圖々々してゐるので湯槽を出られなかつたといふやうな話を自身でも興味を持つて話してゐた。

「いゝ加減湯だつちやつたわ」

謙作は最初からお加代を品のいゝ女とは考へなかつた。只投げやりな生々した所や、變にコケテイツシユな所などに惹きつけられてゐたが、今日の餘りに安價な感じから、すつかり氣持を冷やされた。近よれば近よる程此感じは強くなりさうに思はれた。此點では初めて會つた時が一番よかつた。

間もなく三人は其所を出た。そして直ぐ別れ〲に家へ歸つた。

翌日起きると、宮本からの端書と前日出した手紙の返事とが來てゐた。

宮本のには羅馬字で「失戀を祝す」と書いてあつた。昨晩途中から出したものらしかつた。

返事の方は平謝りに謝つた手紙だつた。實は御妹樣は寫眞で拜見したばかりで、自分にはそれ程の考へはなかつたのですがT病院の看護婦○○に勸められてあんな手紙を差出しました。若し此事が松山樣に知れでもしましたら私一身にとり由々しき事に相成るべく、御慈悲を以つて何卒〲御海容被下たく云々、といふやうな事が書いてあつた。T病院といふのには一年程前咲子が入つてゐた事がある。そして其看護婦は謙作も覺へてゐる。一寸美しい女だつた。

謙作は簡單に前日の事を書き、其手紙を同封して信行へ出した。そして其男へは松山には決して云はないといふ約束をした手紙を出してやつた。それから、宮本には「失戀」と極められると一寸いゝ氣がしなかつたので、羅馬字で「失戀せず」と書いたが、矢張り破つて、それは出さずに了つた。(續く)

There is only one way of preserving what is valuable in Bolshevism, and eliminating what is less good, and that is the way of peace and trade. It is clearly therefore the duty of everyone who believes that common ownership of the means of production is the road of progress to do everything possible in the way of urging peace upon the governments of Russia and the Entente. Continued conflict may give nominal victory to the one side or to the other, but cannot give the victory to any cause which a lover of mankind can value.

more liberal by loss of empire, and would be very likely to adopt communism just as Russia ceased to practise it. But such an empire would probably be closed to western influences, unindustrial, and with a dimishing level of civilization. Being unindustrial, it could not be communistic in any modern sense; it would consist in the main of peasant proprietors governed by a small class of *rulers.* It might be internally happy and externally unaggressive, but it would contribute nothing new to the solution of the world's difficulties. This would be a poor outcome of a movement which has inspired such high hopes as have centered round Russian Bolshevism.

The conclusion to which we seem to be forced is that, unless Russia can secure peace and trade very quickly, it will become impossible, for the present, to realize Bolshevik ideals in practice, because the Bolsheviks themselves will be inevitably led to abandon them in the course of conflict with capitalist Powers. It is quite probable that those Powers will be overthrown by their oppositions to Bolshevism. But if one must suppose (as sometimes seems unavoidable) that it is the good in Bolshevism which causes the governments to hate it, and that they are actuated less by self-interest than by a fanatical horror of communism and economic justice, then it is necessary to concede some measure of success to the opposition of the Churchills and Millerands. They will not succeed in securing the survival of the old, but they may succeed in preventing the new from being any better than the old. The Bolsheviks came into power the protagonists of the new ideals, bringing hope of a better world. By the necessity of fighting, they have been driven more to assimilate their regime, in many respects, to those against which they are contending.

From the imperialist and nationalist point of view, nations such as Japan and England, which have territory on the continent of Asia and immense interests in China, are insanely foolish in forcing the Russians, against their will, to create such a vast hostile force, both spiritual and material. It is not too late to make peace, but it is far too late to hope for military victory. If we continue to fight Russia, Russia is most certain, before many years have passed, to overrun or federate with every part of Asia, except those few that can be controlled by naval force.

Such a result would of course be disastrous to Japan and England from the point of view of their nationalist ambitions and their trade; it would in fact mean their downfall as great Powers. It would also be disastrous to Bolshevism considered as an idealistic movement from which help may come to a degraded and tortured world. It is obvious that the side of Bolshevism which makes it attractive to all who desire a better social order would infallibly be lost as a result of Asiatic conquest and consequent wealth and power. Communism would sink into the background, as an ideal of which the realization must be postponed. This kind of process is familiar to history in the case of Christianity which also was communistic in its infancy, but condemned communism as a heresy when it became rich and powerful.

There is, it is true, another side to the picture. It would make for the peace of the world if all Asia were combined into one Power, since it would be a Power weak in attack but invincible in defence. It is possible, though far from certain, that India might have more freedom than at present; and it is possible that the regeneration of China might be accelerated. Moreover, England would certainly be rendered

Europe and northern Asia, out of which has come many of the great conquerors of the world. Genghis Khan emerged from the same region, and acquired an empire which the Russians may possibly be compelled to surpass in the mere struggle for self-preservation. Bolshevism, on its Asiatic side, is not unlike Mohamedanism, and may inspire similar spirit. The whole effect of the hostility of the western democracies is to emphasize its Asiatic side, and to make, therefore, more and more calculated to produce one of these great upheavals by which Asia from time to time astonishes and terrifies Europe.

It is clear, I think, that this is not what Bolsheviks most desire. What they most desire is that Russia should become an industrial country as similar as possible to the United States, except that there would be great functionaries instead of great millionaires, and the rewards of industrial skill would take the form of power rather than wealth. The Bolsheviks have an ideal of society which they would like to realize; it depends upon industrialism, and cannot be realized immediately except in industrial countries. Almost all the men in the Soviet government are men who have been compelled to spend long years of exile in western countries, and have acquired during those years a taste for western outlook and method. It is not by their choice or desire that they have turned so much of their attention eastward; it is because the west has refused intercourse with them. They had no wish to devote their attention to military problems, but they were compelled nevertheless to create a great army, and so long as peace is refused they are obliged to use their army and their skill in propaganda for further conquest, since that is the only way by which they can avoid disaster.

intercourse which must accompany trade, it will become more conscious of and sensitive to foreign public opinion. The atomsphere of group-fanaticism, which is inevitably created by desperate national enterprise, will be dissipated. It is possible that Russian communism, under such circumstances, may lose some of the fiery quality which forms its attraction to many temperaments; but it will become more practical, it will have a chance to show what communism is capable of technically as a method of production, and it will, if it succeeds, be able to appeal to men's reason and not only to their emotions and to their desperate need of hope. The industrial nations may then be able to learn from Russia, not only to acquire from Russia certain revolutionary ferment. And in that case it is possible that the transition to communism, which is inevitable sooner or later, may take place without too terrible a world-cataclysm, while in Russia itself the attempt to restrict small retail trading by law, which now requires a great apparatus of police and spies and prisons, may be abandoned, and replaced by a policy of making the Soviet stores more attractive than the private shops. For communism cannot be considered a success until it ceases to require a drastic legal suppression of the instincts of ordinary people.

If, on the other hand, the Powers continue to blockade Russia and to incite neighbouring nations and casual adventurers to attack the Soviet government, then a very different development is inevitable. This development has already gone a considerable distance, but it is contrary to the original spirit of Bolshevism, and would, I feel convinced, be readily dropped in return for peace and trade.

The Bolsheviks control that vast plain, stretching over eastern

for the history of the world. The question whether it is adopted or not turns entirely, to my mind, upon the question whether the Powers consent at an early date to peace and trade with Russia. I do not know of any issue more momentous in the polittcs of the last hunderd years. Let us try, as far as we can, to conjecture the results of the two policies of peace and war with Soviet Russia on the part of England and Japan.

If the Russians secure peace and trade, the effect upon their home policy and their whole outlook will be very far-reaching. To begin with, they will be able to restore transport to its pre-war condition. Next, they will be able to offer the peasants clothes and agricultural machinery in return for the food needed by the towns and the army. This will at once allay the discontent of the peasants, who in any case owe their land to the Bolsheviks and fear that the victory of reaction might deprive them of it. It will thus regenerate Russian agriculture, and produce an adequate supply of food and more commodities in the towns. This will make it possible for the Bolsheviks to regain their popularity with the industrial section of the population. Neither the peasants nor the townspeople, for the most part, have any objection to the communist government or principle, but they are uncomfortable owing to the blockade, and they attribute their lack of comfort mistakenly to the government. If the government can give them comfort, they will cease to dislike it.

If the communist government feels itself popular in Russia, it will relax very many of the restrictions on liberty which it at present imposes. If it is not driven by desperate poverty, it will do great things for education. If it has trade with foreign nations, and the

technical experts or contractors under the *ancient regime* and whose whole outlook is still capitalistic. Above all there is the inevitable tendency of the international situation to revive imperialism in a nation accustomed to empire. For all these reasons it is difficult to feel any certainty that the future foreign policy of Russia will not be one of Asiatic conquest.

It is an odd fact that revolutions, after the first moment, make very little difference to the foreign policy of the government. In the 17th century, when England was the revolutionary country, the foreign policy of Cromwell was just the same as that of Charles II: alliance with France against Spain and Holland. In the 18th century, the foreign policy of Louis XIV, XV and XVI was continued by the French revolutionaries and Napoleon. And now, in Bolshevik Russia, there is a tendency to revert to the foreign policy which was pursued by the Tsardom before the German menace overshadowed everything else. Down to the year 1907, Tsarist policy was one of Asiatic expansion in opposition to England and Japan. The phrases have been changed by the coming of the Bolsheviks, and the facts could have been changed if England and Japan had not shown such implacable hostility to the revolutionary government of Russia. But as this government has been obliged to fight for its life, and has fought with extraordinary success, it has gradually been driven, by the inevitable momentum of war, to the very verge of a policy of disguised conquest, which is in effect the old Tsarist policy, and has the immense advantage of being the natural policy from the standpoint of nationalist instinct.

The question whether the Russians will be driven to a complete adoption of the policy of Asiatic conquest is a very momentous one

henceforth necessary to pursue the realization of the strictest union of all the national and colonial movements of emancipation with Soviet Russia, by giving to this union forms corresponding to the degree of evolution of the proletarian movement among the proletariat of each country, or of the democratic-bourgeois movement of emancipation among the workers and peasants of backward countries or backward nationalites."

"The Communist International," he says in the same work, "must conclude temporary alliances with the bourgeois democracy of backward countries but must never fuse with it."

Under the shelter of this formula, it is possible for the Bolsheviks to cooperate with rich nationalists in Turkey, Persia or India, without being obliged to terrify them by the threat that their property will be confiscated. But in fact, obviously, any success of nationalist movements in these regions, if obtained with Bolshevik help, would constitute an extension of Bolshevik power and growth of their Empire. The leading Bolsheviks are undoubtedly men in whom a genuine internationalism is very strong; this is true, in particular, of Lenin. I have no doubt that, if Lenin had to choose between the success of communism and the prosperity of Russia, he would choose the success of communism; and it is admitted by his enemies that he would sacrifice himself without a moment's hesitation. But Lenin is not the whole of the Russian government, any more than Lloyd George is the whole of the British government. And as the Bolsheviks become more firmly established they receive, more and more, the cooperation of men whose real sympathies are not with them. There are in the army now a great number of Tsarist officers; there are in industry many men who were

to propaganda. The necessity of defeating Koltchak and the Czech-Slovaks involved the re-conquest of Siberia; they and the other enemies incited by the Entente complled the creation of a very powerful army. In countries like Turkestan and Bokhara, where the land belonged to large landowners, they were dispossessed by the Red Army, and the small proprietors who were created were naturally friendly to the Bolsheviks. Throughout western and central Asia, the Bolsheviks have known how to secure the friendship of the populations by applying only such portions of their creed as would be popular. They have allowed the natives a far greater share of local administration than they had in Tsarist times; they have not favoured Christanity as compared with Mohamedanism; they have been more just and less corrupt than the old officials.

The Bolsheviks have now recovered practically the whole of the former Asiatic territory of Russia.—Some of it is autonomous and only federated to Moscow; but through the discipline of the communist party, this gives Moscow all the control that is necessary so long as communists are in power in the autonomous regions. But even where communists are in power, little attempt is made to establish communism, which is considered (rightly, as I think) unsuited to such backward communities as those of Central Asia.

Outside the boundaries of the former Russian Empire, the departure from communism is more complete and more openly avowed. In theses presented to the Second Congress of the Third International (July, 1920), Lenin says:

"We cannot therefore any longer confine ourselves to recognizing and proclaiming the union of the workers of all countries. It is

as we did before the war. They therefore advocate peace and trade. On the other hand, fanatical idealists of the older order, such as Churchill and Curzon, find the thought of peace with the Bolsheviks utterly abhorrent. Rather than undergo such a sacrifice of principle, they would rehabilitate Germany both in an industrial and a military sense, if only Germany would undertake to fight the Bolsheviks. Unfortunately, it is the Poles whom the Germans hate, not the Russians. Meanwhile the French remain obstinately determined to continue punishing the Russians and the Germans simultaneously—the Russians for repudiating their debts to the French bondholders, and the Germans for being Germans. Amid these difficulties and conflict, English policy in the Russian trade negotiations remains vacillating. When Lloyd George appears on the point of concluding peace, the Navy, under Churchill's orders, starts a naval war against Russia in the Black Sea, or Curzon sends an insulting note about Persia. The result of the conflict of opinion on both sides is that the negotiations drag on, and up to the present time (December, 1920) no agreement has been reached.

As time goes on, the Asiatic policy of the Bolsheviks becomes increasingly important, and dominates more and more their relations to other powers. In early days, the Bolsheviks had their eyes fixed on the west, and thought little about Asia. They believed that the moment had arrived for the social revolution foretold by Marx, and that it must quickly spread from Russia to western Europe. But with the failure of this hope there has come an increasing need to acquire military strength by ordinary means, to be as strong as imperialist Britain, and to be able to terrify nations which have proved impervious

important concessions for the sake of temporary peace with existing governments.

On the other hand, practical men, who desire to build up Russian industry, to bring contentment and prosperity to the people, and to show that communism is compatible with happiness, urge the absolute necessity of trade with industrial countries if transport conditions are to become normal or factories recover anything like their pre-war standard of output. These men, of whom Krassin may be regarded as typical, desire to make peace with the western democracies. Even if it should be only a temporary peace, it would be worth concluding, from their point of view, if it lasted long enough to secure the importation of locomotives and machinery in sufficient quantities to last for a few years. These men are willing to make great concessions as regards Asiatic propaganda and propaganda in western countries, if thereby they can secure the restoration of normal commercial relations.

It is of course obvious that everything that increases Russia's strength or gives hope of division among Russia's enemies strengthens the hands of the less conciliatory party, while, on the other hand, ill success against the Poles or Wrangel, or any other circumstance tending to weaken Russia, tends to give the upper hand to those who seek peace with the west. Hence Russian policy is somewhat fluctuating and uncertain, according as conditions favour one or other faction in the Communist Party.

An exactly analogous divison of opinion exists in England among those who control policy. Practical men like Lloyd George see that the Bolsheviks can damage us in India, and that it would be advantageous to get corn and other agricultural produce from Russia

exchange for food, and therefore obtains little food and that little with difficulty. The need of dealing with discontent leads the government to adopt several repressive measures, such as prohibiting all daily newspapers except the official organs of the communist party. And the need of repelling the attacks instigated by Entente governments has driven the Russians into militarism, and into what is in effect, though not in its original intention, a policy of Asiatic imperialism. Under these circumstances, it is difficult for the original spirit of communism to survive.

The external policy of Russia has at present a double orientation, towards Europe and towards Asia.

The policy of Russia towards Europe, like that of Europe towards Russia, is a somewhat vacillating resultant of two different tendencies. In the early days of Bolshevik power, Lenin by his personal authority succeeded in forcing the acceptance of the Brest-Litovsk peace, because he felt that Russia could not continue fighting. The Left Social Revolutionaries and many of the Bolsheviks regarded it as a surrender of principle to make peace with a capitalistic government. But at that time Russia was so weak and Lenin so strong that his view prevailed. At the same time, everything was done that could be done to promote revolution both in Germany and in the Entente countries. It was believed in Russia at that time that all Europe was on the verge of revolution. Even so late as last summer, when I was there, all except a few of the shrewdest leaders were persuaded that revolution was imminent in all capitalist countries. This belief is naturally combined with advocacy of an idealistic policy, which would sacrifice all other considerations to the spread of communism, and would make no

nationalism, and militarism. In those days the world was still in the throes of the war, and the Russians hoped to end the war by a revolt of the proletariat everywhere against their capitalistic taskmasters who were driving them on to slaughter each other. This hope proved vain. The Germans did not make a revolution until they were defeated and internationally powerless; the victorious nations of the Entente were momentarily pleased with their governments, and in no mood to listen to revolutionary doctrines. Consequently, the Allies were able to stir up war against the Bolsheviks. They could not get their troops to fight with any vigour in a cause which the working-classes of all civilized countries held to be nefarious; but they were able to employ mercenaries—the Czecho-Slovaks, Koltchak, Denikin, Judenich, the Poles, and so on. Consequently the Bolsheviks were compelled to create a vast army, and to spend their energies on war instead of economic reconstruction.

From this unfortunate sluggishness on the part of the peoples of Europe and America, many very bad results have followed. First and foremost, Russia has not had a fair chance of developing a communist system, so that there is still no experimental evidence as to whether communism is or is not a good method of creating and controlling industry. Secondly, Russia has been subjected to appalling suffering as a result of the absence of imported commodities. There is a terrible dearth of rolling-stock, a grave insufficiency of food in Petrograd and Moscow, an absence of medicines, sanitary appliances, disinfectants and anaesthetics, so that the combatting of typhus and other diseases has been extraordinarily difficult. There is discontent with the government both in town and country because it has nothing to give the peasants in

THE PROSPECTS OF BOLSHEVIK RUSSIA.

By Bertrand Russell.

In considering the prospects and probable development of the Bolsheviks in Russia, it is necessary to investigate, not so much what they would wish to do if they were unopposed, but rather what it will be possible for them to do in view of the hostility of the world in so far as it is controlled by capitalists. It is doubtful whether this hostility will continue to take the form of blockade and vicarious war, or whether it will be confined to more surreptitious methods. I think that both the internal and external development of Russia will be entirely different if there is peace and trade from what they will be if the blockade and the fighting continue. To those who, like myself, are advocates of communism as an economic system, the important thing is that Russia should succeed in establishing a prosperous and happy communistic regime. We should deplore, not only the downfall of Russia under the pressure of external enemies, but also any outward success purchased at the cost of what Russia has come to stand for in the world. Russia is faced with a danger of spiritual defeat at least as great as the danger of national defeat. What hope is there of avoiding both?

Before attempting to answer this question, it is necessary to understand the present policy of the Bolsheviks and the stage by which it has developed.

There is no doubt that, at the time when they first acquired power, in November, 1917, the Bolsheviks were opposed to imperialism,

咬豆茶話

□法は人に依つて枉げらるべきものではない、所が高橋輪長の收賄事件が秘密公判に附せられたのはドウした譯か、風俗壞亂とか、反逆罪とかなら何とか裁判所に都合のよい理屈もつかうが。これで裁判の神聖は保てるだらうか、その係判事である柴田晋一君と大木遠吉君の説明を承りたいものぢやテ。

□内務省の圖書課長だつた堀切君が、外遊の折、倫敦でその親友である外務省の某君への述懐に「自分が在任中にやつた圖書の檢閲がいかに無定見で、いかに無謀であつたことは倫敦へ來て始めて判明した、眞に愚であつた自分の前事業を顧れば悔恨に堪へない」と。内務大臣たるもの、須らく此言を他山の石として參考とすべきだ。

□加藤高明の無爲無策には呆れてものが言へぬ、矢張河野とか、武富とかの舊時代の遺物と、官僚出の小人物をのみ股肱としておる所がお芽出度い限りだ。永井などの元氣な所を活用させたらよささうなものだが。

□大正になつてから河野や、武富、箕浦などの普選論も猿芝居としか見えないであまりに氣が利かなさ過ぎる。

□これでは孔子の洗禮を受けた徐世昌や、サーベル出の段棋瑞が新組織の番頭取りとなると好一對で、時代に何等の新シミを提供せぬ、尤も故寺内伯や上杉博士でさへ普選論を喋々する世の中だから敢へて怪しいこともあるまい

□上杉と云へば、最近までは内務省でも、農商務でも氏の推薦を喜ぶの色があつたが、近頃は課長以下の若手が上杉宗を悦ばぬとあつて次官、大臣閣下も大分困つておる向きがあるとか、ないとか。

□顔だけはナポレオン丸寫しと稱せらるゝセミヨノフもトウ／＼沒落した、彼が沒落するときは金塊だけはシコタマ拵出して逃げたと云ふので評判はあまり香しくない。しかし、その後押しを承はつておるソンジヨそこらの金モール連は何とかして彼が再擧を助けたいものぢやと。力味んでおる。

□だが、彼にはナポレオンの千分の一ほどの精力もなし、それに經綸もなければ、學問があるでなし、レニンとトロツキーに比較すると栃木山と梅昇ぎ程の差違がある。これぢや折角の後押も水の泡だろう。

□少々おめでたい貴族院、自稱有志連は、日本に對する列國の誤解を一掃すべく何等かの新運動を試むべしとのことだ、それこそ無用の長物だ、諸々の舊い頭そのものが列國の誤解を招く源となつて居るのだ、議員諸君が全然引退せぬ限りは日本が世界に孤立することは請合だ。

□今年の議會は中橋イヂメで貴族院は賑ふらしい、何にしろ、あの柔和な一木までが教育調査會の副總裁を辭すとスツカリ怒り出す。騷ぎだから、官僚系と憲政會は期せずして連盟して政府に當る計畫だ、可なり耄ぼけた遣方だが旨くいつたらお慰み。

□それから耄ぼけ序にも一つの頓馬な事は新平君の市長就任だ、彼が東京市長になると共に東京市は根つから官僚屋敷に化けてしまつた、今までは頭首だけが官僚だつたが今回は胴から腹から足の爪先きまでが官僚化して、永田、池田、前田なんぞの助役皆そうである。ナーニ東京市長は大海原重義ナンテ小僧で澤山だ、態々後藤なぞゝ屑籠から拾つて來なくてもよささうなものだ。

ラッセル氏の

ラッセル教授の博大にして深遠なる觀察は江湖の非常なる歡迎を受けたるが、氏は氏が一生涯中にての尤も力作である。「世界政局上の希望と恐怖」なる題下に約一千枚に亘る浩瀚にして透徹せる論文を特に本誌のため執筆するに至り、三月號若くは四月號より登載するに至るべし、本論文は從來の短篇と違ひ、一貫したる系統を有し、深奥なる哲學、幽遠なる數學に基礎をおきたる一大論策にして、約一ケ年に亘りて本誌へ掲載すべし、蓋し我國言論界始めての大偉觀を呈することならんその要項は

◎世界政局上の希望と恐怖

(1)世界政局に於ける勢力

(イ)發育する勢力

- 一、産業主義
  - (イ)資本的
  - (ロ)共産的
- 二、國家主義
  - (イ)侵略的
  - (ロ)被壓迫的
- 三、科學

連續寄稿豫告

(B)亡滅し行く勢力

一、宗教

二、家族並びに貴族

三、農奴的農業並びに手工藝術

(2)國家主義並に(イ)資本主義(ロ)共産主義

(3)政策判斷の方法

イ、現在の幸福並に正義に依つて

ロ、進歩助成の傾向に依つて

(4)世界に對する危險

戰爭、産業の破壞、各國間相互の鎖國主義、新宗教、科學の衰亡、

(5)世界の希望

知識の普及、共産主義、世界の統一

(6)政治家の目標

國際政治、國際共産主義、科學、物質的組織と精神的自由

新刊紹介

□**美術の秋**（有島生馬著）著者が曾て新聞雜誌に發表した美術に關する種々の文章を聚め順序立てて編纂した一册である、美術家にして亦文に於ても一家をなしてゐる著者の氣禀のあらはれてゐる心持の佳い本で挿畫も中々美しい。（四六版三一〇頁價貳圓五拾錢牛込叢文閣發行）

□**頼朝**（長與善郎著）著者の近業五幕物の戲曲「頼朝」と一幕劇「羽衣」とを併せて一册にしたるもの、前者は現世的な葛藤が如實に力強く描かれ後者は理想的に美しい心持がよく現れてゐる。（四六版紙裝一九六頁價金壹圓牛込新潮社發行）

□**厄年**（加能作次郎著）短篇小說集にして「厄年」「祖母」「醜い女」「二階の患者」等すべて九篇を收めてある、吾々の手近な生活に材をとつたものと或る海邊の村民の生活を描いたものと二通りであるが孰れも質實に描かれて親しみ深い一册の集になつてゐる。（四六版三五一頁價金壹圓八拾錢日本橋博文館發行）

□**哲學とは何ぞや**（出隆譯）新カント派の代表的哲學派の創始者ヴヰンデルバント氏の論文集『前奏曲』卷頭論文を全譯したもので哲學の概念及び歷史を知るに適當なものである（定價八拾錢東京淺草花川戶町大村書店）

□**近世社會主義發達史論**（尾崎士郎著）社會主義の發生より記述して英國に於けるブルジョア專制初期佛國社會主義の出現を述べラッサルレの諸運動第二インターナショナル無政府主義の發達カルルマルクスの運動諸國の民衆運動より近代の社會主義運動を詳細に研究したものである（定價貳圓五拾錢 東京芝區三田一丁目三田書房）

・

□**フリー、メーソンリーの研究**（管村道太郎著）吉野博士を中心とした政治研究會の研究發表にしてメーソンリーの起原より發達を說述したるもの也（定價六拾錢東京京橋區加賀町十一內外出版社）

□**危急**（伊藤松雄著）著者の第一脚本集で「危急」以下一幕物七編を收めてゐる鄕土藝術と編者も云つてゐる如く田舍の情調が懷かしく寫されてゐる（四六版紙裝一九一頁價金壹圓三十錢麻布綠葉社發行）

□**煩惱** 藤森成吉著）東京日日紙と報知紙とに連載した長篇小說である、戀愛に依つて惹起した煩惱を細まかく描寫した多感な青年の姿をくつきりと現はしてゐる。（四六版紙裝二七四頁價金壹圓三十錢牛込新潮社發行）

□**ボヴリー夫人**（フロオベル作中村星湖氏譯）佛蘭西文豪フロオベル作マダムボダリイの全譯で一名田舍風俗と題せる如く田園の描寫も佳いが、卑近な生活を碎けた平易な樣で書いた所に親しみ深いものがある、譯文は星湖氏が多年苦心し內務省當局とも諒解を得て漸く上梓したのである、世界文藝全集第一編。（四六版洋裝五九九頁價貳圓五十錢牛込新潮社發行）

□**我れ爾を救ふ**（山中峯太郎著）感想集にして「信」に眼醒めた體驗を說いてゐる、道を求むるの人志ある者が讀めば同感し共鳴する所多からうと思ふ。（價壹圓九十錢京橋警醒社發行）

□**二程子の哲學**（文學博士宇野哲人著）支那近世の哲學者中宋の程明道程伊川兄弟二人の學を述べそれを闡明詳かにした書である。（四六版洋裝二九〇頁價金貳圓神田大同館發行）

□**どんぞこの微笑** 勝田香月著）若い著者の靜かに唄へる詩集である。（袖珍版二七八頁價壹圓廿錢神田國民書院發行）

□**社會主義的諸研究**（高畠素之著）著者が其獨自の立場からせる社會主義學說に關する幾多の研究論策を蒐めたものである。全卷を通じて强き氏の一貫せる主張を看る。（四六三三〇頁定價金一圓八十錢本鄕區千駄木町五五大衆社發行）

編輯局だより

□社員室伏高信は十二月廿九日横濱發の伏見丸で渡米した。一月中は米國に滯在し、二月早々渡英する筈である。三月號にはその燃眉の筆致で加州排日狀態を詳細に描寫して送るとの約がある。

□本社は三月號を以て再び大計畫を發表する筈である。雜誌「改造」が如何に評論壇に重きをなすかは乞ふ三月號に俟て。

□元日から十五日までの。屠蘇氣分にも、編輯局や、營業部は相かはらず大車輪であつた。唯だ山本だけが愛弟の急病で十二月末から一月十一日まで隣縣に歸國していただけであつた。

□一月號は全部賣切れの盛況である。厚く讀者諸君の愛顧を謝する。三月號も一層の努力をするつもりだ。

□ラツセル教授執筆の「過激派の現在及將來」の飜譯は大山郁夫氏に擔當して貰つた。以後、引續き同氏にお願するつもりである。

□一月號所載米田博士の「現代社會の階級分析」は編輯者の疎漏から、その續き物であることを記載洩れしたことは誠にすまぬ次第であつた。厚く博士と讀者に對して御詫する。

□改造社出版部の小僧から編輯局への傳言に曰く、中澤臨川著「嵐の前」もいよ〳〵出來上つた永井潛氏の「婦人生理學」の著述も近く上梓される賀川豐彥氏は目下或る感激を得て創作起案中である。と

□石原純博士の著作も目下考案中である、三月號の「改造」には「アイスタイン」の續稿を送るとの通知も來た。

□賀川氏の著「死線を越へて」は十月から一月にかけてタツタ三ケ月間で。十六版を賣り盡し、既に十七版に取掛つた、十二月、一月の兩月で東京市中で第一番の賣行を示したことは社會敎育に志あるものゝ再考に價する問題である。

□情熱の感化、愛の敎育が全く世に忘られしとき、賀川氏が一大心血を濺げる本書が狂熱的歡迎を受けつゝあるのは、敎育の一大轉機を示しておるものではあるまいか。往年蘆花氏の「不如歸」が歡迎されし折と、思ひ比べて編輯子も今昔の感に打たれる。

□寒威はます〳〵募つて來た、モウ東都もボツボツ梅が蕾を破つて來た。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	七十錢	二錢
半ケ年	四圓二十錢	不要
壹ケ年	八圓四十錢	不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價を更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正十年一月二十日印刷納本
大正十年二月一日發行

本號特價 金八十錢

編輯兼發行者 東京府中目黑七七〇 横關利藤太
印刷所 東京市京橋區南鍋町二丁目廿七番地 秀英舍

發行所 東京芝區櫻田久保町七 改造社
電話新橋一八五九
振替東京八四〇二

新社會の基礎

好評參版

◇故中澤臨川氏著◇

◇山本鼎氏装幀◇

四六版新鑄ポイント組
定價二圓卅錢
送料十六錢

情熱の思想家として、科學的天才として常に、その絢爛な文章を以て知られた臨川氏が、來るべき理想の新社會はかくの如く科學的に改造されなくてはならぬと、眞摯に、そして、熱情を罩めて說けるもので、組織ある社會改造を叫ばんとするものの必讀すべき良著である。

東京芝久保町　改造社　振替東京二〇八四二

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可 [illegible]
大正十年一月廿日印刷納本
第三卷第二號 [illegible]